

古都洛陽の都市再生の基盤
—文化表象から見る洛陽の文化

二〇一三年一二月

長崎大学大学院生産科学研究科

黄 婕

序 章	5
第一節 研究動機	5
一、古都洛陽の都市発展の問題と要因	5
二、京都モデルの洛陽での適用性の分析	9
第二節 文化による都市再生の京都の啓発	12
一、京都の古都復興の歩み	12
二、京都の復興する原動力及び文化環境の構築	16
三、京都モデルの真義	19
第三節 研究内容及び方法	20
一、先行研究及びその展開	20
二、研究方法	25
第四節 研究目的	28
一、当面の目標	28
二、最終的な目標	28
第一章 先秦時代における洛陽の文化表象—天下の中心	30
第一節 先秦時代の洛陽	30
一、洛陽という地域名の変遷	30
二、洛陽が天下の中心とされる原点—洛邑で成周の造営	33
第二節 洛陽が天下の中心とされる理由及びその成立	35
一、地理環境	36
二、政治的な意図	37
三、洛陽から「中国」、「天下」へ	39
第三節 天下の中心としての意味及びその影響	41
一、文明の先進性を強調	42
二、王権の正当性を強調	44
三、文化の正統性を強調	46
第四節 洛陽の「天下の中心」としての影響	46
一、歴代王朝の影響	47
二、現代生活への響き	48
結び	49

第二章 後漢時代における洛陽の文化表象	50
第一節 両漢時代の洛陽	50
一、洛陽城	50
二、洛陽の文脈	51
第二節 漢賦（特に都邑賦）を通して洛陽の文化表象の考察	52
一、都邑賦に映される洛陽のイメージ	52
二、「両都賦」の解読	53
第三節 洛陽と後漢の世風	57
一、洛陽で実現した儒学の隆盛	58
二、後漢の世風およびその影響	59
第三章 魏晋南北朝時代における洛陽の文化表象——文化の融合	62
第一節 時代によって興亡する洛陽城	63
一、後漢の崩壊と洛陽城の破壊	63
二、洛陽城の再建と魏晋の興亡	64
三、洛陽の失陥と「衣冠南渡」	66
四、北朝の統一と洛陽の再建	68
第二節 融合する思想（魏晋を中心に）	69
一、二つの大分裂な時代と洛陽	69
二、儒学思想の隆盛から衰退へ	70
三、魏晋文明の土壌の形成と洛陽	71
四、魏晋思想融合の産物——玄学	73
第三節 融合する民族（五胡十六国、南北朝を中心に）	75
一、民族の大移動及び「華夷思想」	75
二、抗争、対立から統一へ	78
三、楽府詩から民族融合の様態を考察	81
第四節 融合する宗教（南北朝を中心に）	89
一、三教の交渉する時代について	89
二、佛教都市洛陽からみる宗教の融合——『洛陽伽藍記』の解読	92
結び	97
第四章 隋唐における洛陽の文化表象	99

第一節 隋唐時代の洛陽及び関する詩作	100
一、隋唐時代の洛陽	100
二、洛陽に関する詩作	101
第二節 洛陽の文化アイデンティティ及び根源	103
一、王権と象徴する帝都のイメージ及びその根源	104
二、華やかな大都市のイメージ及びその根源	107
三、郷愁のイメージとその根源	110
第三節 安史の乱—洛陽の文化的なアイデンティティの際立ち	119
一、安史の乱時期の洛陽	120
二、「漢」と「胡」の対立意識	121
三、洛陽の文化的なアイデンティティに「漢」の要素の強化	123
第四節 中・晩唐における洛陽の文化的アイデンティティの新要素	138
一、風雅的なイメージ	138
二、「家」「国」イメージの延長	148
結び	155
第五章 北宋における洛陽の文化表象	158
第一節 五代十国時代から北宋への洛陽	158
第二節 儒学復興の土台となる洛陽の儒学歴史	160
一、洛陽と儒学の深いゆかり	160
二、後漢時代に洛陽で行った儒学の興起	161
第三節 洛陽の風土から生まれた二程子の洛学	164
一、政治的な影響	165
二、学術的の影響	168
三、洛陽の風俗から二程子の価値観への影響	171
第四節 儒学復興の時代を切り開いた洛学及びその影響	174
一、洛学の成立	174
二、新学と対抗しながら発展を遂げた洛学	177
三、洛学の伝承と影響	180
結び	185
終 章	186

第一節 研究の結論	186
一、没落した歴史都市（特に古都）の発展原動力の提示	186
二、文化表象を通じた洛陽の文化の在り方の究明	187
三、「洛陽の文化」の価値の明確化	193
第二節 研究の成果と今後の課題	195
一、研究の成果	195
二、今後の課題及び研究方向	196
結び	199
図表一覧	200
初出一覧	201
参考文献	202
謝 辞	210

序 章

第一節 研究動機

私の出身が歴史と文化の蓄積の深い古都洛陽であることも影響し、修士課程以来ずっと歴史都市の発展に関心を持っている。近年、中国の都市建設ブームの背景の下に、歴史都市は様々な問題に直面している。連綿と続く長い期間の経過において、今日に連なる古い都は、伝えていくべき歴史を背負いながら現代社会に立っているはずである。そこから、古都の在り方を探ろうというのが筆者の問題意識の始まりである。

一、古都洛陽の都市発展の問題と要因

1. 都市建設のブームと問題

洛陽は中国の黄河中流域、河南省の北西部に位置し、現在の人口約 620 万、面積約 1 万 5200 平方キロである。この地域は漢民族の発祥地とも言われ、黄河と洛河の恵みを受け、古代交通の要路に発展した。洛陽は中国の歴史都市を代表する最も格式高い古都の一つであり、中国の歴史だけではなく、東アジアの歴史においても大きな存在感を持っている。しかし、遷都によって政治的優位を失い、経済発展の遅れとともに、現代社会での知名度と影響力は低下する一方である。

現在は省都でもなく、国際空港もない洛陽は、文化財保護の面では他の古都西安や北京に比べ立ち遅れた観があり、これまで対外的にもあまり紹介されてなかった。悠久の古都のイメージと異なり、観光スポット以外の洛陽の市街に、歴代王朝の痕跡はそれほど多く残っていないので、古都の実感は薄いと言わざるを得ない。没落した古都洛陽の歴史的地位と現実のギャップが非常に鮮明で、再生する道が差し迫っている。

1990 年代以降、中国の都市の発展は高度成長期に入った。専門家は「世界銀行の統計によると、発展途上国の国民一人あたりの GDP は 1000 ドル、都市化率は 30% に達すると、都市化率は急速に上がる転換期に入る。現在我が国はちょ

うどこの段階にある」と指摘している¹。中国都市発展の速さや消化効率の高さは全世界でも稀なケースであり、西洋国家の数百年にわたる都市発展史を、中国はわずか20年の時間で達成しようとしている。この経済成長は洛陽の経済をも刺激し、ここ数年のうちに高速道路のターミナルが完成し、経済特区として注目を浴びるようになった。高速発展の波に乗って、洛陽のGDPは1992年の103.52億人民元から、2005年の1100億元に急増した。さらに、それからわずか四年後の2009年、GDPは2000億人民元を突破した²。この急増の背後には大規模な都市建設と宅地開発のブームがある。1990年後半から洛陽もほかの中国都市と同じように市内広場や郊外大学集中区、テレビタワーなどの建築ラッシュが始まった。残念ながら、中国の都市の個性喪失の危機と言われる「千城一面（どの町も同じ顔になる）」現象³が洛陽にも見られるようになった。

その結果、旧市街、古民居、古建築遺跡が立ち退かされるとともに、歴史文化の痕跡が消え、残された風習、伝統的な考えなども薄くなってきた。アメリカ合衆国の建築評論家、文明批評家ルイス・マンフォード（Lewis Mumford、1895～1990）は工業文明の進化における弊害を反省した際に、「町の建築や施設など機械的な物質外殻を人文的な中身の発展より優先的に発展させる⁴」という現象を指摘した。これも現在の中国の都市建設の有り様と言えよう。グローバリズムの進展により世界の画一化に向けた流れが加速する中で、古都洛陽の都市建設は、地方官僚が行政成績と経済効果ばかりを追求し、都市の独特な気質が失われつつある。文化資源の破壊は文物だけではなく、洛陽の歴史環境そのものも変えられ、このまま続けば消えていく恐れがある。

2. 洛陽の歴史風致の破壊要因

¹ 讐保興『中国城镇化—機遇与挑战』（北京：中国建筑工业出版社、2004年8月）、P44。

² データ出所は『洛陽統計情報』、洛陽市地方政府公式HP：

http://www.ly.gov.cn/sofpro/cms/previewjspfile/zwgk/cms_0000000000000000070_tpl.jsp?requestCode=2&cateid=320

³ この現象に関しては、阮煜琳「中國不應千城一面」（『中國建設報』2005年12月14日 第八版）、单文翔『文化遺產保護與城市文化建設』（北京：中国建筑工业出版社、2009年1月）P2～5、吳良鏞「論中国建築文化研究與創造的歷史任務」（『城市規画』2003年第1期）P12～16などに論じられている。

⁴ Lewis Mumford 著（宋俊嶺等訳）『城市文化』（北京：中国建筑工业出版社、2009年8月）P8-9。

洛陽の歴史風致の破壊をもたらした要因については、数多くの洛陽の文物・遺跡に関する調査報告がある。中でも、比較的新しい、しかも総合的且つ詳細的、権威性を持っているのは、中国国家文物局文化遺産保護科学と技術研究課題助成プログラムの報告書である⁵。それによると、洛陽の現状を導いた要因は以下の三つに帰することができる。

①歴史的要因

洛陽は中原要地という地理的な条件と歴代王都という政治的な原因により、焼き払われ、都市機能が完全に失った経験が数回ある。また、度々の戦乱によって、昔の繁華はほとんど荒廃した。長い時間に老朽化、自然災害、戦乱、人的破壊などを経て、現代に残された目に見える形での歴史文化遺産は限られている。

②都市計画の失策

1949年から、洛陽は新中国の重点的に発展させる八つの工業都市の一つとして、急速な工業化が展開された。洛陽市の第一期都市計画はソ連の専門家の直接関与の下で、国が直接主導の形で始まった。これは政府が洛陽に対する重要視の表れであったが、この時期に数多くの大規模な重工業工場が建てられ、大量の洛陽の地下遺産に壊滅的な破壊を与えた。

③1990年代からの都市建設ブーム

高いビルと広い道を競争するように作るのは現在中国の都市建設の通弊となっている。洛陽でも創造性・個性の無い建物が大量に建てられると同時に、「旧城改造」という名目で（たとえば2009年実施した老城改造プロジェクトなど）、歴史街区の大規模な改造や遺跡が取り壊され、町全体が新しく建て替えようとしている。

一例をあげると、隋唐時代の洛陽城西門麗景門の旧跡での復元プロジェクトがある。歴史景観回復のために、2004年、洛陽市は3000万人民币を投資し、敷地

⁵河南科学技術大学文化遺産保護研究チーム「洛陽都市発展と文物保護の経験と教訓研究」（中国国家文物局文化遺産保護科学と技術研究課題助成プログラムの成果、2005年10月）。

面積 18k m²余りの隋唐建築の麗景門を建てた。しかし、このような復元工事は「偽文物」と指摘され、批評の声が絶えない。図1と図2に見られるように、城門表に電線が見えるほど雑な設計の上、裏に広告看板が林立し、標識の統一性も乏しく、特に英語の誤訳が多いなどの問題が挙げられた⁶。最も非難されたのは、隋唐時代の城壁にもかかわらず、中身は明・清時代の建築様式となっており、城壁の表面に多くの穴（窓）があること、さらには全く関連性のない媽祖が祀られていることなど、根本史実と時代精神に反する問題である。このような粗製品は人に雑な印象を与え、洛陽の歴史風致の回復に役立たないどころか、逆効果さえある。



図1：麗景門の表正面写真



図2：麗景門の裏写真⁷

以上の要因で、洛陽の歴史風致は多くが壊れ、古都のイメージと風情が次々と消えている。特に90年代からの都市建設ブームは、もともと被害が大きかった見られる。街並みが一新された結果、歴史との関係は、急速に断ち切られてしまった。粗製乱造に復元した歴史建築は、魂が入っていないため、人に感動を与えることはなく、文化遺産という概念をも破壊したと言える。復元歴史建築が容易

⁶馬佳「洛陽旅行の問題分析及び発展対策」（『市場論壇』2011年第7期、総第88期）、鐘慶倫、劉笑歌「洛陽旅行景区標識語翻訳範例化研究」（『洛陽理工学院学报社会科学版』24卷第6期、2009年12月）などの詳しい考察がある。

⁷洛陽市麗景門の宣伝写真を使用。

<http://image.baidu.com/i?tn=baiduimage&ct=201326592&lm=-1&cl=2&fr=ala1&word=%C2%E5%D1%F4%C0%F6%BE%B0%C3%C5%CD%BC%C6%AC>

に蔓延することから、今日の洛陽は文化に対する自信が失いつつあるのだと読み解くことができる。

二、京都モデルの洛陽での適用性の分析

日本と中国は同じ東洋文明の一部として、非常に類似的な文化環境を持っていた。明治維新をきっかけに、日本は中国と異なる道に至ったが、国の文化に関する根幹的に部分は、やはり一致している。先に述べた現代中国の都市に存在する問題は、かつて日本の高速成長期にも見られた現象であり、日本の経験は中国にとって処方箋になる可能性が高い。日本の歴史都市の発展に関する研究の必要性を感じ、本論文は歴史都市の代表である京都を取り上げた。

1. 適用の基礎

日本の京都は、しばしば伝統と現代がバランスよく結んだ古都として注目される。京都モデルは歴史の現実と可能性を提示し、すべての歴史都市の発展に意味があると考えられる。しかし、京都の経験を最大限に活用するためには、少なくとも下記の基本条件が揃わなければならない。

- ① 都としての歴史が相当長い。
- ② 信頼できる歴史記録が多く、文学作品や絵作に表現され、深い文化的影響力を持つ。
- ③ 比較的によく多くの遺跡や歴史景観が残されている。

洛陽の都市の歴史は約 4000 年あり、この土地に都を置いた王朝の数については長い間歴史学者の間に議論があるが⁸、現在、一般的な説によると都城史は 14 王朝の 1667 年間であり、副都の時代も入れると 2207 年間となる⁹。歴史の長さは京都を越え、関係する文献記載や著作記述も多い。前に述べた要因から、で今までの文化遺産策は遅れているが、竜門石窟、関羽の墓地、白馬寺など重要文化

⁸議論の主な焦点は前漢の都としての数か月、及び武周の神都（690-705 年）などを計算に入れるかどうかをめぐるものである。

⁹李久昌『国家、空間輿社会——古代洛陽都城空間演變研究』（三秦出版社、2007 年 11 月）、P 106。

財はまだ残されている。このように、洛陽は以上の基本条件を満たしている。

さらに、京都の造営の歴史をみると、洛陽と非常に類する文化環境を有し、この二つの都市の経験の互換性を持っていることが判る。

京都の前身平安京は、794年から千年余りの都城史がある。日本の宮廷と都城の源流が中国にあることは言うまでもない。平城京・平安京に著しく見られるように、唐の長安城と洛陽城を模倣しようという意識が非常に強かった。長安と洛陽が日本を含む東アジア諸国の都城に多大な影響を与えた点は、従来の研究に既に指摘され、多く論究されている。

古く京都は「京洛」、「洛陽」などと呼ばれた。「洛陽」は現在でも京都の唐名として使われ、その由来について、一般的な説は『帝王編年記』桓武天皇の「東京左京、唐名洛陽」、「西京右京、唐名長安」の記載から、洛陽と長安、それぞれ左京と右京に使い分けたとする説は、今のところ鎌倉時代末期に洞院公賢(1291~1360)によって書かれた『拾芥抄』が最も古いという¹⁰。

「平安京は時が立つにつれて、長安にあたる右京が寂れ、洛陽に当たる左京だけが残ることになる。その結果、上洛・洛中・洛外などの言葉できて、これらの「洛」はすべて洛陽を意味するのである¹¹」と言われる。この「洛陽」なる名称は、最終的に京都を「洛中」「洛外」とする歴史概念につながり、「洛京」という言葉が生まれて首都の代名詞となり、京都に代表される日本文化の一部として定着するようになった。

即ち、京都という町は最初から中国の長安・洛陽を想定して建てられたので、都市の場所の選定、都市計画、建物の配置、住民の生活文化まで、長安と洛陽を手本にした。その後、自らの独特な文化を構築し、日本を代表する立派な都市となった。京都、洛陽、長安の三都市の規模が大きく異なるが、自然環境（内陸、

¹⁰京都の「唐名」について、嶋本尚志「京都唐名考」(『博物館学年報』第35号、2003年12月)、P48-63に詳しく論じている

¹¹西嶋定生『奈良・平安の都と長安』(小学館、1983年10月)、P178-179。

盆地、境内に川が通る)、気候条件(夏暑く冬寒く、四季がはっきりする)、文化環境(歴史人文が豊か、仏教の痕跡が多い)など基本要素がほぼ共通している。故に、京都と洛陽は都市の基礎部分が他の都市と比べて極めて近いので、洛陽は没落した今の時代において、京都をモデルにするのは、最も現実的な意味を持っていると考えられる。

2. 歴史都市の可能性

京都市内及び周辺にはユネスコ世界遺産に登録された17ヶ所の寺院、神社、城がある。平安時代から江戸時代までの建造物群は、各時代を代表する建築様式、庭園様式、文化的背景を今に伝えている。これと比べ、洛陽の町並み、都市景観は最近数十年のものが多く、古都という言い方に相応しくないように感じさせる。しかし、注意すべきなのは、京都の世界遺産や国宝、重要文化財と指定されたものも、すべて創建当時の建造物とは限らないということである。これらの建造物は、もしばしば発生した大火や兵火のため、相当部分を焼失してしまったが、再建をくり返し、現在は日本文化の象徴として守られている。つまり、京都は時代の荒波に翻弄されても、文化を守りながらも文物の再建をくり返し、現在につながっているのである。

即ち、京都の文物は、破壊されても旧来のように再建され、文化財として保存・維持というプロセスを経た。これは文化力の基盤があるからこそ、できたことであり、洛陽が大いに参考すべきものである。

文化経済学の第一人者とされるデイビッド・スロスビーは文化資本と持続可能性を論じる際に、「文化資本は集団によって共有されている観念や慣習、信念や価値といった形式をとる知的資本として成立しており、(略)放置されることでその価値を減少させるし、新しく利用されることで価値を増大させもする。それはまた、継時的にサービスのフローを生み出しもする¹²⁾」と指摘している。目に見える景観や文物は大事だが、文化による都市再生の本質は、何よりも文化そ

¹²⁾デイビッド・スロスビー著(中谷武雄等監訳)『文化経済学—創造性の探求から都市再生まで』(日本経済新聞出版社、2002年9月)、P82。

のものである。歴史というものは必ずしも有形のものではなく、また固定したものではない。歴史を大切にすることは、明日のために、過去の軌跡を明らかにすることであり、決して時代を過去に帰して凍結するものではない。

この意味では、洛陽のような歴史の長い古都は、新興都市にはない文化的な資本を持っている。連綿と長い時間の経過とともに、文化資産として有形あるいは無形に形に残っている。たとえ現在の洛陽の文物保存状況が楽観的ではなくても、無形文化資産の中身を正確に認識、把握することによって、文化の力を発揮することができる。故に、洛陽の歴史的な根が太く、文化的な脈絡が絶えない限り、文化による復興の可能性がまだ十分あると考えられる。

第二節 文化による都市再生の京都の啓発

古都とは、ある国における古くからの都、あるいは昔に都が置かれていた場所を指す。かつて盛んな都の多くは、遷都とともに政治的な中心地位を失い、没落した。日本の京都の特別なところは、遷都されても日本の文化中心として発信し続け、大きな影響力を持っていることである。人口や都市規模、政治的な地位及び経済総量は現在の首都東京と比べにならないが、日本人の心の故郷として愛されている。これは稀な例として、世界的にも注目するに値がある。首都ではない京都は、遷都の衝撃からどのように立ち直ったのか、何を以て復興できたのか、そして京都モデルは歴史都市にとってどんな意味を持つのか。保存と発展の関係や歴史と未来の視点など、京都を成功例とした研究は中国の歴史都市の参考になるし、古都再生という意味では絶好の範例と考えられる。

一、京都の古都復興の歩み

1200年の長さに渡り、ほぼ一貫して同一空間における大都市であり続けた京都は、人口約147万人、総面積828k m²、その4分の3は森林で占められ、よく歴史風土保存と都市発展共存の成功例として挙げられている。京都は歴史的に形成されてきた都市であると同時に現代都市であり、伝統文化につつまれた都市で

あると同時に工業都市でもあり、また商業都市、国際的な観光都市でもある。京都の復興の道をより明確に理解するために、遷都された京都の近代史まで遡る必要がある。

遷都以降、特に終戦後の都市計画、都市建設の経緯を時間軸に沿って整理すると、大きく二つの段階に分けることができる。筆者からみると、最初の段階は都市建設や経済の復興を中心とし、これは京都の都市基盤の整備に必要なものとなった。第一段階に大きな成果をあげた上に、次の段階は文化遺産の保護や環境保全の提唱などを通して、漸く時代の最先端において発信する文化中心の構築を実現した。

1. 京都復興の都市基盤の整備

京都は平安京以来、千年の都を誇ってきたが、1869年（明治2年）の皇室の東京移転によって大きな打撃を受けた。「京都の繁栄は朝廷に負うところ極めて大であったことは言うまでもない。遷都となれば、その衰退は目に見えていた¹³」と記載されるように、近世中後期には35万前後の人口であったものが、1872年（明治5年）は24万4883人になり、1873年にはさらに約18000人が減少している¹⁴。

しかし、京都はそのまま没落した訳ではなく、それをきっかけに近代の道を歩み始めた。京都府の最初の数代の知事は維新後の荒廃した京都復興のための勸業政策に努めた。1872年、1873年に産業基立金を各5万両ずつ下賜され、国が京都府に事業を委譲するときに交付された勸業積立金15万両とともに、新事業勃興の基金となった¹⁵。京都の復興政策は、ヨーロッパの近代技術とシステムの導入として行われたのを特徴とし、主として勸業政策、教育、住民自治行政組織の改編として現われた。京都は急速に変わっていった。

第3代京都府知事の北垣国道は、産業も人口も急激に衰退していく京都にあっ

¹³赤松俊秀、山本四郎『京都府の歴史』（山川出版社、1969年11月）、P240。

¹⁴脇田修、脇田晴子『物語 京都の歴史』（中央公論新社、2008年1月）、P286。

¹⁵赤松俊秀、山本四郎『京都府の歴史』（山川出版社、1969年11月）、P240。

て、京都に隣接し水量が豊かな琵琶湖に着目して、疏水を開削することによって琵琶湖と宇治川を結ぶ舟運を開き、同時に水力、灌漑、防火などに利用することによって京都の産業振興を図ろうとした。また、西郷菊次郎が第2代京都市長に就任した1904年(明治37年)は経済都市としての発展が伸び悩んでいたが、京都市百年の大計として、明治～大正時代を通じて京都市最大の事業となる三大事業の推進に取り組んだ¹⁶。水道、市電の建設と基幹道路の拡幅・延長、これらはいずれも現代都市にとって欠くことのできない、もっとも基礎的な都市施設である。京都百年の大計が第二代西郷菊次郎市長によって受け継がれ完成へと至っている。

京都の近代化は政治、教育、宗教などの多方面で行われ、数度にわたる周辺地域への拡張により広がった。西陣織をはじめとする繊維産業が興隆し、京都が百万都市(人口百万の都市)への歩みを開始した。都市域の拡大を展望しながらのこうした都市基盤整備は、大正から昭和初期にかけても継続的に進められて現代の原型としての京都の都市は建設され、拡大発展した。1931年には遂に面積約288km²、人口100万の都市が誕生し、現代の京都市域の原型をほぼ形成した¹⁷。

明治における京都復興の原点は、衰微する都市としての深刻さにあった。首都が東京へ移ったことによる都市の衰退に対して、それへの反発として京都市民の闘志と京都府の熱意が加わったことで、京都の近代的復興を可能にした。

2. 発信する役割を果たす文化の中心地の構築

京都は大空襲を受けなかったが、日中戦争・太平洋戦争は大きな影響を与えた。戦後の体制変化で、保守層の基盤が揺らいだことや、生活の新しい動向を求める民衆の要望などが、革新行政の状況を生み出した¹⁸。戦後、日本は都市化が急速に進み、1950年代から都市周辺の丘陵地等における開発が激しくなり、宅地開発の波は京都にも及ぶようになった。『京都府の歴史』は「インフレがいちおう

¹⁶三大事業とは、第二琵琶湖疏水事業、水道事業及び道路拡築、電気軌道敷設事業をいう。

¹⁷京都市政公式サイト 京都市歴史資料館

http://www.city.kyoto.jp/somu/rekishi/fm/nenpyou/toshi_h_frame.html

¹⁸脇田修、脇田晴子『物語 京都の歴史』(中央公論新社、2008年1月)、P305。

収まり、ついでとられた高度成長の波にのって、都市の発展も目立った。京都市ではすでに「交通戦争」の様相が表われ、市電も将来は廃止されて地下鉄に切り替えられると言う。南部はドシドシ開発されて住宅地が増え、過密化が進んでいる¹⁹」と記録している。

歴史的意義が高く景観上も重要な地域を保存するため、文化人や市民団体による宅地開発反対運動が展開され、古都の景観を守ろうとする世論が高まった。京都の双ヶ岡の開発問題などを契機に、1966年に議員立法として「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法（古都保存法）」が制定され、新改築や宅地造成が制約された。

古都保存法は、京都を代表とする古都のすぐれた歴史的風土を急速な都市化による破壊から守る特別の立法措置である。「貴重な歴史的、文化的資産を後世の国民へ末永く継承させるべき」、文化の向上発展に寄与することを目的とすることを明記している。この法律は歴史上意義を有する建造物、遺跡等が周囲の自然的環境と一体をなして古都における伝統と文化を具現し、および形成している土地の状況を「歴史的風土」と定義した。これは京都の街並みに大きな意味がある。

この法律に基づき、京都の三方の山並みやその山裾等の地域で、歴史的に意義が高く景観上も重要な地域を国土交通大臣が歴史的風土保存区域に指定し、その中で特に枢要な地域を都市計画手続きによって歴史的風土特別保存地区に指定している。それぞれの歴史的風土保存区域には、歴史的風土の保存行政の基本となるべき歴史的風土保存計画が定められている。古都保存法のおかげで、京都市全市にわたって歴史的風土が良好に維持されており、その全域において、歴史的風土の保存と市民生活との調和を図る措置も講じられた。京都市民と京都市はこれまでも、京都の文化や景観を守り、育てるため、多大の努力を傾注し、大きな成果も挙げてきた。

古都保存の次に、京都は環境問題に向けてもリーダーシップを取った。1997年に開催された「国連気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3）」を契機に、

¹⁹赤松俊秀、山本四郎『京都府の歴史』（山川出版社、1969年11月）、P 313。

持続可能な社会のための京都議定書が合意した。京都議定書誕生地として先導的な役割を果たしていくため、日本初の地球温暖化対策条例の制定(2004年12月)など、先進的な取組を進めてきた。さらに、近年「京都市環境モデル都市行動計画²⁰」も実施し始めた。「低炭素」の視点を基づいて、車優先から公共交通優先への交通政策の転換、伝統的建築を活かした環境負荷の少ない美しい建築など「低炭素型まちづくり」を推進し、温室効果ガス削減の中、長期目標も掲げている。「環境モデル都市構想」は、世界の先例となる低炭素型都市構造への転換を進めるものに位置づけられた取り組みである。地域の特性を生かし、低炭素社会の実現に向けて、温室効果ガス排出の大幅な削減など高い目標を掲げて先駆的な取り組みにチャレンジする。京都は情報発信することにより、国内外での低炭素社会づくりへの取り組みを広げている。

以上から、京都は日本文化の発祥の地のみならず、創造の地でもあるとも言える。「古都保存法」から「環境モデル都市構想」へ、京都は文化遺産の保護から、環境への負荷の少ない持続可能な町を目指し、今も新しい文化を産み出し続ける。豊かな歴史資源や伝統文化に、進取の精神と創造の力など、京都の都市の特性をさらに高めるとともに、市民のライフスタイルを転換しつつある。行政だけでなく、市民や事業者とのゆるぎないパートナーシップにより推進し、大学・研究機関、先端産業など地域資源の一層の活用を通じて、京都を文化の中心地として再び構築した。

二、京都の復興する原動力及び文化環境の構築

1. 文化力は京都の復興する原動力の源

京都復興の歩みから分かるように、国の支援策、都市政策、市民の意欲などそれぞれの要素は復興に不可欠なものである。しかし、これらの要素はより深い所に根差している。それは京都が特有している都市文化の特性である。言い換えれば、京都の文化力は見えざる神の手のように、終始復興と発展の原動力の源とな

²⁰京都市政公式サイト「京都市環境モデル都市行動計画」の内容を参照
<http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/page/0000056642.html>

っている。この文化力の源がなければ、京都復興の都市基盤は短時間に実現しなかったし、さらに、時代をリードして古都保護や環境保全の呼びかけもできなかったであろう。

都市自身も文化の産物であるが、様々な知識を有する人々が都市に集まり、交流する時、巨大なエネルギーを生み出し、高度成長が促進され、文化の多様性が現れるので、都市は文化の舞台だと言える。ルイス・マンフォード(Lewis Mumford、1895～1990)が指摘した「都市文化はより高い社会表現を通して呈しているのは生活の文化である²¹⁾」ように、京都の文化の素晴らしさは単なる文化財的価値のある歴史資源だけを意味するのではなく、先人たちから受け継いできた風習、伝統、言い伝えなど、無形な文化生活全般、そして感性や思いも含むものである。京都の文化は長い歴史と伝統に培われた「和文化」の代表であるから、尽きることのない力を持っている。

2. 文化力を引き出す環境の構築

文化力は抽象的で見えないものだが、その都市の文化環境が文化の具現として考察することは可能である。故に、京都の文化環境の構築は、京都の文化力が発展の原動力としていかに機能するかに意味があると考えられる。京都の文化環境の構築については下記のいくつかの面から簡単に分析したい。

① 景観や行事を通して都市の文化特性を表わす

京都には 1200 年を超える悠久の歴史の中で磨き上げられた文化と景観があり、世界にも類を見ない良い文化環境が形成されている。豊かな自然と古都の歴史が一体となり、都市空間と文化が織りなしている。季節の移ろいを感じさせる自然景観と、史跡や歴史的建造物が散在する町並が特徴的である。京都市内で風致地区が 17 地区約 17,938ha(全国の 11%)、歴史的風土保存区域が 14 地区約 8,513ha(全国の 42%)、歴史的風土特別保存地区が 24 地区約 2,862ha(全国の 32%)

²¹⁾Lewis Mumford 著(宋俊嶺等訳)『城市の文化』(北京:中国建築工業出版社、2009年8月)、P493。

という²²。歴史的な建造物と現代文化が溶け合い、落ち着いた町並みの風情を醸し出し、他都市との比較における明らかな優位性が裏付けられる。

環境だけではなく、庶民に支えられた年中行事も庶民の生活に溶け込んだ京都の文化の一部である。祇園祭をはじめ、京都の年中行事の数は497もある²³。この行事は観光客の為だけではなく、市民生活の一部でもある。このような行事を重視する伝統も歴史環境の保存への積極的な取り組みとなる。

居住、生活環境の面から、町衆と共に生きる京都の独特な文化的ライフを維持することを通して、京都市の文化の特性を醸成している。

②文化、教育資源の集積を通して文化中心的な地位を作り出す

京都には、宗派の本山として位置する寺社や、華道や茶道などにおける流派の家元の存在が多い。これらの存在は、日本社会における文化的ネットワークの中心組織の集積と言い換えることもできる。このことは、本質指向や本物指向にもつながる環境としても捉えられる。さらに、これらの中心組織の存在は、人、情報、モノ、カネなど、文化資源の求心力と遠心力の両機能を果たす動力源となっている。このように醸成された文化環境が、生活文化、ものづくり文化、芸術文化にも大きな影響を与え、常に質の高い、時代の先端を行く文化を生み続けてきた。それらの積層は、現在の京都産業の知的資産の蓄積につながっているようである。

また2007年学校基本調査によると、人口100万人当たりの大学数では、京都は17.0校で全国1位である。さらに、京都市の大学進学率も66.2%と1位である。このような高等教育機関および学生の集積は、自ずと関連する研究機関や文化施設の集積にもつながり、学術、芸術両面の人材の集積は、高度な産業人材の集積誘引にもつながっている。このように、質量両面からの高い「人財」の集積は、自ずと都市の文化環境に影響を及ぼしている。

²²2008年4月のデータ、出所は京都商工会議所「京都の産業・智恵の発信」報告書

<http://www.kyo.or.jp/chie/report/repo01.html>

²³森谷剋久編『京都の祭り暦』（小学館、2000年5月）に基づいて、筆者が統計したデータ。

③文化創新によって産業に付加価値を加える

京都が日本の伝統を象徴する都市でありながら、文化の多様性を保持する都市であり、歴史の姿を今に残しながら重層的に生き続ける世界でも稀有の都市である。京都は老舗が多く、伝統産業が息づく都市であり、「和文化をこれだけ取り揃えている都市は京都のほかに存在しない²⁴」まで言われた。京都の伝統産業が革新に取り込むのは、金儲けより、事業を存続させるためなので、事業を次世代に引き継ぐことの優先度が高い。一方、任天堂、村田製造所、ロームなど最先端ハイテクノロジー企業やユニークな企業、ベンチャー企業も集中している。本社を東京ではなく、京都において、地域にこだわる企業も少なくない。

京都の強みは歴史資産を持つ点にあり、文化をベースに独創性や技術を組み合わせ、新たな価値を創成する流れがある。例えば有名な京セラを生み出したのは陶磁器の流れを汲む伝統産業である。つまり、伝統とテクノロジーの融合は、新たなビジネスが生み出される一つのメカニズムである。京都には閉鎖的なイメージが付きまとうが、実は異文化許容性を持ち、継続のための革新が常に行われている。京都の経済環境も、歴史や文化に裏打ちされた継続性と独創性を兼ね備えている。

三、京都モデルの真義

文物を法的保護する面、古い建物の維持など技術的な面、また都市の経済や文化支援など政策的な面など、京都モデルは洛陽に様々な啓発を与えることができる。しかし、筆者から見ると、これらはすべて因果関係の中の「果」の方であり、「因」ではない。結局、京都の都市復興・発展のできる「因」は歴史によって積み重なった文化力である。この文化力（有形及び無形な文化資本を含め）があるからこそ、整った文化環境の構築によって最大限の力を発揮でき、現在の京都につながった。

したがって、京都モデルの真義は、再生不可能な歴史文化資本を都市発展の源

²⁴村山裕三『京都型ビジネス—独創と継続の経営術』（日本放送出版協会、2008年12月）、P 9。

として位置付け、優れた文化環境の構築によって、文化の力で各領域の連動を推進し、発展を実現することである。

第三節 研究内容及び方法

京都に関する先行研究を通して、文化資本の活用は歴史都市競争力の源であることが明らかになった。洛陽のような古都は間違いなく巨大な文化資源を持っている。しかし、このような巨大な文化資源の中身を把握し、その価値を究明することが、すべての基本である。その文化資源の中身と価値を明らかにした上に、環境の構築によって、はじめて都市再生の原動力の源となる。言い換えると、京都モデルの啓発を受けながら、まずは洛陽の文化の在り方を究明しなければならない。本論文は洛陽の文化の歴史的過程と地域的特色についての認識に力点を置いて、研究に努めることとする。

一、先行研究及びその展開

1. 先行研究について

本論文の先行研究が大きく三つに分けることができる。一部だけ挙げる。

① 文化や都市、風土に関する著作

- デイビッド・スロスビー著、中谷武雄・後藤和子監訳『文化経済学—創造性探求から都市再生まで』（日本経済新聞出版社、2002年9月）
- Lewis Mumford 著、宋俊嶺等訳《城市の文化》（中国建築工業出版社、2009年8月）
- 銭穆『中国文化史導論』（商務印書館、1993年5月）
- 内藤湖南『内藤湖南全集』（筑摩書房）
- 武内義雄『中国思想史』（岩波書店、1957年9月）
- 史念海『中国古都和文化』（中華書局、1998年7月）など

② 京都モデル関連する研究

- 朝尾直弘等『県史 26 京都府の歴史』(山川出版社、2004年10月)
- 脇田修・脇田晴子『物語 京都の歴史』(中央公論新社、2008年1月)
- 赤松俊秀・山本四郎『京都府の歴史』(山川出版社、1969年11月)
- 西嶋定生編『奈良・平安の都と長安』(小学館、1983年10月)
- 同志社大学大学院ビジネス研究科、地域連携カリキュラムシンポジウム「京都とビジネス—その可能性を探究」(2005年4月9日)
- 村山裕三『京都型ビジネス 独創と継続の経営術』(日本放送出版協会、2008年12月)
- 松橋隆治『京都議定書と地球の再生』(日本放送出版協会、2002年9月)
- 森谷剋久編『京都の祭り暦』(小学館、2000年5月) など

③ 洛陽の歴史文化に関する研究

- 平岡武夫、今井清『唐代の長安と洛陽(資料編)』(同朋社、1985年9月)
- 松浦友久『唐詩の旅—黄河編』(社会思想社、1980年3月)
- 妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」太田次男等編『白居易の文学と人生 I』(勉誠社、1993年6月)
- 気賀澤保規編『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』(汲古書院、2011年3月)
- 松浦友久、植木久行『長安・洛陽物語』(集英社、1987年7月)
- 寺尾剛「李白における洛陽の意義—安史の乱時の言及を中心に」(『中国詩文論叢』10、1991年)
- 中尾健一郎「白居易と洛陽」(『中国文学論集』34、2005年)
- 橘英範「六朝詩に詠じられた洛陽」『洛陽の歴史と文学』(佐川英治編集、岡山大学文学部プロジェクト研究報告書10、2008年3月)。
- 妹尾達彦「隋唐洛陽城の官人居住地」(『東洋文化研究所紀要』第百三十三冊、1997年)
- 中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』(汲古書院、2012年10月)

- 宮崎市定「隋唐文化の本質」『中国に学ぶ』（中央公論新社）
 - 竹内康浩「洛陽出土伝世品青銅器研究（一）」（『東洋文化研究所紀要』138号 1999年）
 - 塩沢祐仁『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』（雄山閣、2010年1月）
 - 銭穆「二程學術述評」『中国學術思想史論叢』第五卷（安徽教育出版社、2004年7月）
 - 木田知生「北宋時代の洛陽と士人達 開封との対立の中で」（『東洋史研究』38、1979年）
 - 葛兆光「洛陽与汴梁—文化重心与政治重心的分離」『中国思想史（第二卷）』（復旦大学出版社、2000年12月）
 - 王美秀『洛陽伽藍記の文化論述—歴史・空間・身分』（里仁書局、2007年1月）
 - 河南科学技術大学文化遺産保護研究チーム「洛陽都市發展と文物保護の経験と教訓研究」（2005年）
 - 李久昌『国家、空間與社会—古代洛陽都城空間演變研究』（三秦出版社、2007年11月）
 - 張乃翥、張成渝『洛陽輿糸綢之路』（北京図書館出版社、2009年8月）
 - 王丹など『千年帝京洛陽城』（北京大学出版社、2013年3月）
 - 吳迪など『古都洛陽』（杭州出版社、2011年1月）
 - 王貴祥『中国古代建築知識普及輿傳承シリーズ叢書：古都洛陽』（清華大学出版社、2012年7月）
 - 郭引強『洛陽大遺跡研究與保護』（文物出版社、2009年10月）
 - 趙振華『洛陽古代銘刻文献研究』（三秦出版社、2009年12月）
 - 陳燕妮『居住的詩篇：論唐詩中的洛陽都市建築景觀』（人民出版社、2011年9月）
 - 史善鋼編『河洛文化源流考』（河南人民出版社、2009年12月） など
- そのほか、関係する雑誌論文や修士・博士論文、講演会・学会発表の成果、メディア報道なども数多く参考した。

2. 先行研究の利用と展開

「文化」に対する理解と釈明は様々であるが、根本的な定義「文化とは、人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果のこと²⁵」より離れることができないであろう。内藤湖南がおよそ百年前に指摘した「文化と云ふ語は、近頃流行し、何ものにでも此の二字が附せられると景氣好く見えるかのやうであるが、しかし、一般世人が文化其の物をどれだけ理解して居るか²⁶」という現象は、今でも通じる。現代社会では文化の真義を追究せず何にでも平気で「文化」という言葉を付ける。しかし、文化を復興の基盤にする都市が曖昧な態度で文化を扱うならば、文化の真の力が発揮できないと思う。したがって、まず、溢れるほどある「文化」という言い方のなかで、「洛陽の文化」の在り方がどうあるべきなのかを、考える必要がある。その価値はどこにあるかを、はっきりとしなければならない。

以上、三分類した先行研究をめぐって、それぞれの利用及び展開について下記のように説明する。

まず、①の多くは関係領域或いは文化現象を総合的に考察し、体系的に解説するので、本論文の理論基盤になる思考方法の指導的なものである。時代や長い時期の検証を耐えた著作が多く、各領域の基礎的テキストのような存在なので、筆者は時間をかけて深く勉強し、思考した。

例えば都市研究の金字塔として知られる古典的名著である『都市の文化』から、「都市は文化的個体化の単位としての地域であり、文化的な貯蔵、伝播と交流、創造的付加の機能——これこそ都市のもっとも本質的な機能であろう」と要約でき、都市の文化に対する認識を確立した。また、文化経済界の第一人者の作品と言われる『文化経済学—創造性の探求から都市再生まで』の経済的価値と文化的価値の両面を併せ持つ「文化資本」という概念を論文に取り込んだ。その他、銭穆、内藤湖南、宮崎市定など先賢の文化論や歴史観も終始本論文に大きいな影響

²⁵新村出編『広辞苑』（岩波書店、1988年10月）、P2140。

²⁶『内藤湖南全集 第九巻』（筑摩書房、1969年4月）、初出は『大阪朝日新聞』（大阪朝日新聞社、1922年1月5日～7日）。

を与えている。

②の部分は論文の初期の段階によく参考としたものである。理論より実務的なものが多く、京都に関する内容を詳しく述べている。これらの勉強を通して、京都の歴史、発展、今日までの全貌を把握でき、京都モデルは都市企画、行政政策、立法、市民参加の仕組み、教育・技術支援などいろいろな面において取るべきところがあると感じた。しかし、深く分析すると、これら一見独立している各領域は、文化の絆で繋がっていることが分かる。太い歴史の根から文化求心力を出しているので、京都の復興を成し遂げたのである。こちらは論文の重点ではないため、序章以外の直接引用が多くないが、文化力こそ古都洛陽の再生の王道という結論を導く際には役立った。

③に挙げたのは洛陽に関する資料のほんの一部である。第一章から第五章は本論であり、力点を置いて書く予定なので、資料収集に努めた。洛陽を中心に、歴史全般あるいは一部の時代・時期に関する歴史論術、洛陽の一要素（例えば洛陽の人物、文学作品、出土文物、遺跡、城門など）を取り上げる研究が多い。また、テーマは洛陽ではないが、洛陽が強く関与している研究（例えばシルクロード、文学史、仏教史などに触れた洛陽）がある。洛陽の歴史が長くて複雑で、多くの領域に及んでいるので、これらの資料は洛陽の文化の多様性と複合性を示した。

しかし、今まで洛陽に関する研究はかなり多かったが、歴史の考証的なものや具体的な一文化現象あるいは一要素に限ったものが多い。これらの先行研究は各時代の洛陽の文化表象のまとめに、具体的な素材として各章に多く引用した。先行研究を通して、各時代・時期の洛陽の断面、または洛陽文化の各要素を通観できた。しかし、洛陽に関する各文化現象や諸要素の意味や意義、関連性（事象と洛陽の風土の関連性、事象の間の関連性）などの総合的な論述は乏しい。

先行研究を踏まえ、洛陽に焦点を合わせ、それぞれの時代の洛陽の文化特徴を明らかにできる重大かつ特徴的な文化現象を取りあげ、考察、分析することは本論の研究内容である。この作業は各時代で繰り返し、洛陽における文化の進化と深化の変遷を究明する。それぞれの結論を兼ねると、長い持続と展開を持つ洛陽

の文化の在り方が通観的・総合的に見えてくると考えている。

二、研究方法

研究方法として、文献の比較、分析することに加え、できれば最新の考古成果や民俗学の調査研究結果を利用し、古代人の思惟や感覚そのものにより近づき、正しい解釈に努め、種々の視点から考察を加える。洛陽に関する記載は各時代に渡って膨大な量がある。文献考察の対象について、歴史文献は『史記』、『資治通鑑』などの古書を利用し、『唐兩京坊考』、『洛陽伽藍記』など都に関する重要な記録を併用し、さらに当時の代表的な文学作品も取り入れ、歴史背景の全貌を明らかにしたうえで、各時期の洛陽の文化現象や時代像をできるだけ正確に再現し、その特徴を捉えることに努めた。

先行研究を系統的に整理、分類することによって、私の考えも打ち出し、それぞれの時代の洛陽の文化の在り方を究明する。そして、以下の三点を特に意識しながら研究を展開する。

1. キーワードとしての文化表象

本論文の「洛陽の文化」とは、「文化」に「洛陽」という特定地域を加え、二つが融合して形成される固有の価値を称するものであり、当時の洛陽に住む人や関連する人々の智識、道徳、趣味等を基礎として築き上げられたものを指す。洛陽という地域に、人的流動、異民族の破壊や加入、政治作用などによって様々な文化が交じり合い、常に変容している。その土地の言葉、景観、料理、習慣、伝統等具体的なものと現象を、すべて「洛陽の文化」と呼べるものである。例えば竜門石窟、牡丹の花、水席（洛陽特有の宴席）、唐三彩など、全ては洛陽を代表する文化要素である。しかし、個別な文化要素だけでは洛陽文化の全体的なイメージを掴むのは困難である。

ここで、文化表象という、さまざまな文化現象を横断的かつ自由に考察できる概念を論文に取り入れた。「表象」(representation) という語は、人間が自己や他者や世界を、何らかの感覚や媒体を通じてイメージする行為、およびその行為

を通じて生み出されたものを指す²⁷。表象という概念は文字通り再・呈示する、あるいは、あらためて呈示する、という意味を持っている²⁸。映像、音声の保存法がない時代において、洛陽の文化を表現・伝達される最大なルーツは文字である。文字を介して描き出したのは、実像ではなくイメージなので、「表象」と理解しても良い。したがって、本論は文化表象というキーワードを通して洛陽の各時代に現れる文化表象を分析し、考察し、文化的な現象をその本質的な特徴を捉えるようにアプローチする。

2. 時代区分論

洛陽の歴史は、ほぼ中国の歴史と同じく古いため、複数の王朝の交代を経験した。マクロ的な視点から見ると、「洛陽の文化」はすべて歴史を軸に展開している。通常、中国の歴史を解説するのに、王朝で区分して理解するのは便利だが、洛陽の都城史から見ると、都としての王朝が長かろうが短かろうが十数回あるので、各王朝を区分期間とすれば、煩瑣かつ効率が悪い。

連清吉は内藤湖南など先賢の歴史観を継ぎ、歴史時代の文化意味について、「時代は政権更迭の象徴より、政治、社会、経済、思想、学術の総合体である。……時代は「時間」と「空間」の二重の意義があり、「時代の空間」は文化の形成を意味し、「時代の時間」は文化の超越を意味する²⁹」と指摘している。本論文も王朝の交代だけではなく、社会・文化の変革を考慮の中に入れて線を描き、時代を区分した。

先秦時代から宋まで、一貫して、洛陽は全国の政治中枢的なエリアに位置し、中華文明の精華は集中して洛陽で展開していた。南宋以降は地方都市としての文化は続いているが、中華文明の代表性が失われ、モンゴルの侵入とともに、洛陽の文脈が一時的にほぼ破滅し、徹底的に中国の政治の表舞台から消えていた。従って、本論文が扱う洛陽の文化の範囲は、先秦時代から宋代までの時期に限る。

²⁷文化表象の定義は東京大学の表象文化論研究室ホームページ

<http://repre.c.u-tokyo.ac.jp/about/>を参考。

²⁸ ロベルト・テッローシ特別講演会「美学と文化研究」（京都大学大学院人間・環境学研究科、2006年3月9日）の内容を参考。

²⁹連清吉『日本近代の文化史学家：内藤湖南』（台湾学生書局、2004年10月）、P74～75。

上古から秦の統一までの先秦時代、前後四百年も続いた両漢時代、三国魏晋南北朝時代、隋唐時代、宋代の五つの時期を分けることができる。これらの時代において、洛陽で様々な新しい文化が発信され、多くの中華文化の発展と変革を生み出した。研究の本文はそれぞれの時代の洛陽の文化表象の考察・分析を中心に展開する。

3. 文学作品と文献資料の対照的に分析

以上の時代区分論と対照的に、王国維は「およそその時代にはその時代の文学がある。楚の辞、漢の賦、六朝の駢文、唐の詩、宋の詞、元の曲は、どれもその時代を代表する文学であり、後世が継承できないものであった³⁰」という中国文学史に関する有名な説がある。

中国では昔から文学作品を通して歴史を見る伝統がある。洛陽に及んだ著述や文学作品は、『詩経』から始め、歴史の推移とともに数多く残された。題材、種類、内容が豊富で、その時代の洛陽の様子と人文を各方面から反映し、洛陽の研究には豊富な材料が提供される。洛陽に関わる膨大な文学作品を歴史の軸として考察すると、歴代の代表的な文化作品はちょうど、歴代の洛陽の歴史的風景とイメージを考察する重要な手掛かりでもあることが気付かされる。文学的な描写は作者の歴史観や価値観など感情が入っているので、さまざまな立場と角度で描かれてきた洛陽は、まさに各時代の原風景であり、文化人の洛陽に対する認識とイメージである。さらに、この文学的な記述とその時代の歴史的な記述を対照すると、比較的正確に洛陽文化事情、例えば時代背景、文化傾向を掴むことができ、特徴を分析することが可能となる。故に、各時期の洛陽に関する史実と文学作品をできるだけ収集し、選別した。偏った記述を避け、比較的信頼できる資料と影響力の強い、代表性のある文学作品を材料として論文に使用する。

歴史記載と文学記述の二つを相互に対照する手掛かりを用いることで、その時代に起こった代表的な文化表象及びその関連性を明らかにすることができる。各時代の洛陽の風景を再現しながら、洛陽のイメージの整理を通して、その象徴的

³⁰王国維「宋元戯曲史」『王国維戯曲論文集』（台北：里仁書局、2005年）、P 3。

な文化意味を探ってみる。そして、洛陽の時代像、即ち上述の五つの時期における洛陽の文化表象の歴史軌跡を追跡することによって、洛陽の文化の本質、価値を究明する。

第四節 研究目的

一、当面の目標

「都市」と「文化」両者の間で、多層的に結合しているのは歴史発展の必然の結果である。前述したように、「洛陽」という言葉は中国歴史、中華文明と緊密に繋がっている。しかし、歴史の長さに鑑みて、一口に洛陽の文化と言っても漠然過ぎで意味がないので、まず、洛陽の文化とは何か、どんな価値があるか、という基本的なことを明確にしなければいけない。現段階の目標は、洛陽の文化及びその価値を究明することにした。

つまり、埋もれた潜在的なものも含め、洛陽という地域が有する核心的な文化資源を整理し、中身、根源、風土との関係などを含めるものを究明する。この目標は単純そうに見えるが、洛陽という 4000 の年歴史がある都市で実施すると、長いスパン、複雑な背景及び膨大な資料などのため、逆に手掛かりがつかなくなる。このため、これまで洛陽の文化に関する考察と研究は実に少ない。しかし、京都モデルの適用基盤は文化であり、実際に非常に時間かかり、大変な作業と予想できるが、これは文化による洛陽の復興に絶対必要な作業だと考えている。

二、最終的な目標

古い都の歴史・文化的な価値は貴重な再生不可能な資源であり、中国だけではなく、日本にとっても重要な意味をもつ。洛陽のような古都を経済発展の波から守るため、日本の古都保全と発展の都市戦略、特に京都の文化による継続性のある都市開発の理念、構図及び措置などを含む文化環境の構築を研究した。

京都の実例は文化環境の構築によって、創造性を核として文化を振興できることを示している。文化力を通して深刻な都市問題を解決し、都市の活力を取り戻

す試みは、大きな成功を収めた。洛陽も京都モデルの成功を図るには、自分の文化力の正確な把握と文化環境の整備の両方が必要となる。以上、洛陽という地域が蓄積した歴史文化のストックを掘り起こし、価値を評価する当面の目標を踏まえ、次の課題は洛陽の豊かな文化資源も活用しての文化環境の構築となる。最終的な目標は、京都の経験を洛陽でも通用し、文化力を通して経済的にも環境的にも持続可能性であることを提言し、古都洛陽の復興に資することである。

現代社会は日進月歩で新しくなり、驚異のスピードで発展しているとともに、伝統と文化を具現する歴史的な風土も急速に消えている。一刻も早くこの功利主義に染まった傾向を食い止め、伝統文化と現代生活の連結点を探るべきである。これは私が本論文を取り組む当時の初志であると同時に、これから一生努力する方向でもある。

第一章 先秦時代における洛陽の文化表象—天下の中心

中国の長い歴史を眺めるとき、紀元前 221 年の秦の中国統一は極めて重要なポイントであり、領土的かつ文化的な統一体という意味での「中国」の始まりになった。秦の統一は画期的な意味を持つので、中国の歴史区分で、遠古から秦によって統一された紀元前 221 年まで、特に春秋戦国時代を先秦時代という。先秦時代の歴史を究明しようとする時、洛陽あたりの地域は要となる存在であり、その歴史と文化に触れずに中国古代文化は語れない。

従来の研究は、先秦時代における洛陽の「天下の中」と扱われる事実を度々言及するが、これを一つの文化現象として焦点を当てるものはない。近年地元の学者は「天下の中心」と洛陽の関係を結び研究が見られたが、単なる一都市の文化史としての位置づけが多く、系統的な深い論証が少ない³¹。本稿は地方の都市文化史を超え、中国文化の角度から先秦時代における洛陽の文化表象を究明し、歴史文献に基づく洛陽の「天下の中心」として位置づけられた要因、意味及びその影響について探ろうとするものである。

第一節 先秦時代の洛陽

一、洛陽という地域名の変遷

中国の古代文明について、最近の考古の成果で、長江流域にもより古く、黄河文明に劣らない水準をもつ遺跡が発見されたので、中華文明の発生は一元論から多元論へ転換した。しかし、紀元前 2000 年前後に長江流域の文化は急激に衰退し、独自の文化をもつ地域が消滅し、黄河中流域の文化の影響を強く受け始め、後進的な文化と見られる。それは初期王朝の基盤である「中原」（黄河中流域の現在の河南省及びその周辺の地域）を中心に歴史の始まりを描こうとした『史記』の歴史観とも共通している³²と指摘されたように、文字のある中国 4000 年の歴

³¹例えば李久昌「天下之中与列朝都洛」（『河南社会科学 2007 年第四期』）、王克陵「西周時期“天下之中”的擇定与“王土”勘測」（『人大報刊複印資料（先秦、秦漢史）』1990 年第 5 期）、龔勝生「試論我国“天下之中”的歷史源流」（華中師範大學學報（哲學社會科學版）、1994 年 1 月）等がある。

³²岸本美緒『中国社会の歴史的展開』（放送大学教育振興会、2007 年 4 月）、P 24。

史においては、やはり「黄河文明」は中華文明の起こりであろう。

黄河中流域、もう少し地域を限定して言えば、洛陽盆地を中心とする中原地域は、古文明期の中国において、中央部は「中華」（諸夏、華夏）、そして周辺は「四夷」（蛮、夷、戎、狄）とされた。伝説の夏王朝にかかわりを持つ地理空間は、その中心部を河南の洛陽盆地に置きつつ、黄河と淮河と長江それぞれの下流域にまたがる広大な低地を占め、「四夷」で言えば東夷という低地民の住地である。中心部の洛陽盆地は「中原」の核にあたり、南船北馬の交通網のハブをなした³³。

洛陽は中国、ひいては世界に最も古い都城の一つである。都市の歴史は、人類の文明の歴史と同じ位長いものがあるとは言え、洛陽のような計画的な建造意図を持ち、建造時代、経緯まできちんとした文字の記録が残された古代都市は極めて稀である。四千年の都市の歴史の中で、全体的に古都洛陽と呼ばれているが、「洛陽」という語が指し示す領域と呼び方は、ずっと固定されたわけではない。現在「洛陽」と呼ばれる地域は、歴史的に見れば、時代や王朝によって、名前と場所はたびたび変化してきたのである。

そもそも、洛陽の名の由来は、洛水の北というその地理的条件にある。日の当たる場所を示す陽の字は、山の場合は南側、川岸ではその北岸をさすが、洛陽は洛水の北の都会という意味に基づき、先秦時代において、前後して斟鄩、西亳、邾鄩、周南、新邑、洛邑、王城、成周、河南などの呼び方がある。

洛陽という名前が最初に使われようになった時期について、明確的な記録がないため、まだ確定できない。一般的に少なくとも戦国時代の紀元前 350 年頃既に「洛陽」という言い方が存在していたとされる。例えば多くの資料に有名な縦横家蘇秦を述べる時、大体「洛陽の出身」に言及される。洛陽盆地の東より南、そして西にかけては、中岳と称される嵩山山系が展開し、盆地の中央を洛河、伊河が流れる。両河川は盆地東部で合流した後、東北に流れて黄河に注ぎ込む。そのような地理的条件は昔から「三川」と呼ばれ、紀元前 249 年、秦は東周を滅ぼし、

³³ 斯波義信・浜口允子『中国の歴史と社会』（放送大学教育振興会、1998年3月20日）、P 23。

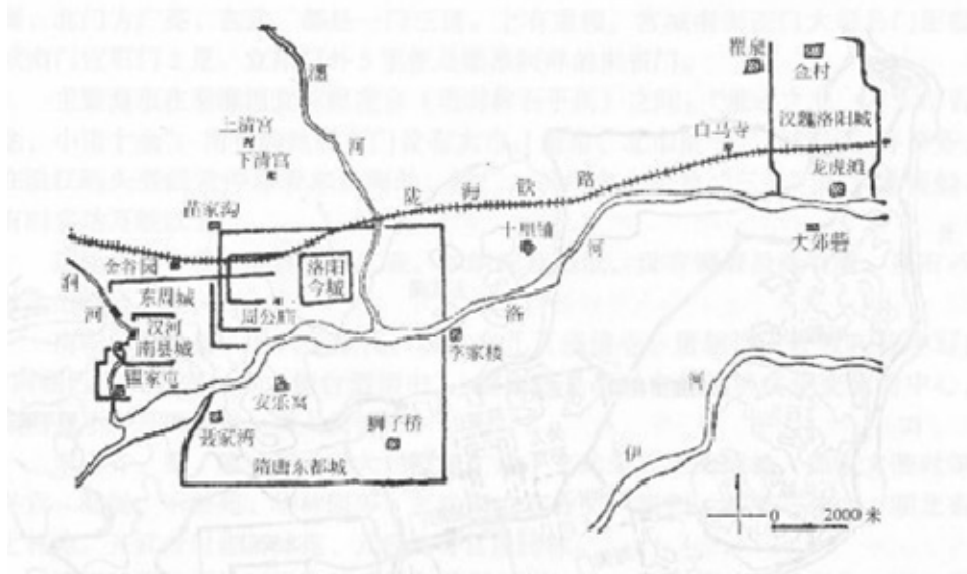
成周城の旧址に洛陽県を設け、洛陽あたりを「三川郡」と名付けた。これは洛陽という名は初めて正式な行政名として使われた記録である。その後の紀元前 202 年、漢高祖洛陽を都とした記録は、「洛陽」という名がはじめて都として史書に書かれたことである。

漢代では、火徳とする漢王朝に洛のサンズイ偏が忌まれ、「雒陽」に改名された。しかし、土徳とする三国時代の魏により元の「洛陽」に戻された。また、唐代の中間にある女帝則天武後の国の武周（690-705 年）では「神都」と改名されて都となった。これも唐の復活により元の洛陽の名に戻され、現在まで来た。また、洛陽（洛邑あるいは雒陽）という地名の後ろに、別名河南と特別に注釈する史料も少なくない。

図 3 の洛陽付近歴代都城地勢変遷図が示しているように、夏の時代から北宋までの三千年の間、洛陽の都市位置は洛川の畔で東西位置を移動して発展している。隋の煬帝が建てた洛陽城以前はほとんど洛河の北に位置し、隋唐洛陽城から洛河の兩岸に跨っているようになった。したがって、古代において洛陽とは洛陽盆地の中心部のことを指し、決められた地域空間より、時代と共に範囲や中心部が変遷する文化地域の称呼となっている。

図 3 : 洛陽付近歴代都城地勢変遷図³⁴

³⁴董鑒泓主編『中國城市建設史』（中國建築工業出版社、2004 年 7 月）、P 43。



よって、本稿に扱っている「洛陽」は文化地域の意味の上の概念であり、即ち各王朝によって位置がずれるが、洛陽盆地を中心とする地域空間を言う。

二、洛陽が天下の中心とされる原点—洛邑で成周の造営

西周王朝の時代は、その後の中国史の上で一つのモデルとなり、極めて重要な位置づけをされている。洛陽で成周の造営について、古文献の『逸周書・作雒』、『逸周書・度邑』、『尚書・洛誥』、『尚書・召誥』、『史記・周本紀』など数多くの文献は当時の一大事として記録し、資料として有効であることは言を俟たない。また、出土した西周時代の青銅器の銘文も洛邑、成周のことについて言及しているので、洛邑で成周の存在は全く疑いのない事実と判明できる。

洛陽に王都の成周の造営について、岡村秀典は「おそらく洛陽は夏王朝の故地と見なされていたため、そこに中国最初の王朝に対する敬意と「中国」の正統な継承者であることを宣言する意図とが含まれていたのだろう³⁵⁾と指摘している。竹内康浩が「成周建設は、単なる偶然性を超えた意味をもつ、積極的な意志的行為である。単なる殷王朝討滅を超えた政治意志、今後自分らがなさねばならぬことへの自覚は、この成周の建設とその後の維持に明確に示されるはずである³⁶⁾」

³⁵⁾ 岡村秀典「中国のはじまり—夏殷周三代の洛陽」(気賀澤保規編『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』、汲古書院、2011年3月)、P60。

³⁶⁾ 竹内康浩「洛陽出土伝世品青銅器研究(一)」(『東洋文化研究所紀要138』1999年)、P

と述べたように、成周は西周王朝の実体を知る上で極めて重要な意味を持っている。

3000 前年以上前のことなので、具体的な年代数など不明点や論議するところがまだ多く残っているが、「洛陽を営むことは一大事で、短時間でできるものではない（営洛大事、非一時所能）」³⁷と言われるように、所在地の選り、具体場所の確定、検証、建設まで複雑なプロセスを経過した。

前述した文献の内容は大きな差がないので、便宜上で以下『史記・周本紀第四』を基づいて述べる。先ず、洛陽盆地に都を置く構想について、周の創建者は殷と違い、武力より徳で天下を征服しようとしていた。故に武王は最初に洛陽盆地に着目したのは、武力ではなく徳で天下を統治するのに、最も適切な所だと判断したのである。

洛水の北涯より伊水の北涯に及ぶまでは、居所とするに其の地勢平易にして周囲に險峻の固無き也、斯れ古有夏の居りし所なり、我今南の方三途を望み北の方嶽鄙に望み、又顧みて有河を瞻て、ここにこの雒伊二水の間を瞻るに、是れ亦商邑の天室に遠かること無し、故に周室の都をこの雒邑に営みて、而して後に去り、馬を華山の南に放し、牛を桃林の丘に放ち、干戈を伏せ、兵士を収め整へ軍旅を釈き放ちて、天下に再び兵を用ひざることを示せり³⁸

洛邑の建設を最初に企画したのは武王であったが、実施まで推進したのは武王の子成王であった。西周の初め、武王は伊洛盆地で新都を建設する意図を示し、成王の時に二回の慎重な方位の占いを経て、洛陽は九鼎の居る所と確定できたのである。以下は洛邑營造の過程も明確に記録している。

成王は豊に在りて召公をして再び洛邑に都を営ましめて、武王の意の如くせむとす、三月周公復たたトひて吉なりしかば、之を延びべ視して卒

364。

³⁷皮錫瑞『今文尚書考証』卷十八（北京：中華書局、1989年）、P 334。

³⁸司馬遷『史記』周本紀第四、訳文は武田尾吉『史記国字解第一卷』（早稲田大学出版社、1929年10月）、P 139。

に洛邑に都を営み築きて九鼎を据るたり、曰く、此れ天下の中央にして四方の諸侯より入貢する道里相均しと、乃ち召誥・洛誥を作る、成王既に殷の遺民を洛邑に遷したれば、周公之に王命を告げて、多士・無佚を作れり³⁹

即ち、洛陽という場所は占いを通して決めた場所であり、天道に合わせる場所であることを強調していた。古代周王城の復元イメージ図から、中心が意図的に強調され、際だったせたことが容易に分かる。「ここは天下の中心で、四方からの入貢の道のりが平均している」という洛陽の地に対して下した定義は、先秦時代における洛陽のイメージの原点となる。故に、佐原康夫は『周礼』の記載にある理想とされる天子の都城と洛陽の関係について、周礼が知られるようになった時代背景をもとに、周公の都城（古来からの都城の理想像）が洛陽そのものを指していく過程を明快に論じ、「周公の偉業は後世の洛陽の原点として絶えず振りかえられ、各王朝において洛陽は、首都であるか否かに拘わらず、常に特別な場所であり続けた⁴⁰」と指摘している。

第二節 洛陽が天下の中心とされる理由及びその成立

地球が丸いのが常識になっている現代社会において、ある意味でどの場所でも世界の中心となれる。しかし、限られていた古代の認知できる世界において、人為的に中心を決めないといけない。前述した洛邑で成周が営造された当初に、初めて「土中」や「此天下之中」などの言葉を通してある具体的な場所を指した。西周時代の洛陽は最も古い決められた天下の中心であり、このイメージは先秦時代に渡って機能を果たし続けたのである。なぜこの場所が中心とされたのか？先秦時代に洛陽を天下の中心とされる理由及びその成立について考察してみた。

³⁹同上、P 142。

⁴⁰佐原康夫「周礼と洛陽」 舘野和己編『古代都市とその形制』（奈良女子大学COEプログラム、2007年8月）、P 31。

一、地理環境

前述した「我南望三塗，北望嶽鄙，顧詹有河，粵詹雒、伊，毋遠天室」の文面から、武王は新しい都を定める時、新都と南側の三塗、北側の嶽鄙及び黄河、洛水、伊水との位置関係が重々考慮したことが分かる。「此天下之中，四方入貢道裏均」は、諸侯が貢物を献じることや労役を出すのに四方からの道程が等しい地理的な中央位置を提示している。洛陽を「土中（大地の中央という意味）」とされたのも、当時の人が洛陽は中央的な存在であり、四方（国）との地理的な距離は均等し、貢賦が集まってくる中心だと考えていた。即ち洛陽の地が東西南北交通の要路にあったということの意味する

洛陽盆地は伊洛平原とも称するが、面積は 3600 平方キロであり、周囲を丘陵に囲まれている。東には中岳嵩山に連なる山塊が黄河まで延び、西には肴山に連なる丘陵が展開する。南には万安山が聳え、北には低層台地の防山が黄河の南に屏風のように連なっている。盆地の海拔は 120-190m，丘陵平均海拔は 300m、周辺山地の海拔は 800m 前後である。山地、丘陵と盆地のとの比高はきわめて大きく、この比高をもって周囲の丘陵から清らかな水が盆地に流入している。洛陽盆地に流れ込む水系は、大別して洛河水系と伊河水系、及び両者が合流した後の伊洛水系に分けられる⁴¹。洛陽はそうした山系と河川と関所によって防御の態勢が組めるという点で、王朝の地となるべき条件を備えていることは多くの先学たちによって十分に認識されている。

久慈大介氏は「西に広がる黄土高原と東に広がる沖積平原地帯との東西の過渡的地帯に位置し、また、アワ・キビを主体的な生業とした北方地域と、稲を主体的な生業とした南方地域との生態環境上の南北の過渡的地帯であった」と二重の意味（交通と気候）で「過渡的地帯」であったという⁴²。さらに稲畑耕一郎も「(夏の)二里頭文化は南北ばかりでなく、東の山東の文化と西の陝西、甘肅の先行し

⁴¹塩沢祐仁『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』（雄山閣、2010年1月）、P4を参考。

⁴²気賀澤保規編『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』（汲古書院、2011年3月）、P30。

た文化が衝突する地でもあった⁴³」と指摘している。実際に、粟と稲の両方が並存している遺跡が、河南省ではいくつか報告され、洛陽盆地は東西南北の異質の生態系にあるので、ここに発する文化も重なり合う中で生まれた独特なものとなった。

環境復元を視野に入れ、洛陽を取り巻く地域というマクロ的な視点で人文・自然環境を探究する考古学者塩沢氏は、「黄河文明はまさにこの地で生まれたと言っても過言ではないが、黄河文明という文言には黄色い大地というイメージが強い。しかし、洛陽について言うならば、緑地も比較的によく、河川には川原石が転がっており、水質も良好で地下水も豊富である。それ故に、中国 3000 年王朝の歴史がこの地において生まれたのである」⁴⁴と述べている。

戦国時代の文献『周礼』は「土中」と似ていた言葉「地中」について、気候的な条件を提起していた。暑すぎず寒すぎずの適切な気候条件も「中」の条件になる。自然万物は調和し共生できる所こそ、王国を建てる場所だという。古代洛陽の生態環境も極端な気候でなく、南北の重なるところであったため、この条件と一致している。

二、政治的な意図

「中国」と「天下」の概念について、張其賢は古代文献を年代別で考察し、西周初期に「中国」はただ地理的な中央の場所を指し、別に中央は四方より優れているという優越感を持っていなかったが、春秋以降は中国＝周王王畿、中国＝諸夏集団など複数の意味を持ち、漸く中国＝文明という意味も加えられたと論じている⁴⁵。しかし、筆者は西周初期の統治者は新しい都城の立地を選ぶ時に「天下の中心」を繰り返し強調し、さらに新しい言葉「中国」を使うことなどは、最初から政治的な意図を持っていると考えている。

周は商国の西の一小国であったため、商を克滅前後は大体「西土」と自称する。

⁴³稲畑耕一郎「中国古代文明と黄河」『月刊しにか』（大修館書店、2001年第一期）、P 30。

⁴⁴塩沢祐仁『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』（雄山閣、平成22年1月）、P 4。

⁴⁵張其賢「「中国」興「天下」的概念探源」（台北：東吳政治学報 2009年第二十七期）、P 169-256。

周は「天命を受けた」と称し、王朝を建て支配を始めたので、「西土」から「中国」までの呼び方の変化は明らかに領土拡大の政治志向を示し、中原及び四方に対する統治を強化するためであった。洛邑は西周の東方の経営拠点として作られたと指摘した学者も少なくないが、いずれにして、西周は洛陽の中央的な地理位置を有利な地勢として意識し、利用していたことは異議がないであろう。

安部健夫は「天下」という概念は西周時代において、「四方（四国）」という周王朝直轄地および封建諸侯国を合わせて指す語で表れ、周の時代に人格的な天の概念が成立すると、それにあわせて「天下」概念の萌芽が見られる⁴⁶と指摘している。「四方」は「中心」を取り囲み、守備的な存在であることも、成周の都市建設から始めて看取できる。楊寛の考察によると、成周城は『周礼・考工記』に「匠人、国を営むに方九里」と一致する。天然の山川を人工的に連結して作られたものとして、より小さい城の外により大きな郭と連結して都城を形作る構造は、成周から考えられる⁴⁷。即ち、城の面積、構造、建設様式や王宮と市場の配置なども記載した都城制度に沿って作られた。この城の所在は天下の中心地、建設内容は礼制に合わせたものであったので、この都市の誕生最初から正統性と正当性が意識的に与えられた。これは安部健夫の「天下概念の萌芽」理論の裏付けになり、後世の王城のモデルにもなる。

春秋時代になると、「中央」が「四方」を凌ぐ感覚は更に強調され、後世まで絶えず影響を与えている。「中心」は「四方」を凌ぎ、格上と扱われる傾向は、比較的古い文献のなかに、はっきり確認できる例として『呂氏春秋』を挙げることができる。

古の王者は、天下の中心を選んで国を建て、国の中心を選んで宮をたて、
宮の中心を選んで廟を立つ⁴⁸

この文の三つの「中心」、全て中央の意味であり、中心は四方より優位に立つ

⁴⁶安部健夫『中国人の天下観念－政治思想史試論』（『元代史の研究』創文社、1972）に詳しい論述がある。

⁴⁷楊寛著（西嶋定生監訳）「中国都城の起源と発展」（学生社、1987年11月）、P 59。

⁴⁸呂不韋『呂氏春秋』卷十七審分覽（六）慎勢、訳は楠山春樹『呂氏春秋（中）』（明治書院、1997年5月）、P 578。

ことを強調している。王者は「中」を選ぶ理由は、「中」は「四方」より、唯一且つ核心的な存在である。これの延長的な理解は、「中心」は主導権を握り、「四方」は附属・服従的な地位となると理解してもよかろう。『呂氏春秋』の例から見ると、「中央」は「四方」を凌ぐ存在である説は春秋時代になると既に文字になって世の中に伝わり、当時の人々に認められた常識と理解してもいい。従って、その考え方の最初の形成はもっと早く、西周時代に溯ることができる。

西周初期、占いなど天の意識と思わせる一連のプロセスを通して、洛陽を天下の中心と決め、多くの文字や青銅器の銘文で「中国」や「土中」を強調し、大々的に宣伝していた。このことは「天下の中心にいるのは天子である」という思想の理論的土台にもなり、以降中国の「華夷思想」の形成に大きく寄与したと考えられる。

三、洛陽から「中国」、「天下」へ

「中国」という語ははっきりした国の名前として使われるようになったのは僅か百年ほど前からである。現在まで発見された「中国」に関する最初の文物記録は西周初期の青銅器何尊に刻された銘文であった。122文字の銘文は武王が成周建設の意志を述べ、西周の東都を営むという重大な決定に関するものである。「余其宅兹中国，自之薛（乂）民」（天下の中心に都を営み、ここで人民を統治しよう）の句がある。何尊の銘文にでる「中国」は現在洛邑所在の洛陽盆地を指していることはほぼ疑いがないとされ、これは洛陽盆地及び中原地域を明確的に「中国」とされた最古の実物証拠である⁴⁹。また、岡村英典は洛陽周辺の夏王朝、殷王朝遺跡の最新の考古成果を基づいて、「「中国」がはじまった国家形成期において、洛陽はまさにその「中国」の位置にあったのである⁵⁰」と断言した。

確かな傍証として、早期の文献に「洛邑」あるいは「成周」を「中国」とする

⁴⁹これに関する先行研究が多く、伊藤道治「西周王朝と洛邑」（伊藤氏『中国古代国家の支配構造』中央公論社、1987年）、李学勤「成周建設論—「何尊」の銘文」（五井直弘編『中国の古代都市』汲古書院、1995年）、葛兆光『宅兹中国』（中华书局、2011年2月）などがある。

⁵⁰岡村英典「中国のはじまり—夏殷周三代の洛陽」（気賀澤保規編『洛陽学国際シンポジウム報告論文集—東アジアにおける洛陽の位置』、汲古書院、2011年3月）、P78。

言い方はたびたびある。例えば『逸周書・作雒』に「乃作大邑成周于土中（故に土地の真ん中に大きな城成周を造った）、为天下之大湊（天下の風水の絶好の所である）」；『史記・周本紀』に「此天下之中、四方人貢道里均（ここは天下の真ん中で、四方の国が貢ぐとき、道の距離は均等）」などがある。

成周建設の時間、洛邑、成周、王城の関係などについて、まだ定説にはなっていないが、「中国」と「天下之中」の二つの言葉は明らかに西周初期の洛邑あたり（成周）を指すことについて、学界ではほぼ定説となっている⁵¹。どちらが先に出現したか。また両者の因果関係（「天下の中心」という位置を理由で「中国」と名付けされたか、それとも「中国」なので天下の中心とされたのか）についてまだ論議が残すところである。

『容齋随筆』という十二世紀の書物に「古代の周の時代、中国の領域は最も狭かった。現在の地理で考えると、呉、越、楚、蜀、閩はみな蛮族の地であり、淮南はやはり蛮族の地であり、秦は戎族の地であり、……洛陽は天下の中心として王の城の所在地であった。……当時中国といえるところはただ晋、衛、齊、魯、宋、鄭、陳、許の国のみで、全体でも宋の時代の天下の五分之一にしか当たらなかった」とする記述が見える。その時の人々のイメージとして、洛陽は相変わらず天下の中心であったが、「中国」は成周よりずっと広くなり、戦国時代の諸国も含めるようになった。

宮本一夫は「実はその後の中国社会は、一つには初期国家を形成した地域、即ち中原を地理的に中心とする古代国家が興亡を繰り返し、そこに中華たる自集団を保護する思想が形成されるに至ったのである⁵²」と言及した。即ち、少なくとも西周初期の限られている一定な期間内に、洛陽（成周・洛邑）＝中国＝天下の中心が成立することが考えられるが、「中国」という言葉は後程、更に延長的な語義と複雑な内包を有する概念となった。中国というのは、天下の中心とされる洛陽の中心という地理的な便利さで、極狭い場所から放射する車の輻のように四

⁵¹『最古の中国』（北京：科学出版社、2009年8月）の作者、二里头遺跡考古学者の許広が二里头遺跡は最古の中国の区内に最古の大型都邑であることを指摘、洛陽盆地を中国とされる時代を更に古い夏の時代まで溯れると見ている。

⁵²宮本一夫『中国の歴史1 神話から歴史へ』（講談社、2005年3月）、P361。

方八方へ広がり出てきた。やがて「天下」という四方、四海などの地上世界だけではなく、至高の神様が支配される宇宙全体を一元的な領域とされていた。

第三節 天下の中心としての意味及びその影響

もともと「中」という字の本義について、尾形勇は『説文解字』に基づいて「吹き流しをつけた旗である。商王は有事の際に、旗を立てて士卒を招集した。召集に応じた人々は、旗の周りに集まったので、「中」から中間、中央の意味が派生したのである⁵³」と釈明している。



図4：「中」の文字の変遷イメージ

内藤湖南は文化湊合の中心について、「長安の前、洛あるを説く」を強調し、「蓋し武力の強、冀州に在り、唐虞夏商、南面して天下を制するに当たり、食貨の利、豫州に在り、人文乃ち此間醞釀す、而して洛は二州文物の湊合する所の處なればなり⁵⁴」と指摘している。即ち、中国の古代の文化が集中するところは、長安にあるのではなく、もとより洛陽にあるという。先秦時代、天下の中心を象徴する洛陽は文明の起源の地と言っても過言ではなかろう。

天下の中心には高い文明をもつ「中国」があり、その周辺には未だ文明の恩恵に浴びさない「夷狄」が住んでいる。徳の高い君主が出現すれば、「夷狄」も次第に感化されて「中国」に従属し、「中国」の領域は無限に広がってゆくだろう⁵⁵。これは中国人がかつて持っていた世界感であった。

⁵³尾形勇等『中国の歴史 12(日本にとって中国はなにか)』(講談社、2005年11月)、P186。

⁵⁴内藤虎次郎『内藤湖南全集』第一卷(筑摩書房、1970年9月)、P22。

⁵⁵岸本美緒『中国社会の歴史的展開』(放送大学教育振興会、2007年4月)、P15。

一、文明の先進性を強調

司馬遷の『史記』の中に「三河」に関する記載がある。この「三河」は黄河、洛河、伊河であり、明らかに洛陽あたりを指している。

むかし唐堯は河東にの都し、殷は河内に都し、周は河南に都せり、夫れ河東、河内、河南の三河の地は天下の中央に在りて対立すること鼎足の如く、帝王のかはるがはる居を奠めたる所なり、而して国家を組織すると各々数百千年に及へり⁵⁶

それ以外に、

昔三代の君は、皆其の都を黄河洛水の間に奠めたり、故に嵩山を以て中嶽と為し、他の四嶽は各々其の方に在り⁵⁷

の記述によって、洛陽盆地の伊洛平原は古代王朝の活動する場所だと明記されている。近年の考古の成果はこの歴史記録の裏付けになった。前文は西周時代の洛陽について紙幅を費やして述べたが、実は現在の洛陽市周辺で、夏王朝時代の都城斟鄩とされた二里头遺跡、殷商王朝時代の都城西亳とされた商城遺跡も発見された。

二里头遺跡は伊河と洛河に挟まれた洛陽平原にあり、夏・商・周の時代区分に関するプロジェクト⁵⁸によって今から 3600 年以上前の中国最古の都一夏都斟鄩と判明されている。これについて、日本の夏王朝研究の第一人者である岡村秀典も、2004 年 1 月 17 日付けの朝日新聞で、遺跡の規模や出土品などから二里头遺跡が「紀元前 1700 年ごろの夏王朝の最後の王、桀がいた都の斟尋の跡である可

⁵⁶司馬遷『史記』卷貨殖列伝第六十九、訳文は武田尾吉『史記国字解第八卷』（早稲田大学出版社、1929 年 10 月）、P 446。

⁵⁷司馬遷『史記』封禪書第六、訳文は武田尾吉『史記国字解第二卷』（早稲田大学出版社、1927 年 10 月）、P 467。

⁵⁸古代の歴史年代の空白を埋めることが目的に、中国の科学技術重点プロジェクトとして、1996 年に約 200 人の学者が参加し、日食や月食の記録をもとに年月日を算定する天文学的手法や、王侯の墓をはじめとする遺跡の調査などの考古学的手法も取り入れて開始した夏商周断代工程のこと。

能性が大きい」と結論付けている⁵⁹。

また、1983年、中国社会科学院は洛陽市から西に約30キロの偃師尸郷沟近辺の考古発掘活動で、商城遺跡を発見し、当時の重大な歴史発見となった。殷王朝後期の都城跡・殷墟よりもさらに古く、殷王朝（前16世紀～前11世紀頃）初期の遺跡と見られる。土壌の分析や『尚書』など記載から、これは商時代早期の都西亳の所在地と確認された⁶⁰。

二里頭遺跡の西北角と洛陽市の東南角は直線距離だと6km程であり、二里頭遺跡の北東角と偃師商城の西南角の直線距離は僅か10km程度である。洛陽を中心にするこの比較的狭い地域は中華文明の初期王朝の中心地であったことは言を俟たない。故に、斯波義信は「中国」とはもともと、国の名前ではなく、複数の国を含むゆるい文明圏を指す語であり、「夏・商（殷）・周」の世を経るうちに、この文明の独自性に対する自意識が芽生えた⁶¹と主張している。

いずれにしても、中国古代文明の起りの過程において、洛陽という地は絶対的な存在を有することが考えられる。文明の起こりになった理由として、やはりこの地域が「中」と呼ばれるように、中国大陸の東西南北結節点にあり、地域間交流の中心地であったということが考えられる。

先秦時代のかなり長い期間中、洛陽辺りの地域は確かに先進的な文明を持っていた。従って、川本芳昭は「洛陽は中国の王都の中の王都ともいべき都であり、「土中」（中国の中心）とも称せられるように、永く「中国」、「中華」の中心と目されてきた都である。中国人は古来その高度な文明を誇り、「未開「野蛮」な周辺の民族や地域を獣偏や虫偏をつけて呼び、強烈な中華意識を抱いてきたが、洛陽はいわばそういう意識の空間的な中心であった⁶²」と指摘している。

⁵⁹横堀克己「姿現した中国最古の王朝の都」（『人民中国』2005年2月号）

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200502/muci.htm>

⁶⁰横堀克己「空白が埋められていく中国古代史」（『人民中国』2005年2月号）、同上。

⁶¹斯波義信・浜口允子『中国の歴史と社会』（放送大学教育振興会、1998年3月20日）、P22。

⁶²川本芳昭『中国の歴史5 中華の崩壊と拡大』（講談社、2005年2月）、P20-21。

二、王権の正当性を強調

「中」という字には豊富な意味を含め、相対的な概念であり、端がなければ、「中」がなし、「四方」がなければ「中」も言えない。「中」は「正」、即ち「正統」を意味しているので、中国の伝統文化は「中」を貴として、「中」を重んずる伝統がある。

漢末の経学者は『尚書正義』巻十五に「天子将欲配天，必宜治居士中，故称周公之言其为大邑成周于土中」と述べ、即ち天子（君王）は天の代わりに世間を治りたいならば、必ず国の真ん中に居るほうがいい。それはなぜ周公が成周という大きな城を国の真ん中にしたと言ったのである。つまり、天の力を借りて王権の正当性を主張していた。宋代の欧陽修も『正統論』に、「夫居天下之正、合天下于一、斯正統矣（天下の中心において、天下を統一することこそは正統である）」という論がある。先秦時代は無論、以降の何千年も、地理的な方位と政治との関係が深く、中心・中央の方位は偏りが無いので、理想的な政治につながると認められていた。

周王朝の第十二代の天子平王は紀元前 770 年に、戦乱により荒廃した鎬京を廃棄し、都を完全に洛邑に移した。遷都後の周朝を東周と呼ばれ、周王朝の諸侯支配力が低下し、相対的に諸侯の力が増大し群雄割拠の様相を呈し、東周王朝の直轄する地方は周王城畿内方六百里の地しかなく、「綱紀が馳緩し道義が頹廢して、諸侯は放恣となり、民衆が生活苦悩む⁶³」と言われる時代であった。しかし、東周王朝は始皇帝による中国統一（紀元前 256 年）まで五百年五十年間も続くことができた。春秋時代の覇者や戦国の強豪が乱立し、東周王朝の勢威は衰えても政権は長く維持できた理由を探ると、洛陽の「天下の中心」の地位はその一因であることが分かる。

楚子(莊王)が陸渾の戎を討ち ついでに洛水の岸まで行き、周の国境近くで観兵をやって見せた。周の定王は王孫滿を遣わして楚子をねぎらわしめた。この時楚子は周の(王位の印と言われる)鼎の大きさや重さ

⁶³高田真治『漢詩大系 詩経』（集英社、1975年6月）、P 274。

を問うた。王孫は答えて、「その大きさや重さは徳によるものであり、鼎についたものではありません。……王の徳が聡明善美ならば、たとい鼎が小さくても極めて重く、徳が暗愚邪悪ならば、大きくても、極めて軽くなります。天は善美の徳を喜び報いますが、それにも期限があり、我が周においては、成王が鼎を郊鄴に安置するに際し、王が何代続くか、年はどれほどであるかを占ったところ、三十世七百年ということで、これは天命です。今、周の徳は既にと衰えましたが、天命のまだ改められぬかぎり、鼎の重さを他人が問うことはできません。⁶⁴」

これは歴史上有名な「鼎の軽重を問う」の故事である。覇者の楚の荘王は王権の象徴とみなされる九鼎の重さを問いたことは、周の王位を奪おうとする一種の恫喝であった。周の使者が強調している「天の命ずる所なり」は、周王城が「天下の中心」の洛陽を占めていることである。周の国力は衰えたとはいえ、天下の中心を占める政権は天命を有することは当時の常識のような考えであったので、楚荘王は兵を引かざるを得なかった。

歴史は繰り返し、弱くなってきた後漢の政権も同じような現象がみられた。後漢時代において、「なぜ和帝から衰弱した後漢が、1世紀も維持できたか。天子が洛陽に住んでいたからである。物理的にも、心理的にも、高い城壁に囲まれた。官僚機構のなかにいた。聖俗を維持する、特殊な機構に守られた」と、大室幹雄は『桃源の夢想——古代中国の反劇場都市』の著作に「都市洛陽に守られる天子」という論がある⁶⁵。これも「天下の中心」の地位は王権の正当性を強調する裏付けになる。

胡阿祥は、政治や地理の面からすると、統一王朝、あるいは分裂時代に統一王朝を目指す王朝は、必ず中原を占め、また洛陽を占める理由を論ずる時は必ず、「中原・洛陽がもっている「正統」という特質を重んずるからである⁶⁶」と指摘している。前に述べた古代の「華夷思想」においては、「天」は宇宙万物の主宰

⁶⁴『春秋左氏伝』宣公三年、竹内照夫（訳）『春秋左氏伝（上）』（集英社、1974年2月）、P 456-457。

⁶⁵大室幹雄『桃源の夢想——古代中国の反劇場都市』（三省堂、1984年1月）、P 10-33。

⁶⁶胡阿祥「天下之中及其正統意義」『文史知識』（2010年11月号）、P 21-27。

者とされ、帝王は天の長男「天子」とされ、天子が行う「道」の倫理性・政治性が天上から観察され、しかるべき罰と恵みが下される。この天と政治の関係は「神権政治」から天命の説、天人合一説へ、と姿はいろいろ変えたが、「天下之中」というポジションは天子の立場を強化する重大な役割があると考えられる。

三、文化の正統性を強調

「天下の中心」の位置も度々「文化の正統」として強調される。洛陽は後漢、魏、西晋まで、政治や文化の首善の区をもって自負していた。しかし、『晋書』卷六十五に「都の洛陽が陥落、中原士人の中に六、七割が長江の南へ避難した」との記載によると、「五胡乱華」の時代に大半以上の貴族や文化人は南へ移動した。即ち百年余りの時間に、洛陽は戦場になってしまい、文化中心ではなくなったのである。それから南北朝の時代において、北朝と南朝が文化の正統性を争う時、必ず頼ったのは洛陽の「天下の中心」の地位であった。

例えば『洛陽伽藍記』に記載された南北士人の文化の差を論争する例があり、それが典型的な例として今の時代でも南北文化の差異を論ずるときよく引用されている⁶⁷。南朝士人は「魏朝が盛んでも、やはり五胡という」と自慢したことに対して、北朝士人は「南朝はあくまで長江の左の偏った一隅にすぎない」と強く反論し、南朝の所在は大陸（中原）を離れることを暗示していた。それから南方は湿気や虫が多く、中和ならざる気候を指摘し、言葉も華音（後漢、魏晋の洛陽地域の当時の言葉で正統とされている）に閩と楚の方言が混ざり、正統の発音ではなくなったという。つまり、北朝の士人は南朝の位置、気候、言語とも中心と正統から外れていると主張し、自分の文化の正統性を表明した。勿論、このような北朝文化の正統性についてのアピールは洛陽の「天下の中心」のイメージをなくしては成り立たない。

第四節 洛陽の「天下の中心」としての影響

⁶⁷原文は『洛陽伽藍記』卷二、王文進「北魏文士對南朝文化的二種態度」『南朝山水と長城想像』（台北：里仁書局、2008年6月）P369-370、王美秀「空間決定文化」『洛陽伽藍記的文化論述』（台北：里仁書局、2007年1月）P192-194などに多く引用された。

一、歴代王朝の影響

先秦時代において、洛陽の地は天下の中心を象徴していた。その後、洛陽以外に一時的に「天下の中心」と言われる場所も出てきたが、その意味と影響は洛陽に及ばない。このイメージは先秦時代以降のかなり長い間に続き、王朝の都を定める時の一要因にもなっている。正史に記載している文句を集め、附表を作成してみた。先秦時代から金までの歴代王朝は都を定める時、政治統治、軍事戦略、経済形勢、文化など要因以外に、洛陽は「天下の中心」としての地位もかなり意識されていたことが分かる。

表 1：歴代王朝の洛陽の「天下の中心」に関する認識（筆者作成）

時代	背景	正史の記録	出所
漢	漢高祖は都を洛陽から長安に遷都	「及成王即位，周公相焉，乃營洛邑，以爲此爲天下之中也，諸侯四方納貢職，道裏均矣」	『漢書』卷 43 婁敬伝
前漢末の 新	王莽は新を建国、洛陽に遷都の予定を表明	「予以二月建寅之節行巡狩之禮……畢北巡狩之禮，即于土中居雒陽之都焉」	『漢書』卷 99 王莽伝
五胡時代	王彌は洛陽に遷都と進める	「洛陽天下之中，山河四險之固，城池宮室無假營造，可徙平陽都之」	『晋書』卷 100 王彌伝
東晋	桓温が北闕し、洛陽に遷都と提案	「夫先王經始、玄聖宅心、画為九州、制為九服、内中区而内諸夏、誠以晷度自中」	『晋書』卷 98 桓温伝
北魏	孝文帝は平城から洛陽に遷都	「伊洛中区、均天下所據、陛下制御華夏、輯平九服、蒼生聞此、応當大慶」	『魏書』卷 十九 中 任城王元澄王伝
隋	隋煬帝大興城から洛陽に遷都	「然洛邑自古之都，王畿之内，天地之所合，陰陽之所和。」	『隋書』卷 4 煬帝紀上

唐	唐太宗は洛陽宮を修繕	「朕以洛陽土中，朝貢道均，意欲便民，故使營之」	『資治通鑑』卷 193 唐紀
武周	武則天は帝位に就くため、洛陽で礼制建築を築く	「夏四月、天樞成」 張景岳（1563-1640）注：居陰陽升降之中，是爲天樞	『新唐書』卷 89 則天武皇后伝
北宋	范仲淹は洛陽への遷都と進言	「洛陽險固，而汴爲四戰之地，太平宜居汴，即有事必居洛陽」	『宋史』卷 314、范仲淹伝
金	元の侵入で、金は洛陽を中都	「以河南路轉運司爲都轉運，視中都，増置官吏」	『金史』卷 16 本紀第 16

二、現代生活への響き

中国の版図の拡大や変化によって、洛陽は地理的な中心地位を失いつつ、戦争、外敵侵入が原因で、北宋以降、洛陽の文化的な中心地位も失った。其の為、先秦時代以降、特に近世以来、洛陽は事実上の「天下の中心」より、歴史的意味上の追憶となり、イメージに過ぎない。特に南宋以降、洛陽は中国歴史の中心舞台から降り、「天下の中心」というイメージも次第に薄くなってきた。

しかし、その名残は残っている。例えば、2010年、嵩山少林寺及び登封市の史跡群は「天地の中心」として世界遺産リストに登録された。嵩山は、前文引用した古文のように、洛陽の天下の中心の地位の影響によって、昔から五岳（中国古来の五大名山の総称）の「中岳」と呼ばれている。登封市は昔から洛陽の所轄する地域（1949年から始めて鄭州市に管轄され）であり、その周公測景台は、周公が天地の中心を定める業績を偲ぶ形で723年に設置されたものである。いずれも洛陽と直接関係している。

また、洛陽地域の庶民の日常生活にかつての「天下の中心」の影響が見られる。例えば、当地方言の中に出る頻度が最も高い言葉の一つは「中」という言葉であ

る。「中」は普通の「中央、中心、真ん中」以外、「はい、素晴らしい、許可する、承知する、それでは」など意味として幅広く使われている。これは洛陽、ひいては河南省辺りの中原地域特有な現象であり、洛陽方言の特徴とも言える。現在「中」は当地住民の口癖になることは、長い間に「天下の中心」を象徴する地域ならではの文化現象であり、洛陽の風土から生まれたものと考えられる。

結び

先秦時代において、洛陽は四通八達の要衝で、最古の王朝夏が誕生し、「中国」に成長した。西周初期、洛邑での王都成周の建設は「天下の中心」というイメージの原点になり、洛陽は世界の中心地とみなされていた。

天下の中心を象徴するようになった理由として、地理環境と政治的意図がみられる。先秦時代において、洛陽は中原の核として、中国交通の要路であり、北と南、東と西の文化が重なりあう地であった。夏・殷・周三代がいずれも中原（洛陽盆地）をおさえて覇をとなえたことからわかるように、政治の要は交通と商業を握ることにあり、洛陽こそ国内はおろか遠く他世界に通ずる交通網のセンターに当たっていた。洛陽の地理位置は複合的な文化要素が重なるところになり、自然に文化的な中心地にもなった。これは天、地、人が調和した世界観の表れであり、古代中国の人々は「天下の中心」＝「天命」として理解し、その地の文明の先進性、王権の正当性及び文化の正統性を強調していた。洛陽を「天下の中心」とされるイメージは先秦時代に止まらず、中国の歴史全体に深い意味と影響がある。

第二章 後漢時代における洛陽の文化表象

第一節 両漢時代の洛陽

一、洛陽城

洛陽地域は黄河、洛河、伊河の三川の地の合流する地域のため、秦代には洛陽に三川郡が置かれ、人口密度が高く、経済が進んでいた。当時の相国呂不韋を「文信侯」に封じ、洛陽十万户を賞地した。呂不韋は城を拡大し、大規模な園林建築を築いた。『前漢書』卷四十「陳平伝」の記載によると、漢の太祖である劉邦は曲逆（地名）を通るとき、城に上り、その壮大な町並に感概し、「極めて立派な町、私は天下を回して、眼中に入ったのはただ洛陽とここだ（壯哉县、吾行天下、独見洛陽與是耳）」という。この賞賛の言葉から、秦末の洛陽城の立派さを覗くことができる。

前漢初年に劉邦は都を洛陽に置きたが、蒯敬、張良の進言で長安に都を移した。理由は洛陽の交通の便が良く、水運も長安より発展していたものの攻められやすかったである。前漢時代、この場所に河南郡洛陽県が設置され、重要な経済都市として盛んでいた。前漢洛陽城の上に築かれ、本格的な都となった。『後漢書』郡国誌一の河南洛陽条に、古書『帝王世紀』によると、造営された洛陽は「城東西六里十一歩、南北九里一百歩」、俗名は「九六城」という⁶⁸。漢代には洛陽盆地を取り囲むように、洛陽近郊には関所（函谷関、伊闕、成皋関、孟津関）が置かれた。後漢末にはさらに八関（函谷関、広成関、伊闕、大谷関、轅轅関、旋門関、小平津関、孟津関）が置かれ、実はこの広大な盆地に出入りする道はこの関所を通過する八本しかなく、まさに盆地全体が天然の要塞でもある。塩沢裕仁は「後漢末の軍事的緊張を背景に洛陽には八関が設けられるが、その設置は洛陽の都市空間が充実・拡大した結果であるとも言える⁶⁹」と指摘している。

⁶⁸明・顧祖禹著『讀史方輿紀要』（中華書局、2005年3月）、P2037。

⁶⁹塩沢祐仁『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』（雄山閣、2010年1月）、P30。

二、洛陽の文脈

当時姜敬は都を洛陽から長安に移すために、劉邦を説得した言葉に興味深いところがある。

「周都洛邑、以為此天下中、四方納貢、職道里均矣。有徳則易以王、無徳則易以亡。凡居此者、欲務以徳致人、不欲以險阻令。(周は洛陽を都にするのは、ここは天下の真ん中、四方から納貢する時、道は皆同じ遠さのため。洛邑に遷都することは、徳があれば王になる、徳がなければ滅ぼす。ここに拠点する者は必ず険しい地理で人をではなく、徳で人を招致することだ)⁷⁰」

これは洛陽と長安の優劣の比較に関する有名な論説の一つであるが、洛陽の文脈を指摘していた。洛陽の地は武力の強さや地理の堅固を頼りとするところではなく、道徳、即ち文化の力で立国するものである。洛陽は後漢王朝の成立から漢の首都になるが、本格の「文制」もここからスタートしたと言っても過言ではない。

洛陽のこの文脈は営造されるときに既に伏線が埋められている。最初に洛邑の構想提出した周の武王は洛陽盆地に着目したのは、武力ではなく徳で天下を統治する目的であった。前文に引用した『史記・周本紀第四』がはっきりこの意を示している。

故に周室の都をこの雒邑に営みて、而して後に去り、馬を崑山の南に放し、牛を桃林の丘に放ち、干戈を伏せ、兵士を収め整へ軍旅を釈き放ちて、天下に再び兵を用ひざることを示せり⁷¹

洛邑の営造自身も、周の創建者は武力より徳で天下を征服しようというアピールであった。これは両漢時代だけではなく、洛陽の都市性格として宋までのほぼ三千年を貫いていた。

⁷⁰後漢・班固『漢書』(中華書局、1975年4月)、P2119。

⁷¹司馬遷『史記』周本紀第四、訳文は武田尾吉『史記国字解第一巻』(早稲田大学出版社、1929年10月)、P139。

第二節 漢賦（特に都邑賦）を通して洛陽の文化表象の考察

一、都邑賦に映される洛陽のイメージ

王国維の「凡そ一時代には一時代の文学がある。楚の辞、漢の賦、六朝の駢文、唐の詩、宋の詞、元の曲は、どれもその時代を代表する文学であり、後世が継承できないものであった」⁷²という説はあり、漢の代表的な文学様式は賦である。漢代の作家たちは、楚辞体の形式や特徴を吸収し、さらに先秦縦横家たちの散文の文才や氣勢を摂取して、誇張や大仰な表現を特徴とする、いわゆる漢大賦を作り上げたのである。漢賦は半詩半文のジャンルであり、両漢四百年間における文人たちの主要な文学様式となった。⁷³

漢賦の中に都城を描写する都邑賦は『文選』の第一類として収録され、文学的価値と豊富な社会的価値が認められる。代表作に「両都賦」（班固）の他、「二京賦」（張衡）、「洛都賦」（傅毅）、「論都賦」（杜篤）、「反都賦」（傅毅）などがある。これらの都邑賦に書かれた洛陽は、共通して儀礼制度が整い、道德教化が実施されていることが注目されている。

賦という題材は誇大で実際とかけ離れている問題があるとよく指摘されるように、「両都賦」は歴史書ではなく文学作品にすぎない。しかし、D. C. D. Pocockが「文学は、場所のイメージを研究する者にとって、重要な手掛かりとなる。なぜなら、作家は性格描写やドラマづくりと同様に、風景を描写するのにも優れた観察力と洞察力を発揮するからである」⁷⁴と指摘した通り、「両都賦」に伝えられている礼制重視の意識は当時の社会環境と文人思想の実際の反映だと考えられる。

特に『文選』の始めに置かれた「両都賦」は、文学作品とは言え、皇室制度を含む政治経済や礼儀風俗を含む社会文化など多方面に及び、まるで小型百科全書

⁷²王国維「宋元戯曲史・序」『王国維戯曲論文集』（台北：里仁書局、2005年）、P 3。

⁷³褚斌傑（福井佳夫訳）『中国の文章—ジャンルによる文学史』（汲古書院、2004年）、P 16。

⁷⁴高橋伸夫『文化地理学入門』（東洋書林、1995年10月）、P 72。

のようである⁷⁵と評価されている。本文が求める文化表象（イメージ）とは、その時代の人々の感情移入した総体としての概念の意識の中での原風景のことなので、当時の文化的作品、特に時間の試練に耐え得た古典的著作は適当な素材だと考えられる。後漢時代の洛陽が礼儀道德の文化を象徴していた点について、都邑賦特に「両都賦」を通して考察してみた。

二、「両都賦」の解説

「両都賦」⁷⁶は班固の作であり、序、西都賦、東都賦三つの部分からなる。西都賓客と東都主人との登場人物を設け、それぞれ独立しているが、つながりもある。賓主の会話で、西都賦に長安の盛んなることを述べ、東都賦において洛陽の長安に優れることを述べている。

1. 主旨を明らかにする序

後漢は都を洛陽に置き、一部の大臣は前漢の都長安に遷都してほしいと考えていた。班固が「両都賦」を書き、西都と東都を比較する目的は、洛陽の礼儀教化の素晴らしさを強調し、遷都の提案を否定することにあつた。「両都賦」の創作背景と目的について、序には明確な記述がある。

或曰：賦者，古詩之流也。昔成、康没而頌聲寢，王澤竭而詩不作。……或以抒下情而通諷諭或以宣上德而盡忠孝，雍容俞揚，著於後嗣，抑亦《雅》《頌》之亞也，故孝成之世，論而錄之。蓋奏禦者千有余篇，而後大漢之文章，炳焉與三代同風。

作者は賦が、その古詩の流れであることを提言し、雅・頌と並ぶことによって、賦の使命を高く評価しようとしているのである。聖王の恵みがなくなってしまうと、詩は作られなくなった。この衰亡した古詩のあとを、漢代になってから賦が継いだと述べている⁷⁷。序文には、賦というものは帝王の功績を褒め称えること或いは遠回しに諫めることによって、王権統治のために書かれた文章だと位置づ

⁷⁵陳君「両都賦の創作と後漢前期の政治趨勢」(『文学評論』2010年02期)、P114。

⁷⁶以下「両都賦」に関する書き下しはすべて小尾郊一『全訳漢文大系(26巻)文選(文章編)』(集英社、1974年6月)、P56~117を参照する。

⁷⁷小尾郊一『全訳漢文大系(26巻)文選(文章編)』(集英社、1974年6月)、P57。

けている。

また、序文の「乃て禮官を崇び文章を考へ、内には金馬、石渠の署を設け、外には樂府、協律の事を興し……京師に宮室を修め、城隍を浚くし、苑囿を起こし、以て制度を備へしに」からは、当時の礼制を重んずる社会環境が見られる。

最後に、「故に臣は兩都賦を作り、以て眾人の眩曜する所を極め、折くに今の法度を以てす」があり、作者は洛陽の今の制度（具体的に言うと、儉約の徳、礼樂制度）を述べることによって、長安を負かすことを「兩都賦」の創作目的にすると鮮明に宣言したのである。

2. 長安の豪美を表現する西都賦

序文から作者の本意は東都洛陽の礼制を広く宣伝することを明らかにしているので、西都賦により洛陽を引き立てている。まず西都賦には西都賓客の口を借りて、西都（長安）の地理的な重要さ、市街の繁華、領土物産の豊かさを紹介している。

「防禦の阻は、則ち天下の隩區になり」で地勢の険しいことを説明し、「皇基を億載に図り、度宏に規りて大に起る」で規模の広大さをアピールする。「紅塵は四に合ひて、煙雲に相連なる」や「冠蓋が雲の如く」で町の人々の多さや繁華な様子を華麗な言葉で表現している。特に皇居宮殿と庭園の素晴らしさについて、華やかな言葉を多く用いて詳しく描写している。例えば、

其宮室也，體象乎天地，經緯乎陰陽。據坤靈之正位，放太紫之圓方。樹中之華闕，豐冠山之朱堂。因瑰材而究奇，抗應龍之虹梁。列芬橑以布翼，荷棟桴而高驤。雕玉填以居楹，裁金壁以飾瑯。發五色之渥彩，光焰朗以景彰。於是左城右平，重軒三階。閨房周通，門闥洞開。列鐘虞於中庭，立金人於端闈。……

また、皇帝が狩猟する場面は力を入れて取り上げ、逞しい兵隊、壮大な布陣、百獣との激しい戦いなど、血生臭いシーンまで生き生きと描き出している。その戦果がいかに輝かしいかということをも自慢し、人々に深い印象を与える。

六師發逐，百獸駭殫，震震爚爚，雷奔電激，草木塗地，山淵反覆。……
松柏仆，叢林摧。草木無余，禽獸殄夷。

例が繁雑になるので、一々挙げないが、このような華麗な表現は始めから終わりまでに続き、宮殿の配置、室内に陳列している珍宝、庭の珍しい植物など、漏れなく述べ、読んでいる人に長安の「泰を窮めて侈を極む」というイメージを与えている。西都賦は二千以上の文字を使い、西都の豪華さと素晴らしさを誇示し表面上西都を称賛しながら、実は東都の儉約道徳を褒める伏線を張っているのである。

3. 洛陽の礼楽制度を呈示する東都賦

西都賦が表現した華美豪華な都城像に対して、「痛ましいかな風俗の人を移すや」という東都主人の嘆きで東都賦を始め、西都賦を全面的に否定する。西都賦と異なり、東都賦は洛陽の町並や宮殿の素晴らしさについて詳しくは描写せず、後漢創立、洛陽に都を定めた過程、意味と功績を詳しく述べ、洛陽に遷都することがいかに道徳礼制にかなうのかを証明しようとしている。その最大の功績は礼法制度の復興を定めたことである。

龔行天罰，應天順人，斯乃湯、武之所以昭王業也。遷都改邑，有殷宗中興之則焉。即土之中，有周成隆平之制焉。……然後增周舊，修洛邑，扇巍巍，顯翼翼。

賦という題材の誇張はよく非難される。しかし、ここに言及した礼楽制度重視の治国方針、具体的な施策は、史料に検証でき、狩野氏も「賦は敷衍誇張を主とするものなれば、必ずしも文字通りには解釈することならはざれども、儒林伝の所言を対照すれば、虚誕にあらざるを知るべし」⁷⁸と述べている。少なくとも、後漢の礼楽制度を重んずる姿勢は伝わっている。

西都賦にある皇帝が狩猟する場面と対照的に、東都の狩猟の様子を東都賦ではこう述べている。同じ狩猟であるが、西都の壮烈な場面に比べ、東都は順調で穏

⁷⁸狩野直喜『両漢学術考』（筑摩書房、1988年10月）、P101。

やかな雰囲気である。狩猟前の礼儀、狩猟後の祭祀など、西都にはなかった行動の描写を通して、間接的に西都の無礼を語っている。また、狩猟後の様子について、西都の「松柏仆れ、叢林摧かる。草木余り無く、禽獸殄く夷さる」に対して、東都は「楽しむも盤を極めず、殺すも物を尽くさず」と記述することにより、是非の意は言うまでもない。

東都賦は皇帝の式典の場面を重点的に描写している。

遂綏哀牢，開永昌，春王三朝，會同漢京。是日也，天子受四海之圖籍，膺萬國之貢珍，內撫諸夏，外綏百蠻。爾乃盛禮興樂，供帳置乎雲龍之庭，陳百寮而贊群後，究皇儀而展帝容。……抗五聲，極六律，歌九功，舞八音，《韶》《武》備，泰古華。四夷間奏，德廣所及。

この部分では典礼の供物や演奏の曲目まで面倒がらずに紹介している。一見式典の壮大豪華さを表現しているように見えるが、「禮を盛んにし樂を興し」も帰するところ礼制を重視する表現となり、洛陽の礼楽文化の繁栄と太平の世の称賛にもなっている。

西都賦には具体的な羅列が多いが、東都賦では具体的な描写を避け、全体に抽象的な書き方が多くなっている。例えば宮殿や町並とは、「宮室光明にして、闕庭神麗にして、奢は逾ゆべからず、儉はる侈る能はず」、東都の儀礼祭典は、「必ず之に臨むに王制を以てす、之を考ふるに風雅を以てす」、社会の様子は「四海の内、学校林の如く、庠序門に盈ち」である。

東都を紹介するとき、すべて道徳礼制に繋がり、作者の礼制を尊ぶ観点は常に貫き通し、鮮明に洛陽の地利、形勢及び風俗の純朴さと建築も王道に合うことを称賛している。

4. 両都の比較と結論

文章の最後、作者は五つの句を並列する修辞法を使い、疑問の形で強い断定の意味を表す。東都主人の言葉で再度主旨を明言し、疑う余地のない「子は徒に秦

の阿房の天に造るに習ひて、京洛の制有りを知らず。函谷の關す可きを識りて、王者の外無きを知らざるなりや」という結論を導く。

両都の違いを下記の表でまとめることができる。

表 2 : 「両都賦」によって描かれた長安と洛陽

	西都長安	東都洛陽
地勢地利	僻界西戎，險阻四塞，修其防禦	處乎土中，平夷洞達，萬方輻湊
山川形勝	秦嶺、九峻，涇、渭之川	四瀆、五嶽，帶河溯洛，圖書之淵
城市建築	建章、甘泉，館禦列仙	靈臺、明堂，統和天人
自然 or 人文	太液、昆明，鳥獸之園	辟雍海流，道德之富
世風民俗	遊俠逾侈，犯義侵禮	同履法度，翼翼濟濟
都城氣象	秦阿房之造天	京洛之有制
防禦 or 王道	函谷之可關	王者之無外

二つの都城を比較して、洛陽の礼制の素晴らしさを強調した。地勢の険と文化の源、宮殿と礼制を象徴する建物、風景の美と道德の豊かさなどの比較を通して洛陽の儀礼制度の素晴らしさを浮き出している。

西都賓客は「小子狂簡にして、裁することを知らず。既に正道を聞けり。請ぶ身を終るまで之を誦せんと」と言い、納得した言葉で賦の本文を終えたのである。洛陽の礼制による儉約・道德は、長安の節度のない豪華よりはるかに素晴らしいという結論で、序文の「折くに今の法度を以てす」の言葉を応じ、文章の始めと終わりが呼応している。

第三節 洛陽と後漢の世風

一、洛陽で実現した儒学の隆盛

「両都賦」で表現している西都は極めて豪華であるのに対して、東都は節制、儉約的なイメージである。その儉約の由来は統治者から実施された礼楽制度の回復と教育の普及であり、また皇帝の徳行と役人の品行にも関連している。為政者の功績や徳を褒め称える目的もある「両都賦」は、完全に新しい基準で秦（本当は前漢のこと）と後漢の優劣をつけている。その時代背景として、武力で領土を拡大、外敵を退治することを功績とする「武制」の前漢と異なり、後漢は礼儀教化を通して文化の力「文制」で社会を統治しようとしている。

漢代まで天と政治との関係は神権政治的な内容から、君権政治の説（天命の説）、道徳的社会秩序の論（天人合一説）へと姿を変えた。そして為政者が仁義という考えをもつようになった。つまり君権の成長につれて、地上の天下を支配する天子の立場もまた強化されてきたのである⁷⁹。後漢時代、洛陽を礼制教化の元にしたのは、当時の政治的要請だと考えられる。これは後漢の「偃武修文」とした国の基本政策と一致している。

後漢の創立者は儒学の知識が深く、洛陽に学問所を建設して儒学教育を深化させた。前漢時代から続いた、儒家思想に基づいた秩序を後漢においても継続させることができたのはこうした光武帝による儒学の保護と奨励があったからである。光武帝劉秀は「吾天下を理するのに、柔道を以て行う」⁸⁰と主張し、礼楽制度を建立するために一連の施策を実施した。「高廟を起し、社稷を雒陽に建つ」⁸¹、後漢は「火徳」として、洛陽を雒陽にした。また、洛陽城南に三雍が設けられ、典礼的装飾的な建物は礼制に従う姿勢を見せた。「三雍」とは、明堂、辟雍、靈台であり、すべて礼制に従うものである。「両都賦」の本文以外に、五篇の詩があり、第一は明堂詩、第二は辟雍詩、第三は靈台詩である。狩野氏は「後漢の人がこの三者を一代の誇りとなしたことがわかる」⁸²という。

⁷⁹ 斯波義信・浜口允子『中国の歴史と社会』（放送大学教育振興会、1998年4月）、P 24。

⁸⁰ 劉宋・范曄『後漢書』「光武皇帝紀」卷一下（台北：鼎文書局、新校本後漢書、1978年）、P 68。

⁸¹ 劉宋・范曄『後漢書』「光武皇帝紀」卷一下（台北：鼎文書局、新校本後漢書、1978年）、P 27。

⁸² 狩野直喜『両漢学術考』（筑摩書房、1988年10月）、P 101。

これは後漢の「偃武修文」とした国の基本政策と一致している。後漢は「火徳」として、洛陽を雒陽にした。また、「太学」も立てられ、儒教思想の教育を通じて優れた官僚を養成する機関となり、『後漢書』儒林伝によると、最盛期には学生数が3万人に達したとされる。前述したように、洛陽は生まれた最初から文徳の伏線が埋められ、基調が定められた。後漢の「三雍」も「太学」もある意味で、この文脈の続きと看取できる。

中国の儒教国家の形成は前漢から始めだったが、本格的な確立は後漢からとみられる。以上挙げた「三雍」、「太学」も重要な意味があるが、最も儒教国の確立の根拠になるのは、班固によって纏められ『白虎通』の成立である。『白虎通』とは、後漢の章帝が宮中の白虎観に諸学者を集め、五経の解釈の異同を討議させた結果を記録編集したものであり、渡辺義弘はこれを国教化の完成とみられる⁸³。そのほか、洛陽で許慎『説文解字』の完成やはじめての儒教経典を石経の形で建てられることなど、儒教だけではなく文化史においても画期的な意味がある。

二、後漢の世風およびその影響

長安と比べると、洛陽は『周礼』考工記に述べられた、古代中国の宇宙論的な理念都市に近づいている。『礼記』月令篇が要請する世界を、「和帝紀」では、月令篇に接近した行事が見られ、具現化していた。なぜ和帝から衰弱した後漢が、1世紀も維持できたか。大室幹雄は「天子が洛陽に住んでいたからである。物理的にも、心理的にも、高い城壁に囲まれた。官僚機構のなかにいた。聖俗を維持する、特殊な機構に守られた」と論じている⁸⁴。この「聖俗の維持」というのは、筆者は洛陽の礼儀道徳を重んずる雰囲気と理解する。

制度と教育は相乗作用をなし、結果的に後漢中期まで文化道徳が豊かになっていた。後世の史官や学者は世の気風を論ずる時、都洛陽を代表すると後漢時代の士風について、高く評価している。例えば宋の司馬光は『資治通鑑』に、夏、商、

⁸³渡辺義浩『後漢における「儒教國家」の成立』（汲古書院、2009年4月）に詳しい論述がある。

⁸⁴大室幹雄『桃源の夢想——古代中国の反劇場都市』（三省堂、1984年1月）、P10-33。

周三代が滅ぼして以来、風俗教化の素晴らしさは後漢ほど盛んな時代はない⁸⁵と懐述している。

また、学問の必要上、「太学」は後漢時代に全盛期を迎えた。地方学校、私立講堂も風潮になり、後漢のとき「禄利と関係なき学問を兼修する人が多かった」、「学問の地位が遥かに高まった」⁸⁶と学問の盛んな様子が指摘されている。

魏晋南北朝の混乱においても、『洛陽伽藍記』には名将陳慶之の感慨が次のように記録されている。「晋、宋以来、洛陽は荒地と呼ばれ、こちらでは揚子江以北はみな夷狄だと言っています。しかし先頃洛陽へ参り、衣冠の士族はすべて中原に集まっていることを初めて知りました。その堂々たる威儀、雲の如く居並ぶ人物は、耳と目で識ることができても、口で伝えることはできません。いわゆる「帝京翼翼、四方の則たり」です」⁸⁷。

清の顧炎武は著作『日知録』にも「夏、商、周三代以降風俗の純朴で美しいのは、東京洛陽に及ぶことができない」⁸⁸と後漢の世風を絶賛している。清末の学者梁啓超は後漢社会の雰囲気「儒教の最盛期、孔子の教えの良い結果が出ている。気骨と廉恥を重んじる。気風は最も美しい」と説明している。

後漢末になると、愚昧な皇帝が多く、朝政が混乱したが、政権は百年以上続いた。司馬光はこれが道德・礼儀・教化を重んずる世の気風が育てた気骨のある士人が多いからで、「政治は混乱したが、風俗は衰えていない」⁸⁹と指摘し、さらに風俗教化の重要さを強調している。

当時の都洛陽は、文化・学問の中心として、礼儀道德の文化的象徴になった。一連の都邑賦の完成を広めることによって、洛陽の道德・礼儀・教化のイメージも次第に強くなり、やがて礼儀道德を代表する文化象徴が定着したと考えられる。

⁸⁵宋・司馬光『資治通鑑』卷六十八(北京:改革出版社,文白對照今譯資治通鑑本,1998年3月)、P1361。

⁸⁶狩野直喜『兩漢學術考』(筑摩書房、1988年10月)、P123。

⁸⁷北魏・楊衒之(入矢義高訳注)『洛陽伽藍記』卷二(平凡社、1990年4月)、P103。

⁸⁸清・顧炎武「兩漢風俗」『日知録』(台北:明倫出版社、1970年)卷十七、P377。

⁸⁹宋・司馬光『資治通鑑』卷六十八(北京:改革出版社,文白對照今譯資治通鑑本,1998年3月)、P1361。

結び

洛陽が位置する地域が「中原」と呼ばれるように、中国大陸の東西南北結節点にあり、地域間交流の中心地であった⁹⁰ということが考えられよう。文化の起源の地としての洛陽は、歴史と文化の磁場として文化の融合と再生を繰り返し、絶えず発展している。筆者は歴史記述と文学記述の二つの互いに対照する手掛かりを用い、洛陽という古都の各時代における文化表象を探り、その時代の背景や歴史風土との関連性を明らかにしようとしている。

先秦時代の洛陽が、「天下の中」を象徴するのは地理環境に大きく関係する。この文化象徴は農業文明を中心とする時代や、陸運を主要交通手段とする時代がずっと続いたためである。後漢の時代、洛陽は交通の中枢と軍事上優れた環境を持ち、依然として「天下の中」を象徴していた。その上に、礼制復興や文徳を重視する政治環境など、各要素が連動して、洛陽に代表される文化象徴に礼楽制度と道德教化の要素を加え、礼儀道德の象徴になった。

本章は漢の代表的な題材賦を取り上げ、一連の都邑賦によって描いた洛陽のイメージを考察した。特に都邑賦の代表作「兩都賦」の解説を通して、後漢時代における洛陽は「道德の富」と言われるほど礼儀道德を象徴するようになったプロセスを明確にした。この文化表象の歴史的根源及び影響も探求してみた。礼儀道德という文化表象が生成したのは、当時の社会状況や政治環境、特に洛陽の特有の歴史的根源に大きく関係する。

⁹⁰岸本美緒『中国社会の歴史的展開』（放送大学教育振興会、2007年4月）、P26。

第三章 魏晋南北朝時代における洛陽の文化表象——文化の融合

魏晋南北朝時代は漢と隋唐の間にあり、異民族に侵入され、権力が不安定で長い分裂がつづいた時代なので、暗黒な時代としてとられがちである。社会秩序と政治制度から見ると、この時代は衰弱期と呼んでも良いが、群雄割拠の時代だからこそ、統一国家の桎梏から解き放たれた自由な精神が見られた時代でもある。この時代の複雑な文化様相と後世への意味を注目し、様々な角度から研究する学者がいるが、武内義雄、錢穆らを代表とする日中の歴史研究者は分裂時代ならではの融合という視座でこの時代を評価している。例えば錢穆は『中国文化史導論』において、「新しい民族の加入」と「新しい宗教の興起」を理由として、「魏晋南北朝時期は、実は春秋時代と続き、中国史上二回目の民族融合と国家形成を達成するに大きく貢献した⁹¹」と指摘して、「純粹な文化史の角度で言うと、魏晋南北朝時代の文化は依然として活力が溢れ、依然として前向いて進み、少しも衰えていない⁹²」と結論をつけた。

魏から隋までの四百年近くの時間に三十以上の王朝があらわれ、中国史上政権交代のもっとも頻繁な時期である。異なる文化の浸透、影響の結果は、一見すると相互に矛盾する「乱世」的に様相と文化的に絢爛の様相とが混在することである。思想の融合、民族の融合と宗教の融合が合わせ、文化の融合を齎し、やがて文化史上一つの「自覚の時代⁹³」と呼ばれる飛躍が実現できた。

都市の歴史は人類の文明の歴史と同じぐらい長いものと言われるように、都市と人間生活、つまり文化に密接な関係を持っているので、単なる偶然とは言えない。都市が人間の知識と情報の生産と流通の場であった故に、それを育む文化と社会の多様性を反映していることが重要である⁹⁴。戦乱を繰り返している渦の中心位置にある洛陽は、魏、西晋、北魏の都として、この時代を理解する最も重要

⁹¹ 錢穆『中国文化史導論』（台北：商務印書館、1993年5月）、P138。

⁹² 錢穆『中国文化史導論』（台北：商務印書館、1993年5月）、P148。

⁹³ 「文学の自覚」は鈴木虎雄、魯迅などに、「美学（芸術）の自覚」は宗白華、李澤厚などに、「土の自覚」は余英時などによって論じられている。

⁹⁴ 倉沢進など『都市と人間』（放送大学教育振興会、2003年3月）P19。

な場所になると言えよう。洛陽は曾て後漢文化の中心地であり、最も戦争の被害を受けたが、また奇跡的に何度も復興した。魏晋南北朝時代において、この地に文化的な衝突は最も激しい、多くの文化的な変遷も最初にここから始まったのである。魏晋南北朝のほとんどの文化事象はなんらかな形で洛陽と淵源がある。そこに呈している文化表象は、晋南北朝時期の時代精神が凝縮されている。

第一節 時代によって興亡する洛陽城

本稿は洛陽城の魏晋南北朝時代の歴史変遷を振替えながら、思想、民族、宗教の三つの面から、融合する時代の実態と意味について探ってみる。時代の渦中の洛陽城、その興亡は複雑なプロセスであるが、鏡のように時代の歴史と文化の流れを映ることができる。

一、後漢の崩壊と洛陽城の破壊

後漢初期、礼制復興や文徳及び教育を重視する政治環境と、洛陽という地域特有の歴史的根源など、各要素が連動して、洛陽に代表される文化象徴が礼儀道徳の象徴になった。一連の都邑賦は、洛陽の礼儀制度、道徳教化の素晴らしさを描写し、節制、儉約的なイメージを築き上げた。当時司馬光は『資治通鑑』に、夏、商、周三代が滅びて以来、風俗教化の素晴らしさは後漢ほど盛んな時代はない⁹⁵と後漢の社風を高く評価した。

しかし、後漢後期になると、皇帝の愚昧、政治の混乱は社風の崩壊を引き起こし、党錮の乱から黄巾の乱へと、社会の混乱を続けた。事実上後漢中期以降、洛陽を中心に、奢侈不正な風が社会に流行しはじめた。漢の思想家王符は『潜夫論』に「今の洛陽には商工などの末業者は農夫に什倍して居る」、「京都の貴族は葬式には必ず立派な棺を用いる」⁹⁶などを詳しく記述して、後漢末期の風俗の破壊が分かる。

⁹⁵宋・司馬光『資治通鑑』卷六十八(北京:改革出版社,文白對照今譯資治通鑑本,1998年3月)、P1361。

⁹⁶後漢・王符『潜夫論』卷三、浮侈第十二(古典研究会編『和刻本 諸子大成第三輯』汲

後漢の末期になると、社会の混乱が続け、董卓は都の洛陽に入り、独裁的権力を握り、皇帝の廃立を行った。暴虐の限りを尽くした董卓は、反董卓軍に攻められ、洛陽の町を焼き払った。宮殿、宗廟、役所、住宅をすべて焼却して、『後漢書』（巻七十二、董卓列伝第六十二）によると「二百里以内何も残っていない（二百里内無復子遺）」の惨状であった。

165年間の都を務めた洛陽の壊滅は、後漢（前漢を含め400年間近く続いた統一王朝の統治）が実質的に崩壊したことを象徴しているだけではなく、三国分裂の直接的な導火線にもなっている。後ほど曹操は「宮殿を焼き払い、天子を脅迫、全国を震撼され、姿を消した。これは国の崩壊時だ（焚燒宮室，劫遷天子，海内震動，不知所歸，此天亡之時也）」という罪名で董卓を討伐し、三国時代を迎えた。その後、中国史上最も長い大分裂の時代と言われるように、魏晉南北朝時代でも戦争が続き、三世紀半の間で一人の皇帝の時期はわずか26年だけで⁹⁷、複数の皇帝が同時に存在するのは通常の状態であった。

二、洛陽城の再建と魏晉の興亡

董卓が引き揚げ後の洛陽は数百里範囲で人煙のない地帯になった。196年、献帝は曹操に伴われて念願であった洛陽帰還を果たすが、「宮室は灰燼に帰し、百官はいばらや崩れた壁の間で寝起きした（宮室尽燒、百官披荆棘，依墻壁間）⁹⁸」という有様で、とても政務を行えるような状況ではなかった。

曹植は建安16年（公元211年）焼き払われた洛陽の悲惨な光景を見て、「送應氏二首」の詩を作った。

步登北芒阪，遙望洛陽山。
洛陽何寂寞！宮室盡燒焚。
垣牆皆頓擗，荆棘上參天。

古書院、1975年9月）、P308。

⁹⁷それは西晋初代の武帝（280年）から恵帝の末年（306年）までの時期を指す。森鹿三『分裂の時代 魏晉南北朝』（人物往来社、1967年1月15日）、P11。

⁹⁸宋・司馬光『資治通鑑』（北京：改革出版社、文白對照今譯資治通鑑本、1998年3月）卷六十二、漢紀五十四。

不見舊耆老，但睹新少年。
側足無行徑，荒疇不復田。
遊子久不歸，不識陌與阡。
中野何蕭條，千里無人煙。
念我平常居，氣結不能言。

当時の洛陽は既に都市としての機能をすっかり失ってしまい、「兩都賦」に描写されている素晴らしい礼儀道徳と優れた人物が集まる「首善の区」が焼け落ちて、焦土荒地と化した。

しかし、曹操は当時の都許昌でもなく、北の名城鄴でもなく、優れた政治家特有の目で30年も荒れ果て続けた洛陽を注目した。曹操は220年から洛陽で「建始殿」の修築に力を入れ、洛陽で亡くなった。政治家としての未来の見通しかもしれないが、「建始（新しいスタートをはじめよう）」の名前通り、晩年の曹操がこの地で新しい時代を始めようとしている。

昔からの「天下の中心」という地理的な優位と、歴代旧都という文化的な正当性を持っているこの文化の意味について、歴史学者陳寅恪は下記のように説明している。

洛陽為東漢、魏、晉故都，北朝漢人有認廟不認神的觀念，誰能定鼎嵩洛，誰便是文化正統的所在。正統論中也有這樣壹種說法，誰能得到中原的地方，誰便是正統。如果想被人們認為是文化正統的代表，假定不能並吞南朝，也要定鼎嵩洛⁹⁹。

つまり、洛陽に都を定めたものは、文化正統の所在と思われる。旧洛陽の壊滅が一つの王朝の崩壊と象徴するならば、洛陽城の再建は、新しい秩序の確立を象徴する。曹操もこの意味を重んじて、洛陽を立て直し始めた。三国時代のしばらくは平和が保たれ、復興も順調に進んだ洛陽は曹操の意図通り、魏の王都となった。

⁹⁹萬繩楠整理『陳寅恪魏晉南北朝史講演錄』第十四篇（貴州人民出版社、2007年4月）。
電子文庫 <http://ishare.iask.sina.com.cn/f/20822302.html>

262年、魏は蜀を滅ぼした。これは司馬氏の活躍が多いが、263年魏から司馬炎に政権は譲り渡され（本当は魏の皇帝が廃立され）、晋王朝が成立した。280年はようやく呉を滅ぼし、中国は100年に渡る三国時代に終止符を打って全土が統一された。

洛陽を都とした魏、晋王朝を合わせてわずか91年間で、年代ですると短い時代であったが、制度の面からの意義は否定できない。例えば曹操が始めた屯田が、以後唐に至るまでの中国の土地制度に大きく影響を及ぼし、また九品官人法は南北朝時代の官吏登用法の源となった¹⁰⁰。文化の面からみると、新しい時代精神と新しい文学風潮が具体的に表われ、過去を継承し未来を切り拓いた重要な発展が多く見られる。洛陽の魏晋時代の文化環境はまさに魏晋文明の土壌になっていた。これは思想の融合部分に詳しく述べる。

三、洛陽の失陥と「衣冠南渡」

皇太子廃位事件をきっかけに、司馬氏を擁護する名目で皇族同士が洛陽に入り、内乱で西晋の滅亡のきっかけを作った。この八王の乱と言われる歴史事件は結果的に、311年に「永嘉の乱」を招き、中国全土が大きく北朝型と南朝型に分かれた。

311年、独立した南匈奴が洛陽に攻め込んできて、陵墓は盗掘せられ、宮室は焚かれ、三万人が殺された。繁栄が90年間続いた洛陽の陥落によって、中国全土を巻き込む内乱へと発展していった。司馬氏は揚子江流域で王朝（東晋）を復活したが、八王の乱、永嘉の乱から逃げるため、大量の中原士族は洛陽を脱出して南方へ遷移した。豪族たちは配下の農民たちを引き連れ、南に逃れるのも多かった。資料によると、西晋初期から、劉宋までの間に北方から南下した人口は100万以上に達した¹⁰¹。歴史で「衣冠南渡（衣冠は文明の象徴）」と呼ばれる人口の移動によって、土地の開墾・水利の開発・農業生産技術の改良など、すべての分野において、江南地域は長足の進歩をとげた。江南地域の経済が発展したことにより、全国の経済の重心は、南方へと移りはじめた。こうした画期的な変化

¹⁰⁰森鹿三『分裂の時代 魏晋南北朝』（人物往来社、1967年1月15日）、P62。

¹⁰¹王育民『中国地理歴史概論（下冊）』（北京：人民教育出版社、1987年9月）、P42。

が生じ、以後もその傾向が変わることなく続いたことは、中国の歴史上の一大転機といえる。

洛陽の失陥は、再び動乱の時代となった印にもなった。中原地域に活躍している異民族政権は五胡十六国と呼ばれている。一方、東晋において、南方に難を避けてやって来た北方貴族・豪族及び人々が南方に経済生活の根拠を求めながら、異民族の馬蹄に踏みにじられた北方領土回復を望む気持ち強い。東晋の謝玄、劉裕、南朝宋の到彦之、梁の陳慶之等武将はみんな洛陽を回復したことがある。そのたびに、遷都の議論が起こった。例えば、軍権を握った桓温は北伐を実行し、洛陽を占領している羌族と戦って、洛陽を占領した。洛陽は東晋の支配下に入り、桓温の名は大いに上がった。当時洛陽は廢墟に近かったが、やはり旧都として北方の失地回復を企図する人々に希望を与えた。桓温も無理を承知で洛陽遷都を申し出、猛進方針のせいで燕国と前秦に敗れた。このように洛陽を攻略することを企て失敗することを何度も繰り返した。結局、唐の劉知幾は『史通・邑裏』に記録したように、「自雒陽蕩覆，衣冠南渡，江左僑立州縣，不存桑梓」になった。『全唐詩』に詩人詹琲の『永嘉乱，衣冠南渡、流落南泉、作憶昔吟』が収録されている。

憶昔永嘉际，中原板蕩年。衣冠坠涂炭，輿輅染腥膻。
国勢多危厄，宗人苦播迁。南来频洒泪，渴骥每思泉。

廢墟になった洛陽より、知識人とともに、当時の文化中心は建康に移ったことは言うまでもない。中原人物が大挙して南方に流れ出たことは、江南の開発を起こした。こうして江南においては文官支配を原則とする貴族政治が発展し、高い文化が創造されていった。しかし、江南に定住していた士人にとって、洛陽と言えば、故郷への偲びや亡国の屈辱など複雑な思いになる。晋の東遷から隋の統一に至るまで、南朝に輩出した多くの詩人はほとんど洛陽を見ることもないままその生涯を終えたことであろう。それにもかかわらず、洛陽をテーマにする詩作が少なくない。例えば

諠譁照邑里 諠譁 邑里を照らし
遨遊出洛京 遨遊 洛京に出づ

—陳・陳後主「洛陽道五首」其一『樂府詩集』

洛陽佳麗所 洛陽 佳麗の所
大道滿春光 大道に 春光滿つ

—梁・簡文帝「和湘東王橫吹曲三首」其一『樂府詩集』

洛陽九達上 洛陽 九達の上
羅綺四時春 羅綺 四時春なり
路傍避驄馬 路傍 驄馬を避け
車中看玉人 車中 玉人を看る

—陳・陳暄「洛陽道」『樂府詩集』

橘英範は六朝詩に詠じられた洛陽を考察し、「洛陽道」に描かれた洛陽のイメージについて触れた。結論は洛陽道が「春のうららかな日射しの中、大通りで美男美女が出逢う大都会」というイメージを持っていた¹⁰²という。これは異民族政権の主戦場になった洛陽の実際の悲惨な光景と、あまりにも対照的なイメージだと言えよう。皇帝を含め、文人たちは洛陽に多大な感情と期待を寄せていたことが判る。

四、北朝の統一と洛陽の再建

主役が交替の半世紀余りの間に、北方では十三の国々が目まぐるしく興亡し、分裂の時代と名付ける魏晉南北朝の中でも、最も分裂の激しかった時期である。439年、鮮卑族が建てた北魏は華北を統一して、五胡十六国時代を終え、北朝と南朝を対峙する南北朝時代の開幕を迎える。

異民族政権でも漢風漢俗を容認し、漢文化を尊重する支配者が少なくないが、最も徹底的に漢化政策を推進したのは北魏の孝文帝時期であった。493年、多くの反対を押し切り、洛陽遷都を断行した。洛陽は戦乱で荒廃したが、周・漢・魏・晋の古都として、中国の象徴になるため、北魏は五胡十六国を受けるのではなく、中国を統一した西晋を受けるものを証明することができよう。洛陽を首都とする

¹⁰²橘英範「六朝詩に詠じられた洛陽」(『洛陽の歴史と文学』(佐川英治編集、岡山大学文学部プロジェクト研究報告書10、2008年3月)、P62。

ことは漢帝国に復帰するところであり、一人皇帝の理想に近づくことを意味する。

北魏宣帝の501年に、畿内の人夫五万五千人を徴発して大修築を始めた。城内に323坊を築き、周囲には東西20里、南北15里の外郭を作った。旧城の五倍にも及ぶ外城が建設されたのであるから、従来の都城を内城とよぶことになった。こうして、北は邙山から南は洛水に及ぶ新洛陽城は、内城、外城をそなえ、政治・経済・文化を総合する帝都に生まれ変わった。

しかし、この帝都がそう長く続かず、西の長安を根拠とした勢力と、東の鄴を都とした勢力がつよくなり、両方とも魏の王族を擁して、しばしば洛陽争奪の戦争を続けた。北魏は分裂するとともに、実質的に滅亡した。

以上は年代を基づいて、魏晋南北朝時代の四百年近くの歴史の発展を整理してみた。この時期の洛陽は政治的にも文化的にも全局面を左右する重要な立場にあったことが判る。この時代の洛陽に表れた文化表象は、当時の中国文化の特徴の表れであると言っても過言ではないと考えられる。

第二節 融合する思想（魏晋を中心に）

一、二つの大分裂な時代と洛陽

歴史は併合と分裂が繰り返されていると言われている。統一国家では思想を弾圧、あるいは特定の思想を保護するなど、思想を制限する事が多い。分裂の時代では、君主諸侯は戦乱に明け暮れる日々を過ごしていたが、その一方自由な発想ができ、思想界を非常に活発にしたのである。従来の社会秩序が崩壊した背景で、思想が解放され、文化が一層複雑な様相を呈し、従って、分裂した社会と共に思想の変革が起こる。

後漢の滅亡から隋が中国を再び統一するまでの魏晋南北朝時代（220～589年）以前も、目まぐるしく動乱で、分裂の時代があった。それは周の東遷から秦の天下統一までの春秋戦国時代（紀元前770-221年）である。周知するように、春秋・

戦国時代に諸子百家と呼ばれる思想家が大いに活躍し、幾つかの重要な思想体系が生まれ、後の中国思想の方向性を決定づけたと考えられる。理性的な探究が多い春秋戦国時代と比べ、魏晉南北朝時代は感性的探究が多くて、新しい人間観と世界観が生まれ、自覚の時代や魏晉風流と言われる。

この二つの時代は中国文明史や精神思想史において、転換期として重要な意味を持つものであり、この二つの時代を比較して、内面的な繋がりなどを研究する人は少なくない。私がこの二つ中国史上異例の大分裂の時代の都城は皆洛陽であることに着目した。これは単なる偶然とは言えないと思ひ、洛陽を育む文化は当時社会の多様性を反映している。本文は洛陽という空間に焦点を合わせ、魏晉南北朝時代の思想の変遷をまとめてみる。

二、儒学思想の隆盛から衰退へ

国家と異なる思想をもたれると反乱を起こされる恐れがあるので、一般的に統一国家は社会の思想管理を重用視している。例えば秦が統一国家として実施した「焚書坑儒」のようなことが起こる。漢は統一国家ならではの「国を保つ」ための懸念が儒教を提唱し、儒教を国教化する。両漢の精神的指導の役を務めたものは、儒学であること言うまでもない。後漢時代、経学の極盛時代を経て、批判精神の展開と正しさの希求する動きが見られる。日本の学者岡崎氏は皮錫瑞（清）の経学歴史の言葉を借りて、前漢儒学の特徴は「通経致用」、「専門学風」であり、後漢の特徴「実事求是」、「移風易俗」であると言ひ、「総じて言へば前漢の学問には世用に適せんとする意志の力が強く働き、それ丈一面の暗さを伴ふ。後漢のそれには理性の色が濃く出で、明るさをもつ丈弱い」¹⁰³と指摘している。

漢の時代では、郷村社会に勢力を持つ豪族や一般民衆の間にも儒教教義がわかりやすい形で受容され浸透していた。礼儀作法が折り目正しく、卑陋粗野が忌避され、厳粛な雰囲気尊ばれた。しかし、儒学は後漢末における国家秩序の崩壊とともに、その権威が失われた。後漢末期、風俗の破壊は儒学思想の衰退を加速した。当時の都洛陽の社会現象からこの変化が見られる。例えば葬送の儀式は家

¹⁰³岡崎文夫『魏晉南北朝通史』（弘文堂書房、1943年10月）、P498。

の富を見せる一方法として、後漢末の思想家王符の著作『潜夫論』にこんな記録がある。

後漢末洛陽の貴族は葬式には必ず立派な棺を用いる。この棺は江南の櫟、梓などで作るのであるが、その木材は多く深山窮谷に生じ、之を伐るためには険阻な山道に分け入り、鐸山の人夫を使用しなければならない。既に切り出された木材は、牛車により大江に運ばれ、海に入り、更に淮水を経て黄河に浮び、然る洛陽に達する。これで始めて大工の手により棺に作られるのであるから、一の棺を作るためには全体として千万人の労力が消費せられる¹⁰⁴。

もともと諸子百家の墨子派の薄葬論に対して、儒家は一般的に厚葬説、つまり荘厳な儀式をして葬る説を取ったのである。しかし、この手厚く葬る風習は富を競う手段になり、嘗て後漢の儉約な精神は特になくなって、棺の一例でも社会の豪華な行為、恣意な状態が判る。岡崎文夫は「かく後漢文化の根本たる経術主義が家族私欲の本能により置き代れるに至つては、そこには一般社会の混乱の生ずべきこと明白である。豪族の奢侈、専恣の状態が極め、後漢盛時の経術主義なるものは全く崩壊し尽くした訳である¹⁰⁵」と分析している

また同じ『潜夫論』によれば、この頃洛陽には人を殺すことを商売にする人がいたという。首都はこんな状況であったならば、全国の混乱が言うまでもない。豪族と官吏、財力と権勢の結託が出来上がり、後漢の衰亡と共に、儒学思想も隆盛期を経て、衰退の傾向が見られる。

三、魏晋文明の土壌の形成と洛陽

三世紀、中国は全面的な変化を経験した。権力が不安定で長い分裂がつづいた時代として、各勢力は競争の時代を勝ち抜くため、優秀な頭脳を必要とした。優れた人材を求めるため、学者や知識人を優遇した。魏晋文明の環境の形成には、

¹⁰⁴後漢・王符『潜夫論』卷三、浮侈第十二（古典研究会編『和刻本 諸子大成第三輯』汲古書院、1975年9月）、P308。

¹⁰⁵岡崎文夫『魏晋南北朝通史』（弘文堂書房、1943年10月）、P436。

曹操の人材登用方針は最大な役割を囚ったと言われる。建安 15、19、22 年、優れた政治家としての曹操が三回にも出した「求賢令」は大きな意味と影響を持っている。

「求賢令」は家柄や品行によらず、才能ある人材を積極的に登用する魏の姿勢を明らかに表れている。この「唯才是挙（ただ才能のみ挙げよう）」という四字熟語を生まれた有名な用人令が、才能を重視し当時身分の低かった専門職の人々も厚く用いる方針であり、同時代ではかなり異質なものであった。曹操が能吏を任用して秩序の樹立を囚ったが、徳行を問わず才能を主として人材を選抜することは、「後漢の経術主義はここに至って完全に打ち破せられたのである¹⁰⁶」と言われ、魏晋の社風にも大きな影響を与えた。

引き続き戦乱と社会不安を反映して、貴族の間には現実から逃避しようとする傾向が強く、魏晋時期、都洛陽をはじめ、各地に儒学的な道徳にとらわれず精神的な自由を守ろうという風潮が表している。「礼教破壊」と総称される礼を無視する行動を誇示する人々や、無為自然を説く老荘思想を借り、世相を軽蔑し、批判する人がたくさん見える。余英時はこの時期の階級の形成と「士の自覚」を注目した。個人としての自覚は「グループ的分化を越えた新たな気風として広がって、自らに独立の精神と自由な意志がることの発見であり、同時に個性を十分に発揮し、内心の真の感情を表現することも意味している」と論じ、「個人としての自覚が思想的には老荘思想に傾斜しつつあったこと、また、それが精神のすべての領域に広がり、文学、音楽、山水の鑑賞がいずれも自由な心の投射対象になったことを知ることができる」¹⁰⁷と分析している。

貴族たちの間に清談(山中や竹林で現実の社会や政治からかけ離れたことを話しあう)が盛んに行われる。洛陽を中心に活動している「建安七子」、「竹林の七賢」、「金谷二十四友」と呼ばれた名士たちがその代表である。南朝宋・劉義慶の『世説新語』はこの時代の文化現象を逸話の形で寄せ集めている。

¹⁰⁶岡崎文夫『魏晋南北朝通史』(弘文堂書房、1943年10月)、P 461。

¹⁰⁷余英時「私と中国思想史研究」(『東アジア文化交渉研究』別冊 I、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2008年3月)、P 109。

最初は老莊の哲学を借りきって儒教の精神を説明しよう傾向が現れ、その後魏から東晋に至る間に無数の老莊注釈書が現れた。時の政治との関与を避け、儒学が強調した礼教道徳に背を向け、老莊思想など高遠な哲理を語り合う清談が流行し始めた。武内義雄は「老莊の全盛は俗事をさけて清談を尚ぶ一種の時代思潮を形作った¹⁰⁸」と指摘している。

晋が天下を統一すると、都洛陽を中心に華やかな文学活動が繰り広げられる。当時は貴族のサロンにおいて詩が贈答・応酬等社交の道具となっていた故に、数多くの詩人を輩出した。こうした風潮の中で、「竹林の七賢」に代表される思想性の強い詩風が生まれ、また、詩の形式を借りて老莊の哲理を論じる玄言詩や、世俗の価値観を捨てて仙界に遊ぶ志を歌う遊仙詩も流行した。この時期の文学作品は、題材の多様化、表現の個性化など特徴が現れるとともに、険難な時代を背景に人間存在の不安に対して深い思索を加え、孤独な心情の表現は後世の詩人に大きな影響を与えている。その後、唯心論の玄学の興起・仏教の盛行として現われ、また同時に唯心論玄学と宗教迷信に反対する闘争も存在し、複雑な様相が見られる。洛陽のこのような文化環境は魏晋文明の形成に土壌を提供していた。

四、魏晋思想融合の産物——玄学

魏晋時代の思想様態の複雑さは言うまでもない。湯用彤はこの時期の複雑な思想を概ね保守的と趨新的の二つに分けた。新学は荊州付近が盛んであり、洛陽本来は保守的な旧学が優位を占めるところであったが、曹操政権で荊州名士は洛陽に集まり、玄学の源流になった¹⁰⁹と指摘している。

魏から晋、即ち曹氏から司馬氏へと権力移行しつつある不安定な政治情勢を反映して、知識人の中に、現実社会から逃避する厭世的な気風が蔓延した。具体的な表現は、魏晋時期の洛陽に、華林苑、金谷園のような贅沢を尽くした庭園別荘が林立し、奢侈の風が盛んであった。俗事からの遊離を重んずる清談の蔓延は、官界の実務軽視・責任回避の風潮を醸成した。これは積極的に政治に関与するよ

¹⁰⁸武内義雄『中国思想史』（岩波書店、1957年9月）、P169。

¹⁰⁹湯用彤『魏晋玄学論稿』（上海：上海古籍出版社、2001年6月）、P111-112。

り、消極的に個人の生活を享受し、山水に悦楽する傾向が強くなったためである。儒家思想の徳から、次第に虚玄の思想に入りつつある。

清談は普及しつつあった仏教の論理性の影響から学問として深化し、老荘思想を以て経伝を解釈する玄学が成立した。老荘思想を以て、経伝の形而上学的な解釈を進め、「正始の音」に始まる清談が格義仏教との交流から論理面・哲学面で深化したもので、『老子』『荘子』『周易』は“三玄”として重んじられた。魏の何晏や王弼たちが洛陽で玄学という哲学を樹立した。これらの書物に基礎を基づいて、何晏は《論語》の注釈を、王弼は《老子》および《周易》の注釈を著した。儒教道徳を絶対的なものとは見なさず、自然を愛する心をもつようになるなど、前代には見られなかった新しい意識が生み出された。

玄学は、形式的には「三玄」を題材として、注釈などの形で多様な議論を展開していたが、論点の根拠に「自然」を置いて、本質的には儒道の思想を基盤とする。玄学家達は名教礼法の是非、転じて名教と自然の関係を論ずる。「名教」はすなわち儒家的な社会秩序に従う礼儀道徳的な価値観であり、「自然」は道家的な「無薦自然」的な価値観である。「名教」と「自然」に関する論争は玄学の中核的な内容になり、幾つかの時期を経た。名教を批判し自然を高揚した初期（正始玄学）から、「名教を越えて自然に任す」の竹林玄学時期へ、最終的西晋において自然と名教の統一を主張するようになった。

「虚無を以て本と為す」を特徴とする玄学は、結局思想上の虚無の流れが政治社会の混乱と相俟って西晋の滅亡を招致したが、政治現象を切り離し、「単に思想そのものの上に立って見れば、世俗を超越する神職なるものの理解する世界が新たにシナ人の中に明確となったので、これが精神文化の上に寄与する点を決して軽々しく評価すべきではあるまい¹¹⁰」と岡崎氏は指摘した。

もう一つ注目すべきことは、玄学は魏晋時代の主流の学術だけではなく、一つの生活態度と社会気風にもなっている。いわゆる「魏晋風流」は、文人の精神から社会風習に発展した。風流の定義は袁行霈によると、魏晋という特定な時代に

¹¹⁰岡崎文夫『魏晋南北朝通史』（弘文堂書房、1943年10月）、P 534。

形成される人物の審美の範疇である。魏晋の玄学に伴っておこり、玄学が唱導する深遠な精神と相表裏し、精神上深遠な境地に達した士人の気質を顕現したものである。換言すれば、それは魏晋時代の詩人が追求した一種の魅力と影響力のある人格美である¹¹¹。人々は形骸化・形式化した礼教道德の束縛から解き放たれ、気の向くままに行動するようになり、生活の中に真の人間性を模索していた。「竹林の七賢」と称する文人たちの姿が「風流」から「狂」の境地に至るまで発展する文人の精神文化の側面から、貴族社会の風習や価値観など魏晋の時代相をのぞき見ることができる。

上から見ると、名教と自然の関係をどう捉えるべきかが終始魏晋玄学を貫く主題になる。「名教」と「自然」の争いは儒家・道家の争いにとどまらず、「礼」と「情」、即ち社会秩序と個人の自由との争いにまで拡大した¹¹²。以前洛陽は後漢の旧都として、特に礼儀道德を発信する地域でとして、儒家的な思想は伝統的精神文化に奥深い影響を与えている。魏晋になると、また都として、陰難な時代を生き抜くために、道家の老荘思想の興起の地にもなった。このところで、当然のことながら玄学思想が形成された。即ち玄学は、儒家思想と道家思想は、お互い排斥し、お互い影響し、最終的に合一した流れを反映した。この融合する流れは、学術思想の面のみならず、魏晋南北朝時代の最大な特徴として、民族文化、宗教文化などあらゆる面に表れている。

第三節 融合する民族（五胡十六国、南北朝を中心に）

一、民族の大移動及び「華夷思想」

1. 民族の大移動

¹¹¹袁行霈「陶淵明與魏晋風流」国立成功大学中文系編『魏晋南北朝文学と思想学術研討会論文集』（台北：文史哲出版社、1991年）、P 572-573。

¹¹²余英時「私と中国思想史研究」（『東アジア文化交渉研究』別冊Ⅰ、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2008年3月、）P 110。

魏晋南北朝時代を表す言葉は複数あり、互いに被っている年代もあり、政治的に極めて錯綜した時代である。厳密的にいえば、魏晋と南北朝の間に、五胡十六国（316～439）時代と言われる異民族の大侵攻の時期がある。中原は大混乱に落ち、豪族たちは配下の農民たちを引き連れ、南に逃れるのが多かった。中原の混乱などによって膨大な数に上る人口の移動、移住が生じている。その波は、北アジアの地域から華北へ、華北から江南へなど、東西南北のいずれの方向にも及んでいるが、そうした移動の焦点となったのは、黄河文明の揺籃の地としての華北平原であった。民族の大移動がこの時代のキーワードになる。

川本芳昭は魏晋南北朝時代の中国社会に見られる最も特徴的な現象は、漢帝国崩壊後の中国内外の諸勢力の激突によってもたらされた「民族移動」現象であり、それが東アジアの諸民族に種々の変容を生み出すことになったと指摘している。そうした変容は、北方民族が漢民族に同化するというだけでなく、北方民族の移動によって政治・文化のあらゆる分野にわたって漢民族のあり方が変質させた。一方、こうした変化は南方世界においても見られ、漢民族の南方移動は江南社会にも大きな変容をもたらした。江南先住民の漢民族化だけでなく、先住民との接触によって江南移住の漢民族社会にも変容が生じたのである。

ほぼ同時期に起こった西方における民族大移動によってヨーロッパ世界の原型が形作られたように、隋唐帝国の制度や文化、東アジア世界の国際関係などは、五胡十六国時代の諸政権にその淵源を求めることができるのである。本稿は、諸政権の興亡の歴史を簡略に記述する傍ら、新たな時代への胎動という観点から、北魏の洛陽城を代表として、多くの民族の活動・融合の上に形成されてきた文化の特徴を明らかにしたい。

2. 「華夷思想」と中華民族について

民族は国籍、住居地域、言語、経済生活、文化心理要素などに関わり、様々な議論がある。現代に至るまでの長い歴史を経て成り立っている中国の民族も極めて複雑な問題であるので、梁啓超が『新民説』に「自分が中国人だと反射的に思う人が中国人の範囲である」との言葉を残している。

「中国」とはもともと、国の名前ではなく、複数の国を含むゆるい文明圏を指す語だった。「夏・商（殷）・周」の世を経るうちに、この文明の独自性に対する自意識が芽生えた¹¹³。「天の下」は四方、四海などの地上世界だけではなく、至高の神様が支配される宇宙全体を一元的な領域とされていた。天下の中心には高い文明をもつ「中国」があり、その周辺には未だ文明の恩恵に浴びさない「夷狄」が住んでいる。徳の高い君主が出現すれば、「夷狄」も次第に感化されて「中国」に従属し、「中国」の領域は無限に広がってゆくだろう¹¹⁴——これは中国人がかつて持っていた世界像であった。「華夷思想」においては、中国は天下の唯一の中心であり、それ故に特に他と区別する名前をつける必要はなかったとされていた。

費孝通は 1988 年「中華民族の多元かつ一体の構造¹¹⁵」を公表し、主な論点は以下の三つで論じた。第一は、漢民族自体が歴史的に中国領域で生きてきた諸民族の接触・混合・融合の複雑なプロセスを通じて生まれ、その中で「中華民族の凝集的核」になったという。第二は、中国領域内に住む諸民族はその形成は多元的だが一体を形成し、「中華民族多元一体の構造」が生れたということ。第三は、「中華民族」は「自然発生的な民族実体」として数千年前から徐々に形成されてきたが、19 世紀半ばから列強と対抗する中で「自覚的な民族実体」になったということである。このような提起は、国家と民族を混同しているという批判や指摘があるが、現在中国の主流な民族学説となっている。

漢民族は漢の時代に形成し、その後幾度の民族融合及び異民族の漢化を経て現在の漢民族を形成した。中華の文明を築いたのが、いわゆる漢民族であったのか、実態は、夏殷周三代以前より、華北地方に定住を果たしていた諸族が、中華文明の成立に寄与し、相互に同化し合って「漢民族」となっていったものと考えられる。さらなる民族混交が進むとともに中華文化の中核が形成された。

漢人に典型的な遺伝的血統がないので、「漢族」という用語は人種的分類ではなく文化的な民族分類である。中国の歴史は絶え間ない民族・人種の混合があり、

¹¹³ 斯波義信・浜口允子『中国の歴史と社会』（放送大学教育振興会、1998 年 3 月）、P 22。

¹¹⁴ 岸本美緒『中国社会の歴史的展開』（放送大学教育振興会、2007 年 4 月 1 日）、P 15。

¹¹⁵ 費孝通（西澤治彦訳）『中華民族の多元一体構造』（風響社、2008 年 6 月）。

繰り返された漢族の周辺の異民族との混血の結果である。銭穆は中国文化史を論ずるとき、「中国人の観念の中に、もともと深い民族の区別がなかった。中国人は血統より、文化のほうはずっと重んじられる。血統の異なりより、文化の優劣が大事。中国史上のいわゆる異民族は、生活方式と文化意味の違う人々の集団を指すだけだ¹¹⁶」のような議論が度々ある。

二、抗争、対立から統一へ

1. 東晋と五胡十六国の洛陽争奪戦

洛陽の陥落によって西晋が滅ぼし、中原（今の華北）には北方、西方の異民族が侵入して、匈奴ら異民族が中心となった国が興亡した。その結果、部族単位の小さな政権がたくさん生まれた。遊牧系民族が国を建てたので、当然ながら華北では農村荒廃がすすみ、五胡同士の戦争も続いた。

ここで扱う異民族は、当時の文明が高度発達した中原を中心とする黄河流域に住んでいる漢族に対して、周辺の遊牧騎馬民族のことである。魏晋南北朝時代に中国内（中原）に入ってきた異民族、匈奴、鮮卑、羯、テイ、羌が五胡と呼ばれる。テイと羌はチベット系の民族、鮮卑はモンゴル系、匈奴もモンゴル高原の遊牧民族であり、羯は匈奴の別種といわれる。中国は漢人中心の国家と思われがちだが、長い年月の中で漢族と同化していき、当時の異民族には現代の漢族の祖先が含まれる場合もある。

大小様々な国が興亡を繰り返す中で、洛陽も国都の地位を失い、異民族の戦場になった。しかし、政治・経済・文化中心の機能を失っても、洛陽は象徴的な機能が持っているので、相変わらず各政権争奪の対象であった。当時の胡漢民族の間に複雑な意識について、漢族側には胡族に対する文化的な優越感とそれに伴う蔑視感、及び被支配者としての屈辱感・恐怖感が存在し、一方胡族側には漢族に対する軍事的優越感と共に文化的な劣等感・反撥感が混在する。このような複

¹¹⁶ 銭穆『中国文化史導論』（商務印書館、1993年5月）、P 133。

雑な意識感情の中、普通の地域より、洛陽は嘗ての旧都と文化中心として特別な意味をもっていた。中原地域に活躍している異民族政権にとって、洛陽を占領するとともに、實際を離れる自信が付けられ、天下統一の野心まで生まれ、さらに戦争を起こすパターンが多かった。例えば前趙と後趙の328年の洛陽大戦は、前趙の失敗がむりやり洛陽を取ろうとする戦略の失敗だと言われ、政権運命の転換点になる大戦であった。

洛陽を狙うという政治目標が余りにもわかりやすいので、攻防が繰り返す結果、洛陽周辺の被害は最も大きい。一時的に族の符堅が建国した前秦が三代目の符建の時に華北を統一したが、中国の統一をもくろんで南の東晋に戦いを挑み、383年に淝水の戦いで大敗し、再び中国は分裂する。『晋書』に「中原士族十不存一（中原の大族は、十家のうちに一家しか残るか残らないほど）」、「北のほうは悲惨で、衣冠文明が南へ移動し、異民族があちこちにあり、漢族の子がほとんど殺された（北地沧涼，衣冠南迁，胡狄遍地，汉家子弟几欲被数屠殆尽）」など記述は誇張な言い方かもしれないが、当時洛陽を中心の中原の悲惨な光景が想像できる。

2. 北魏の洛陽遷都—抗争から統一へのシンボル

五胡十六国時代の混乱の中から、モンゴル系の民族である鮮卑が386年に北魏を建て、漢文化の要素を採り入れながら勅令を系統的に施行し、ようやく439年に華北を統一した。

実は魏晋南北朝時代に、中国に侵入した五胡をはじめとする異民族達は、その人口を漢民族の人口に比べれば圧倒的に少数であった。どの異民族王朝も少数の異民族が大多数の漢民族を支配するという歪な支配構造をしていた。当然、異民族達は漢民族に対して、共通の習慣や思考を持つことで共同体意識を作りあげ、安定した支配体制を確立しないとイケない。長い目で見ると、異民族が生き続けるには文化程度の低い従来文化より、中原文化を吸収し、立ち後れていた風俗を改革せざるを得ないということを各政権に認識されている。

しかし、漢化政策の推進が最も徹底したのは北魏の孝文帝である。したがって、

北魏の統一とともに、北方の民族融合もいよいよ頂点に達する。それを推し進めたのは北魏の第7代皇帝・孝文帝(467-499年)であって、洛陽は民族の融合の中心舞台になった。

漢化教育を受けた孝文帝は、遊牧民特有の豪放な気質に知恵と才能を兼備していた。多くの歴史家は、孝文帝を北方少数民族出身の傑出した政治家として高く評価している。孝文帝の漢化改革の一連政策を考察すると、そのなかに、洛陽の歴史的な性格と文化象徴を利用することに中心的な役割を果たしたことがわかる。

孝文帝は均田制、三長制の施行によって国内整備を行うとともに、493年に都を鮮卑族の拠点から漢民族の中心地洛陽へ遷都することを断行した。この政策は孝文帝の改革の中にもっともシンボリックな行動と言え、徹底に漢族と融合する決心を表れである。

峻函帝宅，河洛王裏，因茲大舉，光宅中原¹¹⁷

上記は孝文帝遷都の詔文である。北魏が自分たちの支配の正統性を主張するために、洛陽の歴代旧都という文化背景に重んずることが判る。周囲の反対を押し切って、首都を漢人王朝の代表的王都洛陽に定め、"胡"寄りの平城から"漢"寄りの洛陽へ南遷を果たしたのである。

洛陽遷都後、孝文帝の漢化政策が更に推進されていた。鮮卑の全ての者が、「拓跋」であった鮮卑の国姓を一文字の"元"と中国風に改めなければならないというもので、孝文帝自身、「拓跋宏」という本名を「元宏」に改名した。習俗の胡服・索髮（お下げ髪のかき方）・胡語（鮮卑語）の禁止などを断行し、鮮卑族の人々に中国語を学ばせ、儒家経典を教材にして中国文化を教えた。また漢民族との通婚も許した。鮮卑の民族的兵力、および身分維持には限界があると察した孝文帝は、鮮卑と漢人豪族と吸収させることにより、鮮卑の地位・身分を擁護する目的であった。北魏の政治制度に至るまで、漢民族による南朝の制度を模して改革した。

¹¹⁷南北朝・魏收『魏書』（台北：鼎文書局，1998年9月），景穆十二王列傳第七中，P 464。

改姓や胡服、胡語禁止などの漢化政策は、中国に定着しようとさまざまな努力が行われた。特に注目すべき政策は、洛陽に移住した鮮卑族は洛陽を原籍とし、洛陽で死亡した鮮卑族は洛陽周辺に埋葬することである。祖先、陵墓を重視する古代の人にとって、この規定には重要な意味がもっている。孝文帝の中原に入り、正統を求め、洛陽を故郷にする決心が明らかにしたと同時に、胡の関係と連続性を自ら断った。

この中国式にする一連の改革政策で、北魏の政治と経済は長足の進歩を見せ、北方少数民族の政権に過ぎなかった北魏が、本格的な漢化王朝に変貌した。北魏の洛陽は中国民族史において民族融合のシンボルになり、以来、黄河流域には、北方の多くの少数民族と漢民族が一つに融合した新たな様相が現われ、このような気風は、唐代に至って頂点に達した。

三、楽府詩から民族融合の様態を考察

漢族と異民族の間に、民族移動による接触・抗争とともに融合も進行し続けた。北朝が成立する以前には、五胡十六国時代の諸政権は既にそれぞれ程度の漢文化要素を採り入れる融合政策を実施していたが、孝文帝時期は一つの到達点すなわちピークと見られ、鮮卑をはじめの異民族は自らの文化を漸次に喪失して中国漢民族の中に組み込まれるようになった。

南北朝時代（439年～589年）において、建康を都とした南朝と、洛陽を都とした北朝はそれぞれの特徴を持っている。この南北朝の異なる時代精神は文学作品にも鮮明に表れている。南朝文化の担い手は貴族であり、とくに華北の戦乱を逃れて南方に逃れてきた貴族たちによって成熟した貴族文化が発達している。一方、北朝では、五胡系統の王朝がつづくので、華やかな貴族文化は生まれず、『齊民要術』、『水経注』のような実用的な書物が書かれる。南北朝時代の最も重要な文学題材は楽府であり、残された大量の楽府詩が当時の社会様子と風俗人事の考察する最適な手がかりになる。楽府は古体詩の一種であり、漢詩の一形式である。楽府は本来、民謡採集のために設立された音楽官署であったが、収集された歌謡自体を楽府と呼ぶようになり、晋代以降文学史上の楽府体の呼称が始まった。言

わば「艶曲は南朝から生まれ、胡音は北の民俗から生まれる」という。八木章好
らも「東晋以来、南方の諸都市では「呉歌」「西曲」と総称される民歌が流行し、
ほとんどが恋歌で、北朝の民歌は南方とは対照的に質朴で雄壮なものが多い¹¹⁸」
と指摘している。

民歌の原型は民間に流行っている歌謡なので、庶民の生活スタイルや考え方に
密接な関係を持っている。広大な草原の光景を活写した「勅勒歌」、老父の代わり
に男装して従軍する少女を歌う「木蘭辞（木蘭詩）」などから、当時の民族融
合の実態を探ることができる。

1 「木蘭辞」から民族融合の受容を見る

北朝の民歌に由来する楽府「木蘭辞」北朝民歌の代表的な作品である。木蘭は
女性の名であり、北魏と柔然との戦争で、父に代わって男装して出征し、勲功を
立てた女性・木蘭の叙事詩である。この「木蘭辞¹¹⁹」から当時の庶民の暮らしに
は、漢民族と北の異民族の風俗や習慣は交じり合うことが表れている。

唧唧復唧唧	ぎいぎい　ぎいぎい（機の音を表す擬声語）
木蘭當戶織	木蘭は戸口で機を織る
不聞機杼聲	機の音が　とだえて
唯聞女歎息	溜息だけが聞こえてくる
……	
昨夜見軍帖	昨夜、徴兵の名簿を見た
可汗大點兵	主君は大いに兵員を調べ
軍書十二卷	軍の文書は十二卷
卷卷有爺名	どの巻にも父の名があり
阿爺無大兒	父さんには大きな子がなく、
木蘭無長兄	木蘭には上に兄なし

¹¹⁸八木章好『中国古典文学二十講』（白帝社、2003年6月6日）、P51。

¹¹⁹『楽府詩集』卷二五、「木蘭辞」に関する訳は伊藤正文、一海知義『中国古典文学大系 漢・魏・六朝詩集』（平凡社、1972年2月）P369～371を参照。

願爲市鞍馬　　鞍と馬とを買い入れて
從此替爺征　　父に代わって出陣しよう

「木蘭辭」の作者は不明で、作成年代もはっきりわかっていないが、出ている「可汗」の言葉や、映っている「兵戸制度」が明らかに北魏の特徴が持っているので、一般的に時代背景は北魏以降とされる。「可汗」という称呼は拓跋鮮卑から始め¹²⁰、古い時代の遊牧民の君主が名乗った称号である。兵役義務が課せられた世襲軍人の家族は一般の戸籍とは異なり、兵戸という。その元は張金奎の考査によると、魏の曹操の起源であるという。その後、兵戸制は南朝・北朝に受け継がれ、南朝では文治重視をして武を軽視する考え方から兵戸の没落を招き、崩壊していた。しかし北朝では鮮卑の持つ尚武的な気風から兵戸の地位は概して高く、比較的長い間保持されていた¹²¹。

旦辭爺嬢去　　明け方　　父母に別れて家を出て
暮宿黄河邊　　夕暮れ　　黄河のほとりに泊まる
不聞爺嬢喚女聲　　父母の娘を呼ぶ声を聞こえず
但聞黄河流水鳴濺濺　　黄河の水のざわざわと流れる音だけ
旦辭黄河去　　明け方黄河を離れて去り
暮至黑山頭　　夕暮れ　　黒山のほとりについた

ここの歌から、北魏の時代に木蘭一家は黄河の南に定住して、普段は安定な農耕生活をしていて、戦争の時だけは出征することがわかる。これは北魏の孝文帝の一連の改革後、大量の曾て北の辺境に住む兵戸は中原に移住させたことが連想させる。その後の戦争の残酷の文面から、庶民は戦争が嫌で、平和な生活が憧れの雰囲気が出ている。従来経済文化の中心であった黄河流域は、五胡十六国の時代に、しばしば戦争による破壊に遭ったものの、北魏中期（5世紀後半）以後、回復と発展を見せ、引き続き優位にあった。当時かなりの異民族たちは中原

¹²⁰梅村坦「草原とオアシスの世界」(『岩波講座世界歴史 9 (中華の分裂と再生)』、1999年1月)、P85-107。梅村は本来部族内部の長を意味した可汗号が道武帝拓跋珪の皇帝即位によって最高君主の称号として権威付けられ、彼によって北方に追われた社崙が北魏との対抗意識的に可汗号を採用したとしている。

¹²¹浜口重国「魏晋南朝の兵戸の研究」(『山梨大学学藝学部紀要』1957年第2期)、P1-50を参考。

に定住し、中原の生活スタイルに慣れ、もともとは漢民族の農耕文明に徐々に溶け込み、しかも楽しんでいることが推測できる。中原の洛陽を中心として、各民族は密接な関係を保った。このことが来るべき隋唐の大統一と封建経済文化の大繁栄のために条件を整えたのである。

歸來見天子 帰還して天子にまみえる

天子坐明堂 天子は御殿で謁見する

……

可汗問所欲 ご主君は欲しいものをと聞かれたが

木蘭不用尚書郎 木蘭は高官の位をおことわりした

君主のことを、前を「可汗」と称するが、ここは「天子」を称している。「可汗」は異民族の君主の言い方に対して、天子は漢民族の古来の「華夷思想」を元とする帝王の言い方である。異民族政権と漢民族政権の最高統治者への称呼、普通では同じように使うことは絶対にあり得ないのに、ここでは何気なく使っていることはとても興味深い。庶民の間に流行っている民歌のなかに「可汗」と「天子」を混じって使っていることが、当時の民衆は既に異民族の帝王を受け入れたことが判明できる。

また、受賞される場所は「明堂」であり、断った官職は「尚書」であることも注目しないといけない。「明堂」もともとは「三雍」の一つであり、中国の禮制を象徴する最も重要建築である。「尚書」はもともと政治史・政教を記した中国最古の歴史書の書名であったが、その後中国固有の官職になった。ここが伝わった情報は、最高統治者天子は時々「可汗」と呼ぶだけで、典礼や官職など国を運営する諸制度はほぼすべて漢民族の旧制である。

洛陽遷都朝後の孝文帝は「朕が自ら礼を行いてより九年、新たな官制を始めてより三年がたった。これはまさにすべての民を導き、礼教の世界を知らしめんが為であった。朕が天子である。どうして中原を仮の住まいとすることがあろうか」と述べたことがある。川本芳昭は「北魏皇帝としての地位よりも、それを超越し

た中華全体の天子としての地位を目指す彼の気概が見える¹²²」と言い、それは中華皇帝への志向として分析している。「木蘭辞」に現れる制度はまさに北魏孝文帝の徹底した中国化施策の結果だとみられる。

最後に、帰還した木蘭は念願の故郷に帰り、「窓際で雲なす鬢をととのえ、鏡をおいて花黄を顔に貼る（當窓理雲鬢、對鏡帖花黄）」という女性の姿をみせる句がある。これは当時の天真爛漫な少女の容姿でしょう。しかし、花黄という飾りは漢民族のメイク道具であり、漢民族従来 of 風俗であった。同じ時期の南朝でも「留心散広黛，輕手約花黄¹²³」の詩文があるから、「花黄」は漢族中心の南朝にも広く使われている。ですので、庶民の生活でも、一部の習慣や風俗は民族や南北の地域を問わずに、中国の広い範囲で同化している流れがみられる。

2. 「勅勒歌」から見る胡漢文化の融合

「木蘭辞」を含め、『樂府詩集』に収録されている北朝の民歌は大体「鼓角横吹曲」項目に収められている。清の郭茂倩は「横吹曲辞」の項目についてこう注釈している。

横吹曲は，其の始亦之を鼓吹と謂う，馬上に之を奏でる，蓋し軍中の樂なり，北狄諸國皆馬上に樂を作す，故に漢自り已來、北狄の樂は総て鼓吹署に歸す。其の後分かれて二部と爲る簫笳有る者は鼓吹と爲す，之を朝會，道路に用い，亦た以って賜に給す。漢武帝の時，南越七部，皆鼓吹を給するは是なり。鼓角有る者は横吹爲り，之を軍中に用いる，馬上奏する所の者は是なり。

この説明から樂府の横吹曲辞はもともと北狄諸国の歌であることがわかる。「木蘭辞」以外に北朝民歌の代表的ものは「勅勒歌」がある。この歌の歌詞は

勅勒川陰山下	勅勒の川は陰山の下にあり
天似穹廬，籠蓋四野	天は穹廬に似て，籠りて、四野を蓋ふ

¹²²川本芳昭『中国の歴史5 中華の崩壊と拡大』（講談社、2005年2月）、P242。

¹²³南朝梁・費昶「詠照鏡」（南朝梁・徐陵編『玉台新詠』卷六）、中華詩辞ネット
<http://www.zhsc.net/2005/04/24/345.html>

天蒼蒼野茫茫
風吹草低見牛羊

天は蒼蒼として野は茫茫たり
風吹き草低れ 牛羊見ゆ

「勅勒歌」の歌詞に異民族の歌と思わせる歌詞が特に含まれていないが、『唐書（回鶻傳・上）』に「回鶻其先，匈奴也，俗多乘高輪車，元魏時亦號高車部，或曰勅勒，訛爲鐵勒（回鶻其の先は，匈奴なり，俗は多く高輪車に乗る。元魏の時高車部と號す，或いは曰く勅勒）」の記録がある。雄大で広々とした大草原を描写しているこの歌は鮮卑族の歌とわかる。しかし、現在まで伝わった「勅勒歌」は、漢語の訳した形であり、鮮卑のもともとの歌詞は失われて考察不能になっている。

同じように、「折楊柳歌辭」がある。

遙看孟津河 遙かに見る孟津の河
楊柳鬱婆娑 楊柳鬱として婆娑なり
我是虜家兒 我是虜家の兒にして
不解漢兒歌 漢の兒の歌を解せず

孟津河は洛陽周辺の川なので、おそらくこれは当時民族衝突が最も激しい洛陽地域にて、戦乱で漢人にとらわれた異民族の兒の歌である。作者は漢民族ではなく、中国語もわからないことをはっきり述べている。すなわち、現在保留された当時の民歌は、相当の部分は漢語に訳した異民族の歌である。「婆娑」のような高度かつ複雑な漢語を用いて、漢民族の理解を加えて再創造したものとも言える。また、唐・李延寿の『北史』の「列伝辛昂伝」によって、「みんなに中国語の歌を作ろうと命じた（令其众皆作中国歌）¹²⁴」の記録があるので、当時の歌の一部は、最初から中国語で作られた可能性があることが分かる。この点から見ると、鮮卑の服装や鮮卑語などの使用禁止の厳しい漢化政策が徹底に実行され、孝文帝による改革の頃、支配民族たる鮮卑の中に自らの言語を忘却し、漢民族と婚姻するような風潮が生じていた。

¹²⁴唐・李延寿『北史』列伝辛昂伝、中国古籍全録『北史』電子版
<http://guji.artx.cn/Article/3405.html>

民族融合は少数民族の漢化のみならず、漢民族は少数民族から受けた影響も各方面にわたり、極めて大きい。漢族の胡族文化の受容についても、北朝民歌から考察することができる。例えば『楽府詩集』に収録されていないが、に記録している当時の民間に流行った「李波小妹歌¹²⁵」がある。

李波小妹字雍容	李波小妹の名前は雍容という
褰裳逐馬如捲蓬	裾をあげて、馬に乗ってすごく早い
左射右射必疊雙	左から撃っても右から撃っても百発百中
婦女尚如此	女子尚そうだったんですが
男子安可逢	男子は負けられるものか

—李波小妹歌

この歌は木蘭のような逞しい、非常に颯爽とした女性像を作り上げている。しかし、木蘭は中原に住んでいるが、もともと遊牧民族の出身であった可能性が大きいのに対して、「李波小妹」は正真正銘の漢族女性である。「李安世伝」の記述から、李波とその一族は広平の豪族であり、税制に不満を覚える漢民族を大量に収容して北魏と抗争したが、最終的に鎮圧されたことが分かる。胡族政権の北魏と対立した立場の李波小妹であるが、騎馬、射箭、敵と戦うことなど、本来なら漢族の名門の女性として考えられない行為だとも言える。

伝統的な漢族女性特に貴族の女性は、長い間はずっと優しくて弱いイメージであったが、同じ時期の南朝女性はまだそうであった。北朝地域は百年以上の戦乱を経験して、異民族に侵略や統治されているうちに、社会気風も「尚文」から「尚武」に変わった。李波小妹のような漢族女性は、生活習慣、考え方、習い事など各側面から、異民族の文化の影響を受け、勇敢で男に負けないほど強くなってきた。

漢民族の文化と異民族の文化が衝突する際、それぞれの心理は複雑である。川本芳昭は胡漢意識をこう述べている。「当時の漢族の内面には、胡族への文化的優越感に伴う夷敵視、およびそうした胡族に政治的・軍事的に抑え込まれている

¹²⁵唐・李延寿『北史』列伝李安世伝、中国古籍全録『北史』電子版同上。

という屈辱感、恐怖といった感情が抱かれ、一方、胡族の内面には多かれ少なかれ漢族に対する軍事的優越感とともに、漢族・漢文化に対するコンプレックス、あるいは反発とが屈折、動揺しながら混在している¹²⁶」という。しかし、異民族の中原侵入した時点から、文化融合の流れはもう止まれない。激しい衝突も残酷な抗争過程も、結局文化融合の軌跡になり、融合の勢いを変えることができない。北魏孝文帝のような優れた当時の胡族支配者は、このことを意識した上に改革したのであろう。「漢化政策」とは言え、異民族の固有の要素と漢族古来の要素との出会いによって新しい文化が生み出される。この新しい文化が中国文化の中に取り込まれて、また中華文化に呼ばれ、古いけれども常に新しい。

現在残された「勅勒歌」や「折楊柳歌辭」のような歌を作ったものは、鮮卑語のできる漢人か漢化された鮮卑人か、あるいは最初から中国語で創作したものかはすでに考察不能ですが、その融合する時代の裏付けになれると思う。「木蘭辞」、「李波小妹歌」に出ている女性は明らかに異民族の特徴があり、民族と文化の融合がかなり進んだことが判る。これらの民歌は民族抗争から融合までの産物であり、結果的に中国民族文化が大変豊かになったことは間違いない。

東晋の滅びた後の南北朝は中国の歴史上において、南北に分裂した数少ない時期の一つである。漢民族ではない複数の異民族が、華北を中心とする長江の以北の土地に割拠し、五胡十六国時代と呼ばれる小国乱立の時代には、放牧や狩猟を主とする少数民族の南下は、農耕文明の発展を妨げ、破壊することは言うまでもない。しかし、客観的にみればその形成は経済の発展を停滞させた一方、外族による中原地区への統治で形成された黄河流域の民族大融合も前例のないものだった。特に孝文帝が推進した漢化政策によって、中国北方の諸族は徐々に漢族に同化され、最終的には同一民族になった。故に、南北朝の分裂は民族の統一が加速される上で、極めて重要な役割を果たし、中華民族の発展過程において不可欠なたいへん重要なプロセスだったと言え、洛陽はこのプロセスを見守った場所であった。

¹²⁶川本芳昭『中国の歴史 5 中華の崩壊と拡大』（講談社、2005年2月）、P 75。

第四節 融合する宗教（南北朝を中心に）

前に民族融合について詳しく述べたので、以下はこの時代における宗教融合の実態を考察する。

一、三教の交渉する時代について

1. 三教と洛陽の関わり

洛陽は長い間に、古代中国の文化中心地として、儒・道・佛三教とも密接な関係を持ち、独自の地位をもっている。両漢の際から、仏教はインドから洛陽に入り、定着し、そして広げることができたのは、洛陽は当時の都だけではなく、黄老の学、玄学の発達にも大きく関わっている。

儒学は孔子を聖人として扱われているが、孔子は周公を「先聖」と呼び、周公を儒教の元祖としている。洛陽の誕生は儒学の形成と繋がっている。『尚書大伝』に周公の功績について、「周公攝政……五年營成周，六年制禮作樂」を記録している。洛陽の雛形の成周城の作り上げは、儒学の基本—礼楽制度の形成はほぼ同じ時期である。両漢時代の儒教を尊崇し諸子を抑圧して以来、儒教だけが栄えて諸子が衰え、儒教の教説が当時の思想を代表するようになり、洛陽はその儒教研究の中心地として、礼儀道徳を象徴するようになっていた。

道教の発達をまとめると、俗信から起こって、次に神仙養生術を取り入れ、また次に魏晋の際一世を風靡した老荘の哲学を牢籠し、最後に仏教の教理で修飾して出来上がった宗教であることを結論できる。魏、晋時代、都の洛陽では、儒教はなお前期の余勢を維持して経学の研究が相当行われていたが、当時を支配した思潮はむしろ老荘の哲学であった。『史記』によれば、老子は東周の守蔵吏、東周の都洛陽で国の図書館の司書を長く務めだったが、東周の衰退を見て立ち去り、洛陽周辺の函谷関で役人の依頼を受けて 5000 余字の『老子』を書き残したという。この『老子』（別名『道徳経』）に基づいて、後に老荘思想、黄老の説、道教などの源流になった。魏晋の際に及ぶと、老荘思想は一転して儒を圧するようになり、才能のあるものは儒から逃れて老荘に走り始めた。洛陽の何晏、王弼は玄

学を創立し、『文心彫龍』に「正始中何晏の徒、初めて玄論を盛にす、是に於いて（老）聃（莊）周路に当てって尼父と塗を争う」が残されている。老莊学の全盛は俗事を避けて清談を尚ぶ一種の時代思潮を形作った¹²⁷。清談は主に老莊思想を題材とする幽玄な哲学的議論を交わし、洛陽周辺活動している竹林の七賢は清談の代表である。また、一方老子を教祖と仰ぐ太平道、天師道のような早期道教が漢末に生まれ、魏・晋の時代に更に発展し、雑多な道派になった。やがて嵩山に入って修行した北魏の道士寇謙之は、北魏政権と結合して道教を国家宗教にまで高めた。

仏教の伝来と発展の歴史において、洛陽はなくてはならない符号にもなっている。仏教の中国伝来の正確な時間はいくつかの説があるが、信頼のおける文献（『魏書・釈老志』）によると、正式に伝わったのは紀元元年ごろ、洛陽の宮廷で大月氏の使者が仏典を口頭で伝えたのが最初である。漢の明帝は金の人々が宮殿を飛び回っている夢を見て、仏法を求めた使者を天竺に行かせた話も有名である。漢の使者は大月氏国（現在のアフガニスタン一帯）に至り、67年に梵僧と仏経、仏像を持って洛陽に帰着した。これは仏教初めて中国に入ることかどうかは議論があるが、持ってきた『四十二章経』は中国に入る最初の仏経であり、そして梵僧のために建てた白馬寺は中国最初に作られた仏教寺院であることは、確実な文献と遺物に証明され、間違いないとされる。また、魏末に都であった洛陽に曇柯迦羅が来朝し、出家修道の儀礼を整えた。その際に、朱士行は洛陽での出家は中国人で最初に出家受戒したものである。当時の洛陽では、安世高、支婁迦讖らによって仏典の漢訳は進められていったものの、翻訳の問題で、仏典を深く学ぼうと思うとまだまだ不足していた状況であった。朱士行は完全な経典『道行般若経』を求め、260年西域に旅立った。『放光般若経』の原本を手に入れ、弟子に中国へと持ち帰らせ、西域求法の旅に出た初めての人物であるとされる。

2. 三教の交渉する時代

中国文化史を書いた銭穆と同じ、武内義雄は中国思想史を研究する時も、魏晋南北朝時代の宗教事情を注目し、「中国中世哲学の特徴は儒仏道の三教がお互い

¹²⁷武内義雄『中国思想史』（岩波書店、1957年9月）、P 169。

に交渉を保ちつつ変化していることである¹²⁸」と指摘し、この時代を「三教交渉の時代」と呼ぶ。

儒、佛、道はそれぞれ儒教、仏教、道教のことであり、中国文化の最も核心的な部分と言っても過言ではない。儒教という言い方について、宗教より、中国人は倫理価値観として儒学或いは儒道と呼ぶのが一般的である。しかし、広汎的な意味で、国際では中国の儒学を宗教的なものとして理解する研究者が多い。例えば、その代表的な人物は歴史家アーノルド・トインビー（Arnold Toynbee：1989－1975）であり、「ここで言う宗教は、人生に対する態度を指す¹²⁹」と主張し、儒家思想を宗教と定義している。本文は魏晋南北朝時代に呈している宗教融合の現象を研究するので、儒教という言い方に従う。

魏晋南北朝時期、儒教は最初後漢末経学の余風を受け、訓詁学文字の末節に屑屑としていたが、間もなく老荘の哲学を取り入れ、南北の分立と統一を経て、新しい経学になった。老荘の哲学は新来の仏教思想中とくに老荘に類似した般若区指導の理解を助けて遂に仏教の成立となった。後漢末に起こった民間な俗信は始め老荘の哲学を採用し、後には仏教の哲学をも取り入れて、茲に道教と称する宗教を確立せしめた。三教の起源時間、発展ルートはそれぞれであり、対立的な立場になる時期も度々ある。魏晋南北朝時代に三教の対立、時には激しい衝突さえあったが、ちょうど三教が融合する趨勢が見られる時期である。

五胡十六国時代、各異民族政権は自国の文化の向上をはかるために、僧侶を迎えたことによって仏教は盛んになりつつあった。仏教はある意味で民族の融合にも働きを収めた。

栄えた仏教は、儒教、道教の要素を吸収し、宗教の融合に果たしたものであった。北魏時代の洛陽は当時の仏教の隆盛を反映して、1,000 余りのお寺もあり、宗教都市になった。

¹²⁸武内義雄『中国思想史』（岩波書店、1957年9月）、P 211。

¹²⁹ A・J・トインビー、池田大作『展望二十一世紀—トインビーと池田大作対話録』（北京：国際文化出版社、1985年）、P 363。

二、佛教都市洛陽からみる宗教の融合—『洛陽伽藍記』の解読

仏教は中国に入って、仏典の漢訳、伝教の努力などによって、仏教の信仰がだんだん広まり、古い伝統を持つ中国文化に、新鮮な息吹きを与えることになった。しかし、仏と呼ばれず浮図といい、中国の神仙や老子などと一緒に祀られていたことから見れば、漢代仏教の受容度はまだ低いレベルであった。武内義雄は「後漢から魏に至るまでの間は単に仏教の翻訳に従事した訳経造僧の伝記を列れるだけで、一人の義解僧も出しておらぬ、これはおそらく魏末以前に仏教は未だ本当に中国人に理解されていないかったことを暗示するもの¹³⁰」と指摘し、中国人が自ら進んで仏教を理解しようと試みたのは、前文に言及した朱士行に始まっているとされる。当時の学者は、老荘の「無」をもって仏教の「空」を説明しているので、魏晋時代の老荘学の全盛が仏教の経典の理解を助けた。仏経精神に対する理解が深めるにつれ、仏教学者によってものされた老荘の本が多く表れている。六朝末になると反対に般若の哲学によって、老荘を説明しようとする傾向が現れる。この現象について、武内氏は老荘全盛の思想界が次第に仏教全盛の時勢に変化しつつあることを看取している。

民族文化の融合について述べる際、北魏時代は胡漢融合のピークとして触れたことがある。洛陽を都とするようになってからは、北後はその地の利を發揮して、西域諸国との通交をさらに発展させ、洛陽を名実ともに国際都市となった。また、仏寺の建立と石窟寺院の営造が始められ、次第に大規模なものとなっている。洛陽城の繁華と仏教の興隆は『洛陽伽藍記』に記録されて、宗教文化を融合するピークもこの時代に起こした。孝文帝の政策は、民族だけではなく、宗教の融合も促進していた。

1. 『洛陽伽藍記』について

北朝の文学作品と言え、最高レベルを代表する「三書」¹³¹、「双璧」¹³²などの言い方がある。その具体的なものについて、いくつかの説があるが、どんな並

¹³⁰武内義雄『中国思想史』（岩波書店、1957年9月）、P171。

¹³¹「三書」については評価基準によって異なる。一説は『洛陽伽藍記』、『齊民要術』、『水経注』、もう一説は『洛陽伽藍記』、『水経注』、『顔氏家訓』がある。

び方でも、絶対逃されない作品は『洛陽伽藍記』である。『洛陽伽藍記』全5巻は、北魏の都・洛陽における仏寺の繁栄の様を描いた記録である。書名だけからすれば、この書物は洛陽の寺院についてのみの記述であるかのように見える。しかし、清・呉若準『洛陽伽藍記集證序』に「お寺の名を名目として、帝京の事を記録する（仮仏寺之名、志帝京之事）」と言われるように、その記述は、単に寺院に関する事柄にとどまらず、当時の官庁や風俗・地理、人物や政治上の事件、伝聞などにも及んでいる。北魏仏教史・寺院史、洛陽の都城史上の根本史料であり、『北史』や『魏書』と合わせ見ることで、北魏史を理解する上での重要な一次史料ともなっている。最後の第五篇の宋雲・恵生の記事は、東西交渉史やシルクロードの史料でもある。「実はその内容は、北魏の洛陽を舞台として、政治・経済・社会・民俗・学芸など、当時の文化の万般にわたって、精細かつ壮大に展開された大パノラマである¹³³」と日本語の訳者入矢義高が高く評価している。

『洛陽伽藍記』の序に、最盛期の洛陽の様子は

昭提栢比。寶塔駢羅，爭寫天上之姿，競摹山中之影。金刹與靈台比高，
講殿共阿房等壯

であったが、洛陽から遷都してわずか十何年間の間（547年）

城郭崩毀，宮室傾覆，寺觀灰燼，廟塔丘墟，牆被蒿艾，巷羅荊棘。野
獸穴於荒階，山鳥巢於庭樹

には、北魏末の混乱によって都の洛陽は廢墟と化しており、寺院もまた見る影も無く荒廢していた。撰者の楊銜之は自序で、既に失われてしまった往時の盛況を後世に伝えるため、本書を執筆した旨を述べている。作者の故国に対する強烈な感情から見て、北魏の漢化政策、特に孝文帝の洛陽遷都後の政策により、洛陽を中心する地域に胡漢融合はかなり進んで、インテリア層の間に北魏王朝に対する民族アイデンティティが生じていることが判る。

¹³²「双璧」も『洛陽伽藍記』と『水經注』説、『洛陽伽藍記』と『木蘭辞』説がある。

¹³³北魏・楊銜之（入矢義高訳注）『洛陽伽藍記』巻二（平凡社、1990年4月）、P253。

2. 仏教の中国化

晋の洛陽には四十二寺院があるにすぎなかったが、北魏になると急に寺院が増え、洛陽市に寺院千三百六十七、全土は寺院三万あまり、僧尼二百万人に至った。この数字から見ると、北魏時代の仏教の普及及び信仰の盛況は空前絶後とも言えよう。なぜ仏教という外来宗教が急速に洛陽で広がったかという問題に関して、入矢義高は「北魏仏教の興隆がその初期から国家宗教としての性格を持ち、帝室と王族の護持に支えられて推進してきた¹³⁴」と指摘している。しかし、洛陽に盛んであった仏教が既にインド発祥の仏教と違い、中国化された仏教になっている。

『洛陽伽藍記』は諸寺から、中心となる大寺を選んで、寺名・創建者・城坊あるいは位置、さらには、四隣や寺中の様子、故事などを記している。例えば、白馬寺に関して、

白馬寺、漢明帝所立也。仏教入中国之始。寺在西陽門外三里御道南（巻四）

ここでは、白馬寺の正確な方位、名前の由来、歴史などを詳しく述べているので、貴重な資料になる。上の引用した部分は「白馬」の由来のみ説明して、「寺」についての説明がなし、当たり前のようにくっ付けている。古インド語に「伽藍」は僧侶たち住んでいる庭園と意味する。「寺」は中国固有の言葉であり、古代官署の名称であった。仏教が中国に伝来とともに、最初僧侶たちは洛陽の賓客を接待する所鴻蘆寺に泊まった。鴻蘆寺の場所に建てられたインドの祇園精舎なので、経典を運んだ「白馬」と鴻蘆寺の「寺」を取り、「白馬寺」と命名された。これは中国最初の国が作った伽藍として「釈源祖庭」と呼ばれ、以降「寺」という言い方は中国仏教寺院の専用名称になるようになった¹³⁵。『洛陽伽藍記』のなかに、ありふれる「〇〇寺」の言い方は、既に仏教の中国化の面影が隠れていると考えられる。

数多いお寺の中に、「法雲寺」は少し異なっている存在である。中国人ではな

¹³⁴北魏・楊衒之（入矢義高訳注）『洛陽伽藍記』巻二（平凡社、1990年4月）、P255。

¹³⁵史善剛『河洛文化源流考』（鄭州：河南人民出版社、2009年12月）、P351。

く、「胡沙門」（外国僧侶）が建てたお寺であった。

法雲寺、西域烏場国胡沙門曇摩羅所立也。在宝光寺西、隔門。佛殿僧房、皆為胡飾（卷四）

「西域烏場国」、『魏書・西域伝』に「西域烏長国」とも言い、今のパキスタン北部とされる。注意すべき点は二つある。一つ目は、ここでは西域の国を「胡」と呼ばれるようになった。上記の述べ方から見ると、当時の人々は漢と胡（異民族の胡族）をあまり意識せず、意識上の国境が拡大されたことが考えられる。もう一つは、「佛殿僧房、皆為胡飾」を強調したところである。良く考えれば、佛教はもともと西域から伝来したものである、そちの方が伽藍の本来の姿であろう。しかし、前述のような法雲寺の見た目は「胡飾」として描写する記述は、当時の洛陽のお寺のなかに珍しい存在を表している。というのは、他のお寺はここと異なり、自分の特徴すなわち中国らしさを持っている。

お寺の中国化性格は仏塔からはっきり見える。インドでは、仏塔は舍利を祀るために建てられ、お寺の中心的な存在である。インド仏塔は台座、覆う鉢、箱、相輪の四つからなり、空洞のない建物である¹³⁶。しかし、『洛陽伽藍記』の巻一に力を入れて記録している壮麗な永寧寺は佛教都市洛陽の代表的なお寺である。九層・九十余丈の堂々たる仏塔は百里の彼方からはるかに道行く人の目に映え、百二十の金の宝鐸をかけ、金銀造形の巧みを極めた豪壮なものであった。「明帝は太后ともにそれを登り、宮内の様子は掌の平ようにはっきり見える。京城はまるで一戸の家庭のように臨む。（明帝與太後共登之。視宮内如掌中，臨京師若家庭）」の記載によると、永寧塔を登って眺めることもできていた。即ち、北魏洛陽城内の佛教建築は明らかに中国の樓閣の特徴を持っていた。

帝王の庇護の下に、佛教が上下の信仰を得て、お寺が急増した。当時の一つの風潮は、貴族たちは自宅を寄付して、お寺にすることという。『洛陽伽藍記』にもたくさん記載がある。例えば建中寺、景寧寺、宣忠寺など皆もと民宅であった。このようなお寺は、大体「前の方を仏殿になり、後ろは講堂になる（前堂為仏殿、

¹³⁶劉敦楨『中国古代建築史』（台北：明文書局、2000年10月）、P 86。

後堂為講堂)」の形になっている。当時中国のお寺はインドの伽藍と違い、築山、池、楼閣など中国式庭園の特徴を持っていたことが判る。服部克彦は『洛陽伽藍記』に記載している華林の蓬萊山と城南の景明寺と一緒に考察し、世宗は道教と佛教の二重信仰を持っていることを推測できる¹³⁷。このように、『洛陽伽藍記』詳しく描きしている建物から、かなり当時の宗教雰囲気を表すことができる¹³⁸。

3. 儒、道の影響

もう一つ興味深い点は、お寺の多くは帝王貴族あるいは庶民が親・先祖の冥福のために建てたものである。例えば孝文帝は祖母のために報徳寺を、胡太后は母親のために永寧寺を立てたなどがある。つまり、仏教の力を借りながら、孝という徳目を中核に据えて国を治めていた。これは単純な仏教の信仰より、明らかに儒教と道教の影響が混じっている。親孝行や先祖を大事にするのは儒教の君臣父子の人倫価値観の基本であり、造像菩薩を拜んで福を祈るという形は土着の道教の神仙方術の思想信仰に合致する形になっている。

また、尼寺の景樂寺は下記の光景である。

至於大齋，常設女樂。歌聲繞梁，舞袖徐轉，絲管寥亮，諧妙入神。以是尼寺，丈夫不得入。得往觀者，以爲至天堂（卷一）。

尼寺にしてこの遊楽がある。北魏の洛陽城内、このような風変りの寺院が少なくない。長秋寺の特異な風習について、

四月四日，此像常出，辟邪師子導引其前。吞刀吐火，騰驥壹面；彩幢上索，詭譎不常。奇伎異服，冠於都市。像停之處，觀者如堵，疊相踐躍，常有死人（卷一）。

仏教行事が盛大に催され、四月四日の長秋寺の法要は、死人がでるほど賑やかと混雑さである。これは庶民の日常生活にとって仏教は身近にあったことの証でもある。

¹³⁷服部克彦『北魏洛陽の社会と文化』（シネルボー書房）、P 6-17。

¹³⁸王文進『洛陽伽藍記：浄土上の風煙』（台北：時報文化、1987年1月）、P 58 参照。

この二例から、当時の洛陽満都の人々は伎楽や奇術に陶醉する有様がわかる。中国人にとって、この世を苦と考える仏教より、五感の楽しみを大切にする現実的な儒教の人生観が合っている。仏教行事は仏理の宣伝より、道術のアピールになってしまった。したがって、『洛陽伽藍記』に表れた宗教事情は仏教、儒教、道教の混合体とも言えよう。

魏晋南北朝時代、儒、釈、道の三教が論難することもあれば、またお互いに融合疎通することもある。仏教は儒教、道教を媒介通して理解され、次第に全盛の時勢に乗り始まった。錢穆が仏教の極盛でも中国伝統的な家庭観念（実は儒教の生命価値観）を動揺する事ができない¹³⁹と指摘した。『洛陽伽藍記』が描き上げている仏教隆盛時代でも、洛陽地方を中心に死者の事歴を石に刻して墓中に納めた墓誌銘が大量に出土している。現在書道の名品法帖になっているこれら北魏の墓誌銘、死者を頌徳、追慕の思いはまさか儒教的な考えである。川本芳昭は墓誌定型化が孝文帝期の時代風潮との関連を推測しているが、錢穆の論の裏付けになる。『南齊書』卷四十一に記載される南朝の名士張融が亡くなった時に『孝経』、『老子』、『法華経』が一緒に納棺されたことは、まさに三つの宗教が融合する表れになる。

結び

「秦漢の帝国は漢族中心の国民的帝国たる色合いが深く、隋唐の帝国は法制の統治の下に蛮漢両族に通ずる天下たる趣が多い。その間を繋ぐのは魏晋南北朝の時代である¹⁴⁰」の言葉を表面上の意味で理解すると、魏晋南北朝時代を「統一までの過渡期」と見なされがちが、岡崎文夫の本意はこの時代を後の隋・唐帝国の下地を用意したと積極的に捉え、研究すべきだと私が考えている。上述の研究によれば、魏晋南北朝時期、分裂の裏側に、思想、民族、宗教のあらゆる面において、激しい衝突を通し、絶えずに融合をおこなっていた。魏晋南北朝の約400年の間に、変動と共に融合する趨勢が貫いている。故に、この時代の特徴は融合することである。この時代は後の隋・唐帝国の下地を用意し、漸く中華文明の新

¹³⁹ 錢穆『中国文化史導論』（台北：商務印書館、1993年5月）、P150。

¹⁴⁰ 岡崎文夫『魏晋南北朝通史』（東洋文庫、1989年7月）、頁vii。

境地を作り出した。大融合の中心地として、魏晋南北朝において洛陽の文化表象は玄学、楽府詩および『洛陽伽藍記』によって鮮明に映されており、融合する文化そのものである。

第四章 隋唐における洛陽の文化表象

一 唐詩から見る洛陽の文化的アイデンティティ

魏晋南北朝時代に始まった儒家と道家の思想の融合、衝突しつつも流入する周辺の諸民族の様々な要素、及び仏教伝来による三教の融合、この一連の流れは文化の大融合をもたらした。この融合する文化は隋唐時代、特に唐の時代に華麗な花を咲かせ、中国史上の全盛時代と言える絢爛たる光輝を放った。唐代の人が見聞する世界や活動する空間が飛躍的に拡大し、六朝以来の韻律論的工夫の上に新たに形が加わることによって、唐代は漢詩の最盛期を迎えた。

唐代の文化の担い手は詩を作り、文を綴り、詩という洗練された言葉で社会生活を反映するのを好む。唐代の有名人で詩文と無縁の人はいなかったであろう。吉川幸次郎は中国文学史を述べる時、中国文学を四つの時期に分けている。その第二の時期を抒情詩の時期として、初唐を経て盛唐に至る自由な詩語は中国詩の黄金時代となり、画期となり、新出発点となる¹⁴¹と述べている。また、宋の詩について、「あるいは詩の時代は既に去り、散文の時代へと移転しつつあったことが、詩も散文化したとも見られる」¹⁴²と指摘している。故に、唐詩は唐代文学の代表的な題材であり、詩人の数、作品の数においても歴代で群を抜き、その影響は周辺の国にも及ぼしている。

中国では昔から詩と歴史は密接な関係があり、詩を通して歴史を見る伝統がある。『唐代の詩篇』の平岡武夫の調査によると、清の初めに刊行された『全唐詩』900巻は唐詩の全集（五代の作品をも含めることがある）であり、作者の総数は2873人、作品4万9403首が収められている。これらの作品の内容は多岐にわたり、唐代の政治社会、民俗慣行、歴史、人情、都市・自然風景などあらゆるものを網羅している。松浦友久は「中国詩の性格」という文で、「中国の文学史では、二つの「SHI」の世界が特に際立った存在となっている。すなわち、平声の「詩」と上声の「史」の世界である。五万首の全唐詩に象徴される詩歌への愛好と、歴大な二十四史に象徴される歴史への関心とは、単に文学史としてだけではなく、

¹⁴¹吉川幸次郎『中国文学入門』（講談社、1976年6月）、P103-104。

¹⁴²吉川幸次郎『中国詩史』（筑摩書房、1967年10月）、P17。

広く中国の文明のあり方を考えるうえでも、とりわけ重要なポイントと言えるであろう¹⁴³」と指摘している。詩は社会的な、また歴史的な成立を持つものであり、これをそのような現実的な条件の中において見る視点が重要であることはいうまでもない。唐の時代の文化現象を論ずる時、これらの唐詩は最適な資料及び素材になると考えられる。

第一節 隋唐時代の洛陽及び関する詩作

一、隋唐時代の洛陽

隋唐時代の洛陽は唐都と称され、国都の長安に対して副都として位置付けられていた。隋が天下統一を果たした後、第二代皇帝隋煬帝（604～616）は、関東（山海関より東）及び江南の地に対する支配力を強化するため、荒廃していた古都・洛陽を復興させることを決意した。四方に対する貢賦徴収の効率化を図るために、洛陽に東都を建設した。この城は隋唐洛陽城と呼ばれ、その方位は各文献に詳細な記載があり、近年の考古成果にも証明されている。具体的にいうと、「選ばれたのは、漢魏洛陽古城の西、周代王城の東南にあたり、漣水の兩岸をまたぎ、さらには洛水を城内に取り込むように位置していた。面積は約 47 平方キロ、長安と比べ非常に小規模であった¹⁴⁴」。

煬帝は東都洛陽の営造するために、毎月 200 万以上の人力を駆使し、わずか 10 か月で出来上がったという。東都の新しい洛陽城は当時の都大興城より、四分の一ほど小さくなり、配置も整った里坊制度だが、宮殿、建物などは一段贅沢華麗になった。また、100 万人以上の民衆を動員して、洛陽の西より 9km のところに、華北と江南を連結させ、南北を結ぶ大運河を完成させ、洛陽は全国の水陸交通の要所となった。隋は統一後、わずか 30 年ほどで終わる短命王朝であったが、唐帝国で発揮された政策基盤は、隋の時代に基礎がおかれたものが多いので、「隋唐」とよくまとめて語られる。中華統一を果たした隋の時代に作った東都洛陽城、大運河建設、また諸制度は、後の唐に受け継がれ、そして中華文明の全盛

¹⁴³松浦友久『詩語の諸像』（研文出版、1981年4月）、P3。

¹⁴⁴楊寛著（西嶋定生監訳）『中国都城の起源と発展』（学生社、1987年11月）、P186。

時代を迎えた。隋唐は、「律令・仏教・儒教や使用文字としての漢字を共通の要素として・東アジア文化圏を成立¹⁴⁵」させていった、“世界帝国”的性格を持ったであった。

唐のはじめに、「東都」の称が廃止され、唐太宗貞観6年（632年）に「洛陽宮」と呼ばれる。高宗2年（657年）に、洛陽はまた東都とされた。その後、則天武後の時代の「神都」、安祿山の大燕帝国など一連の変遷を経たが、長い間長安と並ぶ唐の文化の中心地であった。植木久行の「文学の風土とは、結局のところ、文学の内実を様々な形で作り上げる一種の環境である¹⁴⁶」の言葉のように、洛陽は唐代の人々にどのように捉えられ、どのように詠まれているのかを、当時の作品に答えを求めなければならない。先行研究は文学の風土研究、有名詩人と洛陽の関わりをめぐるものが進んでいるが、洛陽全体のイメージについてはまだ系統的にはなされていないのが現状である¹⁴⁷。本稿で唐詩に表現された洛陽を主眼として、隋唐における洛陽の文化表象を検証してみたい。

二、洛陽に関する詩作

今日我々が唐代の漢詩作品を閲読する場合、『全唐詩』は総合的なテキストとして甚だ重要な位置を占めていると言ってよい。唐詩900巻に収録している「全唐詩庫」のソフト¹⁴⁸を利用して、都市の名前をキーワードに検索してみると、詩のタイトル或いは内容に「長安」という言葉を含む唐詩は694首、「洛陽」という言葉を含む唐詩は456首ある。昔の習慣で、洛陽を洛で省略して呼ぶことも多いので、「洛」のみで検索すると、洛という言葉が出ている唐詩の数はぐっと増え、1215首に上る。ほかの地名、例えば当時の名城同じく古都としての金陵（今

¹⁴⁵宮崎市定『大唐帝国』（中央公論社、1988年9月）、P330。

¹⁴⁶植木久行『唐詩の風土』（研文出版、1983.2.10）、P ii。

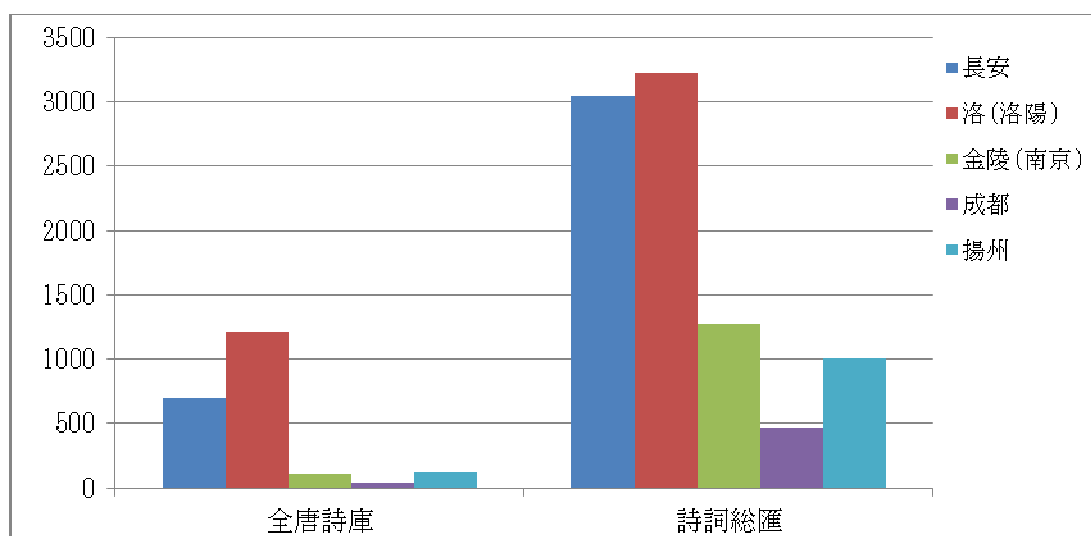
¹⁴⁷植木久行『唐詩の風土』（研文出版、1983年）・『唐詩の風景』（講談社学術文庫、1999年）、松浦友久氏と共著『長安・洛陽物語』（集英社、1987年）等。文学と洛陽の関係を扱ったものには、他に寺尾剛「李白における洛陽の意義—安史の乱時の言及を中心に」（『中国詩文論叢』10、1991年）、和田浩平「韓愈と洛陽—元和年間初期に於ける吏隠の狭間」（『芸文研究』63、1993年）、中尾健一郎「白居易と洛陽」（『中国文学論集』34、2005年）、橘英範「六朝詩に詠じられた洛陽」等がある。

¹⁴⁸鄭州大学「全唐詩庫電子検索系統」HP（<http://www3.zzu.edu.cn/qts/>）を利用した。

の南京市)に触れた詩作は114首、成都是41首、揚州は116首しかない。この結果からみると、他の地名と比べ、長安と洛陽の両京は異常に高い頻度で唐詩に表れていることが判る。

唐代に限らず、中国の歴史を全体的に考え、各時代の詩文のなかに出た地名を調べてみた。中国の古代から清まで、作者13168人の作品292625篇を収録して、詩詞に関する中国最大の検索エンジン「詩詞総匯」¹⁴⁹を使用して調べた結果、「長安」に関するものは3046篇、「洛(洛陽)」に関する者は3223篇がある。その次の「金陵(南京)」の1229篇より断然多く、「長安」と「洛」の出現頻度はやはり他の都市とは比べられない程高い。

表3：詩に現れた地名に関する統計（筆者作成）



実は都市の名前のみをキーワードに検索することは非常に大雑把なやり方であり、これらの数字は正確なデータとしては使えない。なぜならば、ある都市のことを描写する際、特定の場所の名或いは関連する人の名前、典故を使うことで、都市の名前が直接詩文に出ない時も多い。例えば、「曲江」、「灞橋」、「五陵」が出てくる詩作は明らかに長安のことを、「天津」、「金谷」、「白馬寺」などは洛陽のことを詠っている。実際統計するのに膨大な仕事が必要になるので、ま

¹⁴⁹詩詞を27万近く収録している中国最大級の検索サイト <http://www.sczh.com/asp/index.asp> を利用した。

だ行われていないが、長安と洛陽に関連する唐詩の数は上記の数字より大幅に多いに違いない。

数多くの詩作に出ていることは即ち、この二つの場所が当時の文化現象と何らかの形で結びつき、特にその時代の文化人に意識されているということである。唐の時代は勿論、唐の時代を超える長い間に、長安と洛陽は知識人の心の中に重要な地位を占めていることが判断できる。これらの詩文を作った作者たちは各年代、業種、階級、生活背景を持っている人々であるので、色んな立場、角度及び感情で長安と洛陽を観察し、描いている。この膨大な詩作に描かれた長安と洛陽の各面を纏めると、唐の両京の時代像が最大限に復元できると考えられる。

第二節 洛陽の文化アイデンティティ及び根源

洛陽が当時の文化人に注目・意識され、詩作中に度々出現していることは、洛陽にその社会に特有の心象、何らかの「アイデンティティ」と呼ばれるようなものがあると理解してもよいであろう。アイデンティティ(identity)は、広義には、「同一性」「個性」「国・民族・組織などある特定集団への帰属意識」、「特定のある人・ものであること」などの意味で用いられる。つまり、アイデンティティとは「自分は何者なのかを知ること」であり、自らのルーツにある誇りある伝統と文化を知った若者、自らのアイデンティティを確立した若者は、自らをその誇れる大いなる存在に同化させようとする。梶谷真司によると、「それは国なり地域なり、民族なり宗教なり、何らかの社会単位の文化的な一体性、連続性の根底にあると考えられる。それぞれの社会、文化の方向性、その時々々の状況への態度を根本で規定するのは、おそらくこのアイデンティティだろう¹⁵⁰」。

また、NグレーザーD. P. モインハンの説明によると、それは「特定の種族集団に所属する状況、種族としての矜持と規定されている。流動的に感じられている」、「原初的な親近感と愛着」と呼ばれるものから構成されている。それは、人

¹⁵⁰梶谷真司「文化的アイデンティティとグローバリゼーション——社会現象学的考察」、『帝京国際文化』（帝京大学文学部国際文化学科編第17号、2004年）、P 123。

間が生まれながらにして持っているか、その後身に付けるかしたもののから成り立っているアイデンティティである¹⁵¹。

ひらたくいえばアイデンティティとは「自己帰属或いは身元」である。本稿に扱う文化的なアイデンティティは、文化的な帰属感のことである。詩には当時の人々の感情と思想が秘められている。いわば「詩とは、志の赴くところである。それが心の中にあるのが志、言葉として発したものが詩である」。詩の中に個人の感情や想像が入っているため、信憑性の高い厳密な資料としては使えない。しかし、詩作が反映しているのはそれぞれ個人のもの、つまり一人一人の心象風景である。これらの個人的な原風景を通して、歴史の中での人々の営みを感じ取ることができる。「歴史の中に生きた人々によって、その「風景」は、単なる風景ではなく、生活者として主体的に働き掛ける「環境」であった」¹⁵²という。一個人にとっての洛陽の原風景は異なっても、その時代の数多くの詩人が見た洛陽の風景は唐代の洛陽のイメージであろう、

唐代の人々が長安と洛陽について大量の漢詩を作ったことは、この両都市は当時の人にとって、最も大切な地域であり、文化的アイデンティティの拠り所でもあることを示している。長安は別の機会にゆずり、下に唐詩を通して洛陽の文化アイデンティティを考察してみよう。非常に多くの唐詩が洛陽の様々の面に触れ、洛陽のイメージを築いた。洛陽の文化アイデンティティを理解するには、これらのイメージの具現をまとめ、その根源を分析することが必要になる。

一、王権と象徴する帝都のイメージ及びその根源

洛陽に関する詩句には、「天」、「皇」、「帝」、「京」、「王」、「都」、「宮」などの文字がよく表れる。紙幅の関係で、全文を羅列せず関連文句だけを抽出する。

歩登北邙坂，踟躕聊寫望。

¹⁵¹N グレーザーD. P. モインハン（内山秀夫訳）『民族とアイデンティティ』（三嶺書房株式会社、1984年6月）、P 42。

¹⁵²川添登『東京の原風景』（日本放送出版協会、1979年2月）、P 228。

宛洛盛皇居，規模窮大壯。
三河分設險，兩嶠資巨防。
飛觀紫煙中，層台碧雲上。
青槐夾馳道，迢迢修且曠。
左右多第宅，參差居將相。

—鄭世翼（？-637）「登北邙還望京洛」

洛城三五夜，天子萬年春。
彩仗移雙闕，瓊筵會九賓。
舞成蒼頡字，燈作法王輪。
不覺東方日，遙垂禦藻新。

—孫逖（696-761）「正月十五日夜應制」

洛陽花柳此時濃
山水樓台映幾重
群公拂霧朝翔鳳
天子乘春幸鑿龍

—宋之問（656-712）「竜門應制」

南渡洛陽津，西望十二樓。
明堂坐天子，月朔朝諸侯。

—王昌齡（約 690—約 756）「放歌行」

三年一上計，万国趨河洛。

—張九齡（678-760）「奉和聖製送十道采訪使及朝集使」

洛城本天邑，洛水即天池

—儲光羲（706-763）「送恂上人還吳」

邙山は洛陽の北にある山であり、そこで洛陽を鳥瞰して、詩を作るのは文人の伝統になっている。後漢の梁鴻の「五噫歌」から曹植の「送應氏二首」まで、名作が数多くある。「登北邙還望京洛」の作成時期は不明であるが、鄭世翼の歿年は637年なので、述べているのは隋か初唐の頃の洛陽城の壮大な街並みに違いない。上の宋之問、孫逖、張九齡の作は皆應制詩であり、宮廷の公式の席で、皇帝の命によって制作する詩である。これらの應制詩の詩型は典雅華麗で、詩自体の

価値はそれほど評価されないが、洛陽の元宵節の盛んな様子、国家行事の盛大な場面を伝えている。全部説明すると、かなり紙幅を要するので、簡略化し言えば、これらの詩作はすべて洛陽を天子の居場所と結びつけている。以上はほんの一部で、似かよった表現は他の詩にもたくさん出ている。当時の人の目に映った洛陽は、決して普通の都市ではなく、長安に負けない程の帝都であったことを容易にうかがい知ることができる。

唐代歴史全体を見ると、勿論都の長安はほぼ一貫して政治の中枢であり、王権を象徴する都市であった。しかし、当時の洛陽は国都に準じる扱いを受け、皇居、宮殿、宮苑、祭祀などの場所と建物がある。これら政治の中枢に関連するものと雄大壮麗な街並みは天子と結び付けられ、自然にその時代の最高の権力—王権を連想させる。気賀沢保規によれば、「洛陽は物資の調達ははるかに有利のため、長安は洛陽をもつことで存立しえた。洛陽は防衛面では脆さを抱えており、それをカバーするのが関中であった。長安と洛陽は言わば車の両輪¹⁵³」という。故に、唐詩の洛陽についての描写の中に、帝都として王権を象徴するイメージがある。

特に興味深いことは、実際に洛陽の政治的地位が長安と匹敵できる時期は初唐であり、盛唐時期は既に長安に劣っていた。中・晩唐になると、名義上はまだ東京であったが、都の政治機能はほぼ失われた。それにもかかわらず、中・晩唐時代の詩作は相変わらず王権を象徴する都のイメージを持っている。例えば

洛陽天子県、金谷石崇郷

—張継（約 715—約 779）「洛陽作」

高台造雲端、遐瞰周四垠。

雄都定鼎地、勢據万国尊

—韋応物（737-792）「登高望洛城作」

洛陽宮闕當中州

城上峨峨十二樓

—張籍（767-830）「洛陽行」

¹⁵³気賀沢保規「世界史上の長安」(『しにか特集 花の都長安』大修館書店、1996年第九号)、P 16。

平時東幸洛陽城，天樂宮中夜徹明。

—張祜(約 785—849?)「李謨笛」

などがある。これらの詩から、洛陽の王権を象徴する都のイメージは晩唐まで続いたことが判る。帝都というイメージの由来は、現実の政治情勢と昔の歴史的事情の両方から来たと考えられる。洛陽は周、後漢、魏晉、北魏など歴代の旧都なので、唐代の人にとって、洛陽といえば天子王権を連想させる。初唐則天武後の時代、洛陽は一時的に長安を凌ぐ地位を占めたので、都のイメージは当たり前とも言えるが、中・晩唐において、洛陽の都のイメージは、一種の慣性的なものと考えられ、実像より、追憶の中の都になる。

二、華やかな大都市のイメージ及びその根源

唐代の経済状況について、宮崎市定は「西アジアに起こったサラセン帝国との貿易が盛大に行われ、西アジアから陸路、長安・洛陽に達した交通路は大運河によって揚州に達し、そこから海へ出て泉州・広州を経て南海、インド洋から西アジアのペルシア湾に至る世界的な循環交通路も完成された」¹⁵⁴と述べ、中国は好景気の時代を迎えることができ、都市を繁栄させた。洛陽も経済の中心地として、外国商人も往来して、店舗、酒楼、伎楼の集まる繁華な地であったため、「花の都」の輝かしいイメージに相応しい唐詩作品が多い。

天津橋下陽春水（天津橋下 陽春の水）

天津橋上繁華子（天津橋上 繁華の子）

馬聲回合青雲外（馬聲廻合す 青雲の外）

人影動搖綠波裏（人影動搖す 綠波の裏）¹⁵⁵

劉希夷（651-679）の「公子行」に、天津橋を通る人々の往来する賑やかな様子が記録されている。天津橋は隋煬帝が洛陽に遷都後、洛河に建造した橋であり、東都を代表する名勝地として知られる。皇居は伝説の天帝が住む所、洛河を銀河

¹⁵⁴宮崎市定『大唐帝国』（中央公論社、1988年9月）、P378。

¹⁵⁵本章の詩句の書き下しと説明は、松枝茂夫『中国名詩選』（岩波文庫、1983年9月）、吉川幸次郎、小川環樹編『唐詩選』（筑摩書房、昭和44年11月）、小川環樹『唐詩概説』『小川環樹著作集第二巻』（筑摩書房、1977年2月）、植木久行『唐詩の風土』（研文出版、1983年2月）、佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店、1992年10月）などを参考。

と比喻して、銀河の渡し場の意味に因んで、「天津」と名づけたという。『唐兩京城坊考』には、天津橋の重要性について、「唐人、西京より東都に至る、皆天津橋に由る」と記し、初唐から盛唐にかけて、天子が洛陽を訪れると、東都在住の文武百官はこの橋のほとりで天子の行列を出迎えたという¹⁵⁶。詩人は直接天津橋の繁華ぶりには触れず、空気中の音と水に映っている投影に注目した。橋下を流れる緩んだ春の水、橋上を行き交う貴公子たち、馬のいななきは青雲の上に上って高らかに響きあい、雑踏する人影は洛水の緑の波にうつり、波と共に揺れ動いた。

豪放な詩人李白もこの繁華ぶりが気に入り、特に天津橋など賑やかなスポットの辺りで活動した。その様子を詠じる詩作も少なからず残した。例えば洛陽の大通を颯爽と行く車上の貴公子を詠んだ詩

白玉誰家郎，回車渡天津。
看花東陌上，驚動洛陽人
—李白「洛陽陌」

春の花乱れる風景を描いた詩

天津三月時（洛陽の天津橋 三月の時）
千門桃與李（千門 桃と李）
—李白「古風十八」

などがある。特に有名な一首は「憶舊遊寄譙郡元參軍」で、その中の一部は、李白が昔洛陽で放浪した少年時代を追憶したもので、李白の生涯や思想を考察するには重要な価値があると思われる。

憶昔洛陽董糟丘（憶ふ昔 洛陽の董糟丘の）
為余天津橋南造酒樓（余が為に天津橋の南に酒樓を造り）
黄金白壁買歌笑（黄金 白壁 歌笑を買ひ）
一醉累月輕王侯（一醉月を累ねて王侯を輕んず）

¹⁵⁶植木久行『唐詩の風土』（研文出版、1983年2月）、P 86。

—李白（701-762）「憶舊遊寄譙郡元參軍」

この洛陽で、744年に李白、杜甫の二大詩人が初めて出会い、意気投合した。前述の大衆から遊離した荘厳な都のイメージと違い、これらの詩から繁華街に人が往来し、お酒を飲んだり、花見をしたり、賑やか生活感が湧いて来る。安史の乱では、洛陽は大きなダメージを受けたが、また復興し、中唐、晩唐の作品でも、名利を求める人で充満する繁華の地のイメージが強く表われている。

水南冠蓋地，城東桃李園。

—白居易（772-846）「洛陽春贈劉李二賓客」

古來利與名，俱在洛陽城

九陌鼓初起，萬車輪已行

—于武陵（？-852）「過洛陽城」

洛陽古今足繁華，最恨喬家似石家。

—雍陶（約789-873）「洛中感事」

以上のような洛陽の繁華と名利に敏い都市性格を述べている句も多い。戦乱期を除き、このイメージは唐代を通じ一貫している。繁華の裏には、奢侈と安逸に耽った風俗もあり、時に洛陽は喧騒の渦巻く都市である。科挙制度が始まってまもなく、洛陽は名利の獲得を目指す人であふれるので、功利的な考えに傾く気風があった。

『史記』貨殖列伝によると、洛陽の人は商売を善くしたと書かれており、戦國期の有名な大商人である白圭は洛陽の生まれで、彼の商売の能力は洛陽及び周辺地域での経済活動に由来している。漢武帝期の財政貿易理論家桑弘羊も、もともと「洛陽の商売人の子」であった。その政策は後世の経済生活に影響を及ぼした¹⁵⁷。したがって、このしばしば詩人たちに嫌われる功利的風潮は、実は昔から洛陽に存在している。これは詩人に喧騒と浮世のイメージを与え、否定的に捉えられている。例えば青年時代の杜甫は「李白に贈る」に

¹⁵⁷羅炤「洛陽学の私の見解」『洛陽学国際シンポジウム報告論文集』（汲古書院、2011年3月）、P18。

二年客東都（二年 東都に客たり）、
所歴厭机巧（歴る所 机巧を厭ふ）

がある。李白も

長劍復帰来（長劍 また帰り来たり）、
相逢洛陽陌（合い逢う 洛陽の陌）。
陌上何喧喧（陌上 何ぞ喧々たる）、
都令心意煩（全て心意をして煩わしむ）」

と詠んで、洛陽の喧騒と豪奢を批判していた。

三、郷愁のイメージとその根源

魏晋の三百年の大分裂の時代を経た中国、隋唐時代になって、やっと統一帝国になった。特に唐の時代は、さらに周辺への版図の伸長が著しく、唐代の人が見聞する世界や活動する空間は飛躍的に拡大した。知識人たちは出仕のため上京したり、地方官員として任地へ赴任したり、従軍或いは何かの罪で辺鄙なところに流刑にされることなど、故郷を離れて移動することが多い。また、古今の名勝を訪れ、遠方の友人に会いに行くなど旅をする機会も格段に増えたのである。したがって、送別や旅情を詠う詩は数多い。唐詩鑑賞や選集に項目を挙げるとき、「送別」、「留別」、「行旅」、「旅情」、「望郷」、「還郷」など様々な分類方法があるが、これらの詩に共通するのは郷愁の思いである。

郷愁とは、他郷にあって故郷を懐かしく思う気持ちである。広い意味では、本当の故郷より過去のものや遠い昔などにひかれる気持ちを指す。即ちノスタルジアであり、故郷は勿論、長く住んだ環境、離れた家族、昔親しんだ友人、故国、或いは古き良き時代への懐かしさは、皆郷愁の一種である。この広範な意味で郷愁を理解すると、郷愁は唐詩の最大な主題の一つと言える。

先に述べたように、アイデンティティは簡単に言えば「自己帰属或いは身元」であり、郷愁自身もアイデンティティの表現の一つと理解しても良い。洛陽に関す

る詩文の中に、郷愁に関するものがかなり多く、名作も少なくない。その影響は周辺の国にも及び、日本の朝日新聞出版の「シルクロード紀行」シリーズも「郷愁の都 洛陽¹⁵⁸」をタイトルにした。

洛陽の郷愁というイメージを築いてきた詩作を、大雑把に区別すれば、洛陽という地で起こる郷愁と、よその地で洛陽を偲ぶ郷愁の二種類に分けることができる。

1. 洛陽という地で起こる郷愁

唐代では、政治、経済、社会、思想の各方面における中国史上の大きな変動が生じた。新たに科挙が社会階層を決める要素になると共に、様々な改革が行われた。唐の初めは科挙の受験を奨励するために、落第者にも帰りの旅費として絹五疋を支給したなどと伝えられている¹⁵⁹ので、受験者は長安と洛陽に殺到するのも理解できる。とにかく当時の両京はこの諸改革の中心地として、城内は活気に溢れていた。これらの人は自分の故郷を離れ、一族の期待を背負って、それぞれの目的や夢をもって上京したのである。

白楽天、王維のように合格して順調に出仕する人もいるが、思う通りにならず愁う人も多いただろう。華やかな帝都で遠く離れる故郷を思う作品が作られる。その中に洛陽に関する一つの名作は中唐の七言絶句『秋思』である。

洛陽城裏見秋風 （洛陽の城裏 秋風を見る）
欲作家書意万重 （家書を作らんと欲して 意万重）
復恐怱怱説不尽 （復恐る 怱怱説いて 尽くさざるを）
行人臨発又開封 （行人発するに臨んで 又封を開く）
 — 張籍（767-830）「秋思」

この詩は作者が故郷を出て、科挙の為の勉強中か、或いは役所に勤めた頃の作品と思われる。洛陽のまちに秋風が吹くのを見て、秋を感じると共に望郷の念が

¹⁵⁸『シルクロード紀行 洛陽—郷愁の都』（週刊百科 週間シルクロード 44号、朝日新聞社、2006年）。

¹⁵⁹村上哲見「科挙と漢詩」（『月刊しにか』大修館書店、1994年第九号）、P 49。

湧き、ふと故郷への手紙を書きだすと、つのる思いが止めどもなく次々と溢れてくる。心ここになく書いたため、手紙を託した旅人の出発間際、書き残しがないか心配になり、又封を開けて読み返す。「秋風を見て」、「家書を作らんと欲し」、「又封を開く」という一連の行動で、感情の動きが自然で、人間の心の機微が感じられる。詩の中に郷愁そのものを直接述べてはいないが、故郷への思いが溢れてくる。

洛陽の秋風と郷愁の組み合わせは昔からある。『晋書・張翰伝』は洛陽の秋風に関する有名なエピソードを記録している¹⁶⁰。宋の王安石も、この「秋思」は郷愁という題材の中の優れた作品として認め、「看似尋常最奇崛、成如容易却艰辛」と言い、「又封を開く」という生活細部の描写に高い評価を与えた。

洛陽の風景は、まるで人の望郷の念を呼びさます力があるかのように、秋風だけではなく、春風も望郷を募る。李白には春の夜に洛陽の街で「折楊柳」の曲を奏でる笛をきく——「春夜 洛城に 笛を聞く」がある。

誰家玉笛暗飛聲（誰が家の玉笛ぞ 暗に 聲を飛ばす）
散入春風滿洛城（散じて春風に入りて 洛城に 満つ）
此夜曲中聞折柳（此の夜 曲中 折柳を 聞く）
何人不起故園情（何人か 故園の情を 起こさざらん）

—李白「春夜洛城聞笛」

どこで笛を吹いているのだろうか、宵闇に笛の音だけが聞こえてくるが、春風に乗って洛陽城に笛の音が満ちている。この夜、流れてくる曲中に、別れの曲折楊柳¹⁶¹の曲が聞こえてきた、誰が故郷を思う気持ちを起こさないだろうか。この反語の氣勢は、「いや、誰でも起こす」と言わんばかりで、心にしみる郷愁である。

2. よその地で洛陽を偲ぶ郷愁

¹⁶⁰張翰は故郷呉中から上京して、洛陽に住んでいた。城内に起きた秋風で故郷の料理を思い出し、すぐさま官を辞して、帰郷した故事がある。

¹⁶¹折楊柳のこと。横吹曲の一。別れの情をうたった曲名。別離の折り、水の畔まで見送り、柳の枝を折って贈った故事に基づくもの。

繁華な大都市で辺鄙な故郷を偲び、異郷にあって、故郷を思うのは人情の常による。洛陽の地で起こる郷愁の詩も少なくないが、それより量的にも質的にも大幅に上回るのは、離れたところで洛陽を思う詩である。よその地で洛陽を偲ぶ郷愁を表わす名作が多いので、重点をここに置いて述べてみたいと思う。

まず、王昌齡の「芙蓉楼送辛漸」がある。

寒雨連江夜入吳（寒雨 江を連ねて 夜吳に入る）

平明送客楚山孤（平明 客を送れば 楚山孤なり）

洛陽親友如相問（洛陽の親友 もし相問わば）

一片氷心在玉壺（一片の氷心 玉壺に在りと）

—王昌齡（700?～755?）「芙蓉楼送辛漸」

王昌齡の出身についていくつかの説があり、いずれも洛陽とは関係ない。洛陽に帰る友人辛漸を、丹陽（江蘇省・鎮江）の芙蓉楼で送った時の詩である。当時王昌齡は江寧県（南京）の丞、地方事務所の次長として、左遷の身であった。この詩には、別れの朝とその前夜との二つの時刻が詠われている。憂いに沈む作者の心は、この雨がいつの間にか吳の国にも降り、寒い秋の気配を感じることができる。友に託した最後の一言は、澄み切った心境を描くものとしてよく知られている。「私の今の心は玉壺の中の氷片のようだ。悲しみ曇らされ、怒りに乱されていない」。家族と友人の配慮に対して、「安心して」のような答えにはなるが、やりきれない気持ちと言える郷愁が感じられる。

もうひとつ優れた作品は王湾の「次北固山下」である。

客路青山外（客路 青山の外）

行舟緑水前（行舟 緑水の前）

潮平兩岸闊（潮は平かにして、兩岸闊く）

風正一帆懸（風は正しくして、一帆懸る）

海日生残夜（海日 残夜に生じ）

江春入旧年（江春 旧年に入る）

郷書何処達（郷書何れの処にか達する）

帰雁洛陽辺（帰雁 洛陽の辺）

—王湾（692—750？）「次北固山下」

王湾は地方の下級官吏から宮中の校訂に従事し、のち洛陽の尉となった。北固山は今の江蘇省鎮江市にあり、三面が長江に臨む景勝地である。この詩には、「江南の地方を旅していた作者が、この山のふもとに船をとめて一泊したとき、故郷の洛陽を思って作った詩」という注がある。詩の大半は美しい江南の景色を描いた。最後の「郷あての書を帰雁に託したが、今は洛陽のほとりにたどり着いたかどうか」は画竜点睛の句になる。作者の船の旅では、目の前に画のような景色があるが、心はやはり故郷のことは気が掛かる。家族への手紙はいまどこまで届いたか。帰りの雁は既に洛陽の辺りに行っただろう。昔から手紙を運ぶ鳥として望郷の念を抱かせる雁を想像する事により、より一層郷愁を感じさせる。

前例に出したように、秋の季節の訪れを知らせる秋風と洛陽の組み合わせは望郷を意味することは、文化作品の一種の踏襲になっている。以下はもう一首の優れた作品を挙げる。

客心争日月（客心 日月と争う）

来往预期程（来往 預(あらかじめ)め 程(予定)を期す）

秋風不相待（秋風 相待たず）

先至洛陽城（先ず至る 洛陽城）

—張説（667-730）「蜀道後期」

役人が公務で蜀に行く作品である。蜀から洛陽の都への日程がずれて予定した期日に遅れてしまった。旅人の作者は一心に時間を追い、旅先で段取りをして、旅立ちも帰途に着くのもあらかじめ日程を決めている。季節の推移に負けないように進もうとしてきたが。しかし、「秋の季節を知らせる風は私を待っていてくれないで、私よりも一歩先に洛陽の街に着いていたようだ」という、まるで秋風に文句を言う口調での作品である。直接懐郷の文字がないものの、一刻も早く洛陽に帰りたい気持ちが鮮明に表れている。

3. 洛陽に対する郷愁の歴史根源

洛陽という空間が文化的な磁力があるかのように、洛陽出身の詩人の作品は勿論、洛陽に常住している人、或いは短期滞在しただけの人、まだ来たことのない人までも、洛陽を憧れ・思う詩作を大量に作っていた。

楊柳陰陰細雨晴，殘花落盡見流鶯。

春風一夜吹香夢，夢逐春風到洛城。

—武元衡（758-815）「春興」

才兼文武播雄名

遺愛芳塵滿洛城。

—劉禹錫（772-842）「酬令狐相公見寄」

馬上逢寒食，愁中屬暮春。

可憐江浦望，不見洛陽人。

—宋之問（656—712）「途中寒食題黃梅臨江驛寄崔融」

何年赦書來，重飲洛陽酒。

—沈佺期（656～約714）「初達驩州」

回首思洛陽，喟然悲貞艱。

舊林日夜遠，孤雲何時還。

—盧僎「初出京邑有懷舊林」

悠悠洛陽去（悠悠として洛陽に去らば）

此會在何年（此の会 何れの年にか在らん）

—陳子昂（661～702），「春夜別友人」

誰知春色朝朝好

二月飛花滿江草。

壹見湖邊楊柳風

遙憶青青洛陽道

—孫逖（696-761）「山陰縣西樓」

塞迴山河淨，天長雲樹微。

方同菊花節，相待洛陽扉。

—王維（701-761）「送崔興宗」

天涯望不盡，日暮愁獨去。
遙與洛陽人，相逢夢中路。

—劉長卿（約 726-約 786）「夕次檐石湖」

醉來忘卻巴陵道
夢中疑是洛陽城

—儲光義（約 706-763）「新豐主人」

柳絮飛時別洛陽，梅花發後在三湘。
世情已逐浮雲散，離恨空隨江水長

—賈至（？-772）「巴陵夜別王八員外」

紙幅の関係で、以上の詩文は羅列のみとなり、詳しく説明できていない。詩を書くとき詩人たちはそれぞれの事情や心情は異なるが、洛陽に対する情は作品に溢れている。洛陽への遥かな憧れ、中央から遠く離れる寂しさ、無念さ、また洛陽を偲ぶ懐かしさなど、様々な感情があるが、どの詩人も切々と歌っており、どの詩も心に染み入るものである。以上のものはまだほんの一部に過ぎないが、これらの洛陽を思う詩作は洛陽の郷愁のイメージを築いてきたものであった。

前に例として挙げた李白の名作「春夜洛城聞笛」について、松浦氏はわざわざ「春夜—洛陽城—玉笛—春風と続く華やかなイメージが、折楊柳—離別—郷愁と続く哀切なイメージと溶け合って、それぞれに陰影を深め、奥行きを増している。この場合、「洛陽」という地名が「長安」でも「金陵」でも「成都」でも表しえない独特のニュアンスをもって、一首全体に作用していることに注意したい」¹⁶²と指摘している。しかし、ここに挙げた地名は、どの都市も歴史的に名高い名城であり、政治の地位、繁栄の程度、自然風景の美しさなど、洛陽に負けない程と言える。首都の長安を含め、これらの都市が持っていない洛陽の独特のニュアンスとはいったい何であろう。

私はそれが洛陽の特別な歴史的背景に関係すると考える。異民族の侵略によって、晋政権は洛陽を捨て、長江を渡り、新たに東晋王朝を創立した。「衣冠南渡」

¹⁶²松浦友久『唐詩の旅—黄河編』（社会思想社、1980年3月）、P117。

と言われるように、多くの文化人が中原から江南へ移り、新都金陵にあつまった。豊かな江南で安住できるようになったものの、故国を失い、そして民族のプライドの喪失による強烈な痛みは絶えず士人たちの心を襲っていた。胡族に占領された昔の都洛陽は、政治目的として奪還しないといけない対象のみならず、共に故国が失った思いに胸を痛めた南朝文化人の集団的な共同の心象風景でもあった。

『世説新語』にこのような南渡の士人により洛陽を中心とする中原へ偲ぶ記録がたくさん残された。一例だけを挙げよう。西晋の滅亡によって江南に亡命してきた人々は、天気の良い日にめぐり合うと、東晋の都の南郊新亭の地に誘い合って酒宴を開いた。周顥が宴座の半ばで嘆息していった。「風景は（洛陽と）変わりが無いのに、どことなく山河は異なるものじゃ」という一言に、一同顔を合わせて涙を流したという¹⁶³。このような南渡の士人により洛陽を中心とする中原へ偲ぶ記録がたくさん残された。民族の屈辱感、亡国の恨みは洛陽への郷愁に重なり、実際中原から移住した人に限らず、南朝各時代に渡って士人全体に普遍的に存在していた。

晋の東遷から隋の統一に至るまで、文化の華開いた南朝に輩出した詩人のほとんどは恐らく洛陽を見ることもないままその生涯を終えた。それにもかかわらず、洛陽を詠じる詩作がたくさん残された。例えば、橘氏の調査によると、六朝期『楽府詩集』の「洛陽道」という題目だけでも十八首の作があり、「洛陽道」に書かれたイメージは「春のうららかな日射しの中、大通り美男美女が出逢う大都会¹⁶⁴」としている。勿論、これは実風景より、美化された洛陽に過ぎない。記憶や過去の詩作に描かれた洛陽の風景にも基づいて想像したものであり、追憶対象の負の部分は除外され、都合よくイメージが再構成された。

表 4：中国各地で「洛陽」という言葉が入っている地名¹⁶⁵

番号	所在地	名前	番号	所在地	名前
----	-----	----	----	-----	----

¹⁶³ 森三樹座三郎、宇都宮清吉『中国古典文学大系第 9 巻 世説新語 顔氏家訓』（平凡社、1969 年 4 月）、P 34。

¹⁶⁴ 橘英範「六朝詩に詠じられた洛陽」『洛陽の歴史と文学』（佐川英治編集、岡山大学文学部プロジェクト研究報告書 10、2008 年 3 月）、P 31-62 を参照。

¹⁶⁵ 中国城市地図集編輯委員会編『中国城市地図集』（中国地図出版社、1994 年 6 月）に基づいて、筆者の統計であり、まだ完全とは言えない。

1	浙江省 舟山市	洛陽營	1 1	福建省 泉州市	洛陽村、洛陽鎮、 洛陽區
2	浙江省 漳州市	洛陽樓	1 2	山西省 太原市	洛陽村
3	江蘇省 常州市	洛陽鎮	1 3	陝西省 延安市	洛陽鎮
4	江蘇省 鎮江市	洛陽觀	1 4	重慶市	洛陽溪、洛陽郷
5	雲南省	洛陽村	1 5	浙江省 杭州市	洛陽路、洛陽村、 洛陽橋
6	廣東省 肇慶市	洛陽村	1 6	廣西省 南寧市	洛陽村
7	廣西省 桂林市	洛陽江	1 7	湖北省 隨州市	洛陽鎮
8	廣西省 環江県	洛陽鎮、洛陽村	1 8	湖北省 襄樊市	大洛陽溝、小洛陽 溝
9	四川省 樂山市	洛陽村	1 9	湖北省 懷化市	洛陽村

表4は筆者が把握している一部の資料をまとめたものである。まだ完全ではないが、これによると、「洛陽」が入っている地名は全国に分布していることが分かる。これも一つの注目すべき独特な文化現象だと考えられる。これらの地方の「洛陽」と名付けた理由をまだきちんと一つずつ確認していないが、南方地方集中する理由は、洛陽は昔の国或いは王朝の象徴として、長い間に南朝士人の望郷の対象であったことが推測できる。永嘉の乱から逃げるため、大量の中原士族は洛陽を脱出して南方へ遷移した。この人たちは現在住居地に洛陽を命名して、懐郷の念を託したことが多いとされる。その結果、今でも中国各地に洛陽という名前が残っている。沢山の「洛陽」のつく地名は、まさに洛陽の文化的アイデンティティを語る証拠になっている。

洛陽に対する郷愁の根源は、洛陽の独特な歴史風土にある。以上を纏めると、洛陽という地名の独特なニュアンスとは、何世代にも渡る強烈な望郷に加え、王朝隆盛の面影、民族のルーツ、亡国の恨みなど複雑な感情も混在している。集団的な記憶として幾つかの世代に伝承されることにより、洛陽の独特な文化的アイデンティティを形成し、洛陽への郷愁は文化的な求心力を与えてきた。その結果、漢字圏の人にとって、「洛陽」という言葉自体は、言語と同時に伝達される親しみがある。明確に伝えきれないこのニュアンスこそ、文化的アイデンティティそのものではないだろうか。

それ以外に、洛陽の風景や典故を描写する詩作も多いが、他の場所と比べ、量が多いだけで特徴とはならないので本稿は触れないことにした。唐詩で築いた洛陽のイメージを纏めると、詩人の眼に映っている洛陽は、王権を象徴する都で、繁華な名利を求める場所でありながら、人に郷愁を起こさせる所でもある。このようなイメージは更に洛陽の文化的アイデンティティを形成している。そして、洛陽の文化的アイデンティティは安史の乱以降、より鮮明に表れてきた。

第三節 安史の乱—洛陽の文化的アイデンティティの際立ち

長安は洛陽と同じく「周」・「漢」の故都として漢文化の中心であり、唐の首都として、東京洛陽以上に政治・経済・文化の中心地である。唐の両京はよく似たアイデンティティを持っているが、長安は現実的に王権のイメージが強い。一方、漢末の天下三分の局面もあったが、一応魏・晋は正統と認め、長い間ずっと漢文化が主導的地位を占めていた。洛陽の失陥を機に、五胡乱華の異民族政権は初めてこの正統的地位を打ち破ったのである。異民族政権（特に北魏など）はしばしば洛陽の地の声望に助けられ、自分の漢化や正統性を強調する。民族抗争の激しい時代にずっと最前線に立つ洛陽、しかも中原地域に位置することもあり、異民族を区別する「漢」のイメージは長安より強い。この「漢」を強調する民族的なものは、安祿山による大燕政権の宣告の刺激によって、一

層鮮明且つ重要なものとなり、洛陽の文化的なアイデンティティの独自性とも言える。

一、安史の乱時期の洛陽

755年に起きた安史の乱は、唐王朝の国威を大きく傷つけ、政治も社会をも大きく変化させ、唐の変質を齎したと言われる。安史の乱が起きてわずか1ヶ月で、副都の洛陽を陥落させた。安禄山は洛陽で帝位に即き、大燕聖武皇帝と称し、さらに唐の首都の長安へと侵攻を開始し唐の国軍を破る。これは全国を震撼させた。唐王朝は壊滅の危機に直面し、民衆も亡国の恐れに直面した。762年、ようやく長安・洛陽共に回復することができた。しかし、これを契機に、安史の乱の影響を受け、洛陽の文化的なアイデンティティが際立ち、文化人の洛陽に対する気持ちも大きく転換した。詩人たちの心の軌跡は作品に反映している。

10年近く続いた反乱により、唐の繁栄を一挙にくつがえし、洛陽にも大きなダメージを与えた。その時の洛陽の様子も唐詩によって、描写されている。

洛陽昔陷沒，胡馬犯潼關。

天子初愁思，都人慘別顏。

—杜甫「洛陽」

俯視洛陽川、茫茫走胡兵

流血塗野草，豺狼盡冠纓

—李白「古風」第十九首

洛陽宮中花柳春，洛陽道上无行人。皮裘毡帳不相識，万户千門閉春色
春色深，春色深，君王一去何時尋。春雨洒，春雨洒，周南一望堪泪下。
蓬萊殿中寢胡人，鵝鵲樓前放胡馬。聞君欲行西入秦，君行不用過天津。
天津橋上多胡塵，洛陽道上愁殺人。

—馮著「洛陽道」

洛水水辺、天津橋は李白の好きなスポット、いまは胡族兵士の暴行で、河が血と白骨でいっぱいになった。「洛陽陌」に描いた昔の繁華ぶりは突然目の前の惨状となり、今昔の感に耐えられないだろう。

二、「漢」と「胡」の対立意識

以上の文章の裏付けのように、安史の乱を描写した多くの詩句には、「胡」という字の出現する頻度が目立つ。当時の人々は安史の西域人の身分を相当意識していることが伺える。つまり、反乱軍と唐王朝は「胡」と「漢」とを対立的に捉えている。実は、安史の乱以前、魏晋南北朝の時代には、異民族や宗教的要素は、漢民族本来の文化と交わり、唐王朝の文化を築いた。「胡楽」、「胡姫」など「胡風」が流行し、詩人もその現象を時に詩に書き込んでいる。例えば李白の「少年行」その二に「落花踏盡遊何處，笑入胡姫酒肆中」の句がある。都会の少年たちは気軽に胡姫（異民族の女性）の居酒屋に入り、異民族に対する抵抗感・反感は特に見られない。これは唐王朝の国力及び文化に対する自信と、異民族と異文化に対する寛容な態度の表れであろう。

しかし、安史の乱は社会を破壊し、庶民に深い災難を与えた。特に洛陽は、安禄山、唐王朝、史思明の間の争奪の対象になり、終始戦乱の中心であった。結局唐王朝は回纥、吐蕃など胡人の力を借りて、乱を鎮めたが、『新唐書』巻195の記載によると、この胡人たちも「東京洛陽を回復した時、ウイグルの胡族はすぐ官庁や倉庫に入り、財物を奪い、民間の略奪も三日間でやっとおさまった（及收東京，回纥遂入府庫收財帛，于市井村坊剽掠三日而止）」という。

このひどい経験をした漢族は、異民族である「胡人」に対する不信感と怨恨を抱き、以前「胡族文化」への寛容さを反省しはじめた。安史の乱以降、詩人たちの「胡」に対する態度は一転した。『新唐書』巻24に「開元の時、女性は胡族の服を着る。その後安禄山が反乱を起こし、当時人はそれが異民族の服を着たせいだと思う（開元中……士女衣胡服、其後安禄山反、當時以爲服妖之應）」と記している。中唐・晩唐、人々は胡風を好まなくなり、批判する対象となった。以下は元稹と白居易の「胡旋女」抜粋である。

天寶欲末胡欲亂
胡人獻女能胡旋
旋得明王不覺迷
妖胡奄到長生殿

—元稹「胡旋女」

祿山胡旋迷君眼
兵過黃河疑未反
貴妃胡旋惑君心
死棄馬嵬念更深

—白居易「胡旋女」

全文ではないが、安史の乱の原因は胡風の流行に帰する主旨が見える。魏晋南北朝融合の流れは初唐・盛唐まで続いたが、安史の乱を転換点として、中唐以降は再び異民族を排除し、漢文化を重んずる傾向が現れた。まさに吉川幸次郎のいう通り、「熱情を失いがちな詩と「古文」の文学が、熱情を回復するのは周辺の民族の武力」¹⁶⁶である。

陳寅恪も唐の古文運動について、こう指摘している。

唐代古文運動壹事，實出安史之亂及藩鎮割據之局面引起。安史爲西胡雜種，藩鎮又是胡族或胡化之漢人，故當時特出之文士自覺或不自覺，其意識中無不具有遠則周之四夷交侵，近則晉之五胡亂華之印象，“尊王攘夷”所以爲古文運動中心之思想也。¹⁶⁷

陳寅恪の指摘のとおり、安史の乱以降の唐代の士人は潜在意識の中に、夷族の文化を排斥し、華夏正統文化を復興するという考えがある。この背景で洛陽を見ると、また格別な意味を持つ。洛陽は安史の乱において、始終「胡」と「漢」が衝突する最先端であった。漢文化の継承者としての詩人たちが、以前に余り意識していなかった民族的・文化的なアイデンティティは、この国・民族の災

¹⁶⁶吉川幸次郎『中国文学入門』（講談社、1976年6月）、P96。

¹⁶⁷陳寅恪「論韓愈」（『歴史研究』1954年第二期）、電子版
<http://www.douban.com/group/topic/28699416/>。

禍の際に強烈に感じられた。そのために、詩文の中に大量の「胡」が現れ、それは「漢」を意識しているからである。

三、洛陽の文化的アイデンティティに「漢」の要素の強化

洛陽と長安は周から漢の両都で、唐王朝の両京としての正統な漢文化のシンボルであり、当時の士人にとって国そのものを象徴している。たとえ李唐王朝が別の場所に遷都し、皆安全な場所に安住しても、やはり洛陽と長安が気になる。なぜならば、この場所は中華文化のアイデンティティの所在地であり、当時の中国人にとってルーツ的な存在であった。洛陽と長安の陥落は国が破れたと同然である。この時期の作品を見ると、実際の出身や家とは関係なく、洛陽と長安を「家」、「故郷」として捉える詩作が多い。本稿は洛陽に焦点をあて、この安史の乱を転換点に、唐代の詩人達の洛陽に対する感情の軌跡を探究してみる。

いままで洛陽を故郷として意識していなかった人も、両京の喪失によって初めて洛陽を故郷として認め、数多くの詩作が残された。それらの詩人の中に、洛陽と関わり深い杜甫と李白を取り上げ、その作品から詩人の意識の変化を追跡する。

1. 杜甫（712～770）：洛陽を「家」として認識するプロセス

洛陽東郊、鞏縣の筆架山という筆置きの形の山の下に、詩聖の誕生した家がある。父は地方官であり、少年時代は苦勞して学んだ。二十歳ごろから約十年、江蘇、浙江、山東、河北地方を旅行した。三十歳のとき洛陽に帰り結婚。三十三歳のとき、洛陽で李白と会い、終生厚い友情で結ばれることになる。杜甫は洛陽周辺の生まれで、若い時に洛陽の叔母の家で暮らしていたので、洛陽が故郷と言っても良い。しかし、青年時代の杜甫の詩作に洛陽の景色や生活・交友を描写した作品は少なくないが、洛陽を「故郷」として捉えてはいない¹⁶⁸。前文に出した「二年 東都に客たり、歴る所 机巧を厭ふ」の句からわかるよ

¹⁶⁸中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院、平成24年10月）、P135。

うに、若い杜甫は洛陽について否定的な捉え方をしていた。しかし故郷を喪失して初めて、杜甫は洛陽を故郷と認め、洛陽への強い思いを中・晩年の詩文に多く表現していた。

まず安史の乱の直後、杜甫の洛陽から華州に戻った後に作られた「遣興三首」がある。第一首には兄弟の安否が気遣われ、第二首には陸渾山の旧宅に対する望郷の念が詠まれ、第三首には、洛陽とその周辺で友人と交流を持ったことが述べられている。特に

昔在洛陽時，親友相追攀。送客東郊道，遨遊宿南山。

の句から、詩人の洛陽での生活の一端を覗くことができる。その時、親戚や友達と頻繁に誘い合って、洛陽周辺も遊び尽し、賑やかな付き合いをいただろう。鈴木虎雄は「さびしい感興をはらいのけるために作った詩である。洛陽の兄弟、故宅、旧交などおもふことのべたり」¹⁶⁹という。この作品から、詩人は既に洛陽での生活を愉快的な思い出として、今はその時代を懐かしく思っている。注目すべき点は、青年時代の洛陽での生活の否定的な気持ちは、安史の乱以降の作品には二度と出てこないということである。杜甫の洛陽を「故郷」とする認識は安史の乱から始まり、時間の経過とともに深まっている。

杜甫は華州参軍の在任中に一度帰省したが、その時洛陽は一年前に反乱軍の手から回復されてはいたものの、乱後の故郷は見る影もなくさびれていた。故居の陸渾荘に帰り着いて得た感慨は、「得舎弟消息」の「亂後誰歸得，他郷勝故郷」という厳しいものであった。それに何よりも洛陽周辺の混乱した危険な情勢はずっと続いていたので、帰られないのは現実であった。仕方なく 759 年 48 歳の杜甫は官を辞して、家族全員で定住地を捜し求める旅に出た。

それ以降はもう二度と故郷の洛陽の地を踏むことはなかった杜甫は、生涯に渡る苦難のうちにも、洛陽を思い続けた。彼の多くの作品には、強烈な郷愁が満ちている。「絶句」はよく挙げられる作品の一つである。

¹⁶⁹鈴木虎雄『杜少陵詩集 第一巻』（続国訳漢文大成、1928年）、P 599。

遅日江山麗（遅日 江山麗し）
春風花草香（春風 花草香ばし）
泥融飛燕子（泥融けて 燕子飛び）
沙暖睡鴛鴦（沙 暖かにして鴛鴦睡る）

江碧鳥逾白（江碧にして鳥いよいよ白く）
山青花欲然（山青くして花燃えんと欲す）
今春看又過（今春みすみすまた過ぐ）
何日是帰年（何れの日にか是帰年ならん）

これは「春望」と並ぶ杜甫の代表作である。春のうららかな日は水も山も美しく、春風が吹き、草花のよい香りが漂う。水が泥に溶けて燕が飛び、砂は暖かく、オシドリが眠っている。河は深緑に輝き鳥の白さがいっそう引き立ち、山の青さに映えて花は燃えるように真っ赤。碧、白、青、赤と、強烈な色彩のコントラストで南方らしい原色系の風景を描き出している。しかし、明るく晴れ晴れした詩のように思えるが、「そんな綺麗な景色だけれども、私の故郷とは違う、ここは異国だ。今年の春も見る間に過ぎてしまった。いつになったら故郷に戻れる時が来るのだろう」との感慨になる。この「何れの日か是れ帰年ならん」の心の叫びこそ、杜甫の作品の永遠のテーマになっている。

当時の杜甫は安史の乱を避けて故郷の洛陽を離れ、成都郊外に草堂を築き、家族とともに安住している。763年、8年間にわたった安史の乱が終結したが、すぐに洛陽に戻るというわけにはいかない。洛陽は安史の乱とそれに続く大小の反乱によって略奪されつくしており、もはや都市としての機能を失っていた。また、蜀から洛陽までの道のりには盗賊や軍閥がひしめき、家族を連れて移動するなど、とてもかなわないことであった。杜甫は異国の地・成都にとどまりながら、帰郷の思いを詩文に託すことしかできない。

故郷の洛陽に戻れなかった杜甫は、洛陽への思いを頻繁に詩に託した。大量の望郷の詩が作られた。幾つかの例を挙げよう。

洛城一別四千里，胡騎長驅五六年。

草木變衰行劍外，兵戈阻絕老江邊。
思家步月清宵立，憶弟看雲白日眠。
聞道河陽近乘勝，司徒急爲破幽燕。

— 「恨別」

冬至至後日初長（冬至．至る後．日初めて長し）
遠在劍南思洛陽（遠く劍南に在りて洛陽を思ふ）
青袍白馬有何意（青袍白馬．何の意か有らん）
金谷銅駝非故郷（金谷銅駝．故郷に非ず）

— 「至後」

今我不樂思洛陽，身欲奮飛病在床。

— 「寄韓諫儀注」

「恨別」は離郷の事情を説明、月の光の中に故郷と家族を心配している詩人を描き、「洛陽の街にひとたび別れてより四千里、えびすの軍馬（安祿山の乱）が始まって以来5、6年」という。「至後」は二十四節気の冬至時期の作品である。冬至になると、まもなくお正月が近いので、杜甫は故郷を懐かしみ、「冬至が至る後、日初めて長し、遠く劍南に在りて洛陽を思ふ」という。この二首はまだ特定の情景や季節に刺激され、故郷を思い出すものである。しかし、「寄韓諫儀注」になると、なんら理由もきっかけもなく、いきなり「今日機嫌が悪いから洛陽を思う。体は洛陽へ飛びたいが病気で動けない」という愚痴のような口調で洛陽への切ない思いを述べている。

言うまでもなく、この時期の杜甫はすっかり心から洛陽を故郷として思い、郷愁はますます強烈になっていることが判明する。望郷の日々に、いざ唐軍が東都洛陽を反乱軍から奪還した知らせが届いた時、詩人の気持ちはどうであろうか。ここでは有名な「聞官軍收河南河北」という七言律詩を取り上げてみる。

聞官軍收河南河北（官軍の河南河北を収むるを聞く）

劍外忽傳收薊北（劍外忽ち傳ふ薊北を収むと）

初聞涕淚滿衣裳（初めて聞いて涕淚衣裳に満つ）

卻看妻子愁何在（卻って妻子を看れば愁ひ何くにか在る）
漫捲詩書喜欲狂（漫に詩書に捲んで喜びて狂はんと欲す）
白日放歌須縱酒（白日放歌して須く酒を縦にすべし）
青春作伴好還鄉（青春伴を作して好し郷に還らん）
即從巴峽穿巫峽（即ち巴峽より巫峽を穿ち）
便下襄陽向洛陽（便ち襄陽に下って洛陽に向かはん）

劍門の外たるここ蜀の地に官軍が河南河北地方を平定したという知らせが届いた、この知らせを聞くや涙で衣が濡れんばかり、妻子を振り返れば日頃の憂いなど吹き飛び、詩書を放りだしては喜びの余り気が狂うばかりである。昼間から歌を歌って祝い酒を飲もう、春のうららかな日に一家そろって故郷に帰ろう、長江を下って巴峽から巫峽に抜け、襄陽へ下ってそこから更に洛陽をめざそう。この詩の最後の句の「洛陽」のところ、詩人は自ら「私が持っている田園（不動産のこと）は東京（洛陽を指す）にある」と注釈している。

広徳元年（763）、杜甫は梓州にあって、安史の乱が平定されたときいた。この詩はその知らせを聞いて、勝利を喜んで歌ったものである。この時52歳の杜甫、あふれ出る喜びを一気呵成に詠い、故郷へと心は向かっている。その前年杜甫は旅先の綿州で徐知道の反乱に遭遇して成都に戻れず梓州に入っていたが、乱平定後いったん成都に戻って、そこから家族を梓州に移していた。洛陽に対する望郷の念がそうさせたのだと推測される。官軍の勝利に接した杜甫は、いまこそ故郷に帰るチャンスだと思ったに違いない。

しかし、残酷なところに、その後も騒乱が続き、故郷を目指した杜甫は結局、洛陽の地を踏むことなく59歳でこの世を去った。詩の解釈は作者の境遇を知って初めて深められる。千年以上経った今も、詩人の「天辺行」を読んで、「天辺老人帰未得，日暮東臨大江哭。……九度附書向洛陽，十年骨肉無消息」、日暮の夕方、一人ぼっちの老人が川に向って泣いている様子を想像し、感無量になる。

2. 李白（701-762）：洛陽を「国」として認識するプロセス

李白の出身については諸説があり、詳細は不明であるが、周知のように、李白は生涯の殆どを旅のうちに過ごした。李白の行動範囲は極めて広いが、洛陽とのゆかりが極めて深い。史書の明確な記載によると、李白は少なくとも三回も洛陽に来て、暮らしたことがある。洛陽一帯で活動し、しばらく放浪生活を送り、数多くの名作を作った。天宝三載（744年）、44歳の李白と33歳の杜甫が初めて洛陽で会った¹⁷⁰。そこは聞一多が「中国四千年の文学史上、これほど重大で、これほど神聖で、これほど記念すべき邂逅はない¹⁷¹」と、感慨深く綴った一刻である。

李白の作品の中の洛陽は安史の乱を境に、鮮明に分かれている。李白が洛陽に往来した時期は、唐の全盛期であり、丁度洛陽の繁栄の絶頂期にもなる。李白も杜甫のように、洛陽の権力・名利の象徴たる奢侈な都市生活に対する嫌悪感をもっているが、名門の出で生真面目な杜甫と異なり、時に天真爛漫で感性豊かな李白は洛陽の生活を楽しんでいるように見える。

洛陽は李白の生涯の中で、重要な地位を占めている。その理由の一つは、洛陽は李白交友の場である。杜甫も含め、高適、元演、崔成甫、岑参など李白とお互いに真心をもって深く交わった友人の多くは、この洛陽及び郊外の嵩山で出会ったのである。前に挙げた作品を通して分かるように、李白は洛陽で親友たちと豪快にお酒を飲み、富貴王権をからかう放浪する時代を過ごした。友情を重んずる詩人は洛陽を背景に、友人との付き合いに関するたくさんの作品を書いた。例えば

仆在雁門關。君為峨嵋客。
心懸萬里外。影滯兩鄉隔。
長劍復歸來。相逢洛陽陌。
陌上何喧喧。都令心意煩。
迷津覺路失。托勢隨風翻。

—李白「聞丹丘子于城北營石門幽居中有高鳳遺跡」

¹⁷⁰本稿の李白に関する年代は笈久美子「李白略年譜」『李白』（角川書店、1988年8月）P 367-379を参照。

¹⁷¹聞一多『聞一多全集選刊之三 唐詩雜論』（北京：古籍出版社、1956年6月）、P 47。

がある。元丹邱は嵩山及び洛陽に於いて修業する高潔な人で、「元丹邱の歌」、「元丹邱の山居に題す」、「嵩山の逸人元丹邱の山居に題并序」など李白の詩作に度々出現する人物である。田中克己の考証によると、この人は李白の第一の親友、尊敬する先輩という¹⁷²。詩の後半は洛陽の人情に薄く、名利を追求する都市の雰囲気を批判して描いているが、全体としては、友人と離れてお互いに気かけ、やっと洛陽で会える喜びを詠じるものである。

先にも引用した「憶舊遊寄譙郡元參軍」は李白の生涯、思想を知るための重要な作品と考える。そのつづきは、

海内賢豪青雲客，就中與君心莫逆。
回山轉海不作難，傾情倒意無所惜。
我向淮南攀桂枝，君留洛北愁夢思。
不忍別，還相隨。

李白と友人元演と洛陽での逍遥自在な日々を追憶し、厚い友情を詠っている。やはりこの時期の李白は洛陽での生活を懐かしく捉えている。

洛陽の都市生活について、長く地元洛陽で暮らし、道義を重んじる杜甫は、青年時代に利益のためにお互いを騙しあう都市生活に飽き、洛陽を故郷とは認識しなかった。羈旅の生涯を送った李白は豪放磊落な性格なので、自分なりに楽しんでいた。仮住まい先の洛陽で、友達と意気投合し、一緒に思う存分にお酒を飲み、豪快に楽しむことができ、むしろ愉快的な思い出が多かった。前に述べた唐の詩人は洛陽を王権の象徴と見做す詩作が多いのに対して、李白は磊落超俗的な性格の持ち主なので、安史の乱まではそれをあまり意識していないようで、作品に洛陽の帝都王権のようなイメージはほとんどなかった。道教に興味を持っている李白は、洛陽で意気投合した友人とお酒を飲んだり、道を論じたり、詩を作ったりした。彼にとっては、「王権」や「帝都」の政治的なイメージは長安に集中しており、洛陽は友情の溢れる繁華な大都市に過ぎなかった。

しかし、安史の乱は洛陽のこの安楽な都市像を粉々に砕いた。五十六歳の李白は洛陽陥落の事を聞いて大いに驚愕した。755年から洛陽は武力攻防の目標とし

¹⁷²田中克己『李太白』（評論社、1944年4月）、電子版
<http://libwww.gijodai.ac.jp/cogito/tanaka/sanbun/rihaku07.html>

て、幾つかの大きな激戦を経て、李白が亡くなる直前まで、史思明の子によって占領されていた。安史の乱以来、李白の洛陽に対する気持ちは、一気に強くなり、洛陽はむしろ李白の中の「国」そのものになった。洛陽の回復を待ち続け、詩人は転々して生涯を終えたが、洛陽を常に心にかけていた。

李白はこの短い時期に、戦乱中の洛陽を詳しく描写する作品を集中的に数多く残している。賊軍の横暴略奪の様子、乱離中の庶民の悲惨な生活を鮮明に記録しているのも、単なる空想とは考えにくい。例えば

雙鵝飛洛陽（双鵝 洛陽に飛び）
五馬渡江徼（五馬 江徼を渡る）
何意上東門（なんぞ意(おも)はん上東門）
胡雛更長嘯（胡雛さらに長嘯せん）
中原走豺虎（中原 豺虎を走らせ）
烈火焚宗廟（烈火 宗廟を焚く）
……

—「経乱後將避留剡中地贈崔宣城」

この詩には幾つの典故を使っているのも、やや分かりにくい所がある。晋の孝懷帝の時、二羽の鵝があらわれ国が乱れる前兆となり、また、晋の太安中の童謡に五馬游渡江云々、その後五王江南に逃れた。最初の二句は、何れも国にとって不吉な前兆を並べ、次の二句は五胡十六国時代の異民族の君主石勒が少年時代洛陽の門での典故を述べ、それから中原地域が異民族に蹂躪される亡国の惨状を描いていた。

また、李白は草書の名人張旭と遇って、酒を飲んで大いに喜び、別れに際して作った「猛虎行」も安史の乱の最中の作品である。

朝作猛虎行。 暮作猛虎吟。
腸斷非關隴頭水。 淚下不為雍門琴。
旌旗繽紛兩河道。 戰鼓驚山欲傾倒。
秦人半作燕地囚。 胡馬翻銜洛陽草。
一輪一失關下兵。 朝降夕叛幽薊城。

巨鰲未斬海水動。魚龍奔走安得寧。

亡国の感慨を歌い、昔の国の中心地が胡人に乱暴されることを憤慨する気持ち、国の将来に対する不安な気持ちなどが表れている。

これらの作品には、それまでの李白のロマン溢れる雄大飄然とした詩風と違い、飾り気のない手堅い作風が多く見うけられる。それまでの詩風とあまりにも異なるので、詩の注釈者の元代の蕭士贇は度々この時期の李白の詩は偽作ではないかと疑っている。蕭士贇の疑いは、清代の王琦の考察によって、李白作の本物に間違いないと断定された。この論議は本稿の目的ではないので、意見を述べないが、兎に角李白が安史の乱に大きく驚かされ、心が揺れたことは事実には相違いない。

もう一つの作品も研究者の間に議論を齎した。

西上蓮花山	西のかた蓮花山に上れば
迢迢見明星	迢迢として明星を見る。
素手把芙蓉	素手 芙蓉を把り
虛步躡太清	虚歩して 太清を躡む。
霓裳曳廣帶	霓裳 広帯を曳き
飄拂升天行	飄払 天に昇り行く。
邀我登雲台	我を邀えて雲台に登り
高揖衛叔卿	高く揖す 衛叔卿。
恍恍與之去	恍恍として之と与に去り
駕鴻凌紫冥	鴻に駕して紫冥を凌ぐ
俯視洛陽川	俯して洛陽川を視れば
茫茫走胡兵	茫茫として胡兵走る。
流血塗野草	流血 野草に塗まみれ
豺狼盡冠纓	豺狼盡々冠纓。

—「古風五十九首 其十九」

前後があまりにも対照的で、書き方が非常に特殊な詩である。西嶽の蓮花山にのぼってゆくと、はるかに明星の仙女や西王母が見え、仙人とともに空の上へ飛

んでいることなど、長きに渡って、縹渺たる仙境を營造した。しかし、詩人が仙境に遊んでいる最中に、最後の四句は、逍遙自得な雰囲気から一転、突然悲惨な現実にピントを合わせ、画面が一時停止した。「洛陽のあたりや黄河のあたり、地上を見下ろすと、見渡す限り胡兵が走りまわっている。流された血は野の草にまみれている。山犬や狼の輩がみな冠をかむって、役人となった」というまるで人間地獄のように、人に強い印象を与え、憤りも自然に湧き出ている。

これは間違いなく李白の作品であるが、議論の焦点は当時李白の所在にある。元の蕭士贇は『分類補注李太白詩』に「この詩はまるで事実を述べる作のように、まさか安禄山は洛陽に入った時、李白はちょうど雲台山(洛陽周辺の高山)で見えていたのではないか」と注した。笈久美子は通説を取り、李白は南へ避難の途中としているが、郭沫若は『李白與杜甫』に「奔亡道中五首」から考証し、李白は当時洛陽周辺に居て、自ら安史の乱を経験したという結論を得て、郁賢皓もこの論に賛同する¹⁷³。

その詳細を検証することは本稿の目的ではないので、以上の議論は置いて、とにかく安史の乱を李白の詩風、思想、人生に至るまでの重要な転換点と理解し、安史の乱が如何に李白に影響したことが分かる。安史の乱の十年ほど前、李白はしばらく長安の玄宗のもとで、文書を起草したりする翰林供奉を勤めていたが、その自由飄然とした性格が宮廷と合わず、長安を去らざるをえなくなった。長安の政界の現状を目にして絶望を感じる李白は、各地歴遊の旅にでていた。山水を楽しみ、神仙道教を求めようとの心境を多くの作品に示している。

もともと李白の中に、国のために力を尽くす出仕の気持ちと、俗を越えて神仙を憧れる気持ちがある。長安での官途の挫折で、天子を補佐して理想の政治を実現するという道を打ち砕かれ、彼は政治を諦め、情を山水に託した。そのままであれば、隠遁して修行する可能性もあるであろう。安史の乱は李白に大きな刺激を与え、李白の愛国心を引き出した。乱世のなかに、李白はかえって積極的に政治にも関与し、俗世界に身を投じる道を選んだ。

¹⁷³郁賢皓『天上謫仙人の秘密—李白公論集』(台北：台湾商務印書館、1997年6月)、P 65。

函谷如玉關，幾時可生還
洛陽爲易水，嵩嶽是燕山。

—「奔亡道中五首 その四」

洛陽三月飛胡沙，洛陽城中人怨嗟。
天津流水波赤血，白骨相撐如亂麻

—李白「扶風豪士歌」

攬槍掃河洛	攬槍 河洛を掃ひ
直割鴻溝半	ただちに割鴻溝の半
過江誓流水	江を過り 流水に誓ひ
志在清中原	志は中原を清むるにあり

—「南奔書懷」

李白が亡くなるまでの生涯と詩作から見ると、彼にとって、洛陽の陥落の衝撃は特に大きく、思想轉換のきっかけとなっている。安禄山が反乱を起こし、驚異的な勢いで、太原、巨鹿など唐の重要都市を次々に占領し、わずか一か月で洛陽を攻め落とした。唐の両京の一つとしての洛陽、それだけでも大きい、それ以上に大事なものは、いままで君側の奸を除くということの名目とした安禄山は、洛陽に入るやいなや、帝位に即き、国を大燕と号し、年号を聖武と定めた。これが一番李白が許せないことだったであろう。彼が今まであまり意識していない洛陽の周、漢故都の地位、直前の五胡乱華の歴史などの要素が、洛陽に対する認識が一転した。以前は気軽な繁華な行楽地のイメージに過ぎなかったが、今は民族的にも文化的にも華夏正統の地であり、更にいうと、国の象徴となった。だから、洛陽の陥落は、自分の国が破れたという意味をもつので、自尊心が強く、国や文化に誇り高い李白にとって、その衝撃と痛みは表現できない程大きかったであろう。それ故に、李白の作品には洛陽が胡人に占領されることが常に意識されていて、洛陽の胡人を駆除し、国を回復しようという志は詩人の一生の悲願になった。

晩年の李白が謀反人の永王の幕府に入ったことは、長い間李白の政治的汚点として責められてきた。本人もこのせいで入獄され、夜郎の地まで流刑された。この時期の李白は、田中克己によると、「ともかく李白は永王の野心には関係なく、この頃に、安禄山討伐のための永王を将とする軍中に招きに応じて加はったのである。彼の仕事は幕僚の一人として、討伐の檄文を書き、軍中の無聊を慰め、将

士の士気を鼓舞するため詩を作るにあった。檄文の方は伝はってゐないが、「永王東巡ノ歌」十一首は後の目的のために作られたものに相違ない¹⁷⁴。これを李白が一時的に犯した政治的過ちとする解釈もあるが、李白の愛国心・任侠心からきたものだとの解釈もある。私は後者に従いたい。李白は豪放洒脱、自由でロマン溢れる感情の裏に、強い自尊心と愛国心を持っていると思う。これは唐代の知識人の特徴と風貌とも言えよう。安史の乱は彼らを国や民族存亡の危機に直面させる。李白は敵の安祿山を破り、功を立て、国恩に報じようとの希望を持ち、永王に随ったと考えられる。この情熱は「永王東巡ノ歌」から容易に察することができる。

二帝巡遊俱未回	二帝巡遊して俱に未だ回らず
五陵松柏使人哀	五陵の松柏人をして哀しましむ
諸侯不救河南地	諸侯は救はず河南の地
更喜賢王遠道來	更に喜ぶ賢王の遠道より來るを

— 「永王東巡の歌」

皇帝も上皇も都を離れて巡遊され、まだ帰ってこられない、五陵の松柏がさびしげに見える、諸侯は誰も河南の地の乱を平定する気がないが、喜ぶべきことに賢王が遠くからやってこられた。特に「諸侯不救河南地」の句は、戦乱中誰もが洛陽を放っておくことに対して、失望、怒り、痛み、そして自分の無力を感じる無念さなどが含まれる。この時点で、李白は永王が洛陽の反乱軍を破り、国を救うことを信じて身を寄せたことが判る。更に言うと、前述したように安史の乱の時期の洛陽は李白にとって、国を象徴する重大な意味を持っている所である。李白は洛陽の回復にこだわり、永王に期待し、自分も自ら作戦に力を尽くすつもりであった。「在水軍宴贈幕府諸侍禦」の「胡沙驚北海，電掃洛陽川」、「願與四座公，靜談金匱篇。齊心戴朝恩，不惜微軀捐。」などの句は、異族が洛陽を占めたことに憤慨し、戦死の覚悟を持って、国のために戦おうと述べている。

しかし、洛陽の次、長安も陥れた安祿山には、もはや四川乃至江南へ兵を派する意志も余力もなく、相変らず洛陽を都とした。長安の府庫、兵甲、文物、図書のみならず、後苑中に飼養されている珍獣、後宮の美人、玄宗・楊貴妃のために

¹⁷⁴田中克己『李太白』（評論社、1944年4月）、電子版
<http://libwww.gijodai.ac.jp/cogito/tanaka/sanbun/rihaku11.html>

清平調を奏した梨園の弟子たちもすべてを手に入れた。諸官の捕えられて降った者はみな洛陽に赴かせて偽官に任じた。「猛虎行」の「秦人半作燕地囚、胡馬翻銜洛陽草」の怒りは、まさにこのことを述べている。李白の洛陽に対する思いはなかなか実現できず、その強い感情は詩に寄せるしかなかった。

この時期、李白は作品に繰り返し洛陽を言及する。例えば戦争に苦しめられる世の中の様子を描いた「北上行」がある。

北上何所苦，北上緣太行。

……

奔鯨夾黃河，鑿齒屯洛陽。

前行無歸日，返顧思舊鄉。

—「北上行」

避難のため北へ行くのは、太行山に沿って行かねばならないので大変苦しい事である。暴れまわる、狂った鯨であるかのように安史軍は黄河を越え、悪獣の牙の安祿山は洛陽に居座って皇帝と称している。人々は、ただ、北へ逃げるしかない。しかし、いつになったら帰れるのかわかりはしない、厳しい北風の中人々は、振りかえって 戦のなかったころの故郷を思うのである。

戦乱から子供を逃がすため、李白は門人の武十七諤に頼み、妻子を安全なところに送ってもらう時に作った「贈武十七諤」の詩作がある。乱世の最中なので、最愛の家族と別れたら、もしかすると二度と会えないかもしれない。こんな悲しい別れの時でさえ、「狄犬吠清洛、天津成塞垣」を書き、洛陽を悲嘆することを忘れない李白であった。

胡馬渡洛水

血流征戰場

千門閉秋景

萬姓危朝霜

—「獄中上崔相渙」

胡驕馬驚沙塵起

胡雛飲馬天津水

—「江夏贈韋南陵冰」

想像晉末時，崩騰胡塵起

衣冠陷鋒鏑，戎虜盈朝市

石勒窺神州，劉聰劫天子

撫劍夜吟嘯，雄心日千里

誓欲斬鯨鯢，澄清洛陽水

—「贈張相鎬二首 時逃難在宿松山作」

上記の一連の詩作とみると、どちらも重圧感を覚える作である。タイトルから分かるように、李白の獄中や逃亡生活の中の作である。李白は困窮した悲慘な晩年生活を送っているが、自分の身より洛陽や国のことを心配したと思われる。反乱の罪で入獄された時も、「胡馬は洛水を渡り、庶民が苦しんでいるよ」と嘆き、流浪生活の中でも、「鯨鯢を殺すことを誓い、洛陽の水を清くさせる」という大志を持っている。既に六十近くの年になったにもかかわらず、李白は洛陽の混乱した局面を一掃する壮志を抱いていた。詩人はいかに洛陽を重んじていたであろうか。

李白は自ら五十九首の詩を「古風」と名付けたのは、小川環樹が指摘したように、世の中にはびこっている安易な沈滞した空気を一掃し、建安年間の逞しい精神を復興させよう、「その責任は彼自身に負わされている、という強烈な使命感がそこにある」¹⁷⁵。時に仙人に憧れる李白は、見た目は自由奔放であるが、実は強い愛国心の持ち主である。吉川が「李白の詩は杜甫と反対に、人間の快樂を歌うのにいそがしい¹⁷⁶」と評価したように、一般的に、李白は明るくて自由奔放なイメージを持っている。しかし、李白の晩年の詩作は、早期の世俗を超越した雄大なロマンチックなイメージとは全然違うふうになった。詩人の心の履歴が如何に変化したかが判る。洛陽は李白の心の履歴の変化を理解するのに重要なキーワ

¹⁷⁵小川環樹「「古風」の宣言」『小川環樹著作集第二巻』（筑摩書房、1977年2月）、P 360。

¹⁷⁶吉川幸次郎『中国文学入門』（講談社、1976年6月）、P 47。

ードと考えられる。

李白はずっと洛陽を気に向け、ようやく流刑地から恩赦される時に「流夜郎半道承恩」の謝恩の詩を作る時も洛陽に言及し、757年に念願の洛陽回復ができた喜びを「旋收洛陽宮」で示した。しかし、残念ながら、この洛陽回復は一時的なものに過ぎず、759年、史思明は大燕皇帝を称し、再び洛陽を陥れた。761年、李光弼は洛陽の北で反乱軍と壮絶な戦いをしたが、大敗した。この時、江南の金陵にいる李白は他人の仕送りで生活を維持している。依然として洛陽に重大な注意を払い、どうしても洛陽を胡人の手から奪い取りたいので、六十一歳の高齢で自ら進んで李光弼の幕府に入ろうとしている。李白の洛陽の地を取戻し、元の唐王朝に復する念願は、驚くべき執念とも言えよう。李光弼の幕府に向う途中で病気のため、やむを得ず戻った。翌年（762年）十月、洛陽がようやく唐に回復されたのは、李白が亡くなる一か月前の事であった。

以上、盛唐と呼ばれる栄光の時代に生まれた二人の詩人、杜甫と李白の安史の乱の前後の詩作から、洛陽に対する気持ちの変化を述べた。洛陽近辺に生まれ育った杜甫は、洛陽の豪華な風俗と名利に明け暮れる都市性格を嫌い、洛陽を故郷と認めず自分を洛陽の「客」に過ぎないと思った。李白も政治の中心地の長安より、洛陽を気軽に友人と楽しく放浪できる華やかな大都市と思っていた。しかし、安史の乱の勃発によって、洛陽のイメージは一転して重くなり、杜甫の「故郷」、李白の「国」を象徴するようになった。この気持ちの転換については、本文に挙げた二人の詩作から確認できる。李、杜の作品を代表として、安史の乱の期間中に洛陽の「家」・「国」として認識しているのは当時の一般的な傾向である。

したがって、洛陽がそれまで持っていた文化的アイデンティティは、安史の乱のような非常事態によって、より一層際立ったと考えられる。アイデンティティというものは自分の中で作られるものではなく、周りとの関係性の中で作られるということである。嘗てほぼずっと漢文化の中心的地位を占める悠久の歴史と、異民族の安祿山がここに別の王国（王朝）を起した現実、交じり合っ文化人の感情を大きく刺激した。知識人の洛陽に対する心象は、平和な時代にはあまり気

にしない「家」や「国」の意識も、「家」と「国」の喪失によって始めて鮮明になる。この気持は、怒りや偲びに転換し、かつてない強烈な力で人（特に文化人）を襲い、その作品に表わされる。

第四節 中・晩唐における洛陽の文化的アイデンティティの新要素

洛陽は安史の乱後も、ウイグル兵の駐屯や諸藩鎮の反乱で、しばしば戦火にまわれ続け、人々は苦しみを被った。孟郊の「乱後 故郷の宅、多くは行路の塵と為る（答盧虔故園見寄）」、白居易の「洛陽 離乱の年、煙塵三川の上（憶洛下故園）」のような詩から、洛陽の甚だ荒廃していた様子が見える。中尾健一郎は唐代の「東都賦¹⁷⁷」の考察を通して、凡そ830年（大和4年）の時点で、洛陽は皇帝を迎えてもてなすことができるほどに復興し、繁栄していることを明らかにした¹⁷⁸。妹尾達彦も「安史の乱後の洛陽が、政治的地位こそ低下したものの、商業経済の勃興をうけて、全国的商業網の結節点の一つとなった」¹⁷⁹と指摘しているので、乱後約七十年の間を経て、洛陽はようやく復興し、また人が住み、愛する町になった。特に文化人は洛陽に集まり、大量の詩作を残した。これらの詩は洛陽の新しいイメージを築き、洛陽の文化的アイデンティティに新しい要素を加えることができた。

一、風雅的なイメージ

安史の乱は唐の歴史の転機であったと同時に、文学にも非常に影響を齎した。厳しい時相を反映して、小川環樹が指摘するように、「盛唐までの詩が春の山野を覆う「百花斉放」の季節だったとすれば、中唐以降の詩は秋の草花のようなもので、人の目を奪う強い色彩はもはやない」¹⁸⁰。「大暦の十才人」と称せられる人たちも出ているが、中で重要なのはやはり韓愈、白居易、元稹、劉禹錫等である。この時期、多くの士人が長安に自邸を構えていながら洛陽に別荘を購入して

¹⁷⁷唐・李庾の「両都賦」は『文苑英華』巻四十四、『唐文粹』巻二などに収録されている。

¹⁷⁸中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院、2012年10月）、P165。

¹⁷⁹妹尾達彦「隋唐洛陽城の官人居住地」（『東洋文化研究所紀要』第百三十三冊、1997年）、P96。

¹⁸⁰小川環樹「唐詩概説」『小川環樹著作集第二巻』（筑摩書房、1977年2月）、P44。

いる。多くの詩人は洛陽に長く住んだ。『唐兩京城坊考』は当時の有名詩人の故居を詳しく記録している。それに基づいて表を作ることができる。

表 5：唐代洛陽に居住した文人名士¹⁸¹

名前	洛陽住居の場所	関連詩文
李紳 (772—846)	宣教坊	「廉察東洛, 初到洛陽, 寓居宣教里」
孟郊 (751～814)	立德坊	「立德坊新居詩」
元稹 (779～831)	履信坊	「微之履信新居多水竹」
劉禹錫 (772—842)	洛濱坊	「洛濱病卧, 戶部李侍郎見惠藥物, 謔以文星之句, 斐然仰酬」
白居易 (772-846)	履道坊	「白氏履道里宅有池水可泛舟」
李商隱 (813- 約 858)	崇讓里	「崇讓里」詩数篇
杜甫 (712～770)	建春門付近、陸渾山	「遊竜門奉先寺」など
李賀 (790～816)	仁和里	「誰作送春曲、洛岸悲銅駝」
韓愈 (768～824)	瀍穀	「我家本瀍穀、有地介皋巩」
王維 (701--761)	洛陽東北郊外	「洛陽女兒對門居、才可容顏十五余」
劉太白	從善坊	「洛陽大底居人少, 從善坊西最寂寥」
牛僧孺 (779-847)	歸仁坊	「題牛相公歸仁里宅新成小灘」
裴度 (765—839)	綠野堂	「裴侍中新修集賢宅成, 池館甚盛, 數往遊宴, 醉歸自戲耳」
李德裕 (787-)	平泉莊	『平泉山居草木記』

¹⁸¹清・徐松撰『唐兩京城坊攷』に基づいて筆者作成。

これらの詩人たちの原籍や生まれたところはそれぞれであるが、何らかの理由で一定の期間に洛陽に居住していた。実は唐代の著名詩人の多くは前後して長安と洛陽両都市に住んでいた。詩人たちは洛陽で暮らし、交遊し、洛陽を背景または対象として大量の作品を作った。寺尾剛は中国文学と土との関係について論ずるとき、『詩経』の時代から、作品を地方別に分類するなど、土に対する意識が強いというのが中国文学の一つの特色、「中国古典詩は唐代に入り、急速に土地との関わりを深めるようになっていた」、「唐代の詩人の作例を見てゆくと、この土地イメージの典型化・パターン化が、意識的にせよ無意識にせよ、詩の製作に際して不断に行われ続けていることに気付く」という¹⁸²。特に白居易、元稹、劉禹錫ら詩人は洛陽での活動、唱和などは、洛陽の詩情的、風雅的なイメージの形成と発展に大きく寄与した。

1. 白居易の洛陽へのトポフィリア

白居易に関する研究はずっと重視されている課題であり、先行研究がかなり進んでいる。近頃、白居易の洛陽に対する愛着を「トポフィリア」としてとらえる研究がある¹⁸³。トポフィリアとは、土地と環境に対する情緒的な結びつきであり、これは中国語の「情結」という言葉に合い、私は適切な言い方だと思い、本稿の中でもそれに従う。

トポフィリアが生じる環境の例として挙げられているのは、故郷や思い出の場所、生計を立てる場所である。近年、この概念は中国学の分野にも応用され、詩人の創作の場に対する感情を読み解く一つのキーワードとなっている¹⁸⁴。白居易の洛陽での晩年生活が多く研究されているが、実は白居易は青年時代既に洛陽で居住・勉強したことがある。

白氏家譜によると、白居易曾祖父の時代から東都に邸宅を持ち、祖父は洛陽県

¹⁸²寺尾剛「李白における安陸・南陽・襄陽の意義—土地謳歌の手法をめぐって」(『愛知淑徳大学現代社会学部論集』第四号、1999)、P 157-160。

¹⁸³例えば中尾健一郎「中国の詩人とトポフィリア—陪都の文化」(梅光学院大学日本文学会『日本文化研究』第四十五号、2010年)、同氏の『古都洛陽と唐宋文人』(汲古書院、平成24年10月)等がある。

¹⁸⁴中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』(汲古書院、平成24年10月)、P 135。

の主簿を担任したことがあり、白居易は新鄭の生まれだが、少年時代は洛陽毓材里の宅で暮らした¹⁸⁵。例えば詩人の「傷遠行賦」に、799年に白居易の家及び病中の母親は洛陽にすることをはっきり述べている。「昔年洛陽社，貧賤相提携。今日長安道，對面隔雲泥（「傷友」）」の詩句は、洛陽の旧友の遭遇を嘆くとともに、自分の読書時代も振りかえった。中年時代の作品も洛陽を故郷として意識するものがある。例えば

白雪樓中一望鄉，
青山族族水茫茫。
朝來渡口逢京使，
說道煙塵近洛陽。

— 「登鄂州白雪樓」

浔陽遷謫地，洛陽離亂年
煙塵三川上，炎瘴九江邊
鄉心坐如此，秋風仍颯然

— 「憶洛下故園 時淮汝寇戎未滅」

以上は白居易左遷時代の詩作であり、洛陽を気にかけて、故郷のように思う気持ちが現れている。詩人と洛陽のゆかりは、少なくとも詩人の二十代から始まった。青年時代の経験、中年の望郷、やがて晩年の洛陽退居に結実した。

人老何所樂
樂在歸鄉國
我歸故園來
九度逢寒食

— 「寒食」

これは白居易は洛陽に定住して九年目、安堵の胸を現す詩作である。人生はいろいろあったが、ようやく故郷に戻り、落ち着いた生活を送ることができ、それ

¹⁸⁵白高来、白永彤『白居易、元稹、劉禹錫唱和詩編年集』（瀋陽：白山出版社、2009年8月）、P10。

は何より嬉しいことだと詩人は感慨を持った。非常に素朴な言葉で、ずっと洛陽を故郷として扱う詩人の気持ちがはっきり表れている。

『新唐詩選続篇』（吉川幸次郎・桑原武夫著、岩波新書）で、吉川幸次郎は白居易を「偉大な愛情の詩人」と述べている。科挙をトップクラスの成績でクリアした秀才なのに、目線が庶民とおなじところにある。身分制がはっきりしていた時代にあって、文字も読めない庶民の視点に立つことは、詩人は気性の優しい人に違いない。平易な言葉、確たる主張、自然、動物、友人、白居易が大切にしたのはありふれた日常のことである。白居易の愛情は庶民、家族、友人、赴任した各地の風物などに注がれ、歌われたが、洛陽に対する特別な感情は終始彼の心の奥に秘められていた。洛陽は白居易の少年時代の故郷、晩年の退居の地だけではなく、自ら選んだ死後の埋葬の地でもある。一族先祖代々のお墓に行かず、一人だけ洛陽の香山琵琶峰で永眠することは、死んでもこの場所を離れたくないということであろう。この土地愛は、まさにトポフィリアそのものにほかならない。

2. 詩人たちの優雅な洛陽生活

白居易は 58 歳で大臣の職を辞して長安を去り、晩年は洛陽で役所にはお呼び出しがある時だけ行き、普段は隠居する「半官半隠」の生活をおくっている。有名な「序洛詩」を引用する。

自大和三年春至八年夏、在洛凡五周歲、作詩四百三十二首、除喪朋哭子十數篇外、其他皆寄懷於酒、或取意於琴、閑適有餘、酣樂不暇、苦詞無一字、憂歎無一聲、豈牽事強所能致耶、蓋亦發中而形外耳、斯二樂也、實本之於省分知足、濟之以家給身閑、文之以觴詠絃歌、飾之以山水風月、此而不適、何往而適哉、茲又以重吾樂。

以上の文は洛陽暮らしの心境を述べている。白居易にとって詩・酒・琴は欠かせない楽しみである。琴酒の喜びを通して「閑適」や「酣樂」の思いを味わう。内的には「分を省み足るのを知る」心構えを根本とし、外的に補完するものとして家計の充足と閑暇を挙げ、生活の彩りには飲酒・吟詠（詩）・音楽（琴）・「山水風月」を加えている。

他に、「北窗三友」という詩には、詩・酒・琴を「三友」とまで親しげに呼んでいる。白居易は「琴を弾き、琴に飽きれば酒を飲み、酒を飲んで詩を作る」と言い、これらを愛好していた。詩酒の楽しみによって展開された洛陽での自適の生活は、當然の結果として詩篇の数を増大させた。洛陽の四季折々、周辺の山水風景は詩人の詩興をそそり、白氏後裔の統計によると、白居易一人でも、洛陽で書いた詩作、詞、賦、偈なども含め、全部で 1054 首もある¹⁸⁶。一例のみ挙げよう。

水暖魚多似南國
人稀塵少勝西京
洛中佳境應無限
若欲諳知問老兄。

—和敏中洛下即事

白居易の洛陽を描く詩は多すぎて挙げきれない。この一首を一つの代表として取り上げよう。これは白居易の弟への詩の一部で、家族の間での日常的なおしゃべりといった詩作なので、飾り気のない自然な感情が出ている。周知のように、白居易は江南の美しい風景、長安の繁華を体験したことがある。洛陽を南国と西京（長安）と比べ、南国のような風景がありながら、長安の喧騒がなく、「洛中のいい所、名勝は言い切れないほどあるので、詳しく知りたいならば兄貴の俺に尋ねてね」という句はとても親しみ深い、さり気なく誇りにし自慢している詩人の気持が伺える。

白居易は洛陽で詩を作成するとき、よく序文で詩の時間、場面、由来などを詳細に記録している。例えば「三月三日祓禊洛濱并序」は白居易たちの洛陽生活を知る恰好の例になる。

開成二年三月三日，河南尹李待價以人和歲稔，將禊于洛濱。前壹日，

¹⁸⁶この数字は白高来『白居易洛中詩編年集』（白山出版社、2009年8月）によるものである。那波本『白氏文集』に基づいて数えれば、洛陽履道里に邸宅を構えてから洛陽で作ったと見られる詩は全部で千八十首ある。

啓留守裴令公。令公明日召太子少傅白居易、太子賓客蕭籍李仍叔劉禹錫、前中書舍人鄭居中、國子司業裴恠、河南少尹李道樞、倉部郎中崔晉、伺封員外郎張可續、駕部員外郎盧言、虞部員外郎苗愔、和州刺史裴俦、淄州刺史裴洽、檢校禮部員外郎楊魯士、四門博士談弘謨等壹十五人，合宴于舟中。由門亭，曆魏堤，抵津橋，登臨溯沿，自晨及暮，簪組交映，歌笑間發，前水嬉而後妓樂，左筆硯而右壺觴，望之若仙，觀者如堵。盡風光之賞，極遊泛之娛。美景良辰，賞心樂事，盡得于今日矣。若不記錄，謂洛無人，晉公首賦壹章，鏗然玉振，顧謂四座繼而和之，居易舉酒抽毫，奉十二韻以獻。

三月草萋萋，黃鶯歌又啼。柳橋晴有絮，沙路潤無泥。
禊事修初半，遊人到欲齊。金鈿耀桃李，絲管駭鳧鷖。
轉岸回船尾，臨流簇馬蹄。鬧翻揚子渡，蹋破魏王堤。
妓接謝公宴，詩陪荀令題。舟同李膺泛，醴爲穆生攜。
水引春心蕩，花牽醉眼迷。塵街從鼓動，煙樹任鴉棲。
舞急紅腰軟，歌遲翠黛低。夜歸何用燭，新月鳳樓西。

唐開成二年（837年）三月三日の春うらら、洛水の畔に白居易、劉禹錫など當時有名な文化人十五人が集まり、風雅な詩会を行った。船で宴席を設け、魏堤、天津橋などの名勝を遊覧し、歌舞や音曲などで酒宴の座に興を添える芸妓に囲まれ、歌ったり笑ったり、朝から深夜まで楽しんでた。詩人たちは左には筆とすずり、右にはお酒で、仙人のように見える。この盛況を一目見たい町の人が殺到し、渋滞を起こすほどだった。確かに「盡風光之賞、極遊泛之娛、美景良辰、賞心樂事」その言葉の通りであった。それで皆が詩を競い、白居易も即時に上記の詩を書いた。このように相当な規模の文人たちの風雅な集まりはしばしば洛陽で行われた。

詩を作り、文化人の間で詩を唱和し、お互いに鑑賞する行為は日常生活にも浸透している。白居易の自伝とみられる「醉吟先生伝」は、優雅さに溢れる日常生活の細部まで詳しく描かれている。

自居守洛川泊布衣家，以宴遊召者亦時時往。每良辰美景或雪朝月夕，好事者相遇，必爲之先拂酒暑，次開詩筐，詩酒既酣，乃自援琴，操宮聲，弄《秋思》壹遍。若興發，命家童調法部絲竹，合奏《霓裳羽衣》壹曲。若歡甚，又命小妓歌《楊柳枝》新詞十數章。放情自娛，酪酏而後已。往往乘興，屢及鄰，杖于鄉，騎遊都邑，肩舁適野。舁中置壹琴壹枕，陶、謝詩數卷，舁竿左右，懸雙酒壺，尋水望山，率情便去，抱琴引酌，興盡而返。

—「醉吟先生伝」

いかに風流な人、いかに風雅な生活であろう。白居易は友人と洛陽で飲酒吟詠の喜びに満ちた閑居を送り、それに伴って詩篇を大量に作った。同時期に洛陽に住む官職にありながら、私的生活で文学や芸術にひたる名士が多いので、裴度の別荘緑野堂も、当時の名士が集まって終日遊宴し、盛んな詩文の会の一つの中心地であった。彼らもここの風景や生活、人を詠じ、沢山の優れた作品を残した。このような詩情的な雰囲気があったからこそ、洛陽の詩情的なイメージの構築ができたのである。

例えばそれぞれ「元白」、「劉白」と呼ぶほど白居易と並ぶ称される白居易の生涯の友元稹、劉禹錫、また古文運動の代表的な人物韓愈及び李紳、張籍なども、洛陽で活動し、詩を吟じる。詩人名士の交遊や交流などが、洛陽の詩情的なイメージを一層鮮明にさせた。かれらの洛陽に関する詩作を見てみよう。

華林霜葉紅霞晚
伊水晴光碧玉秋
更接東山文酒會
始知江左未風流。

—劉禹錫「自左馮歸洛下酬樂天兼呈裴令公」

これは秋晴れの紅葉、緑の玉のような伊水畔、竜門の東山での詩会の场景である。南から洛陽に帰ってきた劉禹錫は、やはりここの風流が江南に勝るという。

当春天地争奢華

春にあたって、天地奢華を争う

洛陽園苑尤紛拏

洛陽の園苑 もっとも紛拏たり

—韓愈「李花二首」

韓愈は洛陽にいたとき、盧同や張徹らを連れて、雪かと思紛う李の白い花をよく見物に出かけていた時の詩作である。洛陽が韓愈の生涯に関わった時間が多く、重要な場であった。韓愈は洛陽を離れていても、洛陽のことをしばしば口にし、洛陽への思いの強さを自でしめしていた¹⁸⁷。

同向洛陽閑度日

莫教風景屬他人

—劉禹錫「秋齋獨坐寄樂天兼呈吳方之大夫」

悠悠洛陽夢

郁郁灞陵樹

—元稹「西還」

以上はほんの一部の例だけであるが、中唐の洛陽の風光明媚さや、閑静さ、悠悠自適な雰囲気十分に判る。後に「洛陽の花」として有名になる牡丹も、次第に城内に植えられるようになった。中唐以降、洛陽は官僚達が余生を過ごす憧れの地となり、美しい庭園が次々と作られる。長い文化的伝統のある洛陽の地で「雪を見、花を尋ね 風月を翫ぶ」、いわゆる風花雪月の悠々自適の生活こそ、当時的高级官僚たちの一つ理想であった¹⁸⁸。

彼らの詩作は、洛陽の風景と生活を詠じると共に、詩情的な優雅なイメージを自然に作り出していた。

3. 後世への影響

前文に言及したように、もともと洛陽は文化の中心地としての詩作が多い。唐詩の詩文によって王権、名利のイメージが構築されている。中・晩唐、白居易をはじめ文人名士は洛陽に集まり、詠唱し詩酒琴書を楽しむ生活が世間に影響を与

¹⁸⁷和田浩平「韓愈と洛陽—元和年間初期に於ける吏隠の狭間」(『芸文研究』63、1993年)、P 307。

¹⁸⁸植木久行『唐詩の風土』(研文出版、1983年2月)、P 81。

えた。当時でも後世の人でも、このような風流にのんびりと過ごす洛陽生活に強くあこがれた。

もう一つ特に強調すべきことは、中・晩唐洛陽の詩情的な雰囲気は知識人階層に止まらず、普通の庶民階層にも浸透していたことである。この時期、白居易らが提唱している平易な表現と身近な対象にもとづく作風が幅広く愛誦され、庶民層の台頭により詩歌の受容者層が著しく拡大したことが背景にある。例えば下記のような面白い詩がある。

洛陽自古多才子
唯愛春風爛漫遊
今到白家詩句出
無人不詠洛陽秋

—徐凝「和秋遊洛陽」

昔から洛陽の地は蘇秦、賈誼など優れた人物が輩出しているから、「洛陽才子」という典故が残され、しばしば洛陽人の代称として使われる。洛陽の風景と言えば、花がいっぱい咲く美しい春の印象が強い。佐藤保は「春爛漫の都大路といった洛陽のイメージは、劉希夷をはじめとする唐の詩人たちの作品に負うところが大きい」¹⁸⁹といい、前文に引用した韓愈の「李花」という詩の中でも、花の盛んに咲き乱れる洛陽の春の見事さを詠っていた。この詩の意味は、従来の方は洛陽の春風景を好み、春の遊びが多かったが、白居易の洛陽の秋を描く詩作が出て以来、皆秋の美しさに気付き、洛陽の秋に関する詩句を競って詠じているという。

因みに、白居易には洛陽の秋の風物や、行事、景色を描く詩作は沢山あるが、ちょうど上記の詩に対応している一首を挙げよう。

下馬閑行伊水頭
涼風清景勝春遊
何事古今詩句裏

¹⁸⁹佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店、1992年10月）、P 228。

不多説著洛陽秋？

—白居易「秋遊」

詩人は馬から降りて、伊水の水辺でぶらぶらしている。清々しい風と風景の中、春の遠足よりもまだ。「なぜ古今洛陽に関する詩句は春ばかりで、洛陽の秋をあまり言っていないの」と白居易は「不平」を鳴らしている。うえの徐凝の詩は、まるでこの白居易の「秋遊」に応えるように書かれている。

引用した詩文に明らかな通り、白居易らの名士の生活スタイル、美意識、詩の作法などは、世間に大きな影響を齎した。一般大衆は文人を敬慕し、模倣する傾向が見られた。「無人不詠洛陽秋」一句から、詩を作る人の数の多さも伺うことができる。当時の洛陽城は、上層の士大夫から下層の庶民まで、詩を好んだことが想像される。つまり、当時の洛陽城全体的に文化の香りが高かったとも言える。

中・晩唐、白居易らの文化人がリードし、洛陽の大衆とともに、詩情溢れる優雅な洛陽のイメージが築かれてきた。風雅を尽くした大邸宅で、物心両面のゆとりを悠々と楽しむ洛陽の生活は、唐以降も継承され、北宋まで花開いた。欧陽脩、司馬光などの文化人も洛陽に集まり、『宋史』306巻に張去華は自分の洛陽にある庭園を「中隱亭」と命名までしたという。中隱で実現した「閑適」と「知足」の精神は、文人理想の生き方として、今でも影響が残されている。

二、「家」「国」イメージの延長

晩唐になると、度重なる反乱で情勢は不穏になり、特に黄巢の乱は唐王朝に大きな打撃を与えた。安史の乱の最中、文化人にとっての洛陽の「家」・「国」の意識について、前文に詳しく分析してみた。平和な時代では、この意識は薄くなるが、一旦国が危機に直面すると、洛陽の「家」・「国」の象徴的な意味がまたくっきり浮かび上がっている。この時期の作品に表れている洛陽のイメージは「家」「国」イメージの延長として、おおよそ二つに分けることができる。

1. 隆盛期としての追憶する対象

例えば晩唐詩人韋莊の代表の作である「菩薩蠻」を見てみる。

洛陽城里春光好
洛陽才子他鄉老
柳暗魏王堤
此時心轉迷
桃花春水綠
水上鴛鴦浴
凝恨對殘暉
憶君君不知

—韋莊（約 836～910）「菩薩蠻」

韋莊は漢代の賈誼の典故を利用し、「洛陽才子」を自分と譬え、国を偲ぶ感情を詠じている。この詩についての先行する研究はいくつかあるが、「表面上は故郷への思いが、中身は故国への思いである。（中略）さらに言うと、故国の思いだけではなく、興亡治乱の感慨も含めている¹⁹⁰」という兪平伯の指摘が代表的である。即ち詩人にとって、洛陽は既に過去の王朝の象徴になり、太平盛世を追憶する対象になってしまっている。

韋莊は長安の人であるにもかかわらず、洛陽の風光を慕うのは何故かという問題について、中尾健一郎によると、詩人は壊滅した故郷長安を回想することが苦痛に感じられ、「韋莊にとっての洛陽は唐の全盛時代を想起させる風光明媚な都市であり、かつ滅びゆく唐朝を哀惜させる土地であったのだ」、「長安と異なり、（都が遷されて）復興を遂げつつあった洛陽は王朝の広大と相俟って、より強い求心力をもって士人たちの注意と関心を惹きつけたと言えよう」¹⁹¹。

この気持は韋莊の「洛陽吟」により鮮明に表現されている。

萬戶千門夕照邊
開元時節舊風煙

¹⁹⁰兪平伯『読詞偶得』（香港万里書店、1959年）、P 16。

¹⁹¹中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院、2012年10月）、P 184-185。

宮官試馬遊三市
舞女乘舟上九天
胡騎北來空進主
漢皇西去竟升仙
如今父老偏垂淚
不見承平四十年

— 韋莊「洛陽吟」

官僚たちが馬を廻らせた三つの市、皇帝の船遊びに仕える宮女たちは、何れも盛唐時代の繁栄を表わしている。しかし、この繁栄は一転「父老 偏に涙を垂れ」の悲惨な光景となり、詩の行間に昔の開元盛世への思いがにじみ出ている。詩人は自ら「この時、皇帝は四川省にあり、黄巢の反乱はまだ平定されていない。洛中の寓居で作成（時大駕在蜀，巢寇未平，洛中寓居作）」との注釈を加えていることにより、悲しみと寂しさが一層感じ取られる。

国の栄える象徴としての洛陽に対する詩人たちの心象は、韋莊より早い時期に見られる。例えば、張籍の「洛陽行」にはっきり映っている。詩の初めは「洛陽官闕当中州，城上峨峨十二樓」で始まり、「陌上老翁双泪垂，共說武皇巡幸時」で終わる。要するに、興隆期の唐王朝の洛陽の壮観な建物を羅列し、昔の繁華と今の涙する老翁を対照的に取り上げており、以上の韋莊詩と全く同じパターンとなっている。張籍も韋莊も洛陽を詠っているが、実は偲んでいるのは武皇（玄宗）の開元時代、言わば唐王朝の全盛期である。即ち、洛陽は唐の隆盛期の象徴として詩作に取り込まれている。

その他、晩唐詩人羅鄴は則天武后ゆかりの宮殿上陽宮をタイトルとした詩に「春半ばの上陽 花 樓に満ち、太平の天子 昔 巡遊せり」（上陽宮）も、初唐の一時期政治の中心となったこの場所を偲びながら、昔の繁栄を追憶した。詩中の人物も、詩を作った作者たちも、洛陽当日の盛況を回想しながら今を嘆き、王朝の行方や国の運命を心配していた。杜牧の「洛陽長句二首」に、「連昌繡嶺行宮在，玉輦何時父老迎」も、洛陽の連昌宮はまだあるが、いつまで皇帝がのる

輦車を迎えるかという意味で、人を失望させる現実の中で、昔の栄光が懐かしく思われる。

以上から見ると、晩唐詩人は洛陽を昔唐王朝の全盛時代の名残として扱っていた。唐王朝が嘗ての威光を失い、崩壊しかかっていた時期に、これは洛陽の文化的アイデンティティに含まれている「家」・「国」イメージの延長と看取することができると思う。

2. 懐古の対象

中・晩唐の洛陽に関する詩作を見ると、もう一つの特徴は詠史・懐古詩が多い事である。漢詩的なテーマの代表的なものの一つに「懐古」がある。時の流れと政治の移り変わりにより、古都は栄枯盛衰の変化を繰り返し、数多くの故事や故事に絡む多くの人々の名を積み重ねてきた¹⁹²。晩唐の政治は腐敗した暗黒時代であり、皇帝は既に宦官の手中で弄ばれる傀儡に成り果てていた。衰退に向かっていった風潮の中に、この危機的的局面に対して、前向きに良くしていこうという気概の詩作より、消極的な政治に幻滅する作が大量に出てきた。

洛陽の地をめぐる歳月の経過が、懐古詩に絶好の舞台を提供してきたと言えるであろう。荒れ果ててなお人々の心に深い感慨を催させる旧跡や廢園は、古典から近代まで時代を隔てながらもお互いに響映しあい、一つの文学スタイルとなっている。例えば許渾の「洛陽道中」がある。

洛陽多旧跡
一日几堪愁
风起林花晚
月明陵树秋
興亡不可問
自古水東流

— 許渾（791—854）「洛陽道中」

¹⁹²佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店、1992年10月）、P 232。

古今東西、人は過ぎ去った過去を間接的に体験することにより、深い情を覚えるものである。この詩作が言っているに、洛陽には名所旧跡が多いが、それに対して一日に何回も愁いを思わせる。懐古詩の真髓は、人為的に一瞬起こる繁栄と、その後に必ず訪れる荒廃との対比から生まれる、主として過去への詠嘆である。詩の最後に、興亡を追究しても意味がないから、今も昔も変わらないのは水の流れ方だけであると作者が嘆いている。もう一つ「過洛陽故城」もこのような基調である。

三十世皇都
蕭條是霸圖
片牆看破盡
遺迹漸應無
野徑通荒苑
高槐映遠衢
獨吟人不問
清冷自嗚嗚

—崔塗（854～？）「過洛陽故城」

この故城は漢魏の故城であり、約三世紀にわたって、後漢・魏・西晋・北魏と受け継がれてきた。隋・唐の洛陽城は、隋の煬帝の命によって大業元年（605年）三月に着工され、毎月二百万人を動員して、翌年の春正月に完成したものである。この町により洛水の流れを挟んで、南北に広大な市街地が形成された。この結果、漢魏の故城後は廢墟のまま残されることになり、故城をとむらう懐古・詠史詩の舞台となった。昔の栄光と今日の荒涼は鮮明な対照になり、ある時期における繁栄が大きければ大きいほど、それが滅び去り、朽ち果てたときの空しさや儂しさをより多く感じさせるものである。

先の詩に言われた通り、洛陽に旧跡が多いことにより、滅び去ったものへの詠嘆を引き出す。則天武后ゆかりの宮殿上陽宮、西晋富豪石崇の金谷園、佛教の伝来地としての白馬寺、陵墓だらけの邙山、また天津橋、魏王堤、平泉山荘、緑野

堂、竜門などの名所旧跡は、どこでも詩人の懐古の情を引き起こす由緒のあるスポットである。筆者は資料の一部で下記の表を纏めた。

表 6 : 洛陽の名所旧跡と懐古詩(筆者作成)

洛陽の名勝	主な関連懐古の詩作及び作者
上陽宮	「上陽紅葉」徐凝、「上陽宮」羅鄴、「上陽宮月」包溶、「上陽宮詞」呉融
金谷園	「金谷覧古」徐凝、「金谷感懷」于己、「金谷園」李或用、「金谷園」杜牧、「金谷懐古」杜牧、「金谷園花發懐古」王質、「金谷園懐古」陳通方
天津橋	「天津西望」李商隱、「天津橋望春」雍陶、「天津望晚」顧非能
漢魏故城	「感故洛陽城」杜牧、「過洛陽故城」崔塗、「登洛陽故城」許渾、「故洛陽城」李郢、「經故洛城」羅鄴、「過洛陽城」于武陵

このような洛陽の個々スポットに対して懐古の情を歌い上げている詩もあれば、洛陽全体に対する感嘆の詩も少なくない。これらの作品には、「空」、「愁」、「哀」、「変」など言葉が頻繁に表れている。例えば杜牧「金谷懐古」に「淒涼遺迹洛川東、浮世榮枯萬古同」、張祜(785-849?)「洛陽春望」に「世事空悲哀複榮、憑高一更添情」、韋應物「金谷園歌」に「二十四友日日空追遊」、許渾「登洛陽故城」に「水聲東去市朝變、山勢北來宮殿高」など、いずれも世間の移り変わりと宇宙の永久不変とを比べ、政治に対する絶望や無関心の態度を表わしている。安史の乱前の詩人たちの経世済民の志及び未来の憧憬、乱後詩人たちの現実と庶民生活を心配する気風がだんだん失われ、晩唐になると、昔の繁栄を偲び、政治への情熱が冷め、王朝交代を超える宇宙意識が持たれるようになった。

洛陽は単なる懐古のテーマの一つであり、懐古の対象として詠われるだけではなく、一種の歴史変遷に関するイメージになっている。それだけにとどまらず、他の所で起こした懐古の情もしばしば洛陽を言及するようになった。例えば許渾の名作「金陵懐古」が挙げられる。

玉樹歌残王氣終	玉樹の歌 残りて 王氣終わる
景陽兵合戍楼空	景陽 兵合わせて 戍楼空し
松楸遠近千官家	松楸 遠近 千官の家
禾黍高低六代宮	禾黍 高低 六代の宮
石燕払雲晴亦雨	石燕 雲を払って 晴亦た雨
江豚吹浪夜還風	江豚 浪を吹いて 夜還た風
英雄一去豪華尽	英雄 一たび去って 豪華尽き
惟有青山似洛中	惟 青山の洛中に似たる有り

—許渾「金陵懷古」

金陵とは南京のことであり、六朝の都として、よく懷古詩のテーマになる。上の一首は南京に都を置いた最後の王朝であった陳の滅亡を題材に採り、栄華もいつかは潰えるという亡国の哀しみを歌った詩である。目の前の景色、この地の歴史を連想するのは当たり前が、この詩の最後に直接関係のない洛陽のことで終わるのは興味深い。歴代の評論家はこれについて様々な解釈を加えたが¹⁹³、『唐詩選』によると「南京から洛陽まで連想したのは、この二つの場所は同じような感慨を引き起こすから¹⁹⁴」という。即ち、洛陽は歴史の変遷を象徴して世の転変する共感を誘うことにより、他の地の歴史を詠じる時にも連想される。

洛陽という言葉以外に、城内の名所や関連する典故などの要素もしばしば他の地の懷古詩に表れる。

北邙坡上青松下
盡是鏘金佩玉墳

—徐寅「十裏煙籠」

至竟息亡縁底事
可憐金谷墮樓人

¹⁹³例えば明・金聖嘆は『選批唐才子詩』に洛中は王氣の象徴で、この句は金陵の王氣はまだ終わっていないと解釈するのに、朱東岩（清）は『唐詩鼓吹』にすべての繁華は消え、山だけは洛中に似ると解釈する。

¹⁹⁴施蟄存『唐詩百話』（上海：華東師範大学出版社、2011年2月）、電子版

http://wenku.baidu.com/link?url=5piMEobGAv5ouQGfHPY3JCyaKje6qmIHHAYkUm6dnTF8v3-duyCwd-dcphdWHZUY2rRMj0c4Wfhd6SzmR_feR4du-i59rO403Ahwoj1Lsy

—杜牧「題桃花婦人廟」

繁華自古皆相似

金谷荒園土一堆

—吳融（生歿不明、889年の進士）「題延壽坊東南角古池」

舊宅秘荒草

西風客薦蘋

淒涼回首處

不見洛陽人

—戴叔倫（732-789）「過賈誼宅」

「十裏煙籠」は西湖の景色のことで、作者はその美しい現実の景色から、洛陽
邙山の豪華なお墓を連想し、人生は夢のごとくのかを詠った。桃花夫人廟は今の
漢陽に位置し、「桃花婦人」は春秋時期の女性であり、杜牧は彼女と石崇の姫緑
珠を比較している。「延壽坊」は長安の地名であり、詩人は繁華がいつか消える
意を嘆いている。最後は湖南に左遷した洛陽人賈誼の故宅の詩作である。上記の
詩作の作成する場所や詠じる対象はそれぞれで、いずれも洛陽と直接関係ないも
のである。それにもかかわらず、詩人たちはなんらかの形で洛陽を連想し、これ
らの洛陽に関する要素を通して、懐古の情をいざなっている。

そもそも、懐古の情緒は郷愁と類似し、重なる部分がある。人は現在いるところ
から、時間的に遡って過去の特定の時期や空間的に離れた場所を想像し、その
特定の時間や空間を対象として「懐かしい」という感情で価値づけることがある。
洛陽という地は、歴史が長く王朝交代や胡漢紛争でいつも目まぐるしく争いの渦
中であつたので、唐代の文化人は洛陽の時間や空間を実体験し、或いは先輩や他
人の情報に基づき、洛陽に対する想像を加えた特別な感情を持っている。このよ
うな感情も洛陽の文化的なアイデンティティの表れと考えられる。

結び

中国の詩の伝統は『詩経』に始まり、唐の時代になると歴史的発展の高潮の時
代となった。すぐれた詩人が輩出され、夥しい詩作が残されている。これらの唐

詩の中には、驚くべき程大量の洛陽に関する作品が見られる。本稿は洛陽に関する唐詩を素材として、隋唐時代における洛陽の文化表象を考察し、詩人の眼中に映っている洛陽のイメージを掴むことができ、洛陽という都市は同時代の他の都市のない文化的なアイデンティティを持っていることを明確にした。

文学史を論ずるとき、一般論として、唐代は初唐、盛唐、中唐、晩唐の四つの時期に分けて論ずられる。全体に渡って、特に初・盛唐の唐詩が構築した洛陽のイメージは大体三つに纏めることができる。王権を象徴する帝都のイメージ、華やかな大都市のイメージ及び郷愁のイメージである。これらのイメージは文化的アイデンティティの具現であり、その根源は洛陽の歴史に溯ることができる。洛陽は幾つかの王朝の旧都であり、従来から経済活動が活発で、華北や江南からの物資の集散地として栄えた繁華地であった。一方、異民族の侵入によって破壊され、衣冠文化は南へ遷移しても士人の心の故郷として長く思い続けられた。

アイデンティティは歴史や文化伝統に緊密に関連するのみならず、現実の変遷も反映される。洛陽の文化的アイデンティティも歴史の発展と共に修正され、新たな形成と展開が見られる。安史の乱の刺激で洛陽の文化的アイデンティティは大きく際立ち、李白、杜甫の作品にある洛陽は「家」、「国」を象徴するようになった。中唐、白居易をはじめの文人集団の洛陽の暮らしは、洛陽に風雅、詩的なイメージを加えた。さらに、晩唐の動乱時期において、「家」、「国」を象徴するものの延長として、作品にある洛陽は王朝隆盛期の追憶対象や懐古の対象になっている。

一般的に隋唐の文化は豪壮雄大な気分が横溢したもののようには考えられているが、宮崎市定は中国の長い歴史の上から見ると、隋唐の貴族文化は漢代と比べずっと繊細になり、規模が思いの外に小規模なために、分散が可能になり、文化は国都にばかり集中せず、南方の揚州や杭州、西方の成都にも長安に劣らない貴族文化が栄えていた¹⁹⁵と指摘している。陪都としての洛陽は、政治都市であった長安と経済繁栄した地方都市の間に位置を置き、隋唐文化を観察するのに格好なスポットとなっていた。この時期、洛陽の歴史変遷は国の運命と大きく関わり、

¹⁹⁵宮崎市定「隋唐文化の本質」『中国に学ぶ』（中央公論新社、1988年10月）、P 79-80。

洛陽に関する文化人や作品も当時の文化を代表する最高レベルのものが多い。したがって、隋唐時代における洛陽の文化表象は一都市の文化史に止まらず、中華文化の極めて重要な一環であることが考えられる。

この時期の中華文化のアイデンティティは、濃縮して洛陽の文化的なアイデンティティに映っていると言っても過言ではないだろう。

第五章 北宋における洛陽の文化表象

一二程子の儒学の復興と洛陽の風土

第一節 五代十国時代から北宋への洛陽

唐の衰退によって天下は分離し、全国王朝としての唐は875年から884年にかけて起きた黄巢の乱によって滅んだ。唐朝滅亡後、宋朝が興るまでの間、907年から約50年間は、中原では五代に亘って王朝が交替し、江南を始めとする各地では、小国が分立した。

かつて盛んだった都市は戦乱の為、ほとんど破壊された。例えば都の長安は唐末に廢墟と化し、再び国都となることはなかった。東都の洛陽も凄まじい混乱の中にあり、反乱軍がこの地に激戦を続け、『新五代史』によると、「城邑残破、戸不滿百」といった惨状であった。しかし、この荒廢は後梁時代の河南伊¹⁹⁶によって、徐々に旧来の面目を取り戻し始めることになり、いわゆる「瓦礫廢墟の内において、化して都市を出だす¹⁹⁷」という。後唐時代にいくつかの大きな措置を行い、洛陽の町を計画的に再建するようになった。

なぜ激戦区としてもっとも被害を受けた洛陽が比較的短時間で都市の規模や機能を回復できたのか？いろいろな要因の中に、洛陽の文化中心としての影響力が五代や北宋王朝に重要視されていたことが考えられる。『冊府元龜』に記録している「後唐明宗長興二年（931）」の洛陽を都とする勅書の文章が代表的な考えとされる。

勅旨：伊洛之都、皇王所宅、乃夷夏帰心之地、非農桑取利之田。当離乱而曾是荒涼、及開泰而兢為修葺。……
『冊府元龜』卷十四「帝王部・都邑」

この勅書は「洛陽の地は帝王の宅であり、夷狄（少数民族）や華夏（漢民族）を凝結する力のあるところであり、農業や桑の栽培で利益を得るような場所では

¹⁹⁶張全義（852-926）は洛陽を四十年間も統治し、洛陽の復興に力を尽くした。

¹⁹⁷北宋・張齋賢『洛陽摺紳旧聞記』卷二「齋王張令公外伝」

ない」と強調している。佐原康夫の「各王朝において洛陽は、首都であるか否かに拘わらず、常に特別な場所であり続けた。中国における都城の理念を考える時、洛陽の持つこのような特異な重みを忘れてはならない¹⁹⁸」との指摘と一致している言い方であった。唐の時代の唐詩から洛陽の文化的なアイデンティティがはっきり読み取ることができ、この漢民族の文化的なアイデンティティこそ、洛陽の影響力になると考えられる。そのおかげで、洛陽は長安と違い、帝都の面影をある程度回復でき、五代、北宋期にも、国都ないし副都としてそのまま継承され、北宋壊滅まで政治的に重要な都市であり続けた。

趙匡胤の起した宋は、ようやくこの五代十国と言われる動乱に終止符を打ったのである。宋王朝は北宋時代（960-1126）と、南宋（1127-1279）の二つをあわせ、300年余りも続いた。宋の創立者太宗は武断政治を排して文治政策を進み、科挙制度を通して広く庶民階級から有能なものを選抜するようにした。この時代には、産業が急速に発達して都市が栄え、市民生活が向上し、技術も長足の進歩を遂げていた。宋代文化が飛躍的に向上した理由には、政治と経済の二つの面における良い条件が揃っていた。

中国の歴史で唐代から宋代への移り変りは、いろいろな意味で新しい時代に入ったと言われている。この唐宋変革期は先賢に重要視され、例えば内藤湖南は文化史的に考察し、「唐代は中世の終末に属し、宋代は近代の発端となり、その間に唐末より五代に至る過渡期を含むのを持て、唐と宋は文化の性質上著しく異なりたる点がある¹⁹⁹」と指摘していた。多くの先行研究は宋の時代を中世・近世の一大転換期として注意すべきと呼びかけ、宋を中国におけるルネサンスの時代として位置付けた。

宋代文化の一大事は儒学の復興であった。二程子の洛学は理学の先駆になり、儒学復興の幕を開いた。その結果は岡田武彦が言うように、「宋代人は精神的深さにおいては他の時代の人々や他の国の民族も追随することができないような

¹⁹⁸佐原康夫「周礼と洛陽」『古代都市とその形制』（奈良女子大学 21世紀COEプログラム報告集 Vol. 14、2007年8月）、P31。

¹⁹⁹内藤湖南『内藤湖南全集 第八巻』（筑摩書房、1969年8月）、P 111-119。

世界的価値ある文化を創造した²⁰⁰」。新しい儒学の興起と発展は当時の文化中心西京洛陽と密接な関係があり、その源流は洛陽という地域で生まれたと言っても過言ではない。本稿は宋代の儒学復興と洛陽の風土との因果関係と相乗効果を分析し、北宋時代の文化の中心地洛陽の位置づけを明らかにする。

第二節 儒学復興の土台となる洛陽の儒学歴史

一、洛陽と儒学の深いゆかり

儒教の始まりは西周まで溯ることができる。一般的に孔子は儒学の創始者とされるが、孔子が儒教を創出した背景には、周公旦が残した伝統文化があった。春秋時代に生まれた孔子は、周公を「周礼」・「儀礼」を著し礼学の祖として尊敬していた。常に周公旦のことを夢に見続けるほどに敬慕し、「長い間、夢に旦のことを見なかった（甚矣吾衰也！久矣、吾不復夢見周公）」と年を取ったことを嘆いた。

孔子に理想の聖人として崇められた周公旦は、洛陽と極めて重要な関わりを持っている。周の初期、都の宗周が西に偏りすぎて東方経営に不便だったことから、周武王は洛水流域の洛邑に第二の都、成周を建設して、周王朝の中原支配の基礎を確立した。周公旦が武王の死後は成王を助け、成王の命を受けて洛陽に東方支配の根拠地成周を建設した。成周は天下の中心洛陽で建てられ、「周の道は此处で成る」という意味が託されている。

周公旦の貢献について、『尚書大伝』に「周公攝政，一年救乱，二年克殷，三年踐奄，四年建侯衛，五年營成周，六年制禮作樂，七年致政成王」の記録があるので、周公旦は周の諸制度を整備した人物として称えられた。周公の封地の魯を息子にその支配を委ね、自らは中央の洛陽で政治に当たっていた。新しく統一したばかりの王朝のために一連の典章制度を作り、有徳者が為政者となる徳治主義を提唱した。周公は亡くなるまで洛陽に駐留し、その政治生涯はほとんどこの地と繋がっていた。彼が作った礼楽制度は儒学の基礎を定めたとされる。ゆえに、

²⁰⁰岡田武彦『宋明哲学序説』（京都：文言社、1977年5月）、P 4。

佐原康夫は『周礼』の記載にある理想とされる天子の都城と洛陽の関係について、周礼が知られるようになった時代背景をもとに、周公の都城（古来からの都城の理想像）が洛陽そのものを指していく過程²⁰¹を論じた。

孔子を中心に初期儒家が編集した西周以来の古典『詩』『書』には、周初の治績や所業の数々が謳われる。孔子の思想行動は周公を追慕し、成周初期の礼楽文化の再興に向けて使命をおび、周公の制作とされた「礼楽」にのっとり「仁」の表現形式を自ら体現しようと努めた²⁰²。孔子は周公旦の伝統を受け継ぎ、残された古い礼制をまとめ上げ、儒家の倫理思想を形成した。周の政治は儒教によって理想の政治とされ、周初への復古を理想として身分制秩序の再編と仁道政治を掲げた。周公の偉業の原点としての洛陽も、儒学史上最初に関わった都市として特別な意味を持っている。

洛陽の歴史と儒学の発展は常に密接な関係を持っている。『史記』の「孔子世家」、「老子列伝」「楽書」、『孔子家語』などの記載によると、東周時代の洛陽は周の王都であり、周室の図書典籍や禮制建築や文物が集められ、老子は王室の図書館の役人をしていた。北の魯の国に住んでいた孔子が周の国洛陽に入り、老子と会って「礼」について質問したとされる。

今の洛陽市内には、周公を記念するために隋末唐初に建てられた周公廟、清の時代に建てられた「孔子入周問礼樂至此碑」の記念碑などがある。これらの遺跡文物から、この都市と儒学の歴史との深いゆかりを容易に察することができる。

二、後漢時代に洛陽で行った儒学の興起

儒家思想の形成は大体春秋戦国時代になるが、あくまで諸子百家の一家にすぎなかった。中国は「焚書坑儒」や秦末の楚漢戦争など全面動乱をへて、前漢に至ってようやく統一国家の実現ができた。漢武帝は董仲舒の献策を入れ、紀元前136年五経博士を設けた。儒家の経書が国家の公認のもとに教授され、儒教が官

²⁰¹佐原康夫「周礼と洛陽」 舘野和己編『古代都市とその形制』（奈良女子大学COEプログラム、2007年8月）、P 31-47。

²⁰²戸川芳郎など『儒教史』（山川出版社、1987年7月）、P 29。

学化した。

従来の通説では、このことによって儒教が国教となったとしていたが、現在の研究では儒家思想が国家の学問思想として浸透して儒家一尊体制が確立されたのは前漢末から後漢初にかけてとするのが一般的である²⁰³。後漢で儒教が社会全体に対して大きな影響力を持ったという意味では、中国の典型的な道德観が支配した時代である。儒教（特に名教的な意味で）の影響力は人民全般に渡った訳ではないが、少なくとも知識階級にはしっかりと定着したと思われる。

前漢の武帝が確立した儒教国家の理念は後漢にも受け継がれ、光武帝は儒教を奨励して礼教政治を確立した。後漢の文化においてもっとも重視すべきは経学である。これは儒教のテキストであるが、後漢の明帝・章帝が儒学を官吏登用の1つの基準としたため、経学が最盛期を迎えた。洛陽に太学（国立の中央大学）を設立し、数千人の学生が集団生活をしながら学んだとされる。各地でも私塾が開かれ、多数の儒学生を教育した。

後漢末期に洛陽で、訓詁学的アプローチに基づき、馬融・鄭玄により諸経書の統一的解釈が与えられ、許慎の『説文解字』により漢字の書体も整理された。このような儒学興起の風潮の中で、帝室を中心に漸く五経の確定ができ、儒学が国の主導的な学術と思想とされるようになった。当時の洛陽において、儒学研究は空前の盛況の感を呈していた。

当時の儒学の学術雰囲気は、『資治通鑑』に詳しい記録がある石経の一例で分かる。石経とは、朝廷の学府において五経の定本（正規のテキスト）を石に刻み、学習用の教科書兼学府のシンボルとして建てたものである。熹平年間（172-178）の蔡邕が五経の全文と主たる注釈をまとめ、『白虎通義』を碑文に彫り、「熹平石経」が洛陽に建てられた。

まず、『白虎議奏』が当時の正統学術として確立された。

²⁰³例えば渡邊義浩『後漢における「儒教国家」の成立』（汲古書院、2009年4月）などがある。

(79年)後漢章帝の治世の時に、博士官や儒者を集め、『五経』の教義についての異説や文字の異同を二カ月に渡って、洛陽の北宮(白虎観)で議論させた。章帝みずからが議論の場に参加して、結論を出して作ったのが『白虎議奏』といわれるものである。班固は論定した「議奏」を整理して『白虎通義』を著わした。(司馬光編著『資治通鑑』巻46漢紀38)

おおよそ百年後、

儒者を集めて、五経の文字の異同をただし、蔡邕に三つの書体、すなわち古文(大篆)、小篆、隸書で書かせ、それを石に刻して洛陽の大学の門に建てた。これで、後々の儒者が皆、間違いなく理解するようになるということであった。この碑が建てられると、近隣から摸写する人が雲集し、道路が塞がった(『資治通鑑』巻57漢紀49)。

魏の正始年間(240-249年)に、「熹平石経」の横に「正始石経」も建てられた。彫られた文献はほぼ完全に重なっているが、古文・篆書・隸書の3つの書体により新たに刻まれ、「三体石経」とも言う。再び彫られた理由は、漢代に起こった大論争「今古文論争」の影響によるものである。当初漢では口伝などによって伝えられた経典を隸書で起こしたテキスト(今文)が使用されていたが、後に秦以前の古文で書かれたテキスト(古文)が続々と発見され、そのどちらがより正しいテキストであるかについて大論争となった。儒学では古文テキストとともに文字としての古文や篆書についても研究・学習する必要が出てきたので、古文・篆書・隸書の3つの書体により共通のテキストが書かれている石碑は全部で27石が洛陽の太学門前に立てられた。

これらの数十面の石碑は晋末の永嘉年間(307-313)戦乱で、洛陽の陥落と共に大きく破損を受け、北魏時代にかなり荒れ果てていた。

洛陽記に曰く：太学は洛陽城の南、開陽門の外にあり。講堂の長さ十丈、広さ二丈。堂前の石経、四部。本碑は凡そ四十六枚。西行に尚書、周易、公羊伝十六碑、存すも十二碑は毀つ。南行に、礼記、十五碑は悉く崩壊す。

東行に論語、三碑は毀す²⁰⁴。

これらの事跡を順に追ってみると、中国の文人にとって五経の文句を正確に定めることに懸けた執念と熱意が分かる。後漢時代の洛陽は都と文化の中心地としての模範的な役割を果たした。後に『文選』の巻頭を飾る有名な「兩都賦」は後漢の礼楽制度を重んずる姿勢をはっきり伝えている。特にその中の「東都賦」に呈示している洛陽のイメージは奢侈を排しての質素と儉約であり、後漢の道德礼制の素晴らしさを強調していた。このイメージは儒学の基本的な思想と一致するので、洛陽は長い間に名利を超越した有徳の士人の理想的な住む場所として意識されていた。そして、文化中心として四百年にかけて発信しつつある洛陽において、たとえ異民族の侵入を経ても、漢民族知識人の儒教の正統性維持への思いが長く続き、漸く宋代の儒学復興と繋がった。

第三節 洛陽の風土から生まれた二程子の洛学

儒教には道德や名節を尊び、王朝への忠誠心をもたせ、政治の腐敗を防ぐ効果があったと思われる。しかし、漢以降儒教の復興は訓詁学に陥ったので、思想的には却って衰退に向かった。後漢後期になると、儒学者を中心とする官僚知識人と宦官勢力との対立が激化しており、党錮の禍になった。儒教国である後漢にとって、その衰退を加速させるきっかけとなった。その後、佛教の伝来や道教が興隆する背景の中に、儒学は長い低迷期を経過した。北宋になって漸く新しい儒学が生まれ出し、理学（或いは宋学）が形成した。この理学の幕が最初に開いたのは洛陽の地であった。

北宋初期の洛陽はかなりの政治影響力を持っていたが、慶歴初年（1041）の北京建都によって軍事重要度の軽減がある意味で、都市機能をより一層洗練させ、専ら、学術文化の成熟度を高めることが可能となった²⁰⁵。特徴づけられていたの

²⁰⁴宋・司馬光編著（胡三省注）『資治通鑑』卷 46 漢紀 38（中華書局、1997年11月）、P 1485。資治通鑑につけられた注の中の白眉である。

²⁰⁵木田知生「北宋時代の洛陽と士人達 開封との対立の中で」（『東洋史研究 38』、1979年）、P 60。

は、何よりも「文化都市」と呼び得る性格である。周知のように、『伊洛淵源録』という名前が示した通り、朱熹は自分の理学の始まりを伊洛の地の「洛学」にしたのである。理学の形成から成立までは儒学の復興を意味し、その過程は洛学及び洛陽という町の風土に大きく関わっている。

「洛学」は程顥（1032-1085）、程頤（1033-1107）兄弟をはじめとする学派である。程顥は理学の大枠を提示したところで早くに没し、程頤は兄を継承し理学を理論的に整備した。「洛学」は決してたまたま二程兄弟の出身地は洛陽の理由だけで「洛」を付けたわけではない。二程兄弟は長期に渡って洛陽地域に講学し、彼らの思想・学術の形成と発展は、北宋洛陽の地の文化の伝統と政治傾向に因果関係を持っていると言っても過言ではなかろう。以下は洛学の政治傾向、学術、価値観の三つの面から洛陽の風土の影響を考察する。

一、政治的な影響

宋の時代特に北宋を考察するのに、都城の開封と洛陽は最も重要な都市になることは言うまでもない。「都市の規模といい、文化の熟成度といい、北宋時代の東京開封府と西京洛陽府とは、対抗関係の中に考究される要素をまだ多分に残している²⁰⁶」と指摘されているように、遷都をめぐる討論と研究は少なくない²⁰⁷。史書に「宋太祖は洛陽に生まれ、その風土に楽しんで、嘗て遷都の意がある²⁰⁸」の記録がある。開国皇帝宋太祖が嘗て生まれ育った故郷として、洛陽は北宋王朝に特別な意味と価値を持っていた。北宋の中期に至っても度々遷都論の対象となったことは、洛陽は常に人々の念頭に在ったことを示している。

また北宋初期の士大夫階層の代表とされる范仲淹も洛陽遷都案を強く主張し、

²⁰⁶木田知生「北宋時代の洛陽と士人達 開封との対立の中で」(『東洋史研究 38』1979年)、P51。

²⁰⁷例えば宮崎市定「読史さ記」(『史林』21-1、1936年)、久保和田男「五代宋初の洛陽及び国都問題」、「北宋慶暦時代と軍事問題—范仲淹の国防政策を中心として—」唐代史研究会編『唐代史研究』13 pp. 33-55、「五代北宋における複都制の研究—文化都市洛陽の形成の背景」平成22年8月 大阪市立大学、王永太「宋初遷都洛陽的考弁及びその意味」(『中国史研究』2005年第二期)、葛兆光「洛陽与汴梁—文化重心与政治重心的分離」『中国思想史(第二卷)』(復旦大学出版社、2004年)、P185-218。木田知生「北宋時代の洛陽と士人達 開封との対立の中で」等

²⁰⁸李焘『続資治通鑑長編』卷十七、電子版

<http://pan.baidu.com/share/link?shareid=1694239881&uk=1577849962&fid=3055100397>

数回皇帝に陳情した。

西洛帝王之宅，負關、河之固，邊方不寧，則可退守。……太平則居東京通濟之地，以便天下；急難則居西洛險固之宅，以守中原²⁰⁹。

至於西洛，帝王之宅，太祖修營，蓋有意在子孫，表裏山河，接應東京之事勢，連屬關陝之形勝²¹⁰。

これらの文章にも「帝王の宅」の言葉が繰り返し現れていた。東京開封との比較の中に、西京洛陽に守りやすい地勢の「險」も勿論あるし、それよりも士大夫にとって洛陽正統を象徴する政治的な「地望」も無視できない。このような首都開府と意識的に対抗する位置づけは、後日新法旧法両党派の間に権力闘争の一種の力にもなった。

もう一つ注目すべき現象は、洛陽に集まる嘗て高官に達した官僚士大夫集団のことであった。洛陽は開封まで六駅の距離しかなかったので、嘗て最高の権利を握った宰相たちの多くも洛陽で晩年の退居生活を送っていた。例えば開国の宰相趙普、太祖時期の宰相張齊賢、太宗、真宗時期三任の宰相呂蒙正などがあり、この風潮は十一世紀六、七十年代にピークに達した。

欧陽脩はこの地を「洛陽は東西の要衝であり、賢者や豪傑などの集りが多い(洛陽東西之冲、賢豪所聚者多)」と評価したように、士人が洛陽で集会する伝統は昔からある。これらの士人名士たちは洛陽に閑居した唐代の白居易「九老会」の故事に倣った集会数多く開かれた。洛陽で欧陽脩(1007-1072)らによって「八老の集い」を契機として、司馬光の「真率会」、文彦博の「同甲会」、「耆英会」などがあつた。その中に特に影響力を持っていたのは「耆英会」であつた。原則として七十才以上の「洛中の士大夫で、賢明で、しかも高齢のせいで隠逸している人(洛中大夫賢而老自逸者)」十三人を集め、「お酒を設けて楽しむ(置酒相楽)」をする。

²⁰⁹李焘『続資治通鑑長編』卷百十八、『范文正公文集』卷十九にも収録されている。

²¹⁰李焘『続資治通鑑長編』卷百三十六

洛陽多名園古刹，水竹林泉之勝，諸老須眉皓白，衣冠甚偉，每宴集，都人隨觀之。（『邵氏聞見錄』卷十）

この退職官僚の知識人集りの風采は『邵氏聞見録』など記録から知られる。表面上では老人たちが詩酒を楽しんでいたが、実は政界の元老は王安石の新法に反対して地方まわりとなり、見くびることのできない政治勢力であった。木田知生の考察によると、旧来の文学グループのほかに、別箇に政治グループが形成される生地が、そろそろこの時期から醸成されはじめていた²¹¹。洛陽と開封の対立は、神宗初年王安石（1021－1086）の登壇によってよりはっきりとなった。

司馬光（1019－1086）、をはじめ、元首輔富弼、枢密使文彦博（1006年－1097）、御使呂公著など政界実力者の大物たちは「まるで「影の内閣」のように、かすかに士大夫に深遠な影響を与えていた²¹²」。故に、宋の李格非は『洛陽名園記』に当時の洛陽を中国の盛衰と結び、「洛陽の盛衰は天下態勢の徴候になる」と嘆いた。

洛学が形成する時期は、ちょうど当時の改革を反対した保守派と言われる政治家グループが洛陽に退居していた時期に当たった。まず、洛学の最初の確立と発展をみると、二程の出身、家柄、地元での人脈との因果関係を見逃すことはできない。二程子は洛陽の出身、少年時代は父親の赴任で短い間他の所に暮らしたが、すぐ家族と一緒に洛陽に戻った。その後はほとんど洛陽を拠点に活動し、その家族も地元で一定な影響力があった。例えば張載は二程の父の母方の親戚であり、二程の父親は文彦博の「同甲会」の一員であった。二程兄弟と洛陽に閑居していた政界の実力者司馬光、富弼、文彦博、呂公著との頻繁な交遊は『二程集』などに記録されている。

洛学及び後の理学は、封建的な秩序を維持するための理論であり、しばしば保守的、唯心的なものとして非難されるが、実はこれも洛陽の風土の表れであった。

²¹¹木田知生「北宋時代の洛陽と士人達 開封との対立の中で」（『東洋史研究 38』（1979）、P67

²¹²葛兆光「洛陽与汴梁—文化重心与政治重心的分離」『中国思想史（第二卷）』（復旦大学出版社、2004年）、P185。

経済が活発で、改革を推進しようとする東京開封の雰囲気と比べ、洛陽は正反対であった。葛兆光は当時の歴史上珍しい「文化的な重心」と「政治的な重心」が分離した現象を考察し、「洛陽で漸く学術と文化の重心を形成し、道德倫理を標榜し、思想と学術を呼びかける集団ができ、当時の知識、思想及び信仰と違う声を表わす」と指摘し、これらの士人は「文化伝統の再建によって、道德理性の力を借りて知識、思想及びその伝承が秩序の中の意味を確定し、更に温和で漸進的な方式で理想的な社会秩序を建てよう」²¹³という。二程もこの思想の持ち主の一員であった。

臣竊内思、儒者得以道學輔人主、蓋非常之遇。使臣自擇所處亦無過于此矣。臣以斯時雖以不才而辭然許國之心實已萌矣。

程頤のこの言葉から見ると、二程子は政治を排していなかった。むしろ皇帝と儒士が協力して国を治めることを理想としていた。洛陽で保守派の友好的な交遊関係から、二程子の政治見解と傾向は保守派と一致することが推測できる。事実上、二人は保守派の政治活動も積極的に参与した。洛学は単なる学術とは言えず、「道学を以て統治者を補佐する」政治理想が託されている。言い換えると、洛学の形成する最初の段階に、既に二程の政治的な訴えも含めていたのである。

二、学術的影響

洛陽という町、周公の「制礼作樂」から後漢の儒学復興まで、儒学の歴史が長く基盤は相当しっかりしている。儒学の経典が石碑になって何百年も立っていたことはまさにその証拠であった。しかし、この町は純粋な儒学一色に塗りつぶされた訳ではないところは興味深い。魏晋時代において、この地で老莊思想が圧倒的に盛んになり、術学思想まで形成した。また、中国の最初の佛教の伝来の地として有名で、南北朝時代は『洛陽伽藍記』が残されるほど屈指の仏教都市であった。即ち、この町と道学、仏教との関わりは儒学に負けないほど深かった。

魏晋南北朝から唐まで、儒、釈、道の三教合流の文化の融合を経て、宋代にな

²¹³葛兆光「洛陽与汴梁—文化重心与政治重心的分離」『中国思想史（第二卷）』（復旦大学出版社、2000年12月）、P186-187。

ると洛陽の文化環境は更に豊かになり、士大夫の集まりは更に思想を活気づける。この雰囲気の中に、二程兄弟は周敦頤の仏教・道教の理論を導入した宇宙論の啓発を受け、同時代の張載の思想にも影響を受けた。儒学を中心に、仏、道の中に浸透し、哲学から「天理」と「私」との間の関係を論証した。このような環境で、二人は共通の思想的な基盤を持ち、儒学の正統人物を自任し、洛学の思想システムを打ち立てたのである。

北宋時代の洛陽の文化環境は洛学に対する影響が明らかである。前に触れたように、洛陽は長い間文化中心的な役割を果たしている都市として、その特徴は全国から文化人がここに集中して居住したことである。歐陽脩は「洛陽は天子の西都にして、京師を距つること数駅ならず、仕官して雑然として居る。其れ亦た珠玉の淵海ならんか（歐陽修全集 卷六十六-居士外集卷十六）」と感嘆するほど、当時の洛陽は豊かな文化資源を持っている。

「周敦頤、張載、邵雍、程顥、程頤」は「北宋五先生（一説は司馬光を入れて、北宋六先生）」と称され、理学の形成を担った五人は北宋精神史上もっとも重要な大家である。司馬光は洛陽で十五年間を渡って『資治通鑑』を編纂、張載は一時期洛陽で講学し、邵雍は中年時代から洛陽に移り住んだ。これら北宋精神史上重要な大家は周敦頤以外、ほとんど一時皆洛陽に集合して、「中国思想史上での一壯観であった²¹⁴」。これは「洛学」形成と発展の背景として見過ごしてはいけない。

程顥、程頤は地元の出身であり、自分で「洛陽は実にもう一つの都であり、士人淵藪である²¹⁵」と早期に認識し、当時洛陽に閑居しているこれらの学者と深く関わり、学術文化の成熟度を一層高めた。錢穆は「二程居洛陽，乃当時人物荟萃之区，濡染取用，既富既博²¹⁶」と指摘しており、「濡染取用」とは学術の切磋琢磨と思想のお互いの影響を指し、洛学の早期の発展は当代一流の学者群が洛陽に集まっていることがあったからである。

²¹⁴ 島田虔次『朱子学と陽明学』（岩波新書、初版 1967 年）、P 71。

²¹⁵ 『二程集』（北京：北京書局、1981 年）、P 332。

²¹⁶ 錢穆「二程学術述評」『中国学術思想史論叢』卷五（合肥：安徽教育出版社、2004 年 7 月）、P 110。

例えば司馬光を代表としての周りの士人の思想や主張は二程子への影響は無視できなかった。司馬光は洛陽に十五年間も住み、朔学として多くの支持者を得ていた。一人の儒学者としての司馬光は、伝統的な経学の束縛から完全に脱出してはいないが、煩瑣的な経学主義を反対した。儒学テキストに対して、「文章の言葉より、その本義を求める（不治章句，必求其理）」という考え方をもち、天道の觀念に裏付けられる道徳的世界観や伝統的な儒教思想を時代的要請に即して継承し復活させようとしていた。

二程は明らかにこの思想の影響を受け、下記のように発展した。

後之儒者，莫不以爲文章，治經術爲務。文章則華靡其詞、新奇其意，取悅人耳目而已。經術則解釋辭訓，較先儒短長、立異說以爲己工而已。如是之學，果可至于道乎？...

つまり、二程子が文章はただ伝道するための道具に過ぎないと思い、生涯をかけて「文面より根本的な「理」を求めるべき」と主張していた。また、「大学」もとは礼記の一篇であるが、司馬光によって「大学広義」として抜き出されたのである。「大学に対して新しい意義を認めた儒教の一派は程朱学である²¹⁷」と指摘されたように、程明道と程伊川がこれを受け継ぎ、南宋の朱子によって儒教の重要經典の一として分離されて今に至ったとされる。

その他に、一人儒学者邵雍も二程の宇宙観や歴史観に多大な影響を与えた。邵雍の思想の基礎になっているものは、変化の哲学と言われる「易」の思想である。彼の先天象数の学によって構成した思想原理は、二程子の理学の本流とやや外れているが、儒教の經典の「易」に関する研究は二程の啓発になったと考えられる。二程は邵雍を「風流な人豪」と称し、洛陽での付き合いが多かった。

堯夫(邵雍的號)詩：「…須信畫前原有易，自從刪後更無詩」、這個意思原未有人道來。

(『二程遺

書』卷二上)

²¹⁷武内義雄「儒教の論理」『武内義雄全集』第二卷（角川書店、1978年6月）、P42。

上記の語のように、二程子の言葉にしばしば邵雍に言及した。必ずしも邵雍の哲学を完全に賛同していないが、少なくとも二程は邵雍思想を重要視していたことが分かる。そこからいろいろ吸収し、後ほど程頤はもっぱら義理の立場から「易」の解釈を試み、『易伝』を通して自分の思想を形成した。

二程の洛学の思想体系の形成は、時代の産物であって、洛陽の地の社会や文化地盤の上に成立したと言える。したがって、陳亮（1143-1194）は『龍川文集』卷二十に「本王朝の伊洛地域に居る方々、「天理」と「人欲」についてを弁論・分析し、それで「王道」、「霸道」、「義」、「利」に関する説が明らかにになった（本朝伊洛諸公，辨析天理人欲，而王霸義利之説于是大明）」と評していた。北宋初期の洛陽の文化環境に充満した思想的な交流と衝突、例えば政治の王道と霸道、人の私欲と天理にめぐる論争など、詳解することができないが、洛学の天理哲学に大きく影響を与えたことが明らかである。

三、洛陽の風俗から二程子の価値観への影響

北宋一代に渡って洛陽の都市機能はなによりも全国の文化の中心として役割を果たした。それに相応しい自然の風景と風俗の良さがあつた。宋代洛陽の風景について、多くの記録がある。

西京千古帝王宮，無限名園水竹中。

—穆修「過西京」『穆參軍集』卷一

洛陽四时常有花，雨晴顏色秋更好

—司馬光「花庵詩寄邵堯夫」『温国文正公文集』卷四

洛陽相望尽名園，牆外花胜牆里看。

其山川風氣，清明盛麗，居之可樂。

—蘇轍

真宰無私姬煦同，洛花何事占全功？

山河勢勝帝王宅，寒暑氣和天地中。

—司馬光「和君貺寄河陽侍中牡丹」

紙幅の制限で、一、二例しか上げられないが、大雑把に纏めると山水、庭園、

花木、気候などの面から洛陽城の美しさを描写している。洛陽城は山水の景勝があり、士大夫の立派な庭園が林立し、快適な気候に恵まれて花木が生い茂る。自然環境の良さも文人名士がここに集まる要因の一つと考えられる。風景以上に美しいのは洛陽の風俗である。

洛陽の風俗について、昔からしばしば絶賛される。例えば清の顧炎武は著作『日知録』に後漢の社風を絶賛し、「夏、商、周三代以降風俗の純朴で美しいのは、東京洛陽に及ぶことができない（三代以下風俗之淳美，无尚於東京者）²¹⁸」という。清末の学者梁啓超はこの社風を「儒教の最盛期、孔子の教えの良い結果が出ている。気骨と廉恥を重んじる。気風は最も美しい（儒学最盛时代，收孔教之良果。尚气节，崇廉耻，风俗称最美）」と説明している。魏晉南北朝の混乱時代においても、「晋、宋以来、洛陽は荒れ地と呼ばれ、こちらでは揚子江以北はみな夷狄だと言っています。しかし先頃洛陽へ参り、衣冠の士族はすべて中原に集まっていることを初めて知りました。その堂々たる威儀、雲の如く居並ぶ人物は、耳と目で識ることができても、口で伝えることはできません。いわゆる「帝京翼翼、四方の則たり」です（自晋、宋以来，號洛陽為荒土，此中謂長江以北，盡是夷狄。昨至洛陽，始知衣冠士族，並在中原。禮儀富盛，人物殷阜，目所不識，口不能傳。所謂帝京翼翼，四方之則）」²¹⁹。

この伝統は北宋まで続いた。

洛中風俗尚名教，雖公卿家不敢事形勢。人隨貧富自樂，于貨利不急也
洛陽民俗和平、土宜花竹

—北宋・邵伯温『邵氏聞見錄』

卷十七

夫洛陽，帝王東西宅，為天下之中。土圭日影，得陰陽之和；嵩少瀟澗，
鍾山水之秀。……歲時嬉遊，聲詩之播揚，圖畫之傳寫，古今華夏莫比

—北宋・李格非『洛陽名園記』

以上からみると、北宋時代の洛陽風俗の特徴は詩、書など文化が盛んで、儒学

²¹⁸清・顧炎武「兩漢風俗」『日知録』卷十七（台北：明倫出版社、1970年）、P 377。

²¹⁹北魏・楊衒之（入矢義高訳）『洛陽伽藍記』卷二（平凡社、1990年4月）、P 103。

を重んずることである。当時の洛陽人の胸中に、古都に住まいする自信と余裕があったので、人に平和で穏やかなイメージを与え、町全体は風雅的な雰囲気にもまれていた。中尾健一郎が論ずるように、「後漢の班固の「両都賦」と張衡の「二京賦」にそれぞれ描かれているように、その頃より長安が人々の物欲と名誉欲にまみれた世界としてイメージされていたとすれば、洛陽は奢侈を排して質素と儉約を重んじ、名利を超越した有徳の士人の住む場所として意識されていた。両都制の下、物質的なものよりも精神的なものを重んじる文化都市としての洛陽のイメージは、「両都賦」「二京賦」言抛って既に規定されていたように見える²²⁰」。

この環境に育てられた二程兄弟、人生観から処世術まで、洛陽の文化環境に特有な気質が見出される。程氏思想システムの中核として、彼らが「理」を提唱した。哲学分野の角度から、相手には天地万物の中に、「一木一草は全て理にかなう」といい、「天理」は人間社会の最高の行為規範にし、これを解釈する封建的な倫理道徳を「天下の定理」としていた。この理想的な道徳の提唱は、洛陽の風俗の面影が連想される。

以上引用した『邵氏聞見録』に記載した洛陽の風俗について、「洛中の風俗は名教（儒教）を尊ぶことである。たとえ高官の家でも勢力を頼んで人をいじめることができない。」これはまさか洛学が提唱している「理にかなう」社会規範そのものではないか。また、「人々は貧富にもかかわらず楽しんでいて、お金や利益に対して功利的ではない」というも、洛学の「義理道徳を重んじ、金銭利益を軽んずる」基本理念と一致している。即ち、この地域の長期以来の文化伝統は二程の人生・社会・価値観に浸透し、二程の哲学を育ちあげた。洛陽人の秩序・道徳を重視し、功利を軽んじる態度は、二程の学に鮮明に映っていることが判る。もちろん、後ほど王安石が提唱する「新学」と根本的対立の一つにもなった。

洛陽で生み出され、蓄えられた文化と伝統こそが二程兄弟の思想形成に深刻な影響を与え、そして儒学復興の開幕を齎したのである。彼らはこの土地で肯定的な価値を見つけ、そして目の前に広がる自然の中に地上の名利を超越した豊かな価値を見出したのである。洛学は真理と呼ばれる「道」を追求し、それを形成・

²²⁰中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院、2012年10月）、P354。

発展させたのは、古都洛陽の歴史と文化及び自然であった。とにかく、二程の「洛学」の形成は、洛陽特有の文化環境と大きく関わっていた。洛学には洛陽の歴史、儒、釈、道との複雑な関わり及び洛陽の風俗人情、政治傾向など消し難い痕跡が残されている。

第四節 儒学復興の時代を切り開いた洛学及びその影響

宋代儒学の復興の印は宋学（理学）の成立である。これは中国思想の中でも革新的なものであり、仏教・道教と並ぶ体系的な世界観を確立したことを意味し、朝鮮および日本を含む東アジア圏に影響を与え、儒教文化圏を形成することとなる。朱熹が編集した『伊洛淵源録』は、理学の源流及び伝承の系譜を回顧し、周敦頤を発端、二程を正統、張載を補佐とした理学の道統を確立した。程顥・程頤を中心とした「洛学」は儒学復興の時代を切り開いたとも言えよう。

一、洛学の成立

前に二程思想・学術の形成は洛陽の環境と大きく関わっていると論じたが、実は洛学の成立も北宋の洛陽の地と欠かすことができない関係を持っている。岡田武彦が言うように、「韓愈もいうように、孟子没後儒教の道統は絶えたが、宋代になって漸くそれが伝承せられた。しかしそれも単なる継承ではなかった。絶学をはじめて伝承したらものが二程子であった²²¹」。儒学を非常に弱い立場から正統の学問として確立するのは、容易なことではない。洛学の確立の過程に、洛陽という地の歴史的な重み及び文化的な影響力が大きく寄与した。

まず、理学の先駆となる洛学が最初にこの地で成立できたのは、いくつかの条件が揃えていたからである。

1. 儒学を重んずる伝統

儒教のテキストが石経の形で何百年も立っていた町として、洛陽と儒学とは深

²²¹岡田武彦『宋明哲学序説』（京都：文言社、1977年5月）、P 154。

い歴史的なゆかりがある。北宋になると、全国的に見ると儒学は衰退しつつあったが、洛陽には比較的儒学を重んずる環境があった。

邵雍は洛陽に定住したことは、この町の文化環境を示す格好の例である。邵雍は少年時代猛烈に勉強し、青年時代に諸国遍歴の旅に出掛けた。一度洛陽を訪れたことがあり、自然と人情の美しさに心惹かれて、いつか住みたいと念願していた憧れの土地であった²²²。三十九才の時（1049年）、洛陽は「道」の所在地と思い、ここに定住し、儒学を教え始めた。

（邵雍）初寓天宮寺三學院……洛人爲買宅于履道坊西天慶觀東，趙諫議借田于汝陽葉縣，後王不疑、周鄉又買田于河南延秋村……嘉右七年，王宣徽尹洛，就天宮寺西天津橋南五代節度使安審琦宅故基，以郭崇韜廢宅余材爲屋三十間，請康節遷居之。富韓公命其客孟約買對宅

邵雍が洛陽で安心して住み着くために、当時の洛陽人は自発的に絶大な支援を行った。この記録から見ると、前後して少なくとも五人が邵雍に土地や住所を提供した。邵雍は最終的に洛陽に定住でき、自宅を「安楽の巢」と名付け、下記の洛陽人に感謝のお礼を表わす詩を作った。

重謝諸公爲買園，洛陽城裏占林泉。
七千來步平流水，二十余家爭出錢。

この詩によると、皆は邵雍のために、洛陽城の中に庭付きの家を買い、二十余りの世帯は先を争ってお金の支援をした。邵雍は洛陽が「道」の所在地と認定したのは、人情の温かさがその理由の一つであろう。大勢の官僚士人は邵雍に応援・寄付したのは、「儒学者に対する尊敬と親切は表彰すべき社会的な行為だと思われる。洛陽は邵雍に対する礼遇することそのものは周囲の人々の注目を浴び、（洛陽の）士人達は儒学復興運動における最も率直な態度を示した²²³」。

2. 一定な文化水準

²²²日原利国編『中国思想史（下）』（ペリカン社、1987年7月）、P13。

²²³陸敏珍「北宋時期的洛陽与洛学」（『浙江学刊』2011年第2期）、P120。

宋代の洛陽城は、唐代の里坊と市の分離制度から、里坊と市の一体化になった。里坊の住民は街路に向って居住し、街路にそって自然に市になったことは、都市スタイルの一大進化とされている²²⁴。庶民の文化生活と精神内面も大きく変わっていた²²⁵。

北宋時代の洛陽で牡丹を好む風潮が一つの独特な文化現象として、長い間注目されている。実は盛唐時代から、長安、洛陽において牡丹の観賞は既に大いに流行し、その風は宋代以降に引き継がれた。唐代は貴族の間のブームであったに対して、北宋時代になると、牡丹を好む風潮は官僚士大夫階級から庶民までの国民的な風潮になった。欧陽脩が「洛陽牡丹図」に言う「洛陽地脈花最宜，牡丹尤爲天下奇」のように、洛陽の気候は穏やかで、土壌が豊かであり、牡丹の生育に適切なので、現在でも盛んに栽培されている。北宋時代牡丹は洛陽花と称せられていたので、その流行ぶりが知られる。

洛陽之俗，大抵好花。春時城中無貴賤皆插花，雖負擔者亦然。花開時，士庶競爲遊遨，往往于古寺廢宅有池台處爲市井張幄帟，笙歌之聲相聞

— 欧陽脩『洛陽牡丹記』

洛陽人慣見奇葩，桃李花開未當花。須是牡丹花盛發，滿城方始樂無涯。

— 邵雍「洛陽春吟」

このような庶民も参加した花を楽しむ社会ブームは、今までの歴史の記録にはなかった。言い換えると、中国歴史上、宋代の洛陽で初めてこの興味深い文化現象が起こり、徐々に全国に広がったのである。宮崎市定は宋王朝について、「社会の上層には、従来の貴族に変わって、一代貴族とも言えるような士大夫階級が成立し、そこに独特な士大夫文化が繁栄した。庶民にも次第に文化が及んできて、新たに庶民的な文化の成立が見える²²⁶」と指摘している。宋代洛陽で興起した牡丹を好む風潮という文化現象は、まさに「庶民的な文化の成立」として認識される。

²²⁴周宝珠「北宋時期の西京洛陽」(『史学月刊』2001年第4期)、P111。

²²⁵内藤湖南「東洋文化史研究・近代支那の文化生活」(『内藤湖南全集 第八卷』筑摩書房、1969年8月)など詳しい論述がある。

²²⁶宮崎市定『世界の歴史6 宋と元』(中央公論社、1975年1月)、P427。

洛陽で起こった牡丹鑑賞のブームは、宋代以降従来の貴族文化に代わって庶民文化が起こってきた有力な証拠であり、知識層が拡大した印でもある。宋代の洛陽という場所は、率先してこの時代の流れを進めた文化的な先進地域であった。この特有の現象を通して、宋代の洛陽ひいては中国について少なくとも

- 1) その社会背景として、生産力は発達し、社会は一定的な安定と繁盛を保っていた。
 - 2) 士大夫階級をはじめ一般庶民階級まで、一定な文化水準を満ち、人々は美意識を有していた。
- ということが分かる。

北宋の儒学復興が最初に洛陽で行われたのは、儒学を重んずる歴史伝統と庶民的な文化の成立の、二つの条件が揃ったからである。この時代には、洛陽地域に濃厚な儒学の雰囲気があり、人々は他の地域と比べ比較的高い教養を身に付けているので、洛陽地域の民衆は二程子の思想と学術をうまく受容できたのである。洛陽という地の文化の影響力の相乗効果で、二程子の学はどんどん広がり、北宋の代表的な学説の一つ「洛学」になった。

二、新学と対抗しながら発展を遂げた洛学

錢穆は二程子の洛学を「確かに北宋理学の大成と正統になった²²⁷」と指摘している。これは歴史的な評価として勿論適切であるが、洛学が生まれからずっと主流の学術だったという意味ではない。洛学は一つ地方的な学術から主流を代表する学派まで成長した経緯には、むしろ途中でいくつかの挫折を経験し、当時の「新学」と戦いながら正統の地位を確立したのである。洛学の形成はその時代及び洛陽の文化環境ならでの産物であると言えるが、その発展と伝達も洛陽に住んでいる士人の政治傾向と繋がり、党派闘争までに巻き込まれていた²²⁸。洛陽の保守党の政治集団は終始二程子を応援し、洛学の発展に大きく関与した。

²²⁷ 錢穆「二程学術述評」『中国学術思想史論叢』巻5、(安徽教育出版社、2004年7月)、P110。

²²⁸ これに関する先行研究は何俊「王学、洛学之消長与南宋理学的開始」(『浙江社会科学』2012年5月)、などがある。

まず、二程兄弟の学術的な造詣と人柄の声望の伝達は、最初洛陽の士人の間で広がり始めたのである。例えば、司馬光と呂公著は積極的に朝廷に程顥を推薦したり、文彦博は洛陽にいる時、自分に憧れ、門下に入りたい学生を程顥の所に送ったりした。これらの一流の人物の評価は風見のように、程顥、程頤の高名を口伝えで広げたのである。

前文に洛陽の政治の影響力について、当時の洛陽は在野官僚が退居する場所と考察した。特に十一世紀六十、七十年代において、洛陽に影の内閣と言われるほど政治勢力が集まっていた。これらの人の共通点は王安石の改革に反対した保守派と呼ばれる「旧党派」が多い。二程は役人ではないが、事実上王安石の「新学」、「新法」に反対な立場で、「旧党派」の人と見られる。「洛学」と「新学」は学術上の論争であるが、まさにこのような社会背景において、新党と旧党の政権争いそのものにもなっていた。

二程子の洛学と王安石を代表とする新学は、同じ儒学の学派であるが、いくつかの相違がある。まず、王安石のいわゆる「天変恐れるに足りず、祖宗の法は足りず」のような考え方は、思い切って伝統をかなぐり捨てることを意味するので、二程子は決して受け入れられない。儒学の道統を強調し、自分を儒学の正当な継承者と自任する二程にとって、「新学」という儒学の伝統に反逆する思想には反対しなければならないものであった。

また、何よりも「目の前の利益を獲得すること」を目的とする「新学」思想の中核は洛学の価値観とは正反対であった。「興利」と「尚徳」の対立は、洛学と新学の根本思想の違いを示した。王安石が新法を実行した初期、程顥は皇帝に「説令いこの僥倖に由り、事にいささかな成あるも、興利の臣日に進み、尚徳の風浸く衰え、尤も朝廷の福に非ず」と進言した。即ち、洛学思想の価値観は「利」を軽んじ「徳」を重んじるものを中核としている。その故に、二程は生涯をかけて、新法の政策よりも新学そのものを極力反対した。

此學極有害。以介甫才辯，遽施之學者，誰能出其右？始則且以利而從其説，久而遂安其學。今天下之新法害事處，但只消一日除了便沒事。其學

化革了人心，爲害最甚。（『二程集』）

二程子は王安石の才能は認めるが、明確に新法より新学の弊害が大きいと主張していた。なぜならば、二程は社会問題を解決するために、まず人心を正しくする必要があると考え、「新学」の提唱する経済第一の功利的な価値観は社会に危害を及ぼすと恐れていた。したがって、二程は経済の発展より人々の精神が腐ることを恐れ、一生高い道德・価値基準を確立できる人間学に努めた。

かなり長い間、新学は洛学を抑えつけていた。程顥は新法を批判するために、官を辞め、洛陽に家居して講学に力を尽くした。

程顥）既不用于朝廷，……居洛幾十年，……在仕者皆慕化之，從之質疑解惑。閭裏大夫皆高仰之，樂從之遊。學士皆宗師之，講道勸義。……于是先生身益退，位益卑，而名益高于天下。（『伊洛淵源錄』卷2。）

本朝自嘉右以來，西都有邵雍、程顥及弟頤，關中有張載。此四人者，皆道學德行，名于當世；會王安石當路，重以蔡京得政，曲加排抑，故有西山、東國之厄。其道不行，深可惜也。（胡安國「乞封爵邵張二程列從祀劄」）

以上の二つの記録から、理学の基盤になる洛学は当時既に門人が多く、かなりの影響力を持っていたが、新学の弾圧で、まだ正統の地位を確立するに至っていないことが分かる。熙寧年間（1068-1077）王安石が政権を握ったとき、特彼が編集した「三経義」が科挙の根拠になるにつれて、新学は主流的な学問になった。この時期、二程の学問はすでに名高いとは言え、洛学はまだ地域的な学問流派の一つに過ぎず、朝廷が提唱する学問ではなかった。

しかし、元佑年間（1086-1094）になると、旧党が政権を握り、程頤を庶民の身分から直接に「崇政殿説書（皇帝の師に相当する官職）」に任命した。布衣（官位のない身分）から皇帝の先生への任命は極めて異例的な抜擢であった。程頤の短い政治生涯は洛学の世間に対する大きなアピールにもなった。

新、旧党の闘争はその後も二転三転しながら40年にわたって延々と続いた。

そのたびに反対派が追放され、「洛学」と「新学」の勢いが衰えたり盛んになったりし、両者の対立は定着していた。新党の政権下でたびたび洛学の書物が焼き払われ、講学が禁止される境遇までになったにもかかわらず、洛学が提唱した思想は聖人の道を示し、士大夫に支持されて粘り強く生き残り、逆境にても成長した。小島毅は「広汎な士大夫の支持を得ていたことが、南宋における道学興隆の背景にはあった²²⁹」と指摘している。

程頤の晩年にうけた弾圧の後、洛学は次第にその勢力を回復し成長していく。「程門立雪」で有名な門弟楊時（1053-1135）が重要な官職につけ、反新学の旗として洛学の宣揚に努めたのである。南宋に入り、皇帝の責任を軽減するために、亡国の原因をすべて王安石の改革と蔡京権謀を弄することにした。洛学は反新学のホープとしての位置を獲得したのである。また、奸臣の秦桧も新学の支持者なので、新学は南宋士人によって唾棄され、ほぼ完全に消滅した。これも王安石の強力な中央集権志向及び経済至上主義とも言うべき政治姿勢に反発を齎したものであろう。一方、二程の洛学は代々引き継がれ、ついには朱熹によって大成された。

以上のように、北宋理学の正統的な地位としての洛学の確立は、新学との対立の中に新学を批判、排斥などを通して漸く大成したのである。新学に対抗して道学が形成された過程において、東京開封と対峙する西京としての洛陽の位置づけは重要な意味があり、重要視されなければならない。

三、洛学の伝承と影響

二程子が打ち立てた洛学が宋明の性理学の基礎になり、中国哲学史の上で重要な地位がある。内藤湖南も「濂洛の学、北の気運を牽て、而して之を南に渡し、朱陸の義、務め精微に在り、以て朱明に及で餘姚の直截一派を出すに至る²³⁰」と指摘していた。二程の後、宋代の朱熹、陸九淵、明代の王陽明まで、二程子によって開発した方向に発展してきた理学は、宋代以降の長い中国封建社会の理論の

²²⁹小島毅『中国の歴史7（中国思想と宗教の奔流）』（講談社、2005年7月）、P212。

²³⁰内藤虎次郎『内藤湖南全集』第一巻、（筑摩書房、1970年9月）、P20。

基礎と精神的支柱である。

1. 洛学の伝承

そもそも洛学の興起は、二程子は孟子以降断絶したと言われた聖学の復興を提唱し、儒教の道統を自覚に持っていたことに帰することができる。二人は「知者多也即道明、知者少即道不明。知者多少、亦由乎教也」の言葉の通り、教えることを重視していた。洛学は最終的に「新学」を圧倒し、南宋の理学思想の源流になった。それには、二程の門人弟子が決定的な役割を果たしたのである。二程は嘗て「天下の中心」とされる洛陽で何十年も講学をし、多くの学生を教え、優れた人物が輩出した。洛学は最初の地域の学派だったが、実際の地域を大きく超えて、全国範囲の士人を引き付けた。自身の学術的な魅力は勿論、四方に対して、洛陽の位置の便利で中央的な地理条件の助けで、洛学の影響も拡大しやすかった。洛陽に集まった門人たちはそれぞれの所に戻り、洛学の発展と伝承のカギになった。

全祖望が『宋元學案』に言うように

洛學之入秦也，以三呂；其入楚也，以上蔡司教荊南；其入蜀也，以謝是、馬捐；其入浙也，以永嘉周、劉、許、鮑數君；而其入吳也，以王信伯。

すなわち、洛陽で発祥した洛学は、門人たちは二程子の門下で二程の学問を習得して洛学の思想を継承し、さらに全国各地で講学や著書を通して伝道していた。陸敏珍は当時開封の官員や太学生たちは洛陽に行き、二程子の門下に入る例を考察し、「二程子の弟子は中原、河東、蜀中、関中、呉越、湖湘、闽贛などの地域にたくさんあり、洛学は地域の学派として、地理の範疇を越え、大量の士人を洛陽に引き付けた。その一方、洛陽の学術中心として地位も二程子の学説の影響で一層固めた」²³¹と指摘した。

洛学の形成当初から確立まで、最初の「世の中に嘲笑する人が多かった（天下駭笑者多）」から、漸く「後をついていく人が多い（信叢者亦衆）」までになった。

²³¹陸敏珍「北宋時期的洛陽与洛学」（『浙江学刊』2011年第2期）、P122。

洛学の広まりと二程の伝道の方式にも大きく関わると思われる。「我ら兄弟が道学を倡明した」と自負した程顥、程頤は、その門弟たちを道学の継承する立場に置いた。そのため、二程子は文書より、対面式で直接門人に伝える方式を主な伝道方式としていた。

以書伝道、與口伝道，然不相幹。相見而言，因事發明，則並意思壹時傳了；書雖言多、其實不尽（『二程遺書』）

この「口によつての伝道」、つまり学生一人一人と直接交流・指導する教育法は二程特有の伝道方式であり、洛学の伝達の特徴でもある。洛学のブームは洛陽周辺に学院の林立を呈し、例えば伊川の鳴臯書院、登封の嵩陽書院など、皆二程子の高名により盛んであった。

平生誨人不倦，故學者出其門最多，淵源所漸，皆爲名士（『宋史』道學卷1）

これらおおぜいの門人によつて、洛学は一つのまとまった勢力を持つ学派が形成されたのである。門人達は二程の没後も、師道を重んじ、南宋において、二伝弟子、三伝弟子を通してさらに広げていた。朱熹の道統についても、李侗、羅從彦、楊時、二程子までの溯求が明確に認められる。

迄宋南渡，新安朱熹得程氏正傳，其學加親切焉。大抵以格物致知爲先，明善誠身爲要，凡《詩》、《書》，六藝之文，與夫孔、孟之遺言，顛錯于秦火，支離于漢儒，幽沈于魏、晉六朝者，至是皆煥然而大明，秩然而各得其所。此宋儒之學所以度越諸子，而上接孟氏者歟。（『宋史』道學卷427）

洛学そのものだけではなく、二程子の対面式教育方法及び書院という講学方式も門弟に継がれていた。金人の侵入で、洛陽開封が陥落し、書院がほとんど破壊されたが、南の方で洛学の後継者たちが各地で学院を開き、講学で洛学を宣揚した。例えば楊時は「東林書院」、「龜山書院」などを創立し、朱熹も書院での講学に力を入れた。方彦寿の考察によるよ、朱熹と関わりのある書院は67か所もあ

る²³²という。したがって清の学者江藩は「夫道學始于濂溪而盛于洛、閩、自龜山（楊時）辟書院以講學，于是白鹿、鵝湖相繼而起」と言及した。

とにかく、洛学という思想体系自身の価値は勿論、二程子の伝道方式、門弟の積極的な伝承なども洛学の展開に力添えをした。二程の門人に優れた者が輩出し、洛学は北宋時代既に洛陽を中心に全国各地に広がり、南宋時代にしっかりと花を咲かせた。二伝三伝して南宋の朱子に至るや、禅の流行が阻止せられて、儒学が時代の主流となった。

2. 二程子思想の影響

二程子の洛学は後世、宋学特に理学の開幕として高く評価されている。「理」とは、各事物の個性を際立たせる原理であり、またこの世界の秩序のネットワークを前提としているものであった。ものには必ず理があり、各個のものの表象はそれぞれであるが、理は究極的には一つである。理の追求は「格物」という。つまり「凡そ一物上、一理有り。須く是れ其の理を窮め致すべし（『程氏遺書』十五）」という。

二程兄弟は北宋の思潮を総合化し、士大夫の生き方に指針を与える世界観、人生観を作り上げようとした。儒学の用語で「修己」と「治人」を統合し、「人は誰でも道徳的に至善立ちうるとされる反面、その道徳性が人の本質とされることによって、その自己実現のためにいわゆる道学的リゴリズムが生み出されることになった²³³」。それは中国における独特の思想体系と言ってよく、長く人心を支配し、あらゆる方面にその影響を及ぼしたので、宋明の理学は二程によって創設せられたことになる。

二程兄弟は、「性即理」とし、性理を学の宗旨としたという点では同調であったが、理と気、気と性、性と心などについての見解には差異がある。馮友蘭をはじめの学者は

²³²方彦寿『朱熹書院奥門人考』（上海：華東師範大学出版社、2000年7月）に詳細な考察がある。

²³³戸川芳郎など『儒教史』（山川出版社、1987年7月）、P 263。

謂明道乃以後心學之先驅，而伊川乃以後理學之先驅也。兄弟二人開一代思想之兩大派，亦可謂罕有者矣。(程顥は後の心學の先驅者、程頤は後の理學の先驅者となり、兄弟二人で一代思想の二大流派を切り開くことは、極めて稀である)²³⁴

と指摘し、その歴史的意味の大きさに注目した。後学に理学派と心学派の別が生じたが、その源を溯れば二程より発するといっても過言ではあるまい。

二程兄弟の性格気性の相違は二人の世界観に差異を生じた一因と考えられる。例えば二人ともに門弟への伝道を重視しているが、現代まで残されている諺から二程の異なった学風がわかる。朱熹の『伊洛淵源録(卷三)』に「明道(程顥)は座れば泥人形のようにあり、人に接すれば一団の和気があった(明道終日坐、如泥塑人、然接人渾是一團和氣)」と言い、門人は明道と会見して一ヶ月後、その感想を「春風の中で坐っていたこと一ヶ月」と言った。「一団和氣」、「如坐春風」の言葉と対照的に、「程門立雪」(雪の中、程門に立つ)という諺は程頤に関するものであり、「尊師求学」の気持ちを形容している。師を敬い真心から教えを求める雪に立つ門人の姿だったが、程頤の厳格な教え方が判る。岡田武彦は二程子の性格と学問を次のようにまとめた。

二程兄弟の性格気性の相違が学風に反映した。明道は現実の人生社会を見るに、矛盾葛藤の面より親愛温和の面に注目し、高い立場からすべてを包み生かす道を求めたので、その学風は全体的、経験的であり、物事に対して寛容であった。伊川は反対に、矛盾葛藤の面に敏感で、至高至純な理想を立てて厳しく対処しようとした。その学は分析的、主知的で、物事に対しては厳格であった。²³⁵

朱子学は修身齐家を治国平天下の要とする。その道德第一義的な傾向は、朱熹は自分の学の源として、『伊洛淵源録』を編んでおり、これが朱子学と共に広く流布した。性即理を提唱し窮理によって天理に帰すべしという思想は朱子学の根

²³⁴馮友蘭『中國哲學史』(北京：中華書局、1961年)、P 876。

²³⁵岡田武彦『宋明哲学序説』(京都：文言社、1977年5月)、P 155。

幹となった。朱熹は二程の主要な理論を融合させ、性即理説を唱えて『中庸』の「道問学」を主とし、漸く理学を大成したとされる。

一方、朱熹と同時期の陸象山（1139-1192）も格物窮理の学を説いたが、『中庸』の「尊道性」を主とし、心即理として心学を提唱した。陸象山の心学の傾向は既に北宋の程顥の思想に見受けられ、唯心論の由来は程顥の心を重んずる思想系統からなり、宋の時代は盛んではなかったが、明の王陽明によって大成された。

結び

陳寅恪に「華夏民族の文化は数千年の変遷を経て、頂上を極めたのは宋代であった²³⁶」と評するほど、宋代の文化はこれまでずっと重要視されている。この時代の最も重要な文化的な特徴は、儒学の理学という新しい形での復興であった。その源を辿れば二程子は洛陽で洛学を作ったことまで溯ることができる。本稿は洛学の生まれ及び伝達、確立する経緯と洛陽の風土との関係を考察、分析してみた。

二程子は長期に北宋の文化中心の洛陽地域に生活し、講学していたので、洛陽の歴史・文化伝統から影響を受け、さらに伊洛に集中していた諸儒の学を摂取し、格物窮理という主知的工夫と、居敬存養という実践的工夫を併進する洛学を創設したのである。二程子を源流し、朱子によって大成され、理学は新しい時代を切り開いたと言えるほど深遠な意味を持っている。北宋の文化中心洛陽という地理空間を中心に、洛学の形成、発展及び伝達などと洛陽の風土（地望、政治情勢、風俗など）との間に、因果関係と相乗効果がある。理学の幕を最初に洛陽で開いたのは単なる偶然ではなく、時代と歴史の産物とも言えるという結論を得た。儒学の復興は北宋時代における洛陽の最も注目すべき文化表象であると同時に、一歩先に時代の流れをリードし、儒学の新たな時代を作った。

²³⁶陳寅恪「鄧廣銘〈宋史職官志考證〉序」、『陳寅恪先生文集』第2巻、（上海：上海古籍出版社、1980年）、P 245。

終章

第一節 研究の結論

古都の現代社会における理想な在り方を求めるために、本論文は近年の中国の都市建設、特に古都洛陽の現状と問題から着手し、京都のケーススタディを先行研究にした。この研究動機のもとに、文化力による都市再生の啓発を受け、洛陽の発展の源となる「洛陽の文化」の在り方とその価値を究明することを目的に研究を展開した。その結論を以下に要約するとともに、若干の考察を記しておきたい。

一、没落した歴史都市（特に古都）の発展原動力の提示

中国の経済が急速発展の時代に入り、「世界の工場」から「世界の市場」に転換しつつある。グローバリズムの進展により世界の画一化に向けた流れが加速する中で、中国の都市建設は、地方官僚が行政成績と経済効果ばかりを追求し、都市の持つ独特な気質を失ってしまった。歴史と文化の資産として後代に継承されるべき古都洛陽も、経済の発展とともに、連動した過度な土地開発、産業と生活の汚染などさまざまな問題に直面している。特に都市建設の代価として、歴史的な風致の破壊や生活スタイルの変化により歴史との繋がりが断絶する恐れがある。

本論では、中国の古都洛陽の都市建設の現状から問題を感じ、日本の古都京都の発展の経緯を研究した。京都の地理環境、気候など自然条件、特に文化の基盤と洛陽と非常に似ているので、京都モデルは洛陽にとって非常に現実的な意味がある。

京都の遷都の衝撃から復興の歩みを回顧しながら、京都の発展の原動力について考えた。京都の復興は、その結果、文化の力が京都再生の原動力であるという認識ができた。目の前のことへの注目や未来への展望は重要だが、歴史を忘却することはいけない。現代文明を理解し、その行方を考えるのに、今までの歴史の軌跡と文化の意味への深い理解が絶対必要となる。京都の文化は日本の「和の文

化」の発祥の地として、和の文化を代表する文化である。先人達が築いてきた豊かで誇り高い歴史と文化が、この地域に住む人々の生活の礎となり綿々と息づいている。京都の環境、産業、観光、生活までに至るすべてが京都の文化という源泉より力を得ている。この源がなければ、京都はここまで発展できないし、たとえ発展しても日本人の心の故郷にはならない。

要するに、京都モデルの真義は、再生不可能な歴史文化資本を都市発展の源として位置付け、優れた文化環境の構築によって、文化の力で各領域の連動を推進し、発展を実現することにある。文明が発展する過程において、各時代の文化が集中的に表われている場所は各時代（各王朝）の中心であり、古い都は各時代の文明の目印と言われ、それぞれの文化を持っている。京都モデルは歴史都市（特に古都）の大きな方向性と可能性を示した。

二、文化表象を通じた洛陽の文化の在り方の究明

京都モデルは洛陽の文化力による都市再生の方向を明確に示した。しかし、文化というあまりにも抽象的で・複雑な内包のある定義に対して、洛陽の文化を一言簡単に説明できない。本論文の「洛陽の文化」とは、「文化」に「洛陽」という特定地域を加え、二つが融合して形成される固有の価値を称するものであり、当時の洛陽に住む人や関連する人々の智識、道徳、趣味等を基礎として築き上げられたものを指す。文化表象というさまざまな文化現象を横断的かつ自由に考察できる概念を論文に取り入れ、文学作品や文化現象に反映している洛陽の時代像を分析・考察し、文化的な表象をその本質的な特徴として捉えるようにアプローチした。

表 7：洛陽地区首都所在期間表²³⁷

王朝	洛陽の首都（政治中心）期間
二里头文化遺跡（夏王朝？）	前 2000－前 1600 年

²³⁷出処は気賀澤保規編『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』（汲古書院、2011年3月）、P27。

偃師商城（殷の亳・西亳？）	前 1600－前 1300 年
東周	前 770－前 256 年
後漢	後 25－190 年（190 年に董卓に陥落）
曹魏	220－265 年
西晋	265－311 年（311 年に前趙劉聡に陥落）
北魏	495－534 年
隋	604－618 年（煬帝治世）
唐	武周期 690－705 年（前後を包含 682－706 年） 安史軍（大燕）支配 755－757 年・759－762 年 904－907 年長安から遷都（朱全忠）
五代・後梁	907－923 年、汴州（開封を東都）、洛陽を西都
五代・後唐	923－936 年、洛陽に首都機能復興の試み
五代・晋・漢・周	936－960 年首都を開封、有司摂事を洛陽
北宋	西京（分司）、洛学（宋学）の地
洛陽期間	計 1600-1700 年

上記の統計から見ると、中国史上最初の権力の中核となるであろう「二里頭文化」の出現以来、洛陽は絶えず政治（権力）や文化の中心地と意識され続けた。本論は歴史を軸に、王朝の交代だけではなく、社会・文化の変革を考慮の中に入れて、先秦時代から宋代までの歴史を五つの時代に区分し、それぞれの特徴を下記のようにまとめた。

①先秦時代：天下の中心

中国の長い歴史のなかで、秦は画期的な意味をもっている。古代から紀元前 221 年までは先秦時代と呼ばれ、先秦時代の歴史を究明しようとする場合、洛陽あたりの地域は要となる存在であり、その歴史と文化に触れずに中国古代文化の話は語れない。重要なポイントとして、先秦時代において洛陽の文化表象は天下の中心を象徴するようになっていた。洛陽を先秦時代の天下の中心とされる要因を分析・解明してみた。それは洛陽の地理環境と政治的な意図と大きく関わる。

洛陽地域は盆地の中心部の平原であり、呼び方と都市範囲は先秦時代において度々変更があるが、全体的に洛陽と呼ばれ、中国の文明の発祥地である。周王朝は洛陽地域を天下の中心として都を建てたことは洛陽が天下の中心とされた原点となる。そのため、洛陽は高い文明や王朝の正統性を象徴するイメージを形成した。

洛陽の「天下の中心」という文化的なイメージ、農業文明を中心する時代や、陸運を主要交通手段とする時代など、長い間に影響は続いた。先秦時代以降の多くの王朝は、ここに都を定めた際、現実的な理由以外に、「天命」や「正統」を象徴するイメージも大きく働いた。

②両漢（特に後漢）時代：礼儀道徳

中華文明史における両漢 400 年間の時代で最も重要な特徴は、儒教が国家の教学として認定された事である。最初前漢の都が洛陽に置かれ、すぐに長安に移転したが、洛陽を最重要な経済都市として位置づけた。後漢になってはじめて洛陽を都にし、礼制を象徴する建物の建築や太学の設立、白虎通会議を以て、儒教国家の成立を示した。漢の代表的な文学様式である賦の都邑賦は、この歴史文化の変遷を鮮明に反映している。当時の都洛陽は儀礼制度が整備され、道徳教化が実施されていることに注目され、一連の都邑賦によって、礼儀道徳を象徴するイメージが築かれてきた。

漢賦の代表的な作品「両都賦」の解説を通して、後漢時代において「道徳の富」と言われる洛陽が持っている文化表象を考察した。班固が作った「両都賦」は、主旨を明らかにする「序」、長安の立派さや豪奢さを表現する「西都賦」、及び洛陽の礼楽制度を呈示する「東都賦」三つの部分からなる。洛陽の礼制による儉約道徳は、長安の節度のない豪奢よりはるかに素晴らしいという結論を出した。「両都賦」によって築き上げた洛陽の礼儀道徳のイメージの背後に、統治者から実施された礼楽制度の回復を目的とする国策、および太学などによる儒学教育の普及の歴史背景がある。制度と教育の相乗効果として、社会全体の文化道徳が豊かに

なり、後世の史官や学者が、世の気風を論ずる時、都洛陽を代表する後漢時代の士風を高く評価している。

両漢時代、洛陽は交通の中心で軍事上優れた環境を持ち、依然として「天下の中心」の象徴であった。その上に、礼制復興や文徳を重視する政治環境など、各要素が連動して、洛陽に代表される文化象徴に礼楽制度と道德教化の要素を加え、礼儀道德の象徴になった。

③魏晋南北朝時代：文化の融合

魏から隋までの400年近くの時間に30以上の王朝があらわれ、中国史上政権交代のもっとも頻繁な時期である。漢と隋唐の間にあり、異民族に侵入され、権力が不安定で長い分裂がつづいた時代なので、社会秩序と政治制度から見ると暗黒な時代とされる。しかし、文化の視点から見ると、統一国家の桎梏から解き放たれた自由な精神が見られた時代でもある。この時代の渦の中心位置にある洛陽は、最も戦争の被害を受け、文化的な衝突が最も激しかったが、奇跡的に何度も復興し、多くの新しい文化を生み出した。魏晋南北朝のほとんどの文化事象はなんらかの形で洛陽に淵源があり、「自覚の時代」と呼ばれる文化の飛躍も最初にここから始まったのである。

本章は洛陽城の魏晋南北朝時代の歴史変遷を振替えながら、思想、民族、宗教の三つの面から、融合する時代の実態と意味について探ってみた。思想の融合する面では、儒学思想の隆盛から衰退へ、仏教の論理性の影響から学問として深化し、老荘思想を以て経伝を解釈する玄学が成立し、「魏晋風流」と言う時代精神も形成した。民族が融合する面では、民族移動による接触・抗争とともに融合も進行し、孝文帝時期は一つの到達点と見られる。宗教の融合する面では、儒、釈、道三教の対立、時には激しい衝突さえあったが、融合する趨勢が見られる時期である。このような文化の融合は具体的に玄学の誕生、楽府詩、『洛陽伽藍記』に描く北魏洛陽城などの事象によって裏付けられる。

魏晋南北朝時代の洛陽の文化表象も融合する文明そのものであり、変動と共に

融合する趨勢が貫いている。思想、民族、宗教それぞれの融合を通して、この時代は後の隋・唐帝国の下地を用意し、漸く中華文明の新境地を作り出した。

④隋唐時代：文化的アイデンティティ（文化の帰属感）

魏晋南北朝に始まった文化の融合は、隋唐時代、特に唐の時代に華麗な花を咲かせ、中国史上の全盛時代と言える絢爛たる光輝を放った。詩の黄金時代の唐代において、洛陽が詩作中に頻繁に現れていることは、その社会に特有の文化現象であり、洛陽が当時の文化人に特別に注目・意識されていたことを意味する。例えば、若い頃に洛陽に楽しんだが、安史の乱によって洛陽を国として認識した李白や、洛陽の出身だが、故郷の喪失によって初めて洛陽を故郷として意識した杜甫、また一生洛陽へのトポフィリア（愛着的な情緒）を持っていた白居易など、唐代の代表的な作品と詩人を取り上げ、唐代の士人達の洛陽に対する感情の軌跡を探究した。

初唐・盛唐期の唐詩が構築した洛陽のイメージは、大体三つに纏めることができる。王権と象徴する帝都のイメージ、華やかな大都市のイメージ及び郷愁のイメージである。これらのイメージは文化的アイデンティティの具現であり、その根源は洛陽の歴史に溯ることができる。洛陽は幾つかの王朝の旧都であり、従来から経済活動が活発で、華北や江南からの物資の集散地として栄えた繁華の地であった。一方、異民族の侵入によって破壊され、衣冠文化は南へ遷移しても士人の心の故郷として長く思われ続けた。

アイデンティティは歴史や文化伝統に緊密に関連するのみならず、現実の変遷も反映する。洛陽の文化的アイデンティティも、歴史の発展と共に修正され、新たな形成と展開が見られる。安史の乱の刺激で洛陽の文化的アイデンティティは大きく際立ち、李白、杜甫の作品から表現された洛陽は「家」、「国」を象徴するようになった。中唐期に、白居易をはじめの文人集団の洛陽の暮らしは、洛陽に風雅、詩的なイメージを加えた。さらに、晩唐の動乱時期において、「家」、「国」を象徴するものの延長として、彼らの作品での洛陽は王朝隆盛期の追憶対象や懐古の対象になっている。

唐代詩人の眼に映っている洛陽のイメージを考察・分析し、洛陽が持っている文化的求心力、即ち文化的故郷のようなアイデンティティを明らかにした。唐代洛陽における洛陽の文化表象は、漢民族の文化的な帰属感の表れであった。

⑤宋代：儒学の復興

多くの先行研究は、宋の時代を中世・近世の一大転換期として、宋を中国におけるルネサンスの時代として位置付けた。この時代の最も重要な文化的な特徴は、儒学の理学という新しい形での復興であった。その源を辿れば二程子が洛陽で洛学を作ったことまで溯ることができる。洛学の形成及び伝達、確立する経緯と洛陽の風土との関係を考察、分析した。

新しい儒学の興起と発展は、当時の文化中心西京洛陽と密接な関係があり、その源流は洛陽という地域で生まれたと言っても過言ではない。周公の「制礼作楽」から後漢の儒学復興まで、洛陽地域の儒学の歴史が長く、その基盤は強固なものであった。一方、魏晋時代において、この地で老荘思想が圧倒的に盛んになり、玄学思想まで形成された。また、中国の最初の佛教の伝来の地として有名で、北魏仏教都市であった。魏晋南北朝から唐まで、儒、釈、道の三教合流の文化の融合を経て、宋代の西京洛陽は文化中心として、文化環境は更に豊かになり、一流の文化人が集まっていた。長期にわたりこの地域に居住し、講学していた程顥、程頤兄弟は洛陽の歴史・文化伝統から影響を受け、さらに伊洛に集中していた諸儒の学を摂取し、「格物窮理」という主知的工夫と、「居敬存養」という実践的工夫を併進する洛学を創設したのである。

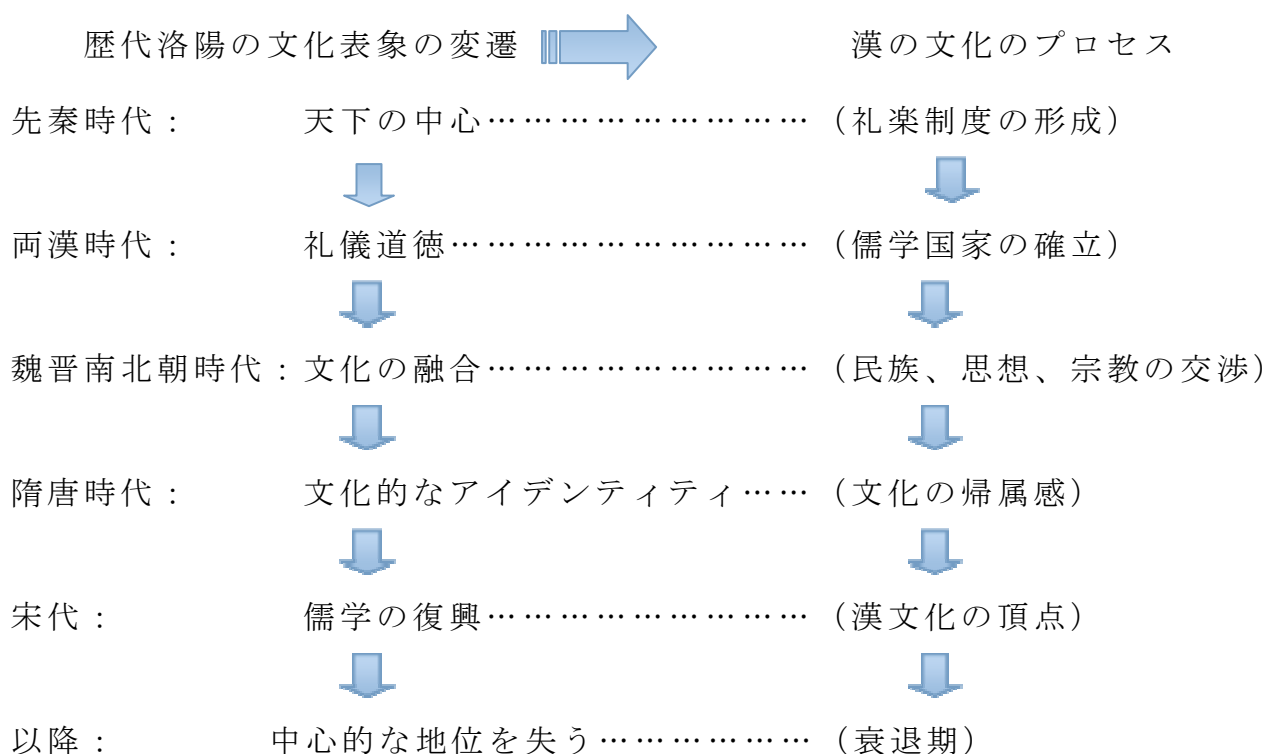
洛学は一地方的な学派から、全国的拡大、確立するプロセスは、ちょうど新法・旧法が争う時期に当たった。洛陽は旧法党の拠点として、洛学も政治的色に染められ、王安石によって新法と呼ばれる改革の新法・新学との対立の中で成長した。また、洛学の伝達、伝承も、この過程において、文化の中心地西京洛陽として、東京開封と対峙するその位置づけは重要な意味がある。洛陽の風土、地望、政治情勢、風俗などが相乗効果を生み、北宋理学の正統的な地位として確立したのである。

理学は洛陽で生まれた二程子の洛学を源流し、後に朱子によって大成され、新しい時代を切り開いたと言えるほど深遠な意味を持っている。宋代、儒学復興の幕を最初に洛陽で開いたのは、単なる偶然ではなく、時代と歴史の産物とも言えるという結論を得た。

三、「洛陽の文化」の価値の明確化

以上、時代順で洛陽の文化表象を通して、それぞれの時代の洛陽文化のあり方を明らかにし、洛陽がしっかりと時代に根を張っている様子を感じ得る。この地は 4000 年に渡る中国王朝史の 4 分の 3、紀元前 2000 年から紀元後 1000 年までの 3000 年を超える長い期間、歴史の枢要あるいはそれに準ずる位置を占めていた。文化は空間性を持ち、風土的な特性を持っているので、この地域を背景とした時間と空間を交えて生成した文化表象の多くは、実は時代より一歩先に文化を発信し、中華文明の核心的部分—漢文化の発展と変革を生み出した。洛陽自身も中華文化史において、深い象徴的な意味を持つ文化記号と見做すことができる。

図 5：歴代洛陽の文化表象の変遷イメージ図（筆者作成）



周公によって「洛邑の造営」と「制礼作樂」はほぼ同時に完成し、後漢洛陽の太学を通して儒学が確立し、魏晋南北朝の民族・思想・宗教が融合して、唐代の文化が飛躍的に発展したが、安史の乱で漢民族の意識が喚起され、ようやく宋代に洛陽で儒学復興の幕開けが実現され、漢文化の頂点に達した。その後、洛陽は元の侵入によって文脈が切断され、再び歴史の中心舞台に戻らなかった。そして漢文化も衰退期に入った。このイメージ図からわかるように、各時代の中国文化史の流れは濃縮して洛陽の文化表象に反映していることが分かる。特に漢文化の核心的な部分の動向が、ほとんど洛陽で実現したことは単なる偶然の合致とは考えられない。すなわち、各時代の洛陽の文化表象はそれぞれの時代の本質につながり、洛陽の文化自身は中華文化の漢の文化の核心的な存在である。

一般的歴史記述は歴史の進展を中心に描くものであり、このような歴史の記述では、長く続く安定な王朝の都について焦点が当てられている。これはその時代の歴史文化の研究には勿論好都合の材料であるが、歴史全般の研究或いは文化の流れの研究にとっては限界がある。長安、北京、南京のような都の歴史はそれぞれ中国歴史の一部であり、中華文明全体的な変遷と発展を掴むのは困難なことである。こうした意味で、中国のような古文明大国の、ある程度一貫したまとまりの洛陽の歴史を究明する意味は大きい。つまり、洛陽の文化の最大な価値はひとつの空間を通して、古代から近世までの中華文明を見渡すことができる。

前述したスロスビーの「文化資本」理論は、文化資産、文化現象、文化活動等の一切を含みながら、社会経済的に価値のある財としている。洛陽は今までの歴史などの要因で、有形文化資本がかなり破壊された状況である。無形文化資本として「洛陽の文化」、およびその中華文明の軌跡を通観できる価値を明確に認識することは、疑いもなく洛陽の文化力の向上につながる。漢族というのが、長い歴史の中で周辺少数民族、さらには周辺国家が絶えず融合してきた結果であり、血統の概念より文化的な概念である。この意味では、漢の文化を代表する洛陽の文化という認識の確立によって、洛陽の文化価値が一層際立つことになる。

第二節 研究の成果と今後の課題

一、研究の成果

これまで洛陽に関する夥しい研究の大半は歴史の究明や遺跡・文物の考古的な考察である。例えば比較的新しい著述をみると、中尾健一郎の『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院、2012年10月）は唐宋時代に洛陽と関わった文化人を中心、塩沢祐仁の『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』（雄山閣、2010年1月）、郭引強の『洛陽大遺跡研究與保護』（文物出版社、2009年10月）、趙振華の『洛陽古代銘刻文献研究』（三秦出版社、2009年12月）は遺跡・文物を中心、張乃翥、張成渝の『洛陽輿糸綢之路』（北京図書館出版社、2009年8月）、邵如林『糸路起点看洛陽』（崑崙出版社、2008年4月）はシルクロートを中心、王貴祥の『中国古代建築知識普及與傳承シリーズ叢書：古都洛陽』（清華大学出版社、2012年7月）、陳燕妮の『居住的詩篇：論唐詩中的洛陽都市建築景觀』（人民出版社、2011年9月）洛陽の建築景觀を中心とするなど、洛陽に関する研究の現状である。洛陽の文化に関する研究はまだ不十分であり、洛陽の一つの歴史時期・時代の文化現象、あるいは具体的な個別な文化要素に集中している。2010年日本で開かれた明治大学主催の「洛陽学国際シンポジウム」もこの傾向が見られる。

現時点収集できる洛陽の文化を中心とする総括的な研究は、趙金昭の『洛陽文化と洛陽經濟』（中州古籍出版社、2001年9月）と史善鋼の『河洛文化源流考』（河南人民出版社、2009年12月）のみとなる²³⁸。本論文は先秦時代から宋までの洛陽を巨視的に捉え、一貫性を持っている文化表象という概念を通して、洛陽で発生した文化現象や事象を全面的・総合的に考察、分析、評価した。これはある意味で、洛陽の文化に関する研究分野の空白を埋めたと考えられる。洛陽の文化中華文明の核心的な存在であり、その価値は中華文明の軌跡を通観できるという結論も現実的な意味がある。

²³⁸『河洛文化源流考』の著者史善鋼は、「河洛文化とは、古代黄河と洛水合流する地域の物質と精神文化の総合」と定義し、河洛文化は洛陽文化を含む、より広い概念としている。また、「洛陽文化地理論綱」（『西北史地』、1993年第2期）があるが、入手できなかった。ほかに洛陽の一文化現象に関する論文なども発表されているが、文化に関する系統的な論述はなかなか見られない。

二、今後の課題及び研究方向

以上、本論文の研究成果は、各変革期の洛陽の文化表象を明確に示し、そのあり方が中華文明における漢文化の核心的な存在であると結論づけた。さらに、洛陽の文化の最大の特徴は、中華文明を通観できる場所ということにある。洛陽はそれが可能な唯一の地域であり、世界に発信すべき使命がある。ここで、本研究の当初の目標を達成したと考えられるが、最終的な目標のための第一歩に過ぎない。京都の例にみられるように、優れた文化環境の構築によって、その力を最大限に引き出し、各領域の連動を推進して洛陽の発展を実現することが最終目標である。

京都モデルは洛陽の都市再生に大きな可能性を提示したが、簡単に成し遂げられるものではない。戦後の京都の発展もいくつかの段階を経験した。京都タワーのような文化人の主導する時期（昭和三十年代）、景観保全の高揚期における行政主導の時期（昭和四十、五十年代）、現在まで続く市民主導の都市建設論争の三つの段階に分けることができる²³⁹。本論は都市再生の基盤である洛陽の文化を明らかし、それは大きな前進と考えられるが、本当の再生・復興まではまだ道が長い。

洛陽の都市再生をいくつかの段階に分けるならば、現在は文化人が主導する時期に当たる。本論も含め、学者や文化人の洛陽に関する研究・究明は、人々の洛陽の歴史、文化に対する再認識に役立つ。都市再生の実質的な進展は、政府や地方行政の参入がないと実現できないので、今後の課題は洛陽の文化環境の構築に関する問題である。今後の洛陽の都市建設に対して、本研究の結論を利用し一つ実現可能な構想を建言することが可能である。

具体的に言うと、現在の洛陽の都市計画は、歴史文化資源を利用する意識はあるものの、すでに述べたように、麗景門のような問題が多く発生している。確かに、すでに分析したように、現在の洛陽市内の有形文化資源は限られ、古都のイ

²³⁹大西国太郎『都市美の京都(保存・再生の理論)』（鹿島出版会、1998年4月）、P 5-6 参考。

メージには大きな格差がある。同じ古都の北京は明・清を、長安は漢・唐を、南京は六朝をセールスポイントにしているのに対して、洛陽の歴史が長くて複雑で、宣伝すべき文化の要素が余りに多いため、特徴的なものが足りない。明確な歴史的な位置づけがなく、観光客に鮮明な印象を与えないので、洛陽は長い間に苦しい境地に置かれている。

しかし洛陽周辺では、洛河沿岸の東西 30 km も満たさない範囲内に、二里头遺跡、偃師商城、東周王城、漢魏故城、そして隋唐洛陽城の 5 つもの大型遺跡が分布し、「五都会洛」（五つの都城が洛陽にあつまる）とも称されている。これは歴史・考古分野の専門家に高く評価されているにもかかわらず、一般の人に知られていない。これらの大型遺跡・古墓葬・大型古文化遺跡などは、遺跡公園化が進んでいるが、散在しており、明確なテーマがなく、一般の観光コースにも入っていない。

図 6：洛陽五大都城遺跡見取り図

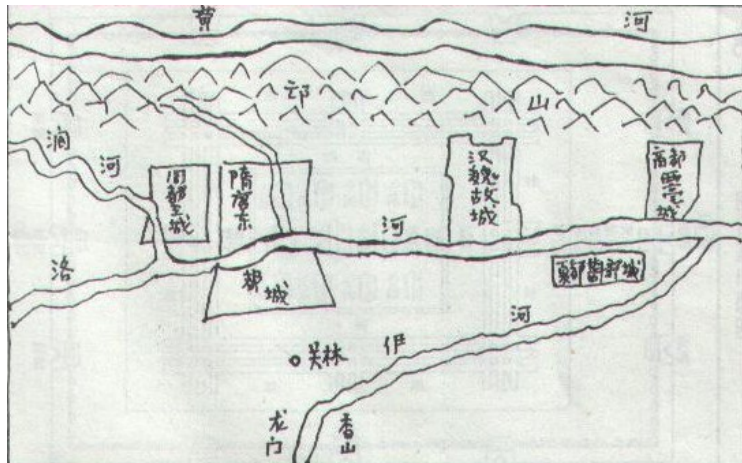


図 7 : 二里头遺跡発掘現場写真 (2010年4月7日、洛陽市宣伝部)



都の遺跡がこれほど密集し、しかも文化的関係が強く、長い時期に跨るのは、世界においても稀な例であり、連綿と続く中華文明の軌跡を探るフルコースを設置すべきである。この実質上眠っている文化資源と本研究の結論をどのように結び付けられるかは、興味深い課題となる。洛陽の位置づけは個別の王朝から抜け出して、中華文明をより高い視点から俯瞰することが可能である。即ち、中華文明、特に漢文化の最も重要な時期の歴史的・文化的な特性は、四千年前の夏王朝都城の二里头遺跡をはじめ、洛陽で検証できる。本論は各時代の洛陽の文化現象を分析したが、それはあくまでも歴史記録と文学作品によって築いた洛陽のイメージである。歴史を伝え、継承することは、洛陽のような古都が宿命的に抱える使命であり、各時代を貫いて流れる洛陽の都城像が、どのように現物の遺跡を結びつけるのかという課題は非常に意味がある。

結び

高度成長期とも言える中国において、大都市や新興都市が次々に現れているのに、なぜ古い都の洛陽にこだわり、研究対象にしたのであろう。それは洛陽が漢文化を代表する地であり、その象徴であることにある。洛陽の文化による都市再生を強く望むことは、漢文化の復興への期待も秘めている。洛陽の意味について、本論に引用した「伊洛之都、皇王所宅、乃夷夏帰心之地、非農桑取利之田」の言う通り、経済利益よりも、洛陽が持っている文化の凝縮力を重視したい。歴史の中に、洛陽城が何度も廃墟で再び立て直された理由も、この特別な文化の力にあると思われる。

かつて京都は、中国の都長安・洛陽をモデルにしたことよって、飛躍的な発展を実現し、誇り高い和の文化を創出した。今は目の前の経済効果や現実的な利益を追求する時代だと言われ、その疲弊も自然環境や人の内心面などに現れている。洛陽は京都をモデルとし、文化の力を頼ることはその反省となる。原点に戻り、文化の力で一つの都市を興すことは、ひいて一つの時代を立て直す可能性も隠れていることを信じたいのである。

図表一覧

図 1 : 麗景門の表正面写真	P 8
図 2 : 麗景門の裏写真	P 8
図 3 : 洛陽付近歴代都城地勢変遷図	P 32-33
図 4 : 「中」の文字の変遷イメージ	P 41
図 5 : 歴代洛陽の文化表象の変遷イメージ図	P 193
図 6 : 洛陽の五大都城遺跡見取り図	P 197
図 7 : 二里頭遺跡発掘現場写真	P 198
表 1 : 歴代王朝の洛陽の「天下の中心」に関する認識	P 47-48
表 2 : 「兩都賦」によって描かれた長安と洛陽	P 57
表 3 : 詩に現れた地名に関する統計表	P 102
表 4 : 中国各地で「洛陽」という言葉が入っている地名	P 117-118
表 5 : 唐代洛陽に居住した文人名士	P 139
表 6 : 洛陽の名所旧跡と懐古詩	P 153
表 7 : 洛陽地区首都所在期間表	P 187-188

初出一覧

(1) 「古都文化の再生—京都を例として」, 『東亜漢学研究』創刊号 (pp.346-357)、西安 : 東亜漢学研究学会発表、2011年5月

(2) 「東漢時代の洛陽の文化象徴及び歴史風土」, 『東亜漢学研究』第2号 (pp.404-415)、台湾 : 東亜漢学研究学会発表、2012年5月

(3) 「後漢時代における洛陽の文化表象についての考察—「両都賦」の解読を中心に」, 『汲古』第61号 (pp.71-76)、2012年6月)

(4) 「日本の京都から見る古都の文化環境及び地域経済の発展」, 『洛陽師範学院学報』32巻3月号 (pp.84-87)、2013年3月

(5) 連清吉と共著「先秦時代における洛陽の文化表象—天下の中心を象徴する」, 『長崎大学総合環境研究』第16巻第1号 (pp.1-10)、2013年10月

参考文献

1. 文化や都市、風土に関する著作

Lewis Mumford 著（宋俊嶺等訳）『都市の文化』（中国建築工業出版社、2009年8月）

銭穆『中国文化史導論』（商務印書館、1993年5月）

デイビッド・スロスビー著、中谷武雄・後藤和子監訳『文化経済学－創造性の探求から都市再生まで』（日本経済新聞出版社、2002年9月）

中村良夫『風景学入門』（中央公論新社、2009年5月）

中村良夫『風景学・実践編』（中央公論新社、2001年5月）

中村良夫『都市を作る風景－場所と身体をつなぐもの』（株式会社藤原書店、2010年5月）

武内義雄『中国思想史』（岩波書店、1957年9月）

戸川芳郎など『儒教史』（山川出版社、1987年7月）

後藤新平歿八十周年記念事業実行委員会『都市デザイン・シリーズ後藤新平とは何か－自治・公共・共生・平和』（株式会社藤原書店、2010年5月）

茶谷幸治『町歩きが観光を変える 長崎さるく博プロデューサー・ノート』（学芸出版社、2008年2月）

佐々木雅幸、+総合研究開発機構『創造都市への展望 都市の文化政策とまちづくり』（学芸出版社、2007年4月）

西村幸夫『都市保全計画 歴史・文化・自然を生かしたまちづくり』（東京大学出版会、2004年9月）

田坂敏雄『東アジア都市論の構想 東アジアの都市間競争とシビル・ソサエティ構想』（御茶の水書房、2005年8月）

佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』（学芸出版社、2009年5月）

小林重敬『都市計画はどう変わるか』（学芸出版社、2008年6月）

宮崎洋司『都市再生の合意形成学』（鹿島出版会、2008年12月）

採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究会『都市の文化と景観』（同成社、2010年4月）

西川幸治『都市の思想（上、下）』（日本放送協会、1994年5月）

植田和弘等『都市の再生を考える 第5巻 都市のアメニティとエコロジー』（岩波書店、2005年2月）

後藤和子『文化と都市の公共政策』（有斐閣、2005年9月）

山崎茂雄『文化による都市再生学』（アスカ文化出版、2009年1月）

福沢健次『地域再生町づくりの知恵—古都・鎌倉からの発信』（株式会社平凡社 2007年3月）

井上徹編集『中国都市研究の資料と方法』（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2005年3月）

John Friedmann 著（谷村光浩訳）『中国 都市への変貌』（鹿島出版会、2008年2月）

Augustin Berque『風土学序説』（筑摩書房、2002年1月）

水内俊雄『シリーズ人文地理学 8 歴史と空間』（朝倉書店、2006年10月）

高橋伸夫『文化地理学入門』（東洋書林、1995年10月）

張在元『中国 都市と建築の歴史』（鹿島出版会、1994年10月）

五井直弘『中国古代の城』（研文出版、1983年9月）

楊寛著（西嶋定生監訳）『中国都城の起源と発展』（学生社、1987年11月）

武内毅雄「儒教の論理」『武内毅雄全集』第二巻（角川書店、1978年6月）

戸川芳郎など『儒教史』（東京：山川出版社、1987年7月）

Nグレーザー著内山秀夫訳『民族とアイデンティティ』（三嶺書房株式会社、1984年6月）

董鑒泓『中國城市建設史』（中國建築工業出版社、2004年7月）

史善鋼編『河洛文化源流考』（河南人民出版社、2009年12月）

2. 京都モデル、都市再生に関連するもの

脇田修、脇田晴子『物語 京都の歴史』（中央公論新社、2008年1月）

赤松俊秀、山本四郎『京都府の歴史』（山川出版社、1969年11月）

京都市編『京都の歴史第八巻 古都の近代』（学苑書林、1975年）

京都市編『京都の歴史第五巻 近世の展開』（学苑書林、1975年）

同志社大学大学院ビジネス研究科、地域連携カリキュラムシンポジウム「京都とビジネス—その可能性を探究」（2005年4月9日）

朝尾直弘等『県史 26 京都府の歴史』（山川出版社、2004年10月）

松橋隆治『京都議定書と地球の再生』（日本放送出版協会、2002年9月）

村山裕三『京都型ビジネス 独創と継続の経営術』（日本放送出版協会、2008年12月）

西嶋定生編『奈良・平安の都と長安』（小学館、1983年10月）

森谷剋久編『京都の祭り暦』(小学館、2000年5月)
飯田昭・南部孝男『歴史都市京都の保全・再生のために』(文理閣、1992年3月)
リムボン『歴史都市・京都の超再生：町屋が蠢く、環境・人権・平和のための都市政策』
(日本評論社、2012年8月)
大西国太郎『都市美の京都(保存・再生の理論)』(鹿島出版会、1998年4月)

3. 洛陽の歴史文化に関するもの

狩野直喜『兩漢学術考』(筑摩書房、昭和63年)、P101。
斯波義信、浜口允子『中国の歴史と社会』(放送大学教育振興会、1998年3月)
岸本美緒『中国社会の歴史的展開』(放送大学教育振興会、2007年4月)
平勢隆郎『中国の歴史 都市国家から中華へ』(講談社、2005年4月)
川本芳昭『中国の歴史 中華の崩壊と拡大』(講談社、2005年2月)
小島毅『中国の歴史7 中国思想と宗教の奔流』(講談社、2005年7月)
植木久行『唐詩の風土』(研文出版、1983年2月)
岡崎文夫『魏晉南北朝通史』(弘文堂書房、1943年10月)
森鹿三『分裂の時代 魏晉南北朝』(人物往来社、1967年1月)
那波利貞『唐代社会文化史研究』(創文社、1974年2月)
宇都宮清吉等『中国中世史研究一六朝隋唐の社会と文化』(東海大学出版社、1970年3月)
松浦友久『唐詩の旅—黄河編』(社会思想社、1980年3月)
妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」太田次男等編『白居易の文学と人生I』(勉誠社、1993年6月)
長嶋和重「隋唐洛陽城に関する諸問題」(『龍谷大学大学院文学研究科紀要』25、2003年12月)
気賀澤保規編『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』(汲古書院、2011年3月)
小川環樹『小川環樹著作集』(筑摩書房、1977年2月)
大室幹雄『桃源の夢想—古代中国の反劇場都市』(三省堂、1984年1月)
松浦友久、植木久行『長安・洛陽物語』(集英社、1987年7月)
寺尾剛「李白における洛陽の意義—安史の乱時の言及を中心に」(『中国詩文論叢』10、1991年)

和田浩平「韓愈と洛陽一元和年間初期に於ける吏隠の狭間」(『芸文研究』63、1993年)

中尾健一郎「白居易と洛陽」(『中国文学論集』34、2005年)

橘英範「六朝詩に詠じられた洛陽」『洛陽の歴史と文学』(佐川英治編集、岡山大学文学部プロジェクト研究報告書10、2008年3月)。

橘英範「小説の舞台としての隋唐洛陽城」『洛陽の歴史と文学』(佐川英治編集、岡山大学文学部プロジェクト研究報告書10、2008年3月)。

妹尾達彦「隋唐洛陽城の官人居住地」(『東洋文化研究所紀要』第百三十三冊、1997年)

中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』(汲古書院、2012年10月)

宮崎市定「隋唐文化の本質」『中国に学ぶ』(中央公論新社)

安部健夫『中国人の天下観念—政治思想史試論』(創文社、1972)

稲畑耕一郎「中国古代文明と黄河」(『月刊しにか、2001第一期』)

佐原康夫「周礼と洛陽」館野和己編『古代都市とその形制』(奈良女子大学COEプログラム、2007年8月)

稲畑耕一郎「中国古代文明と黄河」『月刊しにか』(大修館書店、2001年第一期)

伊藤道治「西周王朝と洛邑」(伊藤氏『中国古代国家の支配構造』中央公論社、1987年)

李学勤「成周建設論—「何尊」の銘文」(五井直弘編『中国の古代都市』汲古書院、1995年)、

竹内康浩「洛陽出土伝世品青銅器研究(一)」(『東洋文化研究所紀要』138号1999年)

渡邊義浩『後漢における「儒教國家」の成立』(汲古書院、2009年4月)

塩沢祐仁『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』(雄山閣、2010年1月)

島田虔次『朱子学と陽明学』(岩波新書、1967年5月)

程顥、程頤著、王孝魚校『二程集』(北京：北京書局、1981年7月)

木田知生「北宋時代の洛陽と士人達 開封との対立の中で」(『東洋史研究』38、1979年)

波多江英紀『漢王朝 劉一族と邪馬台国』(文芸社、2002年2月)

茶谷満「後漢洛陽城の可視領域と皇帝陵との空間関係—洛陽都城圏の様相に関する基礎的考察」(『年報人類学研究』第3号、2013年)

尾形勇等『中国の歴史12』(講談社、2005年11月)

横堀克己「姿現れた最古の中国」(『人民中国』2005年2月号)

横堀克己「空白が埋められていく中国古代史」(『人民中国』2005年2月号)

松尾幸忠「許渾詩試論」(『中国文学研究』第十四期、pp37-55)

- 埋田重夫「白居易における洛陽履道里邸の意義」(『中国文学研究』第二十九期、pp117-132)
- 谷川道雄『隋唐世界帝国の形成』(講談社、2008年9月)
- 許広『最古の中国』(北京：科学出版社、2009年8月)
- 葛兆光『宅兹中国』(中華書局、2011年2月)
- 錢穆「二程學術述評」『中国學術思想史論叢』卷5 (安徽教育出版社、2004年7月)
- 湯用彤『魏晉玄學論稿』(上海古籍出版社、2001年6月)
- 余英時『中国知識階層史論』(台北：聯經出版事業公司、1980年8月)
- 葛兆光「洛陽与汴梁—文化重心与政治重心的分離」『中国思想史(第二卷)』(復旦大学出版社、2000年12月)
- 連清吉『日本近代の文化史学家：内藤湖南』(台湾学生書局、2004年10月)
- 張其賢「「中国」與「天下」的概念探源」(『東吳政治學報第二十七期』、2009年)
- 孫明君『漢末士風與建安詩風』(文津出版社、1995年1月)
- 葉万松編『洛陽考古四十年—1992年洛陽考古學術研討會論文集』(科学出版社、1996年1月)
- 徐金星「漢魏洛陽故城保護 考古研究的回顧和展望」(『河洛春秋』1996年第1期、第2期)
- 徐金星『漢魏洛陽故城研究—洛陽文物と考古』(科学出版社、2000年9月)
- 傅崇兰等『中国城市发展史』(社会科学文献出版社、2009年4月)
- 史念海『中国古都和文化』(中華書局、1998年7月)
- 馬先醒『中国古代城市論集』(簡讀学会、1980)
- 胡阿祥「天下之中及其正統意義」(『文史知識』2010年11月号)
- 单文翔『文化遺產保護與城市文化建設』(中國建築工業出版社、2009年1月)
- 李健超『漢唐兩京及びシルクロード地理歴史論集』(三秦出版社、2007年7月)
- 王育民『中國歷史地理概論(下冊)』(人民教育出版社、1988年9月)
- 董鑒泓主編『中國城市建設史』(中國建築工業出版社、2004年7月)
- 許広『最古の中国』(科学出版社、2009年8月)
- 張川等編『咏洛古詩選』(河南人民出版社、1986年10月)
- 北京大学中国文学史教研室選注『魏晉南北朝文学史參考資料』(中華書局、1972年2月)。
- 何沛雄「「兩都賦」と「二京賦」の歴史価値」(『文史哲』、1990年第5期)
- 陳君「兩都賦の創作と後漢前期の政治趨勢」(『文学評論』2010年第2期)
- 趙達夫「「兩都賦」の創作背景、体制及び影響」(『文学評論』2003年、第1期)

- 王美秀『洛陽伽藍記の文化論述—歴史・空間・身分』（里仁書局、2007年1月）
- 王文進『浄土上の烽煙』（時報文化、1987年1月）
- 王文進「北魏文士對南朝文化的二種態度」『南朝山水と長城想像』（台北：里仁書局、2008年6月）
- 河南科学技術大学文化遺産保護研究チーム「洛陽都市發展と文物保護の経験と教訓研究」（2005年）
- 徐萃芳「唐代兩京的政治、經濟和文化生活」（『考古』1982年第6期）
- 陸敏珍「北宋時期的洛陽与洛學」（『浙江學刊』2011年第2期）
- 馬佳「洛陽旅行の問題分析及び發展対策」（『市場論壇』2011年第7期、總第88期）
- 鐘慶倫、劉笑歌「洛陽旅行景区標識語翻譯範例化研究」（洛陽理工學院學報社會科學版、24卷第6期2009年12月）
- 錢穆「二程學術述評」『中國學術思想史論叢』卷5（安徽教育出版社、2004年7月）、P110。
- 李久昌『國家、空間与社会——古代洛陽都城空間演變研究』（三秦出版社、2007年11月）
- 阮煜琳「中國不應千城一面」（中國建設報2005年12月14日 第八版）
- 張乃翥、張成渝『洛陽輿糸綢之路』（北京圖書館出版社、2009年8月）
- 王丹など『千年帝京洛陽城』（北京大學出版社、2013年3月）
- 吳迪など『古都洛陽』（杭州出版社、2011年1月）
- 王貴祥『中國古代建築知識普及與傳承シリーズ叢書：古都洛陽』（精華大學出版社、2012年7月）
- 邵如林『糸路起點看洛陽』（崑崙出版社、2008年4月）
- 吳良鏞「論中國建築文化研究與創造的歷史任務」（『城市規畫』2003年第1期）
- 郭引強『洛陽大遺跡研究與保護』（文物出版社、2009年10月）
- 趙振華『洛陽古代銘刻文獻研究』（三秦出版社、2009年12月）
- 陳燕妮『居住的詩篇：論唐詩中的洛陽都市建築景觀』（人民出版社、2011年9月）
- 趙金昭「論洛陽文化と洛陽經濟」（『中華文化論壇』2002年第1期、P103~106）
- 趙金昭編『洛陽文化と洛陽經濟』（中州古籍出版社、2001年9月）
- 李久昌「天下之中与列朝都洛」（『河南社會科學』2007年第四期）
- 李久昌「二十世紀五十年代以來的洛陽古都研究」（河南大學學報（社會科學版）2007年第四期）
- 王克陵「西周時期“天下之中”的擇定与“王土”勘測」（『人大報刊複印資料（先秦、秦漢

史)』1990年第5期)

龔勝生「試論我国「天下之中」的歷史源流」(華中師範大學學報(哲學社會科學版)、1994年1月)

4. その他(古文献、古典に関するもの)

司馬光『資治通鑑』(北京:改革出版社,文白對照今譯資治通鑑本,1998年3月)

譚其驤『中国歴史地図集』(北京:地図出版社、1982年10月)

劉宋・范曄『後漢書』(台北:鼎文書局,新校本後漢書,1978年)

古典研究会編『和刻本 諸子大成第三輯』(汲古書院、1975年9月)

聞一多『唐詩雜論』(古籍出版社、1956年6月)

吉川幸次郎『中国文学入門』(講談社、1976年6月)

白川静『詩經』(中央公論社、1975年7月)

吉川幸次郎、梅原猛『詩と永遠』(雄渾社、1967年9月)

田中克己『李太白』(評論社、1944年4月)

高田真治『漢詩大系 詩經』(集英社、1975年6月)

吉川幸次郎『中国文学史』(岩波書店、1975年3月)

内田泉之助『漢詩大系 古詩源』(集英社、1975年6月)

伊藤正文、一海知義『中国古典文学大系漢・魏・六朝詩集』(平凡社、1972年2月)

伊藤正文、一海知義『中国古典文学大系漢・魏・六朝・唐・宋散文選』(平凡社、1970年10月)

小尾郊一『全訳漢文大系 文選(一)』(集英社、1974年6月)

褚斌傑著、福井佳夫訳『中国の文章—ジャンルによる文学史』(汲古書院、2004年3月)

平岡武夫、今井清『唐代の長安と洛陽(資料編)』(同朋社、1985年9月)

平岡武夫、今井清『唐代の長安と洛陽(索引)』(同朋社、1977年11月)

平岡武夫、今井清『唐代の長安と洛陽(地図)』(同朋社、1977年11月)

石川忠久『漢詩を読む 杜甫100選』(日本放送出版協会、1998年12月)

石川忠久『漢詩の風景』(大修館書店、1989年5月)

笈文生「宋代文学の特徴」鈴木修次等『中国文化叢書5文化史』(大修館書店、1967年1月)

春秋・呂不韋『呂氏春秋』卷十七審分覽(六)慎勢、(楠山春樹訳)『呂氏春秋(中)』(明

治書院、1997年5月)

植木久行『唐詩の風土』(研文出版、1983年2月)

植木久行『唐詩の風景』(講談社学術文庫、1999年4月)

河合康三『白樂天』(岩波書店、2010年1月)

武田尾吉『史記国字解第一卷』(早稲田大学出版社、1929年)

吉川幸次郎『中国文学入門』(講談社、1976年6月)

吉川幸次郎、小川環樹編『唐詩選』(筑摩書房、昭和44年11月)

小川環樹『唐詩概説』『小川環樹著作集第二卷』(筑摩書房、1977年2月)

佐藤保『漢詩のイメージ』(大修館書店、1992年10月)

入矢義高『洛陽伽藍記』(平凡社、1990年4月)

周振甫訳注『洛陽伽藍記』(江蘇教育出版社、2006年1月)

『春秋左氏伝(上)』(集英社、1974年2月)

徐松撰 愛宕元訳注『唐兩京城坊攷——長安と洛陽』(平凡社、1994年)

白高来『白居易洛中詩編年集』(白山出版社、2009年8月)

顧祖禹撰賀次君等点校『讀史方輿紀要』(中華書局、2005年3月)

顧炎武『日知録』(台北:明倫出版社、1970年10月)

施蟄存『唐詩百話』(上海:華東師範大学出版社、2011年2月)

謝 辞

修士課程修了後、しばらく勤めましたが、子供に恵まれ、主婦として忙しい日々を送っていました。しかし、何かを勉強したいという気持ちが強くなり、二人目の娘が一歳になる前に、長崎大学生産研究科博士後期課程に入学しました。「今度こそ、受験のためでも就職のためでもなく、自分の為になんか勉強しよう」と心の中に決めました。

長崎大学で恩師の連清吉教授の厳しく、そして思いやりのあるご指導の下に、古都洛陽について研究を展開しました。国語が得意で、ずっと歴史や文化に関心を持っていた私ですが、いざ研究の分野に入ると、自分の勉強不足や認識の甘さに痛感しました。ほかの人以上に勉強するしかないです。子供が保育園にいる昼間はできるだけ研究室で研究に取り組み、子供と遊ぶ時も研究テーマで頭いっぱいでした。家庭と学業とともに、中国語教室の勤めも続けたため、よく周りの方に「大変ね」と言われますが、自分自身はとても充実した生活が出来、全く苦にならなかったです。なぜならば、研究を通し、私の中で洛陽という古い都の特殊性、歴史、文学、各王朝の社会現象、そして中国人の精神史まで、すべてが繋がるようになりました。古典文化の素晴らしさや日本と中国の関連研究された先人たちの知恵、学べば学ぶほど、その奥深さに感心し、楽しくてたまりませんでした。

研究遂行上の様々な問題や論文の細部にわたって、連先生以外に、副指導教官の早瀬隆司教授、谷口賢治教授にも適切な指導と助言をいただき、厚く御礼を申し上げます。また、修士時代の指導教官である井手啓二教授ご夫婦も論文の書き方や投稿の修正など、多く助言を下さいました。そのほか、友人の林清美先生、品川浩実先生、市川智生先生、松本ニヨ子さん、蒲池文恵さん、山口響子さん、一之瀬幸子さんも日本語の練習や発表の準備を助けていただきました。このように、小論の遂行は多くの方々のご指導やご支援のおかげで出来たのです。

最後に、一人っ子の私の長年にわたる留学を許し、遠い中国からいつも暖かく応援してくれた両親に感謝します。また、留學生活の笑と涙を共に分かち合い、支えてくれている夫の李喬にも感謝します。二人の娘に「努力することにより、結果が出ると、自信になり、結果が出なくても、経験が残る」ということを教え、何事も後悔が残らないように努力してほしいです。

2014年2月21日